
月神の祝祭～有明の使者～

悠月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月神の祝祭／有明の使者／

【著者名】

Z8358E

【作者名】 悠月

【あらすじ】

セイラとジルフォードの婚姻から数ヶ月、春を迎えるアリオスでは、春告げの祭りが行われる。そこにタハルの一の王子がやつてくることになつて……（初めての方は、月神の祝祭／月神の娘と夜の王子／の続編になりますので、そちらを先に読んでください）

万の群衆が頭を垂れる。

天に座す凡さえも、揺らめく炎さえも息を止め、彼女を彩るためだけに存在した。

興奮と酩酊を呑みこんで、金色の眼は未来を垣間見る。

鋭い刃は影を裂き、勝利への道をつくつだす。

その姿を誰もが、眼に焼きつけ、恐怖と共に名を呼ぶだらう。

マルスの妻にして、雷を友にした娘。

戦女神のエイナと。

春の気配が濃くなつてきて、まだ宵には体の縮むような寒さが残つており、暖炉には小さな炎が踊つていた。炎は向かいに座る老人の苦惱を浮き彫りにしようと、その面に深い影をつけた。

「タハルの若造が？」

老人の言葉に、それこそ全身、影のようになに黒い装束でまとめた男が、壁に体を預けたまま訪ねた。

「ああ、シルトの祭に来るそうだ。この間の式に出れなかつたからと。国王の代理としてな」

老人の名はハマナ・ローランド。アリオスにとって最もすげいやすい時期が来るといつに、彼の表情は固い。ハマナは单眼鏡を外すと、目頭を押さえ、深く息をついた。

アリオスの城の中で、一番高齢なハマナには暇な時が無い。一人を忙しなく見ているモーズ・シェリンは着膨れして、普段の二倍ほどになつていた。骨と皮しかないような細い彼には、宵の寒さがこたえるのだ。

「代理ねえ。そろそろタハル王も危ないか」

黒い男—エンは軽い調子で言った。

数年前からタハル王の調子が悪いことは伝わつてきていたのだ。今更、騒ぎ立てることでもない。

タハル王には一人の王子がいる。王子はあまり仲が良くないらしい。本人同士がというよりも、それぞれの後ろについているおえらいが

たが。

今回来るのは、一の王子。
名をナジュー＝ルというが、ここにいる誰も会ったことがない。
アリオスとタハルの間にあるローラ山脈は互いの行き来を困難にし
ているのだ。

「今のうちに、対外政策を固めておこうって魂胆か」

それとも、弟に対するけん制か。
どちらにしても面倒なことになりそつたが、三者それぞれのため息
をついた。

アリオスに友好的な今の王が倒れるとなると、次の王は誰なのか見
極める必要がある。
ササン大陸の歴史で見ると、両国が友好的な状態を保つていたのは
ごく僅かだ。

「最近、ジキルドのばあさまの話もとんと聞かねえな。死んじまつ
たか」

魔女だとされているジキルドの女王も外に出てこなくなつて久しい。
もともと常青の森にぐるつと周りを囲まれたジキルドは秘密主義の
国だったが。

「うちの先代にタハル王、それにばあさま。……ピンシャンしてん
のは、リューデリスクだけか」

「リューデリスクは元気そうだが、もともと政治に対する興味は薄
いだろ？ 今、事実上エスター＝アを仕切っているのは、宰相殿と
ユリザ王女じゃないのかい」

ぼそりと、「シヨリンの言葉にハマナも頷いた。

「アキナスか」

その一言で、エングがエスターイアの宰相、アキナス・ゴーリをじう思つているのか分るほど苦々しい声だつた。

「エスターイアもやうそろ、新しい王を迎える時が来たんだうつよ」

一斉に代替わりが始まる。

「大陸に新しい時代が来るといつことか」

月のめぐるのはなんと早いことが。先ほどまで戦いあぐね、やつと新しいアリオスを築いたと思つたのに、手に入れた平穏は、さらこ大きなうねりへと呑みこまれていく。

「せいぜい、取り残されんようにしたいものだな」

静まり返つた部屋にドアを叩く音が響く。

「何だ」

誰も近づけるなと言つておいたので、自然と声が強くなる。瞳に浮かぶ険は来訪者の姿を認めると、ふつと消えた。

薄暗い廊下でも、僅かな光を得てその人物の髪は輝いた。

銀の煌きは、この国の王のものだ。

「これは、これは、ルーフア王」

「よしてくれ。エン。貴方に頭を下げられるほど、偉くなつたつも
りは無いのでね」

慇懃な礼がわざとだと知つてゐるので、ルーファの調子も軽い。

「どうか、なされましたか？」

立ち上がりかかる、ハマナを制してルーファは封筒を二人の前に掲
げると少々困ったように微笑んだ。

「このようなものが届いた

その封筒には、これからのことを見越すかのよつて、不気味に笑
う髑髏の横顔が刻印されていた。

世界は夜に包まれていた。

月すら姿を隠した残酷な世界では、ただビヨウビヨウウと吹きすたぶ風の音ばかりする。

夜の闇より、なお濃い影に包まれた絶壁の隙間に入り込んだ風が、亡者の鳴き声のごとく辺りに木霊した。

四方から迫り来る怖ろしげな声は旅人を恐怖へと誘い、本当に恐れるべき物を隠してしまつ。

今宵の犠牲者は唯一人。

すでに、気でも振れたのか、この暗がりに明かり一つ持つていない。風の音に紛れ、獣の声がする。

ぐるぐると喉を鳴らし、これから起る宴に舌なめずりする音だ。合図が下るのを、今か今かと待ちわびる。

ぎりぎりまで、張り詰めた緊張は獲物によつてふつりと絶たれた。

「やあ、と、会えるね」

闇夜を切り裂いて響くのは、明るく歡喜に満ちた声だつた。ちょつとばかりの舌足らずさが、その場に似合わぬ可愛らしさをかもし出す。

けれど、血に飢えた獣にそんなものが通じるはずもなく、声が終わるのが合図とばかりに鋭い爪が地を削る。

五つの不吉な影が宙を飛ぶ。

剛毛におおわれた体は固く、むき出しの爪も牙も一搔きで人間を死に至らしめるのは簡単なほど鋭かつた。

「ほぐらの、おひこさま。素敵な人だといいねえ」

次の瞬間、いくつかの絶叫が響くと重たいものが地に落ちる音がした。

苦しげに砂をかく音と外に漏れない悲鳴が重なり合つ。

片肺だけつぶされた獣たちが、逃げ去ることも出来ずにはいりでいるのだ。

「うふふ。思わず殺したくなるような素敵な人だつたら、どうしよう。ああ、でもおそんな人ならぜひ会いたいしい。ねえ、困っちゃうね」

贊同は返つてこなかつた。

もう一人の視線は、片肺を奪われた獣たちに向けられていた。互いの姿も確認できないような闇の中、視線は違うことなく獣の姿を舐めた後、今しがた一刀のもと五つの脅威を振り払つた人物に向つた。

「お前は、『うじて無益なことを好むのか』

なぜ、わざと生かす必要があるのか。揺るぐことなどなぞそんな固い声は、やつていてる様にも聞こえた。

空気を裂く、小さな音が連続で響くとえさはぴたりと止んだ。

「だつて、ぼくはコザだもん」

血の匂いを纏つて闇が晒つた。

「君だつて、そうだろ?」

さくりと砂を踏みしめれば、簡単にくるぶしまで埋まつてしまつ。

半時も放置していれば、すべての物が砂に覆われてしまうだろう。問い合わせの答えも放置して先に進む相方に、慌てて駆け寄り追い越した。

「ねえ、どんな人だと思う？」

「計画に支障がなければどんな人物でも関係ない」

足の長さが全く違うので、小走りをしていないとあつとこう間に追いつかれてしまう。

後ろ向きで砂の上を走るところを少年は、なんなくやってのけた。

「むう。前から思つてたんだけど、君つて冷たいぞ。この冷酷人間め。薄情人間め！ ああ！ ユザにぴったりじゃないか……」

自分の言葉に落ち込んでしまった少年は、砂の上に膝をつく。さめざめと泣きまねまでしていたのだが、相方の足が自分の体を越えるところに来ると、立ち上がり走り出す。

「ぼくが先に会うんだからね！」

どちらの脳裏にも、もはや息絶えた獣のことなど、一欠けらも残つてはいなかつた。

第一章・見放された地より

優しい夢を見た。

母がいて、ハナがいて、ジニースの皆が周りを囲んで笑っている。
きっと、アリオスの気候がジニースに近づいてきたからだろう。

最近は、雪もすっかり溶けてしまって、残念に思っていたのだが、
こんなに穏やかな気持ちで目覚めるのも悪くない。

長椅子から起き上ると、セイラは机の上におかれている小さな箱
へと手を伸ばした。

セイラは宝物入れと言っているのだが、大概の人は中を見てガラク
タいれだと言うだろう。

その中から、セイラがつまみ出したのは玉が五つ連なった髪結い紐
だ。

玉といつても、燻った色の小さな石には大して価値がなさそうだ。
価値は無くとも、セイラにとっては母から貰った大事なものだ。
よくこの紐で髪を結つてもらつたのだが、不器用な彼女に任せると、
いつも鳥の巣のよな頭にされたものだ。

奇跡的にハナのお許しが出たこともあつたが。
今ではセイラのほうが、格段につまく結べる。

優しい夢の残滓を一緒に結い上げて、セイラは書庫へと足を向けた。

「シルトの祭？」

カナンの朝の挨拶に盛り込まれた、聞いた事のない単語を拾い上げて、セイラは首をかしげた。

最近、城内がほわほわと落ち着き無い空氣に包まれて居るのは、どうやら間違いなかつたようだ。

シルトとは確かにアリオスに咲く花の名前ではなかつたか。

「花のお祭りなの？」

「春告げの祭りですね。長い冬が終わつて、春が来たことを祝うのですよ。シルトは雪が溶けて、一番に咲く花ですから、春告げの花として選ばれたのでしょうか？」

ゆづくりと流れる水のようなカナンの声は、耳障りがよい。耳じりに刻まれた皺が更に彼の微笑をやわらかく見せめり、こぢらの頬もついつい緩む。

セイラとハナはカナンの部屋で彼の話を聞きながら、朝食を取るのが日課となつていた。

「祭りは七日続きます。最終日の夜には春乙女の舞が披露されるのですよ」

「春乙女の舞つて？」

「選ばれた女性が、丘の上の石舞台で舞つるのが慣例です。エイナの舞と言つたほうがいいでしょうか。去年はテラーナ様が舞われましたよ」

「へえ～今年は誰が選ばれるのかな？」

知つてゐる女性の名を片つ端から上げていくセイラの隣で、ハナは小さくため息をつく。それに合わせ、ハナの黒髪が揺れる。セイラがお揃いにしようとしているので、今日は珍しく一本に結つている。今、アリオスの話題性一番の女性といえば、セイラしかいない。

「私はハナを推すぞ！　春告げなんてぴったり」

「推さないで下せ」

そうして、いつも自分のことを考えに入れないのだろうとぴしゃりと言い放つたハナに、セイラは肩を落とす。本当にぴつたりだと思っていた様子だ。

ふてくされて、行儀悪くお茶をするセイラに、また強い言葉が降つてくる。

「最近、ハナは『機嫌斜めなんだよ。カナン、気の静まるお茶でも入れてあげて』

「別に機嫌が悪いわけではありませんけど」

言葉を切つたハナの視線を辿ると、扉があり、その向いには書庫がある。

その書庫には珍しい」と、侍女が姿を現すよつになつた。彼女たちは別に本を借りようとしてくるのではない。

お目当てはジルフォードだ。

カナンの部屋にも何度か「ジン様はおいでですか？」と彼女たちが尋ねてきた。

セイラとハナの姿を見つけると、そそくさと去っていくのだが、立ち代りに別の侍女がやってくる。

式の一件より、ジルフォードの人気が上がってきたのだ。

都でというよりも、地方、はたまた国外でその不思議な姿の噂が広まり、勝手に肖像画が作られる有様だ。

中には似ても似つかないものもあるが、式で顔を見せたほんの少しの間でよく描けたと思うほどすばらしく出来のものもある。

ジョゼが買ってきたものを、セイラもありがたく頂いた。

ジルフォードの出生を知っている古参のものは、やはり気味悪いといつて近づかないものもいるが、直接知らない若い娘には恐れが薄いらしい。

セイラがジンは神の名だと公言したものだから、彼女たちもそう呼ぶようになった。

「納得いきませんわ」

その様子をセイラは喜んでいたのだが、あまりの変わりようには呆気に取られた。態度の変わらないマキナたちを嬉しく思いながらも、苦笑しながら仕方ないといった彼女の態度は釈然としない。

「国外の人間から褒められれば、嬉しいもんだよ。すごい人なのね。仲良くしこつて思つても仕方ないさ。それにね、ジルフォード殿には専属の侍女がいないだろ。誰か付となると、待遇も世間の目もかわってくるものさ。ダリア様かセイラ殿が子供を生まない限り、残っている王族はジルフォード殿だけだからね。早いもの勝ちってことさ」

誰か専属になるのが特別だということは分るのだが、この手の平を返したような扱いはなんなのか。

あからさまに侍女にして欲しいと言つてくる者もいるし、それなり

に力のある後見人を持っているものは、その後見人からさりげなく圧力のこもった手紙が送られてくるのだ。

「ジンが気に入られてるのらしいんじゃない?」

「これは、気に入られているというか……」

「それにね、ジンの侍女になる子がいるとして、よっぽど理解してくれる子じゃないと続かないんじゃないかな?」

「……まあ、そうかもしませんわね」

ハナの遠くなりかけた意識は、つい先日の光景へと続いていた。みつちりと物の詰まつた、もはや部屋とはいえない様な空間に。

「あれには、私驚きましたわ。あまりにもギャップが……」

初めて訪れたジルフォードの部屋。

何もないような殺風景なところを想像していたのだが……。

詰まつているのだ。物が積んであるなんて可愛らしいものじゃない。

何が言われば、もう全てがどしか言いようがない。

本はもちろんのこと、変なお面やら大量の椅子やら。

それを集めたのがカナンだと知つて、彼の収集能力に驚かされた。

セイラとハナには知る由もないが、某单眼鏡のおえらいさんに有無を言わせず、優しくリストを渡したのだろう。

それ以上に驚いたのは、それだけ物があるのに、一切生活臭がないことだ。

「わたしはおもちゃ箱みたいで好きだけど」

楽しそうと取るか、奇妙と取るか個々の好みだろうが、午前中に掃除を終わらせなさいとでも言われたら発狂しそうだ。
その状況で、何処に何があるのか把握出来ているようつなのが、怖ろしい。

もう一つの、問題は彼の偏食なのだ。

今までお茶を飲むことはあっても、食事まで一緒にとつていなかつたので分らなかつたが、かなり偏食だ。と言つより生命維持に関わる食事に興味がなかつたのだろう。カナンの豊富なレシピは涙ぐましい努力の結果なのだ。

朝食をカナンの部屋で取るようになつたのは、朝ぐらーバランスの取れた食事をさせようとの魂胆なのだ。

「それそろ、下火になつてくるのではないでしょうか」

二人のやり取りを苦笑しながら見ていたカナンの言葉に、顔をあげる。

「何があるのですか？」

「祭りに合わせて、タハルから使者が来るので、そちらの対応に追われることになるでしょっから」

「タハル！」

「タハルですか？」

二人の驚きように微笑みながら、カナンはそうですよと付け加えた。タハルは近いようで、とても遠い国だ。地図上では隣なのに、情報が全く入つてこない。見放された地と呼ばれていることから、漠然と環境の厳しい場所などということぐらいしか知られていない。

勇猛果敢なエスターニアの商人たちも天を突くようなローラ山脈を越えるのは難しく、アリオスを迂回してタハルを目標していたのだが、その労力に見合ったものが無いと知ると、物流ルートの確保を諦めた。

タハルを訪れた冒険家も何故こんなところに国を興したのかと著書に記したほどだ。

「他国の使者ですか……」

ハナの重いため息の理由が分らない。

「グラントさんに何を言われるか

今までほしゃいでいたセイラの表情が音をたてて固まつた。テラーナの侍女頭であるグラントは最年長の侍女だ。

七十近いとの噂だが、背筋はピンと伸び、無駄のない動きは侍女の鑑とも称えられているが、何しろ厳しい。

彼女は最近、セイラの礼儀作法の師として抜擢されたのだ。

「固まつていてる暇なんて、ありませんよ。セイラ様。今日は朝からグラントさんのアリオス王家にふさわしい女性になるための授業その27ですわ」

「……うん。その27ね……その何まであるのかな~」

「たぶん、セイラ様がアリオス王家にふさわしい女性になるまでですわ」

「……そう

ハナはふらりと立ち上がったセイラを氣の毒に思いつつ、見送った。それほど嫌でも、セイラのためになることだ。行かなくていいとは言ってあげられない。

セイラはカナンの部屋をでると、体に力を込めた。

「ジンー！ ちゃんと朝ごはん食べるんだよ」

今日は一緒に食べる事が出来ないのは残念だが、遅れていくとグランが怖い。

下に下りてきさえすれば、カナンが抗いようもない笑顔できつと朝ごはんを食べさせてくれるだろ？

「よし」と頷いて書庫を出ようとすると、後ろで高い声がした。

「やはり、ジン様はここにいらっしゃるのですね」

侍女の服を纏つた女性は、すらりとした肢体の美人だった。きつちりと結われた黒髪は皇かで、彼女からはふわりと甘い香りがする。

セイラより頭一個分ほど背の高い彼女は、挑戦的にセイラを見下ろした。

「うん。上にいるよ」

「こりと微笑めば、彼女は少し驚いたようだ。

「……そう、ですか」

詰まりながら、そう言った時にはセイラはもう駆け出した後だった。

第一章・見放された地より2

毎度思うのだが、城といつのはじりはじめていのだから。すでに掃除の行き届いた廊下を走りながらセイラはふうとため息をつく。

遊んでいる時にはいいのだが、緊急事態のときなどいのにはわざらわしいだけだろうと思うのだが。

質実堅固を信条とするアリオスの城がエスターに比べて、随分と質素で小さい事を知らないセイラは、そんなことを思いながら、足を速める。

あと、三分後には階段の傍を通り抜けなければならない。

時間に正確なケイトが調練から戻ってきて、スカートの裾も気にせず走る姿を見られたらきつとお小言が始まってしまうから。

予定通り階段を通り抜け、幾人かの侍女たちに驚かれながらも、どうにかグラնの待つ部屋の前までたどり着いた。

指定された部屋は東の端にある。書庫とは真反対の場所だ。

「おはようござります！」

「5点の減点」

弾む息の勢いで元気に挨拶すると、固い声が振つてくる。部屋の中央で陣取っている女性は、きらりと瞳を光らせた。

背筋はピンと伸び、侍女服には皺一つない。

年相応の皺があるのに、それさえも彼女の美しさだった。けれど、凍えた湖のような色の瞳と引き結んだ薄い唇が彼女に厳しさを伝えている。

「扉を開けるときは静かにと申し上げたはずです。ここは調練の場

ではあります

「「口の端を少し上げ、微笑みながら挨拶を」」

違わず言葉を重ねたセイラに更に冷たい色が突き刺さる。

「分かっているのならば、そうしてください」

分かっているのだが出来ないのだ。

どうして元氣におはよひ「わこますではいけないのかせつぱり分からぬ」。

「わつすぐお祭りがあるみたい……ですね」

「」の間、申し上げたはずですが。まさか、聞いておられなかつたのですか?」このグラントがアリオスの歴史と共にお教えしたはずです「

挨拶の話から逃げようと口にした話題は、明らかに選択ミスだった。たらりと冷や汗が垂れてくる。

「え、ああ、うん。そうだった……かなあ」

確かにグラントの授業で、アリオスの歴史について教えてもらつたことがあります。

最初こそ、面白がつて聞いていたのだが、グラントは古文書を読んでいるように小難しい話をするのだ。

そんな話を何時間もされれば、何時の間にか意識が飛んでいくと言ふ寸法だ。

「今年の春乙女はセイラ様ですから、それまでにみつちつと仕込み

ます。覚悟なせつてください」

「へつ?……ええ、ちょっと待つてよ。そんなの聞いてないよ!」

「へりなんでも、そんな重要なことを聞き逃す事なんてしないだろう。

それよりもみつちりつて何だ。

今だつて十分絞られていふのに。

そんなセイラの心の声など聞こえないグランは、今日の教材を机の上に並べながら無情にも言つた。

「今、申し上げました。言葉遣い10点減点」

「いつたし今、何点残つてゐるのだね?」
いや、あつとグランのなかでセイラの評価は地を通り越し、深く深く穴を掘つて落ちていつて
いるだね?。

「ハイナの舞はテラーナ様に教えを請つのがよいでしょう」

「ああ、そつか。去年はテラーナが舞つた、ん、ですよね?」

「ええ、それは、もう美しく最高の舞でござりました」

グランの瞳は急に孫を見る祖母のように優しくなつた。
生まれたときか、ずっとテラーナ付きの彼女は、家族の誰よりも長い時間をテラーナと過ごしたに違いない。

「今日は、タハルの話をいたしました」

「祭りにはタハルの使者がくるんだっけ

「ええ

グラントが取り出したのは、十分に凶器になりえるほど分厚い本だった。

全てが黒いその本は、不気味なものを閉じ込めた箱のよつとも見える。

「どれほどタハルについて存知ですか」

「うーん。ローラ山脈をはさんでアリオスともエスターニアとも隣国になるつてことぐらいかな。砂漠があるつて聞いた。見放された地つて呼ばれてるらしいね」

砂だけしかない広い空間をセイラは思い浮かべることが出来ない。植物さえ生えない土地とはどんなところだろうか。

「そうです。かつて、ローラ山脈の向こうは流刑地でした。」

「流刑地？」

「罪を犯し、見放された人間が最後にたどり着く場所でした。」

「……国があるんだよね？」

「ええ、もともとあの地に住んでいたのか、何処から移り住んだのか、それとも遠い昔に罪人たちが興したのか分かりませんけれど」

グラントが捲ったページも真黒だった。

「苛烈な環境の中、動物は強く、残虐に進化いたしました。それに打ち勝つことを覚えた人間もまた、限りなく残虐です。獣の皮をまとい、血を好む野蛮な民です。お心を許してはなりません」

まるで、仇のある相手の話をするよつて「グラ」の声は強かつた。

「……今は仲が良いんじゃないの？ 行き来が出来るんでしょ？」

「……」数年は友好状態ですが、いつ攻められるか分かったものではあつません」

「……」食えた土地からば、いつも肥沃な土地を寄せせと怨嗟の声が聞こえるのだといつ。

ローラ山脈さえなければ、もっと頻繁に攻め込まれていただけ。

「タハルの使者はびつやつてアリオスまで来るのかな、山脈越えてくるの？」

春といつても、高い山脈の上には雪が残つており、容易に越していくことは出来ないだつ。

「ノースの道を来るのは、日の差をない洞窟のような道を二日三晩進まなければならぬといつ。

一度迷えば、死者の国。そんな言葉もあるやつだ」

「……」ノースの道を抜けるには、日の差をない洞窟のような道を二日三晩進まなければならぬといつ。

「……」一度迷えば、死者の国。そんな言葉もあるやつだ。

「……」

に、心地よい言葉を吐かれても必要以上に近づいてはいけません」

再三詰め寄られ、しぶしぶ頷いたものの、セイフは納得できなかつた。

まだ会つてもいない相手を悪く思つことが出来ないのだ。

「その本には何が書いてあるの?」

グラン強いの思いは、黒い本から生まれるに違いない。本を指差すと、グランは本と閉じ、表紙を撫でた。

「知らなければならぬことの全てです」

言い切つたグランにはせどりが白戻げだった。

「お茶がはいりましたわ」

ルーファがダリアの存在に気づいたのは、優しい声と共に、机の上にお茶の準備が出来てからだつた。

少々驚き気味の夫にふつと笑いかける。

「ルーファ様、いくら声をかけてもちつとも気づいてくれないのですもの」

わざと口を尖らせて見ても、ダリアの表情は柔らかで包みこむようになに広がつた香りからは気遣いが感じ取れる。

「ああ、悪かつた」

この香りは一番好むお茶の香りだ。

微笑を返しペンを置く。

机の上の書類は増えるばかりで減りそうにもない。

いつもの執務に加えて、タハルからの使者対策に追われてのことだ。

「さあ、お茶にしましょ。国をより良くするのが貴方の務めでも、一日一回のお茶の時間を貰つたつて悪くないはずだわ」

最近では息抜きだつた調練にさえ出れない始末だ。

四六時中、部屋に籠つていれば疲れもたまつてくるだろうに、ダリアに同意するように頷くルーファの顔からは疲労の影はみえない。それが、ダリアには少し悔しい。

「私、ここに居ますのよ

いきなりの言葉にルーファは目を瞬いた。

まだ、部屋に入ってきたことに気づかなかつたことを言つてゐるの
だらうか。

「 もう少し、弱音を吐いてくれても良いことと思います」

ルーファは良くも悪くも、外から変化が見えない。
連れ添つてやつと分かるようになつた小さな変化も、優しい笑みで
隠してしまつのだ。

「ダリアには感謝してるよ。」ついしてお茶を忘れずに入れてくれて
いる

「これは、私の趣味みたいなものですもの」

趣味にしては上出来すぎる。一緒に並べられた菓子は、専属の菓子
職人すら唸らせるほどの出来栄えだ。

「サンディア殿のことも任せきりだ」

前王妃でありジルフォードの母である彼女は、長い間城から遠く離
れた離宮に幽閉を余儀なくされていた。最近になつて、ようやく城
近くに移されたが、新たな争いの種になることを恐れ、彼女のこと
は未だに伏されたままだ。

知つているのはルーファにダリア、そして元帥だけ。
自然にサンディアのことばダリアがするようになった。
今では、時々お忍びで出かけてお茶をしたりしている。

「私がやつしたことをおましたの」

「お邪魔だったかな」

ひょこりと顔を出した男にルーファはため息一つ。

「ジョゼ、入るときはノックをしろと」

「いいとこに来てくれました！」

ルーファとは反対に満面の笑みを浮かべたダリアは机の上の書類の半分を持ち上げると、ジョゼの腕へと押し付ける。とつてに出してしまった腕の上にはずつしりと重い紙の束。

「おこ！何だよ」

「ルーファ様の仕事が多いのは兄様がサボっているせいもあるのよ。だからそれは兄様の仕事。今日中にお願いしますわ」

「国王の仕事が俺に務まるわけないだろ？」

「軍事のことなら兄様にも分かるはずです。最低限、ルーファ様しかできないものと、そうでないものを分けることくらい出来ますでしょ？」

来るんじゃなかつたと悔やんでみても後の祭り。

「「」となるとなるなら、嬢ちゃんのところでも行けばよかつたな

がしがしと頭を搔ぐジョゼにもお茶を注ぎながら、ダリアが笑みを浮かべた。

「残念ですね。セイラはグランヒルとの講義だから居ませんわ」

「聞きたかったんだが、何であのばあさんをつけたんだ？ あれグラード一族の出だらうが」

「優秀な一族だらう」

「……そりや、そうだがな。」

グラード一族といえど、廃れた地方貴族だ。

けれど裏を知っているものには意味が違つてくる。

情報収集の能力に長けた彼らは、闇の仕事を主に行つてているのだ。訣然としないといった声を出しながらも、ジョゼはわざわざと書類を書き分けていく。

一見無造作に散らかしているように見えて、ちゃんと項目ごとに分かれていた。

「んなもん、下の連中で出来るだらう」

悪態をつきながら弾かれた書類は、差し戻される事が確実となつた。その書類の多いこと。

「頭の切れる奴が欲しいもんだな」

軍事強化で進んできたために、筋力は有り余つていて、頭が追いつかない現状がある。

なまじハマナや少數の頭脳派がすこいだけに、そこに頼りきりで次代が育つていない。

アリオスにとつては頭の痛い問題だった。

「そりだな。体制の見直しも考えなくてはいけないな」

夫を休ませるための判断だったのに、雲行きが怪しくなってきた。
先ほどまで和やかお茶会モードだったのに、今や深刻な顔をしたルーファの姿がある。

ほんの十分ほどでもいいのだ。

少しでも執務を忘れてくつろげる時間を作つてあげたいのにヒダリアは窓の外に目をやつた。

「もうすぐシルトの祭が始まりますわね」

窓の外に見える街は祭りを意識して装いを変え始めていた。

「今回は嬢ちゃんが大役務めるんだろ」

大役と言えば最終日の春之女の舞だ。

「ええ、どんな舞になるか楽しみね」

いつのまにか和やかモードが帰ってきて、たっぷり注がれたお茶も冷める前に口をつけた。

「貴女……どうして出来ないの？」

震える声で問いかけるテラーナに自分こそ知りたいとセイラは深く深くため息をついた。

エイナの舞を覚えるべく、早々にグラント部屋を追い出されたセイラは、現在テラーナとマキナに囲まれて、床の上に伏せていた。部屋を出る際に、それまでの言動を全て見ていたグラントに「十点の減点を申し付けられた上に、テラーナからの手厳しい意見が押し掛かり、地面に埋まってしまいそうだ。

「まあ、まあ初めてなんだ。出来なくて当たり前や」

生まれたときからエイナの舞が身近にあるアリオスの住人ではないのだから、仕方がない。

テラーナにもそれは理解できるのだが。

「それにしても……」

普段の手合わせで見せる優雅な動きがどうして、出来ないのだ。あれが出来るなら楽勝だろうと考えていたのに。

「まあ、これが基本の動きだから。後は好きに踊つていいから」

「……はー」

これまた悩みの種なのだ。

エイナの舞を基本として独自の舞を考えるなど、今の状態のセイラに出来るはずがない。

「こつておきますけど、舞にはそれなりの衣装がありますのよ。そ

「のとひるが、よく理解しておこなへだせ。」

「うへ

頭を抱えて唸り始めたセイラをマキナは氣の毒そうに見つめたが、テラーナは容赦なかつた。

「使者がつくと、やぢらへの挨拶やいら向やうりで練習する時間なんてありませんからね。それまでに完璧になさつてください」

今回、タハルの使者は式に出る事が出来なかつた侘びも含めてやつてくるのだ。

対応には当事者であるセイラも必ず狩り出される。

「……はいへ

これから日々を考えてセイラは長い間息をついた。

第一章・見放された地より4

もしため息を具現化することができたとしたら、黒くてモヤモヤしたものがカナンの部屋の床一面に積もっているに違いない。重いそれは、簞で掃いたところで部屋から軽快に出て行くことはないだろう。

そんな鬱々としたものの生産者である、セイラは机に額をつけべりと伸びている。

光りの弾けていた亞麻色の髪も艶を失ったかのように沈んでいる。

「大丈夫ですか？」

「…うん」

カナンの心配げな声が振りそそぐと、優しさが沁みて涙が出てきそうだ。

グラン、テラーナ、マキナにみつちりしこかれ始めて、早数週間。体の節々も痛いが、頭も痛い。なんとか基本の舞だけは合格をもらえたのがせめてもの救いだろうか。

「もうすぐ来るんだよね？」

「……ええ、一、二日中には到着されるとか」

「ふう」

嬉しいのだ。

間違いなくタハルの使者がやってくることは嬉しいのだ。どんな人物が来るのか楽しみもあるし、向こうの生活はどうなのか等聞き

たいことは山ほどあるのだが、言葉を発せうとするたびにグラムの顔がちらつくのだ。

ついでに減点という幻聴も聞こえてくる。

けれど、使者を田の前にしたらいつも通りの口の聞き方をして、怒られるんだろうなと未来予想図でき上がつていた。

目を瞑つていると、頭の上を優しい感触が行き来する。

この感触がセイラは好きだ。

気遣うような優しい手つきは、どこか壊れ物を触るようにおつかなびっくりでくすぐつたい。

「大丈夫だよ。ジン。怒られるの慣れてるし」

そんなことに慣れないと下せことハナの視線を感じるが口は出してこなかつた。

この四人で顔を合わせるのも久しぶりの事だつた。

目を開けると、髪越しにオレンジ色が目にに入る。

見る角度のよつて色を変えるジルフォードの瞳が、今たたえているのは、消える前、一層輝く火の粉のよつな色。新しい瞳の色に鬱々したものなど吹き飛んでしまう。

「こんな角度で見上げる事なんてなかつたもんね~」

ジルフォードが体を引けば、すぐさま消えてしまう。ちよつともつたいないよつで、それがごく自然のよつで。

「ありがと。もう大丈夫」

頭を上げて、ちゃんと座りなおす。何とかなるものだ。げんきんなもので、嬉しい事があるとそう思えてしまつ。

「ジンは大丈夫?」

環境が変化したのはジルフォードも同じ事だ。

今まで、政治の世界など関係ない場所にいたのに、否応がなくかりだされることになり、ジルフォードのことを邪険にしていた相手が手のひらを返したように近づいてくる。

最初はジルフォードが他人と関わりを持つ事はよいことだと思っていたけれど、ジルフォードの居場所を聞きに群がつてこられると辟易するのだ。

彼らの顔に見えたのは、どうにか利用してやろうと「う思惑ばかりだつたからだ。

「大丈夫」

「よかつた」

最近のジルフォードは表情が豊かになってきたと思う。
薄い唇が僅かばかりの弧を描くことが多くなった。

初めて見る人物にとつては、とても笑顔を呼べるものではなかつたが、カナンにとつては嬉しい変化だつた。

一人の侍女がカナンの部屋の扉を見つめていた。

ジルフォードが入つてから一刻ほど前の時が経つていて。

中ではきっと馬鹿らしいほど和やかな空気が流れているのだろうと彼女は思った。

式の時の一人を見て、まるでおまじとみたいな夫婦だと苦笑が漏れた。

きっと夫婦と言つ感覺も持ち合わせていないのではないだろうか。

「そんなこと関係ないわね」

ジルフォードの人気だつて関係ない。

関係あるのは彼が王族である事だけ。

今まで、居ないようには扱われながらも、その存在はひどく目立つものだった。

其処に近づけば、必ず怪しまれる。

けれど、今や目立つ存在でありますながら、近づくのは前よりずっと容易になつた。

一刻も早く、そんな焦りを笑顔でこまかして、彼女は自分の仕事に戻つていつた。

薄汚れた一団が王城へ続く大通りを進んでいく。

灰色のマントは叩けば、盛大に砂埃が上がりそうだ。

彼らが乗っている馬だけは、体格も良く美しい毛並みをしているので、余計に乗り手をみすぼらしく見せている。

頭から足先まで、しつかり覆つた姿では、相手がどんな人物なのか察する事ができずに、人々に不安を抱かせる。

蹄の轟きと嘶きに子どもたちは振るえ、母親の影に隠れていく。大人たちは、何者なのか見極めようと視線を送るのだが、恐ろしいものと視線が交わつてしまつ前にと自然に瞼が下がつてしまつ。時折、風に煽られてマントの裾が大きく揺らぐとその下には、見たことの無い獸の毛皮がのぞくのだ。

祭りに合わせて陽気な音楽が流れる中、それはとても異様な光景に思われた。

門番の誰何の声が上がつた時、誰もがほつと息をついたと言つのし、頼みの綱の兵士はさつと慌てて頭を下げるに門を開けてしまつたのだ。

何故。

どうしてあんなものを通したのだ。

そんな声が聞こえてきそうだが、まさか門番の年若い兵士も、目の前を通りすぎていく不気味な一団が自國の国王とタハルの国王の署名が入つた手紙を持つてゐるなどと思つていなかつただろう。バクバクと鳴る心臓は本当に通してよかつたのだろうかと、その手紙を見た後でも思つてゐるからだ。

彼の心音が落ちついたのは、元帥であるハマナ・ローランドがその一団に深々と頭を下げてからだつた。

「意外にこじんまりと来たんだね」

セイラがつい漏らしてしまった呴きは、広い空間に溶けて相手までは届かなかつただろう。

アリオスのお偉い方がひしめく広間に導かれてきたのはたつたの五人だけだつた。

隣国からの使者、しかも王子が来るとのことだつたため、もつと仰々しく団体で来るのかと思っていたが違つたらしい。

まだ、誰もマントを脱いでいないのだ。

目深に被つたマントのせいで表情が読み取れない。

不敬であろう。

そんな想いが幾人もの内で燻つたが、それを声にすることはなかつた。

この対面が重要な意味を持つ事を誰もが理解していたからだ。

王座から続く階段の前で足を止めると、先頭を歩いていた背の高い人物がフードを取り払つた

現れたのは強い色をもつ青年だ。

彼の瞳とつねつた髪は全ての光りを吸収しているかのような濃い黒。夜の深淵。

それが意思を持ち人の形を象る。

耳を彩る銀と胸の前に掲げられた手の甲に施された刺青の赤が異彩を放つっていた。

「アロー」

伸びやかでいて、不思議な音を持つ声が広間の中を走つた。

よく通る声は、部屋の隅に隠れるよつこしてこる侍女の下にまで届いたであつた。

けれど誰も、言葉の意味を取りかねた。

「アロ？」

反応を返したのはセイラだけだ。

おそらくタハルの挨拶なのだろうと感じ取ったセイラは、同じよう

に相手に手の甲を向けてみた。

青年はセイラを視界にいれると表情を緩めた。

「タハルの挨拶は通じないかと思いましたが、通じたようですね」

にかつと笑われると、口元から真白な歯がのぞき、小麦色肌とのコントラストが目に焼きついた。

はつきりとした目鼻立ちと強烈な色は、アリオスにはない美しさで見た目を引くのだが、柔らかな言葉が踏み込んでくる不快感を与えない。

青年の挨拶はタハルに悪いイメージしか持つていなかつた人物に少なからず、そのイメージを緩和させる効果をもたらせた。

「お初にお目にかかります。アリオスの王よ。我が名はナジユール。この度はタハルの我慢をお聞き入れくださつたこと感謝いたします」

「アリオスにとつてもタハルとの友好が深まるのは歓迎すべき」とです。祭が終わつまで、あるつともくつれへださない

「やうせせていただきます」

それぞれの口上を述べ終えた後に、ナジユールは先ほど挨拶を返してくれたセイラへと視線を向けた。

「そなたがセイラ殿？」

「うう、はい」

頷こうとするグランの顔が脳裏にちらつき、思わず言葉使いを正す。もちろんグランのいう微笑も加えようとするのだが頬が引きつりそうだ。

「そして、ジルフォード殿」

セイラの隣に佇む青年の姿をみて、何故かナジユールは小さなため息をついた。

他国の王子を目の前にしてため息をつく理由など分からぬ。僅かに含まれた落胆が、広間の雰囲気を微妙に変化させる。

「ジルフォード殿は隠された王子、しかも魔物だと聞いていたものだから」

今度は確実に空気が変化した。

疑心を含みながらも友好的だった場が、魔物の一言でぴりりと緊張した。

今まで和やかに微笑んでいた夫の雰囲気が僅かばかり揺らいだのをダリアは肌で感じていた。

ナジユールの付き人も場の雰囲気が変化したのを感じ取つて、そつと彼の手を引いたが、彼には通じない。

「ウーフのような人物なのか、ホーンのような人物なのかと楽しみにしていたのですが」

数瞬、空気が弛緩した。

緊張が解けてというよりも、一瞬それを作り出していた人々のうちに空白が生じたのだ。

えつ？

何のことだ？

ウーフ？

誰それ？

誰一人として言葉には出さなかつたが、同じような困惑が人々のうちに沸いたのを見ることが出来た。

「ホーンはさすがに無理だね」

やはり、ついていけたのはセイラだけだ。

隣のジルフォードを見上げると、そんな一言を漏らした。

「！ セイラ殿はヘインズの剣を知っているのですか？」

「もちろん」

ヘインズの剣は子供向けの冒険物語。

ウーフやホーンはその中に出でてくる魔物の名前なのだ。

一度は読んだ事のある夢物語。しかし、誰もこんな場所で聞くとは思っていないため、その意味にたどり着けない。

ホーンは巨大な角を有した魔物のことだが、それを思い出せたのは幾人いたか。

「なんて素晴らしい！」

「うわー。」

抱きつかれた。

あまつさえ、そのまま一回転させられたのだ。
長身のナジユールに抱きかかえられると当然、足は宙に浮き、振り回されれば遠心力でピンと伸びる。

幸いな事に誰にもぶつからずにすんだのだが、突風のような抱擁が終わつた後には、微妙な空気が流れていた。

「こいつのよつなとこひでヘインズ談義が出来るなんて！」

しんと静まり返つた広間にナジユールの嬉しそうな笑いだけが響いていた。

どうやら、こいつの人物まわりの空気を読まないらしい。
おかしくなつた場の雰囲気をおさめたのは賢明な国王だった。

「今日はお疲れでしょう。部屋に案内させます」

その一言に、救われたのはナジユールの背後でうろたえていた付き人ばかりではないだろう。
緩んだ雰囲気は元に戻ることはなく、人々は氣の抜けたよつな足取りで広間を後にしてた。

第一章・見放された地より6

一旦はお開きになつたものの、ナジユールはセイラについてきた。そこにお目付け役のケイトまで加わって、ぞろりぞろりと書庫までの道のりを歩く。

短い道中の話は、専らホーンやウーフなどの話だったが、ケイトには口を出す事ができなかつた。

今や、書庫の中にはセイラ、ジルフォード、ハナ、カナンのいつも四人に加え、ケイト、ナジユールと彼の連れてきた少年が席に着いていた。

さすがにこの人数に入るには、カナンの部屋は狭いが、身を寄せれば、全員が座ることが出来る。

カナンは隣国の王子が突然現れたことに驚いたようだが、快く迎え入れ、お茶の準備をしている。

一人機嫌が悪いのは、先ほどの抱擁を見てしまつたハナだ。大きな瞳を怒らせてナジユールを睨んでいたのだが、「ハナ殿は情熱的ですね」と意味不明の言葉を吐かれたのでそっぽを向いた。マントを取り払つたタハルの一人は、奇妙な格好だつた。

彼らが腰に巻いているのは見たことの無い動物のもので、その毛並みは固い。

恐々と触るハナに矢ぐらいならば貫通しないと言つたナジユールの言葉は、あながち嘘ではなさそうだ。

少年のほうは色鮮やかな布を頭に幾重に巻いている。

その瞳の色からナジユールと同じような漆黒の髪だと思つたが、布の下からその色がのぞく事はない。

やはり目を引くのは、手の甲にほど施された刺青と、耳から長く垂れる銀色の球体だ。

耳飾にしては長いそれは魔除けなのだと言つた。

球体の中には香が入つており、その香りで憑しきものが近づくのを妨げるのだと。

「へえ～」

確かに見せてもらえれば、透かし彫りされた球体の中には何か入つており、不思議な香りがする。

エスターニアで魔除けと言えば玉の飾りだ。
その輝きによつて魔を祓つ。

「国によつて、いろいろ違うと、ですね」

先ほどから変なところで言葉を切るセイラフにナジユールは笑つた。

「話しやすい言葉でかまいませんよ。セイラフ殿。ここにいる皆が内緒にしておけば、怖い師に怒られなくてよいでしょう。」

漆黒の瞳はお見通しとばかりに細められた。にわか仕込みでは鍍金がはがれるのは時間の問題だ。

「なら、普通に話すよ。だから、ナジユール殿も普通に話して

「……普通ですか？」

「そう、タハルで話してみたまに」

その言葉に、ナジユールは頬を搔いた。

「どうか不自然な点が？」

「ううん。完璧だつたよ」

彼はセイラのように分かりやすい反応ではない。広間にいるときも、その態度は「よく自然に見えた。完璧だからこそ、どこか違和感がついて回るのだ。

「でも、なんか似合わないなあと思つて。だから、私なんかとは比べ物にならないくらい頑張つて覚えこんだつて感じがするのかなあつて。それに、怖い師つて言つたでしよう? ナジユール殿にもいたんじやないかなと思つてね」

「これは、まいった」

敬語をなくすと、途端にイメージにあつてくる。

「タハルは野蛮人という噂が広がつてゐるから、少しでも払拭しようと頑張つてみたんだが」

「挨拶できる人は野蛮人じやないよ」

「ありがとうございます。セイラ殿。それでは、互いに師がいな」とこうでは普段どおりにこうつ

セイラは同意するように微笑んだ。

「さつきのアローリやつがタハルの挨拶?」

「そうだよ」

ナジユールはさきほどやつたように、胸の前で相手に手の甲が向く

よつて掲げて見せた。

「「ひつやつて、武器を何も持っていない」と相手に教え、自分が何者なのかを伝えるんだ」

「……何者つて?」

「この刺青で分かる」

ナジユールの両の甲には同じ模様が彫られてある。

中央に「重の円があり、回りを不可思議な文様が埋めていく。

「赤は一の者。一の者からは他の色を使つ」

「一の者?」

「……ああ、そうだな一の者は、最初の子どもの事だ」

「第一子といつことですか?」

ハナの言葉にナジユールが頷いた。

「周りの文様で族名を表し、真ん中の模様が「このことを示す。ナジユールは太陽という意味だ。だから、私のは太陽の印だ」

ナジユールは背後に控えていた少年をよんだ。

「ルルドだ。お前のも見せてあげるとい

ルルドと呼ばれた少年は、しぶしぶながら、セイラの前に手の甲を

曝した。

彼は、どうやらナジユールほど、この空間に馴染んでいない。
彼の刺青は鮮やかな青だった。

「ルルドは慈しみの水だから、水の印だ」

中央の印は縦線が一本。

「へえ～面白いな」

身の乗り出して目を輝かせるセイラに、くすりと笑う。

「やうだな。セイラ殿なら、何がよいか。そういうえば、エスター・アの姫君は女神の名を貰うやうだな」

「やうだよ。私はリーズ。月の女神の名をもらつたの」

「月か。月なら単の円だ」

其処まで言つと、何かを思い出したかのよつと顔を上げる。

「なんと、セイラ殿は月の女神か。わが国では、月は太陽と夫婦だ」

セイラの手を取り、白い歯を輝かすナジユールにハナはピクリと米神をひくつかせた。

結婚している女性の手を掴みーしかも目の前には夫がいるー自分たちは夫婦だと嬉々として言つてゐるよつなものだ。

あくまで神話上の話だが。

そして、へえ～そつなんだと納得しているセイラにもちよつとばかし腹が立つ。

何度も言つてこゐようだが、自覚とこゝるものを持つて欲しい。

「月のセイラ殿、太陽の私。ぴったりだな」

飛びつかんばかりのナジユールの前に割り込み、そつとセイラを横に押しやつた。

「確かに、タハルの神話では月は太陽の傲慢振りに愛想をつかして、いつも反対の世界にいるのでしたわよね？」

「うじて昼と夜が出来たのだ。

これはカナンに教えてもらつたことだ。

「……いや～ハナ殿は博識だな。」のよつた女性がタハルにいてくれると嬉しいんだが。なあルルド」

「嫌ですよ。こんな煩い女

「うひうひうひ……」

ふるりと揺れるハナの肩を看めながら、ケイトは口元を引きつらせながら、ようやく言葉を出した。

「おっ落ち着きましょうね。ハナ殿

「落ち着いていますわ

そつこいながらも、差し出す為に掲げたコップは怒りのためこすりと揺れでいる。

「ジルもアリヤかですね」

無言でやつとりを見つけていたジルフォードはカナンの言葉に、やはり無言で頷いた。

第一章・見放された地より

「ん~うまい」

たつぱりと蜜のかかつたパンにかぶりつきながら、少年は至福のひと時を過ごしていた。

「やうだろ。そだわ」

ところそつな少年の笑顔に店主も笑みを浮かべた。

「お前さん、どこから来たんだい？ 見かけない格好だね」

少年が纏っているのは緻密な文様が織り込まれた布地のようだ。袖口がでろんと広く、腰に巻いているひも状のもので結んでいるだけのように見えるのに、どれほどうまいと暴れても肌蹴てしまわないのが不思議だった。

「ずーっとね、北からきたんだよ」

「ローラ山脈のあたりかい？」

「まあ、そんなとこ」

少年は一つ目をかぶりつきながら氣の無い返事をした。

「いっぽいに広がる幸せな甘さに夢中なのだ」。

あの山脈の近くには少数民族が点在していると聞く。

アリオスが豊かになるに従つていろいろな場所から人が集まつてくるようになつた。

ここも随分とにぎやかに、そして色彩豊かになつたと思つ。

店主は感慨深げに見せの外に視線をやつた。

特別に早く咲かせたシルトの花が街中を彩つて陽気な歌が流れてくれる。

戦ばかりだったことは大違ひだ。

このまま、この平穏がずっと続けばいいと思つ。

「そういやあ、変なのが城に入つていつたなあ」

小さな眩きを漏らして、店主は呼ぶ声に応じて奥へと引っ込んでいく。

「変なのだつて」

きやはりと少年は高い声で笑う。

口の端に蜜を垂らしながら、変なのが入つていた城門を見つめていた。

おかしげに細まる瞳は、無邪気な残酷さを秘めていた。

「彼らも無事に着いたみたいだね。さて、これからビーナスって接觸しようかな」

「時期が来れば、おのずと会えよつ」

少年は先ほどからパンにも手をつけず、話にも乗つてこない女にふうと頬を膨らませて見せた。

「ほくはねえ、早く会いたいんだよう。時期つていつ来るのぞー。」

「そのときになれば、分かる。勝手をして城に忍び込んだりするな

「むつー。」

まだ納得しかねる少年を置いて、女は席をたつた。
「必ず会える。それが運命だからな」

駄々をこねる子どもの顔だ。

結んだ。

第一章・白き花の告げるもの

日差しは暖かく、眠気を誘つに十分だつた。

それに合わせてか、城が纏う空氣も緊張を解き、ビリかわるつじた時間が流れていった。

静かな執務室に無遠慮に響いたのは、ジョゼ・アイベリーが盛大にもらしたあくびの音だつた。

水分の多くなつた瞳を瞬くと、クッショוןに頭を沈ませる。ここ数日、拍子抜けするほど何もない。

隣国からの使者はたつた五人であるし、しかも一人は少年だ。

その人数で何かを起こすには、あまりにも無謀であり、またアリオスの軍は無能ではない。

そして彼らはタハルの印象を裏返すほど皆、礼儀正しく穏やかだ。隣国の王子様はその物腰のせいか、目を引く容貌のせいか侍女にも貴族にも受け入れられ、小競り合いさえない日々だ。

国境付近も小康状態が続き、今のところ早急な心配事はないと言った。

キースは何があるか分からんと氣を張り詰めているが、そういうことは必要になつた時にすればよいというのがジョゼの考えだ。

従つて、今現在、アリオスの片翼である月影の将軍は、とても暇だつた。

「お前はいつたい何がしたいんだ？」

王の執務室の長椅子にでろんと伸びてゐる将軍にルーファはため息をついた。

「いやあ、お疲れの国王様に癒しを贈ろうとかと

「お前の寝姿などで癒されるか」

軽い無駄口が張り詰めていたものをふつと和らげて良く。
ジョゼが、どうぞうと居座るようになつてから、仕事がしやすくなつたのは、上げられる書類がきちんと項目別に分かれているからだ。
今も、寝転がりながらも、紙を仕分ける音がしている。

彼がここにいる分、将軍の仕事のしわ寄せがどこかに出ていこうな気がしてならないのだが、ルーファにとつてはありがたい。
後で、月影の連中に労いを送つておこう。

「またか！」

ジョゼが投げつけた紙の束が床の上を這う。

庶民の一家族の生活を一ヶ月は優に支えられるほどの大贅を詰め込んだ煌びやか紙に書かれた内容はどれもくだらないものばかりだ。
ご機嫌伺いに、やんわりとだが地位を上げろとの要求。

どうでもいいことなのに、高級な封筒とそれに施された印に圧倒され、おし抱くように恭しく届けられる。

「そう言つな

ルーファは床に広がる手紙を拾い上げる。

どんなにくだらないご機嫌伺いにも耳を通し、有力貴族との絆を保つのも彼の仕事なのだ。

「ジルフォードの侍女か

手紙の内容は弟の侍女に自分の娘をつけたことだった。
最近は、じついつた内容の手紙が多い。

「本人が望むならば、かまわないのだがな。」

それとなく聞いたこともあるのだが、「いらない」の一言で片付いてしまった。

今現在、侍女たちに追い回される状況も、表情にこじれがないが好んでではないようだ。

「ジルフォードで思い出した」

「何だ？」

「頭の切れるやつが少ないって話だ」

その言葉にしようと片眉を上げ、席に着く。

ジヨゼの言いたいことはよく分かる。

ジルフォードを執政の場所に。

今まで此方の都合で、関わらせないようにして、それどころか存在するないものにしようとていたのに、都合が悪くなると此方の世界に来いと。

国王としての立場ならば対応は決まっている。
けれど、兄としては？

「お前の言いたいことも分かるさ。だけどな、アイツだつていつまでもふらふらしてゐるわけにはいかないだろ？ 月影に誘つていつて言つてみるがいいやつあるぜ」

「……そうだな」

想うのは一人とも同じだ。

自分の望む道をあるかせてやりたいと。

落ちた視線は、自然に手元にあった手紙の文字を追った。

意味など頭には入ってこない。けれど、ある人物の名に目が釘付けとなつた。

「……サンティア殿」

「ん？ 元王妃様がどうした？」

『最近サンティア様の「機嫌はどうどうぞいましょう。』

優美な細い線が踊つていて。

全てを知つて嘲笑うかのようだ。

サンティアが西の離宮から離れたことは、ほとんどの人間が知らな
いはずなのに。

「そういうや、ダリアはどうしたんだ」

いつもならば、必ず口を出してくるはずの妹がいないことを不思議
に思つて視線を巡らせる。

「ヤガラく」

「ヤガラ？ なんでまた、そんなどこかに」

大貴族でも気軽に立ち入ることの出来ない場所。

そこは、さりに秘密を飲み込んだ。

今、まさにそこへと向つている妻の身を案じて、ルーファは強くま
ぶたを閉じた。

第一章・白き花の告げるもの2

田畠は雪解け水によつて潤い、新緑が大地を覆つていく。その中を軽やかに駆けていく馬の乗り手が若い女性だとしても農作業に勤しむ人々を感嘆させることは出来なかつた。

この辺りでは女性どころか小さな子どもまで馬を驅る事を知つているのだ。

もしも風にたなびく髪が見事な金色だと知れば、ほつとため息をつかすことが出来たかもしれないが、今はフードの下に隠されている。ここはタナトスから程近いヤガラと呼ばれる地域だ。

唯一民に自治が認められた特殊な場でもあつた。

その環境を壊さないようになると極力貴族の介入を許さず、許可を取らねばいかなる大貴族も中に入ることが出来ない。

「なにやら騒がしいですね」

先を駆けていたマキナが馬を止め、前方を睨みつける。ヤガラに入る唯一の門の前には派手な馬車が止まっており、その従者と門番とか激しく言い争つてゐるのだ。

「仲裁して来ましょう。ダリア様はここでお待ちください」

さほど珍しい光景でもない。

入れないとなるとどうしても入りたくなるよつだ。

今や、ヤガラへ入る許可を持つ事が一種のステータスになりつつある。

私はどこぞの大貴族であるぞ。

さつさと許可をおろさんか。

そんな会話はよく聞かれることだ。

「何か？」

いきなり現れた女性に従者は、門番を罵倒するのを止めたが、何者か見極めようと無遠慮な視線がマキナを讐め回す。

腰に帯びた剣に一瞬ひるむものの、相手の格好は平服だ。

己の主になど顔向けも出来ないほど下級のものだと認識すると、途端に嘲るような視線を送る。

「この愚か者が、私の主はヤガラに入ることが出来んなどと戯言をほざくのよ」

「許可はお持ちではないと」

マキナの言葉にぶんぶんと勢いよく門番は首を振る。

まだ年若い青年だ。

懸命に己の職務を全うしようとしたのだから。

顔は真っ赤で、言い負かされそうだった悔しさが滲んでいる。

「許可？ そんなものこの馬車を見れば分かるだろ？ ほら、見る。お前らのような下級階層でも知っている紋章だろ？ リグンブル様は大貴族様だぞ」

馬車に描かれた紋章は確かに有名なものだった。

「その大貴族様がヤガラに何用で？」

マキナの声は冷ややかだった。

ヤガラは長閑で美しい場所に違ひはなかつたが、それ以外に貴族の目を引きそうなものは無い。

「ここに居られる高貴な方とお話をなさるんだ」

「高貴？」

マキナは眉根を寄せた。

従者の言い方では、その相手が己の主と同等かそれ以上の位の人物だと言つてゐるようになつてゐるのだ。

確かにリグンブル家といえば名の通つた貴族だ。

それ以上の貴族がヤガラの中に入れば、必ずと噂が立つだろうに、マキナの耳には入つていない。

「だから、言つてゐるだらう。 今日ヤガラの中に貴族は一人も居ないつて！ あんたらの勘違いた。 そつと帰つておくれよ」

「いや、一人だけ居られるわ」

「お帰りください」

従者の言葉に重なるように、柔らかな声がした。

マキナの横にもう一頭、馬が並ぶ。

ダリアの顔は半ばフードに隠れていつたため、何者かまで従者には分からなかつた。

「大貴族と名乗るならば、それ相応の礼儀がありましょ」

声音は優しいながらも、凜とした強さがあり従者は思わず口を閉じ、馬車の中の人物を窺うように後方に目を向けると、馬車の天井が一度なつた。出せとの合図だ。

従者は何か言いたげに一二度、口を開閉したが何も言わずに鞭を振

るつた。

「顔も見せないとは」

もつもつと煙を上げて去つていく馬車に苦笑を一つ零し、門へと馬頭をめぐらせる。

先ほどの青年はどこかほつとした佇まいだ。

「ありがとうございます。ほんとにつ等、なかなか帰んなくて。貴族だからつていぱりくさつて」

「じめんなさいね」

沈む声に青年ははつと顔を上げた。
ダリアとて貴族の出だ。

「いえつダリア様が悪いんじゃないし、……貴族だつて悪い人ばっかりじやないつて知つてるけど」

同じくら、それ以上にひどいことをする貴族も知つていて青年の顔は物語つていた。

青年は曇つた表情を笑顔に変えると、さつと門を開けた。

「サンディア殿に会いにきたのでしよう。 あ、どうぞ」

ヤガラの人々には彼女の立場を伝えてはいなかつた。
薄々感づいているものもいたようだが、彼女は好意的に受け入れられていくようだ。

青年に礼を言いつつ、二人は馬を走らせた。

「情報が漏れてしまつたみたいね
「ものよつですね」

従者の言つ高貴な方とは、おそれべサンティアのじだ。
ヤガラの中には、以上容易には接觸することができないだつが、
今日のよつに強引なものがくれば、どうなるかわからぬ。
それを防ぐつと見張りを多くすれば、ここにと宣言してこるよ
うなものだ。

「対策を考えましょ」

「は」

しばりく馬を走らせると、じじんまつとした造りの家が見えてくる。
低い塀で囲われた其処には、子どもたちの笑い声が溢れていた。

「お邪魔するよ」

「マキナおねーちゃん!」

薦草を絡ませたアーチを潜れば、子どもたちが歓声を上げてマキナ
に纏わつづく。

「一緒に遊ぼうよ」

「剣を教えてくれる約束だよ」

「こいよ。じやあいひきこで」

マキナは子供たちをつまづく家の外へと誘導してこく。

残つたのはダリアとサンティアと、最期まで彼女に従つてきた老執事だけだ。

「元気やかでしたね」

突風が過ぎ去つた後のよつた静けさにダリアの笑い声が軽やかに響く。

「お久しぶりですね。サンティア様。貴女のお茶が恋しくなつて遊びに来てしました」

「それでは、さつそく準備いたしましょう」

サンティアの顔は晴れやかだつた。

平服に身を包み、皇かだつた指先には無数の傷が出来た彼女に王妃だつた頃の面影はなかつたが、どんなときよりもその表情は慈愛に満ちていた。ここに来るたびにヤガラを選んだことは正解だつたと思う。

「子どもたちがたくさんいましたね」

「今、文字の読み書きを教えています」

サンティアから全ての付属品を取り払つと、出来る事は「く僅かだつた」。

料理を作るも、田畠を耕す事もここに来てから初めてのことだ。何も満足に出来ないくせに、かつてはふんぞり返つて着飾つていたかと思うと顔から火が出そうだ。

何も出来ないサンティアに呆れつづ、ヤガラの人間は優しく彼女を受け入れ、なにくれと世話を焼いてくれるのだ。

唯一、「与える事ができるものがある」と気づいたときには、ひどく安堵したのを覚えている。

先生と呼ばれるのは、面映いが慕われるのは嬉しかった。勉学の師であるだけでなく、サンティアは彼らの母の役割も果たしていた。

戦の時期が多かつたアリオスには孤児が多く、ヤガラでも例外ではない。

小さな孤児院には、今もたくさんの孤児たちが暮らしているのだ。

「すばらしくことですわ」

「いいえ、あの子にしてやらなかつたことを押し付けているだけかもしだせん」

サンティアの表情が少し曇る。

あの子ージルフォードには何一つ教えてはあげなかつた。

「せうだとしても、彼らは幸せなのでしょ」

でなければ、あんなに笑顔で集まつたりしないだろ。

「もう少し、お待ちくださいね。準備が整えば、ジルフォードに会うことも出来ますわ」

それからでも、教えてあげることは山ほどあるだろ。ダリアの言葉に含まれたものを読み取つて、サンティアは小さく頷いた。

キレイに整えられた庭には、シルトの薺がふくらと膨らんでおり、数日中には白い花弁が天を向くだろ。

この前に来たときに、春乙女にセイラが選ばれたことは話した。

今日は何から話せばいいだらう。

「今、タハルの王子様が来ているのですよ」

第一章・白き花の告げるもの③

ナジユールの付き人として訪れたルルドたちにも一人ずつ個室が与えられた。

最初は特別対応に面食らっていたのだが、アリオスにして見れば何十とつてくると思って用意していた部屋の一部だ。

タハルでは焼しめたレンガ造りの家の外には荒涼とした砂漠が広がっている。

目覚めて一番に目にするものが四方を石の壁でぐるりと囲まれた空間であることに戸惑いを覚えることもなくなってきた。

けれど、窓の外には、木々が枝葉を伸ばし、ただ観賞用に池が作られているのが不思議で仕方ない。

タハルでは水の獲得は死活問題だ。

故郷を離れて数週間。

あの砂だらけのわびしい場所が懐かしい。

ここでは、夜中に大きな獣に襲われることを畏れ、煌煌と火をたくこともない。

武の国だと聞いたが、タハルに比べれば危険など微塵も感じなかつた。

上げ連ねれば、他国の文句とは山のように出てくるものだ。まず、このぬるりとした温度が嫌だ。

一番嫌な理由など分かりきっているのだが、言葉にするなど出来ない。

「もう慣れましたか

部屋の入ってきた老人はサクヤという。ルルドと同じくナジユールの付き人としてアリオスにやってきた人物だ。

声音は優しいながらも、苛烈な環境で過ごしてきた事を物語るよう
に細く見える体もたくましく、皺の刻まれた顔には厳しさが漂つ
いた。

「ああ」

ルルドは相手のほうを見もせずに頷いた。

彼の視線は窓の外に向けられたままだ。

そこに侍女と談笑するナジユールの姿があつた。

ああ、まだだ。

苛苛する。

馬鹿みたいに安全なこの場所で、眉間に皺を寄せる理由などないは
ずなのに、ルルドの眉間に最初から彫りこまれているかのように
深く皺が出来ていた。

「どうして、あんな事をさせるんだよ」

いつもならば、けして歯向かわないのに、ついに口が出た。

「あんな事とは？」

ルルドはぐつと拳を握り締めた。

「あれでは軟弱者の道化じゃないか！ ナジユールは太陽の王な
に」

悔しくて仕方がない。

ナジユールがへらりと笑つて、物腰の柔らかな言葉を選んでアリオスの連中の御機嫌取りをするなんて。

タハルでは苛烈な太陽そのままに、誰もが頭を垂れる男だったのに。

それでいて慕われる彼はルルドの憧れでもあった。

いつもは尊敬の対象でもあるサクヤも今ばかりは怒りの矛先だった。サクヤこそが、ナジユールにそう振舞えと助言したからだ。

「だからよいのです」

人当たりのよい言葉は野蛮な国というイメージを薄めさせる。

悔りたければ、そうすればよいのだ。

それが間違いだつたと気づいたときには、こちらが相手を飲み込んだ後なのだから。

「サクヤの考えは分からん！」

ナジユールを慕いきつているルルドには、どうしてもサクヤのやり方は納得できないものだった。

「お前は、タハルの人間ではないから、」

そこまで言つて、はつと息を呑んだルルドに苦笑した。

ルルドが言つたようにサクヤは生まれながらのタハル人ではない。その証拠に、生まれたときに刻まれる甲の刺青が彼には無かつた。

「思いついたことを考えもせずに口に出してはいけません。今のよううに後悔することになりますから」

「……すまん」

サクヤがタハルのためにどれだけ尽力しているか、ルルドには身に沁みて分かっているので謝罪はすぐに零れ落ちた。

悪戯をした幼子を許すようにサクヤは、その頭を撫でた。

「これもタハルのためです」

いつだってサクヤの言つたことは正しかつた。
もしも、ナジユールが関わつていなければ素直に頷けただろうこと、
ルルドは力なく頭を垂れた。

「今日は、書庫へは行かないの？」

「いや、行く」

ナジユールはルルドを伴つて毎日のように書庫へと足を向けるようになつた。

お世当では本ではなく、ヘインズ談義なのだ。
専らセイラとナジユールが話していく面白くないのだが、あの空間は好きだ。

なにより、ナジユールが普段通りに振舞つているのが嬉しい。
ハナという煩い侍女もいるけれど言いたい放題言える相手がいるのは気が楽だつた。

「ジルフォード殿とは話をしましたか？」

「いや、……アイツは何を考えているのか

会話にも殆ど入つてこないし、視線が合つ事もない。
瞳の色が変わるなんて不思議だったが、その分人形のように表情が変わらない。

「十一分に仲良くなさい」

国王の弟だ。

仲良くしておいて損はないだろうが、果たして出来るかどうか。
ルルドはサクヤの言葉に曖昧に頷いた。

ここ数日観察していく分かったのだが、ジルフォードという人物は恐ろしく隠れるのがうまいのだ。

ふつと気を抜いた瞬間に、たちどころに姿を見失ってしまう。

足音もしないものだから余計に探し出すのが難しい。

それが必然的に身についたのだとしたら……そこまで考えてクロエは頭を振った。

こんな余計な事を考えていっては、またもや対象を見失ってしまうと、廊下の先をぐつと睨みつけながら辛抱強く待った。

いつも、この辺で見えなくなってしまつのだ。

今日こそ接触を試みておかなれば。

彼に近づける状況で、尚且つ他の娘が近づけない時期はあまり長くない。

最早見慣れた色が視界に入つてきたとき、クロエは思わず身を引いた。

姿を隠す必要など無いのに、見つかればうまく撒かれてしまうような気がしたのだ。

そつと後ろに続くのだが、声をかけるタイミングがつかめない。

向こうの足取りはゆっくりとしたものなのに、間にある距離はなかなか縮まらないのだ。

ジルフォードが角を曲がった後に、ふいに姿が見えなくなつた。

また見失つたかと、大きな柱のある廊下で肩を落とす。

ふうと長いため息をつき壁に背を付くと、背後でカツンと響くものがあった。

そんなことはありえない。

後ろは正真正銘の石壁なのだから。けれど、耳を寄せてみれば微かに音がし、壁に手を這わせば、僅かばかり違和感がある。

馬鹿な思いつつ、力を込めれば石壁の一部がすつと沈んだのだ。

恐る恐る中を覗き込めば、人一人がやつと通れるほどの薄暗い通路が続いていた。

本当にこんな場所を通つてはいるのかと疑問が湧き出でてくるのだが、前方では微かな足音がしている。

クロエはえいとばかりに通路に身を投げ入れた。

手を離すと自然と壁が閉まり、もう前方へと続くしか道はない。

恐怖心と使命感がせめぎあいながら、クロエを突き動かす。

ほんの少しの好奇心もあつたのだろう。

通路が傾斜しているのが感じられ、地下にもぐつてはいるのだと分かった。

どれほど進んだだろうか。

かなりの距離を歩いたと思うのだが、急にぽかりと開けた空間に出たのだ。

全身を冷たい空気がそつと包み込む。

薄暗さに目が慣れてくると、ぼつと白いものがたくさんあるのが見て取れる。

それが全て棺だと気づいたときに、まさしくクロエは総毛だつた。

恐怖ではなく、自分の浅はかさを呪つて。

その棺の数に、この場所が何なのか気づいてしまつたのだ。

今や、王族しか入ることの出来ない聖地。

そんな場所にふらふらと入つてしまつたことがばれると身の破滅だ。見つかる前に引き返さなければ。

頭がその答えをはじき出す前に、足はもと来た道へと戻りつとしたのだが、聞こえてきた声に身をびくつかせた。

「何か用？」

恐る恐る振り向けば、追いかけてきた人物が其処にいた。

ジルフォードは棺と同じように微かに暗闇に白く浮いているように

思えた。

冥府の住人が問いかける。

「あの……」

感情の見えない声には疑惑すら含まれていなかつた。
ジルフォードにとつて見れば、後ろから追いかけてきた侍女はいつ
か諦めるだらうと思つていたのだ。

魔物と呼ばれる人物と不思議な通路。

引き返すには十分な材料が揃つていたのに、彼女は追いかけることを
止めなかつた。

何か言おうと口を開いたようだが、言葉は続かない。
用がないのならば、それもいい。

「私、クロエと申します」

どうやら相手には話す意志があるようだとみると、ジルフォードは
じつと相手を見つめた。

瞳の色が変わつたが、クロエは視線を逸らす事などしなかつた。
むしろ、その色に魅入られたように正面から向き合つた。

「クロエです」

「……クロエ」

あまりに必死な形相で名を告げるから、その名を口にしてしまつた。

「どうぞ、お見知りおき下せ」

それだけ言つて逃げるように去つていいく侍女に首を傾ける。

彼女が自分に何の用があったのかはさっぱり分からぬが、その響きはいつまでも口の中に残っていた。

「可笑しな娘に口をつけられたねえ」

しんと静まった空間にヒヨヒヨと奇妙な笑い声をたてながら、小さな老人が影から抜け出るように現れた。

墓守と名乗る老人は口元をにひやりと面白げに歪めた。

「それにしても熱烈な告白だ」

「告白？」

彼女はただ名乗つただけだ。

「あの娘つこはお前さんに名を覚えろと言つたんだ。覚えろつてことは名を呼べと言つ事だよ。名はね、その人間を縛るもんだ。それを呼ぶ権利を『えるつてのは、なかなか強烈じやないかい？』

墓守の笑い声は高くなる。

「名がどんな意味を持つかなんて、お前さんが一番知つているだろうぞ」

ジルフォードは魔物の名前。つい最近まで、誰もが恐れ口にしなかつた。

ただの名前だと言い切るには、哀しい過去がある。

「あのお姫さんとは仲良くなつてゐるのかい？」

墓守の白濁した眼には、城の中で起ころうとしていることはつぶさに見て取れる。

セイラが、今憔悴してグランの部屋を出た事も、ナジユールが侍女たちと談笑している事もだ。

二人の仲にさほど変化もなく、今は会う時間も少ないと知つての意地悪な質問だつたが、ジルフォードの表情に変化はない。そもそも仲良くの定義がよく分からぬのだ。

「……つまらんのう」

四六時中幸せオーラを撒かれるのも少々うれしいが、何の変化もない関係を見ているのも面白い物ではない。
まだ、どちらかが焦つていれば見所はあるのだが、ジルフォードもセイラものほんとしているのだ。
けれど、そろそろ波風が立ちそつた気配がする。

「太陽が、ふむ中々面白い者が来たようだ」

隣国の王子はその名が示すとおりその強い光りで、こんな地下からでも何処に居るのかすぐに分かる。
太陽と夜。相反する性質を持ちながら、どちらも月を伴侶に持つと言つ。

「頑張りなよ。王子様」

何も波風が立とうとしているのは、この城といつ小さな世界だけではない。

この大陸は今、大きなつねりの中を行こうとしているのだ。
緩んだ螺子の歪は大きくなり、歯車は流れ始めた。
あの時感じたのは嘘ではないのだ。

予見していた未来は、大きく変わつたある。

「ほれ、もうお行き」

今ならば、ちよつと地上に出た頃に、あの娘と出合つだらう。
何かを聞いたそつたジルフォードの背を押すと、墓守は現れたとき
と同じように、唐突に姿を消した。

「ジンー。」

嬉しげな声が足音と共に近づいてくる。
振り向けば、声が示す感情そのままの笑みを浮かべてセイラが小走
りにこちらへとやつてきていた。
陽光を含んだ髪さえも跳ね回り、喜びを露にしているようだ。

「そう。アリオスの王家に相応しい女性になるための授業その29
だつた。『よいですか、セイラ様。王族とはいかなる時でも毅然と
振舞わなければなりません』」

セイラはさつと前髪を上げると眉尻をきりつとあげ、グラムの低く
厳しい聲音を真似して言つた。
かなり似ていてると評判だ。

テラーの顔を微妙に歪ますことにも成功した。あれは、笑いを堪

えていたに違いない。

「疲れちゃった。カナンにお茶を入れてもいいおつよ」

セイラは針金を入れたかのようにぴんとした姿勢から、へこやりと力を失くすと書庫に行こうと手招きをする。なにやら鼻歌を口ずさみつつ、「二歩先をゆくべつと歩く。

「セイ」

「ん？ 何？」

呼んだ」とに意味など無かつた。いつまで経つても呼びなれない。

彼女の名はいつも、いつも口の中に不思議な余韻を残していく。わざわざ、振り向かせてしまつた事にちょっとした罪悪感が積もる。ただ、口を突いて出でてしまつただけなのだ。

特に用事があつたわけではないことを語ると、セイラはふつと口元を緩めた。

「ジーン」

それは特別な響きを持つて落ちてくる。

「呼んでみただけだよ」

悪戯が成功した子どもみたいな笑みを浮かべ、くるりとスカートを翻して前に向き直るとセイラはまた鼻歌を口ずさむ。知らないはずの旋律は、なぜか耳に馴染み暖かな日差しに似合つていた。

「結局、いつもと同じですね」

ハナはうんざりとばかりにため息をついた。

憔悴して帰つてくるであらうセイラのためにお茶を用意していたハナの耳に聞こえてきたのは、予想外に楽しげなセイラの鼻歌だつた。セイラがジルフォードを呼ぶ声がしたため、久しぶりに四人でゆつくりとお茶を飲めると思って扉を開けると、余分なものが一人付いて来ていたのだ。

廊下でナジユールに呼び止められ、そこにルルドが加わった結果のようだ。

ケイトの姿は見えなかつたが、彼一人いなくとも、部屋の騒がしさには変わりない。

むしろ見張り役もとい仲介役がいない分、カナンの部屋はにぎやかだ。

「お前、愛想が無い上に口答えばかりだな」

深いため息を聞きつけたルルドが、ふんと鼻を鳴らして言つたが、ハナだとて負けてはいない。

きりりと眉尻をあげると、席に着いているために自分より低い位置にいるルルドを冷たい瞳で見下ろした。

「貴方に愛想を振りまく必要がありまして?」

二対の黒い瞳がぶつかり合つて火花を散らすが、今日は生憎間に入つてくれるケイトがいないのだ。

彼がいなくて、一番の問題はハナとルルドが険悪さを増す事だ。

ぴりっと緊張した空気を一気に瓦解せたのはナジユールの感極まつた声だった。

「すばらしく！」

また、セイラとの話で彼なりの素晴らしい顔を現出したのかとちらりと視線をやつてハナは固まつた。

「なつー！」

これでもかといつほどハナの眉はつりあがり、口の端がひくりと揺れた。その今にも爆発しそうなハナの様子にルルドも後ろを窺つてぴしりと止まつた。

「ー。」

セイラが困り顔で黒い剛毛に埋もれている。音がしそうな勢いで一人を引き剥がすと、ハナはセイラを背中へと隠した。

「夫ある女性になんてことなさるんですか！」

キンと高い声が木霊したが、ナジユールは不当な扱いに不平をもらした。

「喜びを共有していたのだ」

「だつ、抱きつくなんて。喜びの共有とやらは他の方法でなさつてください！」

「ハナ殿は少々、神経質すぎるな。タハル人は感情の表現が大らかなのだ」

「貴方は無神経すぎます！」

最初こそ、隣国の王子だと慎ましく対処をしていたのだが、彼の奔放さにハナが業を煮やしたのは出合つてから、さほど時間が経つてないときだつた。

外面と全く違うのも怒りをうむ。

侍女仲間が「ナジユール様素敵よね」そんな会話をするたびに絶叫したくなるものだ。

「お前こそ、ナジユールになんてことする！」

ルルドが無理やり引き離すと言つ不敬を働いたハナに詰め寄つて、毎度の事ながら事態は悪化するのだ。

ひとしきり、一步も引かない口喧嘩をした後には、二人の額にはつすらと汗が滲んでいる。

不毛さに気づいて、身を引くのはいつもハナの方が先だ。よくも口が回るものだと感心しているセイラ見て、涙腺が緩むのをいつもの事。

「セイラ様もセイラ様ですわあ～……つう

泣き縋るハナの背を撫でながら、肩をすくめて見せる。

夫がある女性云々の話が分からぬわけではないのだが……なんとなく犬に懐かれているような感じがするのだ。彼らが身にまとう毛皮のせいかもしれないが。

ルルドなど、母親を取られないようにキヤンキヤンと鳴く子犬のよ

うだ。

懸命なことに口には出さなかつたが。

「ひどいと思わんか。ジルフォード殿。ハナ殿はあのように縋るくせに」

なんとも答えようの無い言葉を吐きつつ、ナジユールは子どものように頬を膨らます。

立派な青年でありながら、その動作が奇妙に映らないのは彼の魅力かもしれないが、外面を知っているものにとればハナと同じ言葉を吐くかもしれない。

「……絶対詐欺ですわ。騙されではいけませんよ。セイラ様」

他の侍女たちに見せる姿とはあまりに違う姿にハナはじと目で睨みつける。

反撃しようとしたルルドが口を開ける瞬間をついて、セイラはナジユールが纏う毛皮を指差した。

二人の口喧嘩を止めさせようと氣もあつたが、好奇心のほうが強かつた。

「それって何の毛皮？」

狼のようにも見えるが、セイラが知っているものより随分と大きなものだ。

「ルーガと言う獣だ。此方にはいないようだが、そうだな狼の体格を三倍にして残酷さを十倍にした感じの獣だ」

あまりに大雑把な説明だがよく分かる。

「丈夫で暖かいし、矢ぐらいなら難なく防ぐ事が出来る」

気になつてゐるのが、伝わつたのかナジユールは毛皮を外すと、わざりとセイラの背にかける。

セイラにすがり付いているハナは勿論巻き込まれ、その重さにうめき声を上げる事になつた。

その毛は固く、ずつしりと重い。

長身のナジユールの腰から下を覆うほどなので、セイラの体には大きすぎて、顔以外の全て覆われてしまつ。

まるで大きな獣に食いつかれているような哀れな姿にルルドからは憐憫の視線が送られ、ジルフォードからは珍しく苦笑を送られた。毛皮の海から抜け出そうとハナが悲鳴をあげたので、ナジユールはゆっくりと毛皮を持ち上げる。

そのゆっくりさに先ほどの仕返しをされているのではないかと、視線をやれば、にっこり笑われた。

絶対にそうだ。

「よく、そんな重いものを身につけていますわね」

「ハナ殿がひ弱なのだ」

先ほどと同じような口論が始まりそうなので、セイラが仲介に入ろうとすると、「ンと小さく書庫へと続く扉がなつた。

開けてみれば、瘦躯の老人が立つてゐる。

見知らぬ顔ではあつたが、纏う衣装は紛れもなくタハルのものだ。今話題になつてゐる毛皮も彼の細い腰に回されてゐた。

「サクヤ」

ルルドが訪問者に目を丸くした。

サクヤがわざわざ出むくほどどの何かが起つたのだろうか。

「何事だ？」

ナジユールが席を立ち、サクヤに近づき問うと、アリオスの貴族の誰かが挨拶をしたといつて、顔が簡単に告げられた。

厳しく引き締まつた表情が途端に崩れる。

その表情にはめんどくさいと大きくかいてある。

「そんなことしなくてもいいだろ？ 皆が皆同じようなことを述べていくせに」

「遊びで来ているのではありますから、仕事をしてくださー」

「少しでも有力者との繋がりを持つ事が貴方の仕事です。

言葉に出さずとも、サクヤの思つていることは突き刺さるような視線が物語つている。

「……わかった」

細くなつた瞳で見つめられると頷くより他はない。

「気が向かないが、行かないとサクヤが怖いからな」

部屋にいる者たちに小さく告げた後、ナジユールは頭を一振りした。揺れた髪が元の位置に戻る頃には、侍女たちが素敵だと騒ぐ微笑が浮んでいた。

まるで仮面でも被つたかのような早業だ。

「それでは、また」

優雅な一礼を残して去っていくナジユールに続きルルドが部屋を出て、サクヤが深々と頭を下げた。

彼が静かに扉を閉める瞬間、セイラを視界に入れ、その口の形を僅かに変えたが、誰にも見られることは無かつた。

それは消え入りそうな笑みだつたのかもしれない。

「ルーガだつて」

ナジユールが置いていった毛皮を触りつつ、どんな姿だらうと思いつはせる。

この固さでは、婦人たちを飾る装飾品としては使えないだろう。

「タハルには、こんなのがいっぱいいるのかな？」

「子どもほどの大きな鳥がいるとは聞いたことがありますよ」

「本当!」

瞳を輝かすセイラにカナンはあえて伝えなかつた。

その鳥もまた、凶暴で人を襲うと言われている事を。

ナジユールがヘインズの話がことさら好きなのは、同じよつた環境で育つたからではないかと言う思いが頭をよぎる。

獣と呼ぶには、あまりにも強大な力を振るつものが跋扈する世界で、タハルは真に欲しているのだ。

魔物殺しの英雄を。

ヘインズ

「リュウはいるのかな？」

「リュウですか？」

「ヘインズのお話に出て来るんだよ。綺麗なうるこに覆われてて、世界の全てを知ってる偉い生き物なんだ。人間が嫌いなんだけど」とリュウは争うようになり、世界は暗黒時代に入る。そんな冒頭で始まる物語は、ヘインズがリュウと対峙したところでぶつりと終わってしまうのだ。

「いるかもしませんね」

「一緒に見に行きたいね」

カナンの言葉に嬉しくなつてジルフォードを見上げ、にっこり笑った。指折り数えれば、行きたい場所も見たいものもたくさんあるのだ。

「いつか、世界中を巡るぞー」

何気ない一言と突き上げられた拳に呪力があつたかは誰にも分からぬ。

第一章・白き花の告げるもの⑥

席に着いて一呼吸するとサクヤによつて扉が開かれた。

期待はしていなかつたが、現れたのはやはりいかにも貴族ですと言わんばかりに着飾つた中年の男が一人。

痩せすぎの男は、室内を一瞥し、愛想笑いと一目で分かる笑みを浮かべ、小太りの男は鼻の下にちょろりと生えた鬚を一撫ですると、此方も何かを探るように視線を巡らせた。

用意されたままの状態の部屋には彼らの興味を惹くものは生憎となかつた。

「「アロー」」

進み出た二人は両手を肩の位置で掲げてみせた。

タハル流の挨拶ですと自信満面の顔に違つと言つてやりたかつたがサクヤが瞳を光らせていることもあって笑みを浮かべるに止めた。手のひらを相手に見せての挨拶は挑発しているのと同じなのだ。

お前などに正体を教えるものかと。

ルルドがいたなら目をむいたであろうが、今は隣の部屋で待機を言い渡されている。

感情と言動が直結しているルルドは、こいつた場所ではトラブルを巻き起こす事になりかねないからだ。

「お会いできて光榮です。私、ラングエルと申します」

体に似合つて細い声が告げると、

「ヒリオと申します」

野太い声が続いた。

それぞれが、自分はどの地方を治めていて、どれほど素晴らしいもののかを声高に続けるのだが、もちろん耳には入ってきても頭にはさっぱりと入っこない。

タハルならば楽なのに。

刺青を見れば何処のもののかすぐに分かる。

話を聞いている限り同族でもないのに、どうして共に来たのだろうか。

その答えは、三度ほどあぐびをかみ殺した後に訪れた。

「今日は、リブングル様の使いで参りました」

「なにぶん、忙しい方なので」

大げさなほど申し訳なさそうな顔をするエリオに、気にしないで下さいと微笑んだが、内心は「ちちうど忙しいとふつりと怒りがわいていた。

「こんなおっさんのためにカナン殿のお茶を逃したのか

サクヤを見やると軽く首を振られた。
やはりリブングルとやらに覚えはない。

「これは、贈り物でござります」

恭しく掲げられたものは皇かな布がかけられている。

その一枚とてかなりの値があるものだつ。

いやらしいほどゆつくりと布を引かれ、目の前に現れたのは光り輝く金の杯だった。

細部にまで施された細工は美しく、見るものにため息を零させる。

ナジユールの口からも息が漏れた。

それが感嘆だと受け取つた二人は、顔を見合わせにやりと微笑んだ。

「これは、素晴らしい……」

重そうだ

手にとつて見ればずしりと思い。

実用より装飾性を取つたそれを日常で使うのは困難であろう。アリオスの人間は、どうして自分たちが少数で、部屋を飾るほどのものも持たない軽装でやつてきたのかは考えないようだとため息をついた。

どれほど大きく息をつこうとも、今は全て感激してのため息と取つてくれるだろうと遠慮はなかつた。

ノースの道はとても厳しい。

無駄など命取りだ。

どうせなら、上にかかつてていた布のほうが軽くてよいのに。

ちらちらと上目遣いが見え、内心げつそりとしながら笑みを浮かべた。

おっさんの上目遣いなど可愛いわけがない。

「リブングル殿の使いとおっしゃつたが、一体どのような御用でしょう？」

何の下心もなく、貴族から贈り物をもらえるなどありえない」とはよく知つている。

アリオスに比べようもないほど疲弊したタハルから得るものなど何も無い。

ならば、国内の権力争いの類だろう。

くだらない話が一刻も早く終わるように、ナジユールは贈り物に浮かれる馬鹿な王子の顔を貼り付けた。

第一章・白き花の告げるもの

「先の話、どう思つ?」

当たり障りのない返事をして、一人の貴族を見送る頃には空は赤く変じていた。

その、どろんと重たげな色と同じように、ナジユールの声は重い。疲れ半分、怒り半分。

彼らがどうどう語つた内容は無駄を省けば、半日もかかるものではない。

「権利の回復という部分は同意いたしますが……」

話の間中、ぴくりとも表情を変えず、立ち続けていたサクヤは称賛に値する。

その姿に感心しながらも、サクヤがいなければ、どうにかして逃げ出したのに。

そんな思考を呼んだのが、疲れ知らずの厳しい瞳がナジユールを射ぬいた。

「そこは、私も納得するが……」

三流貴族にしては、話の出始めは良かつた。

尊い身分の方ながら、不当な扱いを受けている女性がありますと。どうもきな臭い話ではあったが、どうせなら話の中心はおっさんより、女性の方がいい。

しかも、相手は美人なようで、セイラにも関わりがあるらしい。ちょっとばかり話を聞いてやってもいいかと思つていると、彼らのネタばらしは早かつた。

その女性とは、元王妃のサンティアだった。

うつとおしい泣きまねまでしながら、どうかサンティア様が、もとのように暮らせるように力を貸してくださいと。

彼らの言つ権利の回復すなわち、権力の回復と云ふことだ。
争いを生むのは必然。

「結局は政権を握りたいから、力を貸せと云ふことだらう。サンティア殿はおまけだ」

こんなにも苛立つのは、この状況を己と重ねてゐるからか。
仲の良い兄弟の間に亀裂を生むのは、いつだって強欲なとりました
ちのせいだ。

サンティアを取り込めば、その魔の手はジルフォードへと伸ばされ
ていくに違ひない。

「どうらへ？」

すぐりと立ち上がったナジユールにすぐさまサクヤが問いかける。

「散歩だ。付いて来るなよ。半口我慢したんだからな自由田舎へぐら
いくれてもいいだらう」

ナジユールが上面を貼り付けるのがうまいだけで、けして気が長い
ほうではないことを十分に知っているサクヤは静かに頭を下げた。

「あれが本当にタハルの王子かのう。」

「あれぐらいの贈り物で頭を地に着けんばかり」

ひげた忍び笑いが一人の男の口からもれ出て、不快に空気を振動させた。

二人は前方からやつてくる一人連れを見つけ一瞬目を丸くすると、すぐさま笑みを貼り付けた。

「これは、これはキース将軍にアイベリー将軍。お一人揃つてなど珍しい」

肩を並べて現れたのは、月影、陽炎、両軍の将軍だ。長身の一人に見下ろされて、彼らはへこりと頭を下げるよう而去つていった。

「誰だ、あいつら

「ランゲル殿とエリオ殿だ」

一人はそれなりに名の通つた貴族なのだが、ジョゼにはまったく覚えがない。

聞いておきながらどうでもいいような返事を返したジョゼを睨みつけるとラルドは軽く息を吐く。

逆に覚えていたら恐ろしい。

彼のお気に入りで無い限り、どうもってひどい目にあわせてやるつかと画策しているほど嫌な相手とこいつになるとになる。

「数年前まで、アリオスも野蛮な国だと言われてたつてのに」

「うむ」

「これでは、どちらが礼儀も知らぬうつけだか」

誰が通るかも分からぬ廊下で隣国王子の悪口をおおっぴらに口にするとは。

「もう少し、遅かつたら戦争だつたかもな」

貴族たちが歩いてきた方向からナジユールが姿を現したのだ。

「おや、両将軍。アローー」

二人は会釈で答えた。

とくに、話も無いのでそのまますれ違あうとすると、二人の目の前でナジユールが足を止めた。

一人に負けぬくらい、ナジユールも背が高い。

ちょうど向き合つた強い色の瞳には、いつもの人当たりのよい笑みは無い。

「もしよければ伝えてくれないだろうか。賄賂は金の杯よりも食料がいいと。タハルでは万年食糧不足でね、金の杯など貰つたところで食べれないし、あんな浅いものでは水を汲む役にすらたん。無下に断つて心象が悪くなるのは困ると思つて笑顔で貰つておいたが、はつきり言つて邪魔だ。ああ、人材ならば大いに結構。」

頷く暇も与えず、まくし立て言いたいことが終わるとナジユールは去つていく。

言葉さえ飾る事を止めたナジユールに違和感はない。むしろ、これが素の彼なのだと妙に納得できる。やはり、最初に受けた強烈な印象こそが本質なのだ。

「本当にどちらがうつけか」

ラルドの顔に苦い笑みが浮んだ。完全に手のひらの上で転がされているのだ。きっと影で嘲つていてる事も知つているのだろう。

「あいつはルーファ型だな」

「ルーファ王？……なんのことだ？」

「俺流、人間觀察。今のところ、ルーファ型と嬢ちゃん型とラルド型がある」

今のところと言つあたり、いい加減さが漂つてゐる気がしないでもないのだが、知つてゐる名が出てくると妙に気になるものだ。しかも、自分の名が在るのならばなお更。

「ルーファ型は裏表がある。完璧に使い分けるから性質が悪い」

「ルーファ王がか？」

「今度、休み時間の執務室に入つてみる。逃げ出したくなるぞ」

心配していた妻がけろりとした顔で戻ってきたので、現在の執務室も逃げ出したくなる有様だろう。ジョゼも、ダリアが席を立つた瞬間をついて逃げ出してきたのだ。

「嬢ちゃんど「うのはセイラ様のことか？」

渋い表情が、その呼び名は相応しくないと言つてゐるがジョゼの知つた事ではない。

本人がいいと言つたのだからと肩をすくめ、ふつと笑う。

「能天気に好き勝手に突つ走るタイプだな。それでいて、確信に近いところにいるから怖い。それで、ラルド型はだな」

喜色満面。

「くそ真面目で一直線。信念を貫き通す姿勢は天晴れだが、時々うざい。」

「……」

どうこう反応を返していいものかラルドは困つた。これは、褒められているのだろうか。

「……それは、褒められているのか？」

くそ真面目のラルドは直球勝負。
分からぬのならば、聞いてしまつのがいい。

「やつ聞こえたか？」

「こや、ひきことはどうひ考へても褒め言葉とは思へん」

「じゃあ、やうなんだら」

口を引き結んだラルドの顔が面白く、ついに噴出した。

「褒めてんだよ。やつこつ暑苦しい奴もたまには必要だ」

「誰が暑苦しいだと」

さすがに、これにはむつときた。

ひとつとした氣を感じ取ると、ジョゼは一瞬と口の端を上げた。

「最近、書類整理で体がなまつてんだよ。」

ジョゼの思惑を正確に読んで、ラルドはしかめつ面で頷いた。

「望むところだ」

一人の足は、誰もいなくなつた調練場へと向かつていた。

第一章・白き花の告げるもの

散歩と称して出てきたものの、特に当てがあるわけではなかつた。他国の城を誰の案内も無しにふらつるのは好ましくないことだと分かつてはいたが、さすくれ立つた気持ちのまま部屋に閉じこもつているのは嫌だつた。

愛用の毛皮をカナンの部屋に置いてきたことを思い出したが、再びあそこを訪ねるのも気が進まない。

廊下には橙色の明かりが灯されはじめていたが、その光りさえ今では癪にさわる。

タハルではこんな気分の時、どうしていだろつ。

一遠乗りか……

それこそ、許されることではない。

ふうとため息をついたとき、背後から名を呼ばれた。

振り向けば想像通りの人物が手を振りながら、近づいてくるところだった。

「セイラ殿……どこかへ行くのかい？」

見回してみても、いつも煩いぐらいにひつついているハナの姿は見えず、セイラの手にはバスケットが握られている。

「月の綺麗な夜だから秘密の場所にね

セイラはこれから不思議な話を始める語り部のよう、人の興味をそそるような笑みを浮かべ、そつと囁いた。

もちろん、秘密の場所という単語は気になる。

しかも月が綺麗だから?

「ついていても良いだろ?」

だめだと言われば別の場所を探そう。
軽い気持ちで言ったナジユールに、セイラはにこりと笑みを浮かべた。

「もちろん」

日が暮れるのはあつと言ひ間で、空はすでに闇夜色。
何時の間にか月ものぼり、明かりが無くとも行動するには十分なほど
の光りがあった。

セイラが向かったのはどうやら、庭園の一角らしい。金属の門をくぐり抜けると、わざりと四方から枝葉が伸びる。
アリオスで最初に咲く花はシルトの花だ。

その花もやつと咲き始めたばかり。

アリオスでは城であつても特別に時期をずらし、花を咲かしたりな

どはしない。

それなのに、そこには甘さを含んだ不思議な香りがあった。

「エーリは？」

植木の壙に囲まれた通路は細く、外から中をつかがい知る事はできない上に、その壙は何重にもあるのか、何度も角を曲がったのだがセイラが足を止める事はない。

すんずんと先に行くセイラの姿を見失わないよう足を速めながら問うと、さつと視界が開けた。

「カナンの烟だよ」

そこには、きれいに区画わけされた烟があった。

「あつちからはお城の厨房で使つようだから入つちやだめなの」

烟の先にはもう一つ、門があり厳重に鍵がかかっている。あきらかに、カナンのと言つた烟のほつが大きい気がするのだが。城の一角に自分の烟を持つなど、いつもにこやかな優しい老人は何者だろうか。

「カナンのお茶の材料がいっぱいあるんだよ。この良こにおこは葉つぱから出てるんだ」

差し出された葉に鼻を寄せると確かに甘い香りがする。

「甘いよ？」

試すような物言いに半信半疑で口に含めば、青臭さと共に甘みが広

がつた。

「驚いたな」

洗練された菓子しかしない者にとれば、とても食べられたものではなかつたがナジユールにとれば十分だ。
甘味の貴重であるタハルにどうにかして植えることができないだろうかと思案していると、田の前にカップが差し出された。
湯気が立ち、一層甘い香りが広がる。

「それを乾燥させてお茶にしたらこうなるんだよ」

いつのまにか、敷物が引かれお茶と菓子が用意されていた。

「よく、ここに来るのかい？」

「なんだか好きなんだよ。どうしてかな？」

セイラが月が綺麗な夜だからといった意味がようやく分かった。
強い光に照らされて木々の影がくつきりと浮かび上がっている。
風に揺れて、伸び上がり、踊るように動く。
その影を踏むようにセイラ周囲を回る。
月の光りに照らされたセイラだけの舞台。

「ココウはいるかな？」

一瞬、何を言われているのか分からなかつた。田の前で起る光景に魅入られていたのだ。

リュウが大好きな物語に出てくるものだつたと思い出す頃には、セイラは跳ね回るのをやめバスケットの中から焼き菓子を摘むと口に

放り込んだ。いるかいないかと問われれば、いないと答えるしかない。

少なくともタハルにはそんな素晴らしい生き物はいやしない。それど、現実的な答えでこの世界を壊すのは憚られて

「セイラ殿はヘインズはリュウを倒したと思つかい？」

別の質問を返した。

終わりの無い物語。

ヘインズがリュウを倒して初めて終わるはずなのに、その部分だけが書かれていない。

「わかんない。でも、ヘインズはリュウが好きだったんだよ」

それこそが真実だと告げているような、きつぱりとした声。

「そんな馬鹿な。好きだったのに倒しに行つたといつのか？」

まるで詰問めいた声を出してしまった事を恥じたが、セイラはふつと柔らかく笑つた。

月光を纏つた髪に彩られた笑みに、いくつと心臓が音をたてる。

「私も受け売りなんだけどね。愛してたからこそ、自分が最期を与えてやるつ、そう思つたんだつて。他の誰にも譲ることはできなかつたんだつて」

大好きならば争わなければ良いのに。そつまつたセイラに母は「そうね」と悲しげに微笑んだ。

「でも、もしもリュウもヘインズを愛したら」

答えなど出るはずもなく、それぞれが望む未来を夢見るのが。

愛しさゆえに終わらない物語。

わざわざ立つた気持ちもいつの間に廻いでいた。

「セイラ殿は不思議な人だな

「そ？」

変だとかつつしみが足りないとはよく言われているが、不思議は初めてかもしれない。

「タハルの連中もそいつだらう」

その素直さに、朗らかさに、月光に愛されたかのような姿に驚き、そして受け入れられる。

そんな様子が容易に想像できる。

砂ばかりの世界を見ても、きっと第一声は否定の言葉ではない。そんな気がしてくると無性に見てみたくなった。

「セイラ殿、タハルに来るといい」

きよとりとした瞳が嬉しげに溶けていく瞬間、気づいてしまった。廻いだはずの気持ちがざわめく理由を。

「うん、行く！」

そこに生まれ温度差を埋めるよつて、まだ暖かいお茶を流し込んだ。

第一章・白き花の告げるもの⑨

秘密の場所とやらに出かけて行つたセイラがいつ帰つてきてもいいように、ハナの手によつて寝室は完璧に整えられていた。

秘密のといつても城の中のことだ。

ある程度予想はついているので、あまり心配してはいない。もう帰つてくるだらうと思う頃には、必ずただいまと扉が開くのだ。セイラは、今日も同じようく満足げな顔をして帰つてきた。

一つ違うのは、バスケットの重さが予想以上に軽いことだ。いつも、一人では食べきれないほどのお茶とお菓子を持っていくのだが、それが全く残つていらない。

「セイラ様、誰かどー」一緒にでした？」

今まで道すがら知り合いに会えば分けていたようだから、何気ない一言だつた。

ジョゼかケイトあたりの名が浮ぶと思つていたのに、予想外の名に飛び上がつた。

「途中でナジユール殿に会つてね。一緒に食べたんだよ」

ハナの予想ではセイラ出かけていくのはカナンの畠だ。

一度案内された時、ひどく気に入つた様子だったので自由に入つていいといつお許しを頂いたのだ。

周りから隔絶された場所は秘密というに相応しい。

けれど、そんな場所でナジユールと一人きり。ハナはさつと青ざめた。

「セイラ様！ 何もされなかつたでしょうね！ 抱きつかれたり、

抱きつかれたりなんて……」「

「されてないよ。葉っぱ食べさせて、お茶飲んで、リュウの話をしだだけ」

『氣になる言葉が出てきたが、見事に聞き流した。

葉っぱを食べただぐらいで、お腹を壊すような軟弱さは持ち合わせていないうだろ。

「氣をつけてくださいませ。あんな、あんな方と一緒にりなんて……」

…

ハナの中でナジユールの評価は地の底のようだ。
田の据わったハナの迫力に押され、曖昧に頷くセイラにふうとため息一つ。

「変な噂でも立てられたら大変ですわ」

噂が立つのはあつと言ひ聞。

事実に尾ひれ背びれがついて、世間を渡つていぐのは田に見えてい
る。

今は、皆もうすぐ始まる祭りに氣を取られているところだが、二人
きりの姿など見られてしまえば、関心は一気に切り替わる事だろう。

「ハナは心配性だなあ」

「心配にもなりますわ。……ジン様のことだつて」

「ジンがどうかした?」

ハナはゆるく首を振った。

ハナとて侍女仲間の一人に聞いたに過ぎない。

「最近、ジルフォード様、クロエといふのを見かけるけれど、あの人がジルフォード様付になるの？」

その娘は、ハナに事実を問うように尋ねたが、寝耳に水の話だった。

「最近、クロエといふ侍女といふところをよく見かけられる感じで」

それ 자체はたいして問題ではないのだ。

ジルフォードの理解者が増えるのは喜ばしい事に違いない。
けれど、そこに権力争いや貴族たちの思惑は絡んで、ジルフォード
を利用しようと言う魂胆なら見過ごす事なんて出来ない。

「クロエって、すらうとした美人さんのことかな？」

「知っているんですか？」

「書庫で一回話したのと、何回か見かけてことがあるよ」

「……そうですか」

彼女が近づいた真意を探らなければ。

そう決意したハナの前で、セイラはくわっと猫がするようにあぐび
をし長椅子に倒れこむ。

緊張感のカケラもない姿が、「彼女のことは心配する事ないよ」そ
う言つてゐるようになに見えた。

「あの組み合わせ。最近良く田にするね」

ナジユールの視線の先にはジルフォードと一人の侍女の姿がある。ジルフォードが他人と話している場面が珍しいのと、相手が中々美人ということもあって名前は知らないものの、彼女の顔には覚えがあつた。

内容までは分からぬけれど、会話は途切れていらないらしい。廊下で立ち止まっているセイラを見つけ、その視線をたどると今の光景があつたのだ。

「……セイラ殿は嬉しいのかい？」

ジルフォードを見るセイラの田はどこか嬉しげに細められて、口角もふつと柔らかな弧をかいてある。こんな状況でなければ、その様子に表情を緩めたのだが。

「うん」

「……夫が別の女性と仲良くしてて嬉しいなんて、変わっていると思つが」

初めて此方を向いた瞳には、「何故?」そんな不思議な色が宿つていた。

よどみの無い答えに首を傾げたくなるのは此方だといつのこと。

「まつたく」

苦笑のよつな小さな吐息が漏れる。

「あまりに幼い愛情なのか」

時に憎悪にも変わるほど想いを知らぬがゆえか。

「それとも女神のよつに寛大な愛情なのか」

時に残酷なほど慈悲深い想いゆえか。

自分ならば、どちらも要らない。

同じ身の丈の愛情を返して欲しい。

そう想うのは傲慢だろうか。

この愛情を注がれる対象のジルフォードは、どう思うだろう。ふと浮かんだ疑問の答えを探ろうと、その答えを持つてゐるであろう人物に視線を移す。

目があつた想いは、きっと錯覚に違いない。

一瞬だけ見えたような赤い色は白い髪に隠されて何処にもなかつた。視線を戻せば、やはり疑問を宿した瞳がナジユールを見つめている。吐息がかかるほど近づいても、大きな瞳に搖るぎは無い。まったく意識されていないのか、そういうことに鈍感なのか判断がつかない。

慌てた声を出したのは隣にいたルルドのほうだ。

「ただの阿呆です！」

「なんで、ジンが仲良くしてると嬉しいのが阿呆になるのさ」

むつとしたセイラがルルドの頬を抓つて伸ばす。

ルルドの身長は低いのでセイラでも容易に手が届くのだ。

「「」やにをふるー。」

「変な顔ー。」

まるで仔犬のじゃれあいのような光景についつい頬も緩む。ナジユールは一人の頭に手を置いて、ぐりんと方向を変えさせた。そのまま押せば、つられた様に一人とも付いて来る。

「ど「」に行くんだ?」

「街を案内してもうおうと思つてね」

シルトの祭りは明日から始まるのだが、すでに街には熱気が満ちる祭り状態。

城の中にも、熱気は十分に伝わってくる。

正式に祭りが始まれば、自由には動けまい。

タハルの客人たちは、その前に街の降りて楽しんでしまおうとの考えだ。

ずっと城の中にいた反動も大きく、サクヤの制止の声も聞こえない振りをした。

「どうかいました?」

会話が途切れた、といつても話すのはクロエばかりでジルフォードは頷きを返すばかりが多かったのだが、それすら返つてこないこと

に気づきクロエは視線を上げた。

長い睫に縁取られた瞳が話題の種から離れていることを知ると、何が彼の関心を引いたのか気になり、視線を追いかける。

ジルフォードの視線の先には、誰もいない廊下があった。

流れるような速さで連れて行かれたセイラが問題に気づいたのは城を出て、大通りを歩いている時だった。

「……私、あんまり道詳しくないんだけどな」

一、二度、街に下りたことはあるが、ケイトに連れられてきょろき

よろと見回してばかりいたので、道順を詳しく覚えていないの」と
にやつと思い至ったのだ。

それに裏街に迷い込めば、地元の人間でも方向がつかめなくなるか
ら、入ってはいけないと言われたような気がする。
そんな場所に不慣れ三人が行つて大丈夫だろうか。
しかも、そのうち二人はまったくの初めてだ。
セイラの心配をよそにナジユールはにっこり笑つた。

「迷子になつてみるのもいいさ。新たな発見があるかもしれないだ
らう?」

ルルドの早くと訴える視線にも後押しされ、セイラ頷いてしまつた
のだ。

大通りばかりではなく、いつもは静かな細い路地ですら人が溢れ、
騒がしい。

家々の窓に飾られたシルトの花は零れ落ちんばかりに咲き乱れ、時
折吹く風が花弁を一枚、一枚と宙に舞わす。

広場では踊り子が喝采を浴び、子どもたちが語り部を追いかける。
ふわんと甘い菓子の香りが四方からたちこめ、見たことの無い品物
が露店に並んでいた。

売り子の声は高らかに、此方においでと呼びたてる。

「ここはとても活気にみちているのだな」

街の喧騒に目を細めながら、ナジユールが呟いた。
遠い何処かの景色と重ね合わせているような表情だ。

「そうだね。何も無い時だつて、すつじぐさぎやかだよ。タハルの
都はどうなんだ?」

行つたことのないエスターニアの都も華やかで活気に満ちていると聞いていたので、都とはそういう場所なのだと想い込んでいたら、予想外にナジユールは苦笑した。

彼には似合わぬような暗さがあった。

「エリに比べたら、死んでいるのと同じだ」

「死んでる？」

「砂ばかりの侘しい場所だ。誰も彼もが疲れきっている。知つているか。セイラ殿。タハルの砂漠には雪が降る。荒涼とした乾ききつた世界をほんの一夜で白く変えるんだ。苦労して苦労して作った作物は砂嵐と雪が全部、奪っていく。大した産業のないわが国には致命的だ。都とて獣の跋扈する場所だ。都に明かりが絶えないのは、豊かだからではなく、そうせねば生きていけないからだ。大地と同じく、人の心も乾ききっている。」

知つているかと訪ねるナジユールの声は知らないだろうと突き刺さすような鋭さがあった。

ルルドの暗い表情は、それが事実だと告げており、陽気な曲が響く中、二人の周りだけがすんと重い。

「山脈を一つ挟んだだけなのに」

何も答えることが出来ないセイラの上に落ちてくるのは怨嗟にも似ていた。

グラムの言葉が蘇る。

肥沃な大地を寄せせと彼らは、いつもアリオスを狙っているのだと。その言葉は、アリオスばかりではなくエスターニアにも向けられて

いふこと容易に想像できた。

ローラ山脈をはさんで隣国となるエスターニアは大陸一の栄華を誇る。

「おおい、おにいさん方寄つて行きなよ！－ なあに、辛氣臭い顔してんだい。ほいさ、これなんてお似合いだよ」

事情など知らぬ露天商が三人を呼び止めた。

手に持つた布をセイラに巻き付けると、こちらも似合つと新たな布を出してきた。

「すまないな。セイラ殿。楽しむために来たのに、暗い話をしまつた。おやじ、そつちのも見せてくれ」

「はいよ」

ナジユールの言葉に返事をする前に、セイラの頭にはぐるりと鮮やかな布が巻かれていく。

あまりの手際のよさに、何をされているのかセイラには分からなかつた。

とりあえず、大人しくしていふと、田の前にルルドの手が突きつけられる。

「此方のほうが似合ひ」

ルルドが差し出したのは、瑠璃のような青さを持つた布だった。そっぽを向いた頬には僅かばかり赤みがさす。

「うん。そうだな。そちらのほうがいい」

ナジユールは布地を受け取ると、器用に他の布地とともに巻き込んで

でセイラの頭を覆つっていく。

「あの、ナジユール殿？……ルルド？」

セイラの困惑を他所に、ナジユールは己の首から提げていた香入りの魔除けを飾りとして括りつけると満足げに頷いた。

「タハル美人の出来上がりだ」

鈍く光る鏡の前に立たされ、何をされていたのかは初めて分かった。

亜麻色の紙は一部を除き、幾重にも重ねられた美しい布で作られた被り物の中につきちらりとおさめられていたのだ。

ちょうどビルルドがしているのと同じような格好になる。

セイラ自身は何も変わっていないと言つのに、別人になつたような奇妙な感覚に陥るのは何故だろ？

「おやじ、これをすべて貰おつ」

氣前のよいナジユールの言葉に、「まごどあり」と露天商の声が続いた。

「ナジユール殿、これは……」

「氣分を沈ませてしまつたお詫びだよ。なに、氣にすることは無いよ。どこかの奇麗な方々が素晴らしい贈り物をしてくれたからね。」

にこりと笑つたナジユールには、思わず頷いてしまつような強さがあった。

助けを求めるようにルルドを見れば、

「贈り物を突き返して、ナジユールに恥をかかせるつもりか」

と、赤い顔をしたままあらぬ方向を向いてしまったのだ。

「ありがとう」

ルルドの言つとおり、せつかくの好意をつき返すのは憚られてありがたく受け取ることにしたのだ。

先ほど突き出された青い布はルルドからの侘びだつたのだろう。そして、もう一つ言わなければならぬ言葉がある。

「君たちが謝る必要なんて無いよ。私は、もっとタハルのこと知りたいと思つてゐる」

ナジユールの語つたのは紛れもない事実。
知らなかつた、知らなければならぬ事実。

「あんな話を聞いても、タハルに来たいと思つかい？」

「うん」

ナジユールはどこかで、ほんの少しでも迷つてくれればいいのと思つてゐる自分がいることに気がついた。

もし返答に躊躇いが含まれていたならば、きっと諦めもついたのに。

「やはり、セイラ殿は不思議な人だな」

「……ただの阿呆ですよ」

ぽつりと呴かれた言葉に、ルルドが聞き取れないほど小さな悪態が天に向かつて零したが、陽気な歌に書き消されてどこにも届く事はなかつた。

振り仰いだ視線の先で見えたものにルルドが思考を停止している間に、違う露天商がセイラとナジユールを手招きしていた。

「なぜ？」

呆然と呴いた問いに答えてくれる者は生憎といなかつた。

「つまくこつてるならいいんだけどねえ」

「それは、もう」

もみ手せんばかりの笑顔を振りまく男に「げんなりしつつも、少年は「それはよかつた」と心の籠つていらない言葉を吐いた。

正直どうでもいい。

彼らの素晴らしい計画とやらが成功しようが、しまいが関係ない。ちろりと視線を向けたが、相方も同じ想いなのだろう。もともと無表情な女だったが、今日は色さえないかのようだ。

「じゃあ、計画通りようじくねえ」

へこりへこりと何度も頭を下げて去つていく男に薄い笑みを浮かべながら、ぬるくなつてしまつたお茶に口をつけ、べつと舌を出した。

「この店、はずれ」

先ほどの男は、それなりに名の通つた貴族だと言うから期待していたのに、彼が用意した店は内装ばかりが美しく料理の味は大した事ない。

「それにしても、欲つてのは怖いもんだねえ。サキの力なんて関係ないじやん」

相方の特殊な能力を使わずとも、権力と言つ餌をちらつかせるとほいほいと寄つて来る。

鉄仮面な女と少年。

そんな怪しげな二人連れに不信感すら抱かないなんて馬鹿な奴らだ。

「でも、正直言つて元王妃様なんて関係ないんだけどなあ。お城の中がごたごたしてゐるほうが動きやすいと言えば、そつだけど」

食べる事に飽きた少年は、砂糖を積み上げていく作業を開始した。ある程度まで積み上げては、突き壊し、積み上げての繰り返し。

「元王妃様に近づいて、王弟を取り込んで、正統な継承者を主張してにして権力を手に入れるの？ どう考へても馬鹿らしいけどねえ。」

彼らはもつともらしく語るのだが、彼らの根拠はジルフォードが王妃の産んだ王子だということだけだ。

「ねえ、ユザは王座の交代なんて望んでたっけ？」

「ユザが望むのは、ユザを捨てた全てのものが滅ぶ事だけだ」

サキの声には表情と同じく、変化がない。

少年は、声だけ聞けば女か男なのか分からぬような不思議な音が嫌いではなかつた。

「ふうん。じゃあ、やつぱり関係なんだ」

砂糖の積み木崩しにも飽きた少年は、立ち上がり窓辺へと近づいた。味は失敗だが、窓の外に広がる風景は悪くない。視界の半分を空の青が埋め、下半分は果物や布売りの露天商が色鮮やかに覆つていく。

「あつ……」

思わず出でしまった小さな声は、サキの表情を少しばかり変えたことに成功した。

こんな場所で見つけてしまつとは。

しかも、向こうも此方に気がついたようだ。

黒い瞳が見開かれ、「なぜ?」と唇が動くのが確かに見えた。

「どうした、ヒイラギ」

「じめん。見つかつた」

謝りつつも、反省などしないような明るい声でヒイラギと呼ばれた少年は笑つた。

高い笑い声に混じつて、足音が部屋へと向かつてくる」とヒサキもヒイラギもすでに気づいていた。

勢いよく個室へと続く扉を開けたのは、ヒイラギが今しがた露店の前で見かけた色彩だつた。

「お前たち、何をやつてるんだ!」

第一声も表情も想像通り。

「これは、『これはルルダーシエ様。ぼくらを置いていくなんて、ひどいんじゃありませんか?』

慄懾に頭を下げるヒイラギの前で、眉尻をきつと上げたのは先ほどまでルルドと呼ばれていた少年だつた。

「そのことについては、ちゃんと話したはずだぞ！」

「話は聞きましたよ。」「承ることは言ひてませんけどねえ。だつて、ルルダーシェ様、サクヤ殿に苛められていないか、心配で心配で、来ちゃいました」

「誰が苛められるだと？」

「サクヤ殿は、あのナジユール様だつて手のひらで転がせる人だからねえ、ルルダーシェ様なんてペツつて感じですよ」

ヒイラギの虫でも払うかのような仕草に頬が瞬時に熱を持つ。タハルに置いてきたはずの付き人たちが、どうしてこんなところにいるのか。

怒りと困惑とが渦巻いて、うまく言葉が出てこない。

「お、お前たちまでいなくなつたり、騒ぎになるだらう。」

「それについては対応しておきましたから大丈夫ですよ。たぶんね。それに、仲の悪い兄弟が一緒にアリオスに行つたなんて考えませんつて。もし、一の王子^{ルルダーシェ}が付き人の格好させられて連れて行かれたなんて知つた日には……ねえ」

物騒な笑みにぐつと口を噤む。

「今はルルドだ」

「そうでしたねえ」

にっぽと笑うヒイラギに脱力して、今のやり取りを何の感慨もなく見ていたサキに恨めしげな視線を送るが、返ってくるのは光りの差さない真黒の視線だけだ。

「……お前まで」

自由奔放なヒイラギはともかく、寡黙で職務に忠実なサキまでもがアリオスにいることが信じられなかつた。

「それにもなんだ、その格好は」

二人の格好はタハルのものとは大分違う。
色彩だけはルルドが頭に巻いている被り物と同じく鮮やかだが、腰には毛皮ではなく細長い布が巻かれ、袖口は大きく開いていた。

「さすがにタハルの格好は目立ちますからね。これ、ローラ山脈の麓あたりに住む少数民族の格好なんですよ。なかなか似合つでしょ？」

その色彩の豊かさは、ヒイラギの性格によく似合つてゐる。

「ところで、ルルド様はどうしてここに？ てっきりお城で閉じ込められてるかと思ってたのに。予想外なのは僕らも同じですよ。影ながらこつそり見守るつとしてたのに」

「……兄上と一緒に出てきたのだ」

「ナジユール様？」

そのわりにはナジユールの姿は見えない。

上から見たときも、ヒイラギの位置からはルルドの姿しか見えていなかつたのだ。

「他に誰か一緒に？」

「ああ、セイラっていつヒスターーアから来た女だ」

「セイラ王女ですか」

「知っているのか？」

「そりや、ヒスターーアの王女が嫁ぐとなればちょっとした騒ぎでしかねえ」

ヒイラギはにいつと口の端を吊り上げた。

「美人でしたか？」

「いや」

ルルドの答えは殊更早く、短かつた。

迷う素振りさえ見せない主に目を瞬かせると「そうですかあ」と残念そうに呟いた。

美人であろうと、なからうと会えるわけでもないのにと呆れたルルドの横でサキが初めて口を開いた。

「おー一人はどちらへ？」

階段を上がつてくる気配もなく、窓から見える路地にそれらしき姿

も見えない。

ナジユールほどの長身ならば見つかる」とはそういう難しい事ではないはずだ。

「ルルド様、置いていかれちゃったんですかあ？」

「置いていかれてない！」

噴出したヒイラギを射殺せそうな瞳で睨みつけると今しがた開けたばかりの扉をぐぐりぬけた。

「お供しましょうか？」

駆けていく背中に笑いを含んだ声で言えば、「いらん！」と怒鳴り声が返つてくる。

「お前たちは、早くタハルに帰れ！…」

足音が遠ざかるほどヒイラギの笑い声は高くなり、ついには腹を抱えて床に倒れこんでしまった。

「怖い怖い。ルルド様は僕を笑い死させる気かもしれないねえ。兄上大好きーは健在だ。あは。今のうちに仲良くしておくれといつよ

仲が悪いと思われているのは、周りがそう振舞っているためだ。国では満足に言葉を交わすこともできない。

視線を合わすことすら困難かもしけない。

「……来てるんだ」

ぱつりと零された、小さな歓喜の声をサキは聞き逃さなかつた。路地の見つめていた視線が床に転がつたヒイラギに移る。

「ヒイラギ」

その一言で何を言おうとしているのか理解できるのだが、彼女が言うように我慢してきたのだ。『褒美を貰つたつていいはずだ。

「ちょっとだけだよ」

「ルルド？」

呼びかけに答える声はなかった。

どうにか、その姿を見つけようと懸命に背伸びをしてみるのだが路地を行き交う人の壁によつて、ほんの少し先すら満足に見ることが出来ない。

セイラの行動に気づき、ナジユールもあたりを見回すのだがルルドの姿は見つからない。

「さつままでいたよね」

セイラの頭に巻かれた布を選ぶところまでは確かに一緒にいた。視界の先で揺れる青はルルドが選んだものに違いないからだ。今はその布を選んだ露店からさほど離れていない場所のいるのだが、どうではぐれてしまったのか。

「まあ、あいつも子どもではないし城までは無事に帰れるだりつ」

まだ城はすぐそこに見えているし、大きな路地からはすぐの距離だ。天才的な方向音痴で無い限り、城まで行く事は容易なはずだ。少なくとも、ルルドは何も無い砂漠を星を頼りに進むことが出来るので大丈夫。そう判断したナジユールをセイラは不思議そうに見上げた。

いつもより頭が重いので重心が揺らぎ、かくりと首が傾ぐ。

「探さないの？」

「大声で探し回れば、ルルドの自尊心を傷つくだろうし。せっかく街に下りてきたのに入探しで終わるなんて私は嫌だ」

力が入っているのは、どうやら後半のようだ。

「てっきり探そうって言つたと思ったのにな

「私はそこまで過保護じゃないよ」

肩をすくめるナジユールにセイラは明るい笑い声を返した。

「そうかなあ」

「……なんだか含みのある言い方だな。セイラ殿」

ナジユールは気づいていないかもしれないが、よく世話をやいているように見えるのだ。

アリオスに中々馴染めないルルドを連れ出しては書庫にやつてくる。会話に入り込めないルルドを刺青の話で無理やり押し込んだのもナジユールだ。

見透かされたような優しい笑みを受け、頬が熱を持つ。

「ナジユール殿はいいお兄さんって感じだもの」

驚いたように開かれた瞳は背を向けているセイラには見ることが出来なかつた。

「知つていたのか」

その言葉を飲み込むことが出来たのは、セイラが二人の血縁関係を知つているわけではなく、イメージだと気づいたからだ。

「いい兄などではないと思つ」

しゃがみこんだセイラの田の前には奇怪な動物の形を象つた装身具や彫り物がずらつと並んでいる。およそ年頃の少女が好むものでは無さそうなのに、田を輝かす様に張つていた気も抜けてしまう。露天商も普段あまり見かけない客層に驚いているのか口数は少なく、時折、ナジユールをちらりと見る。

「それはどうでもいいことだよ。決めるのは君の弟だもん」

お土産にどう?

差し出されたのは、鈍い銀色の腕輪だった。

浮彫にされた怪物たちの瞳には、くすんだ玉がはめ込まれている。うめく様に怒る様に牙をむく怪物たちの細工は緻密ではあるが気味が悪い。

今まで買ひ手もつかなかつたのだね。

「これ買つたらね、おまけでつけてあげるよ」

露天商はそう言って、田の前にあつた変な置物をセイラに押し付けると、金を払えとばかりに手のひらを出した。

「いい買い物をしたね」

銀の腕輪をナジユールの腕に嵌めながら嬉しげに微笑んだ。タダ同然で貰つたものにしては腕にしつくりと嵌り、金具もしつかりとした作りで嵌める時にパチンと小気味よい音がした。セイラが気に入っているようだったからあげようと思つていたのに、セイラはさつさとナジユールの腕に嵌めてしまったのだ。

「随分気に入つていいようだから、セイラ殿にと思つたのに」

「それね、エスター亞のお守りなんだ」

セイラが頭を揺らすと、ナジユールのつけた魔除けの飾りが音を立てる。

まるで、これの代わりこと言つてゐるよつて。

「ジニスで作つたんだよ」

ジニスの職人が貴族の婦人むけではなく、楽しみに作ったものだ。誰にも見向きもされないよう、わざとくすませた玉は王冠を飾る玉も霞むほどのもの。

気づくものだけ気づけばいい。

そんな思いを込めて。

「セイラ殿の故郷か」

「そう」

セイラはそれがとても愛おしいものだとこゝりよつて一度だけ腕輪の表面を優しく撫でた。

「では、私が身につけよう

ナジユールは腕輪の表面に口をつけた。
まるで神聖な儀式のように。

まわりの喧騒がふと消えたような静けさだった。

「お守りを贈る意味を?」

問い合わせは短く、悪戯を思いついたような笑みは魅力的だった。

タハルでは己の作った守りを贈るのは求愛の印。

今回セイラに渡したものはナジユールの作ではなかつたが、その気持ちが全くないといえ巴囁になる。

そのことを告げれば、どんな表情をするだろう。

「あなたが愛しいのです」

息を止めたのはナジユールのほうだ。

その言葉が愛の告白ではないことは声の温度で分かつたけれど。

「わたしがあなたの幸を望むにたる友人でありますよ!」この玉があなたの行く末を照らすように。エスターニアでは、そう思つてお守りを贈るんだ。タハルはどう?」

「同じようなものかな」

ただし友人ではない。

心に秘めた言葉が伝わる事はなかつた。

「じゃあ親友だね」

「では、更に交友を深めるために探索を開始しよう!」

「ルルド、本当にいいの?」

「大丈夫だよ。セイラ殿」

ナジユールの予定では元々途中で分かれるはずだったのだ。
ルルドには知らせていないため、自ずと置いていくという形になる
だろ？。

「さあ、行こう」

田の端にルルドの姿を見つける前に。
耳朶に己の名を呼ぶ声が触れる前に。

そして

刃が愛しい弟の上に降りかかる前に。

いくら人をかき分けても、望む人の姿は現れなかつた。人を押しのけ進むルルドに迷惑そうな顔が返つてくるけれど構つてなどいられない。

先ほどの店まで戻つたのにナジユールの姿もセイラの姿もなかつた。「あつちに行つたよ」と言う露天商に従つて進んできたものの目前には知らぬ人間ばかりがひしめいている。

これだけ人が溢れているといふのに、ルルドは初めて真の孤独を感じた気がした。

何もない砂漠にただ一人取り残されるより、なお強く。

立ち止まつたルルドにぶつかり文句を言つ男、見て行けと手を引く露天商。

確かに彼らの営みに自分は存在するといふのに、世界でただ一人きり。

そんな馬鹿みたいな、恐ろしいほど巨大な恐怖が落ちてくる。

『ナジユール様は貴方様のことを邪険にしておられる』

『近づいてはなりませんぞ』

ふつと浮んだ、権力者たちの声に身が凍る。そんなことはないと知つているはずなのに。

王子の不仲は作られた。

……本当に？

ルルドは勢いよく首を振つた。

その勢いが強いほど止めなく立ち上がる不安を遠くに押しやれるというように。

帰ろう。

それが一番良いと思った。心当たりもないままに闇雲に探したところで見つかるわけがない。

何処に？

あの石造りの城は自分の居場所じゃないのに。

サクヤのところに？

彼はきっと向かえ入れてくれるけれど、決してルルダーシュの味方じゃない。

ぐるぐると回り始めた思考に出口は無い。

目の前を行き交う見慣れない色に眩暈が起る。

「おい、お前」

大きな手がルルドの肩を叩くと、その衝撃で目尻にたまっていた液体が一粒だけポトリと落ちた。

石舞台の広場も人でごった返していた。広場の半分ほどを露店がうめ、石舞台の横には明日からの催しもののか剣術大会と書かれた看板が置いてある。

それに便乗してか武器商人たちの店も多かつた。

子どもたちが店の前を陣取つて、真剣な顔をして剣を見ている。

商人たちは、子どもたちを追い払つたりはしない。

小さな頃から剣を振るう事を知つてアリオスの子どもたちは立派な客に違ひなかつた。

ふと剣から視線を上げた少年が、顔一面に喜色を浮かべた。

「おねーちゃん!!」

その声につられて子どもたちが一斉にセイラのほうを見た。手を振る姿を見つけるとわらわらと近づいてきて、あっけにとられるナジユールなど知らぬ顔をでセイラを取り囲む。

「お話ししてよ

「Hスターのお話がいい

「語り部のおじちゃん、向こうの広場にいるの」

それぞれが手を、服を掴んで引っ張り、目的の場所へと急かす。セイラの話を語り部に聞かせておけば、彼がいつでも好きなときこ朗々と不思議な話をしてくれるのだ。

時折やつてくるセイラを子どもたちはいつも心待ちにしていた。

「……すごい人気だな」

取り残されたナジユールがぽつりと呟くと、傍にいた老婆がほほと笑う。

「不思議なお嬢ちゃんでね。ふらりと来ては変わった話をしていくのさ。煩いばかりの子どもらもお嬢ちゃんの話の間だけは呼吸もしてないのかつてくらい静かだよ。おや、今日は勝氣なお嬢ちゃんはないんだね」

そう言いつと、私も聞こえかねえと老婆も子どもたちの後に続いた。自分も続こうと足を出したナジユールの背をぴりりとした気が打つた。

瞬時の瞳を鋭くし、背後を振り向くと広場の陽気さに合わない沈んだ黒のマント姿の男たちが人の間を蛇のよじとする抜けて此方へと向かってきていた。

「やはりな」

予想は当つていた。

タハルを出て時から、後ろをついてくるものがいた。彼らが消してしまいたいのはルルダーシュではなくナジユールだ。わざわざノースの道を越えてまで暗殺しに来るとは「ご苦労な事だとほくそ笑む。

ひどい仕打ちと知りながらルルドを置いてきたのは正解だった。

「……さて、どうするか」

これだけの人を巻き込まずに戦うにはどうすればよいか。

街は何処へ行つても人の山。

目をつけたのはすぐそばにあつた石舞台。明日のためにと磨かれて
いる其処には幸いな事に人がいなかつた。

ひょいと舞台に上がるナジユールにどよめきが上がる前に、5つの
マントが忍び寄る。

舞台に上つた青年と剣を抜き放つマントを被つた男たち。

一触即発の氣を出しながらも誰も止めようとはしなかつた。
それどころか、祭の余興かと拍手が沸き起つる。

青年の武器は小さな湾曲したナイフだけ。

あまりにも不利な状況も観客の熱を高めるばかりだ。

「よお、にいちゃん！ 大分不利なんじやないかい？ 貸してやる
よ」

面白がつた露天商が投げ入れた剣は綺麗な放物線を描いて、ナジユ
ールの手元に落ちてくる。

「かり受ける」

受け取る瞬間に鞘から引き抜いて構えるとどつと歓声が上がつた。
男たちが一瞬ひるんだのは、その歓声ゆえか、不敵な笑みゆえか。

決着は早かつた。

飛び掛ってきた男たちの半数は吹き飛ばされ、石畳の上でうめいて
いた。

ナジユールと体格はあまり変わらないと言つのに、男たちの体は一
人を除いて宙をまつた。

ただ一人残された男が躊躇したところに走りより、刃をあわす。そ
ちらに気を取られている間に無防備な横腹に一撃。

くぐもつた悲鳴を上げる男の獲物を弾き飛ばし、喉元に刃を突きつける。

あと一加減で肉に刃先が沈む。

その位置でナジユールはぴたりと剣を止め、息を呑む男の耳に口を寄せる。

「お前の主に伝えるがいい。愚かだと」

「ふつ。愚かなのはお前のほうだ。今タハルがどうなっているか」

男の言葉は完全に止まった。

呼吸さえ、額を伝う汗さえ時を止めたように。

「お前……」

やつと出た喘ぐような声には色はなかった。

笑みに射すくめられ男の思考も恐怖も驚愕さえも溶けた。

「知つて」

返した刃で打たれた男はがくんと膝を折り、意識を失い舞台の上に崩れ落ちた。

「知らないとでも思つたのか」

歓声が吹き荒れてナジユールのため息はかき消された。

「オヤジ、助かつた」

きちんと鞄に収めて投げ返すと、露天商は危なげなく受け取りにま

りと笑つた。

「さあさあ、見てたかい。今の大立ち回り！ ほうれ、うちの商品だよ。軽い上に切れ味抜群！ 大の男だつて紙のようく吹き飛ばせるよ」

商魂たくましい商人のもとに入々があつまり、舞台の上のナジユールへの感心は一気に下がつた。

あきれつとも、そちらのほうが助かる。

大きな騒ぎになる前に早くセイラと合流をしよう。

確かに此方のほうへ連れて行かれたはずと進むと、田の前には3本の路地の入り口がそれぞれにのたうちながらぽかりと口を開けていた。

「これは、ルルドを置いていった報いかな？」

とりあえず真ん中へ進んでみよつ。

その選択が正しかつたかどうか、ナジユールが知るのは随分先のことだった。

城の中は、未だセイラとナジユールたちの不在には気づいておらず、明日の祭を待ち望む平和な空気が流れていく。けれど、一箇所だけぴりりと緊張している場所があった。

クロエは視線を感じて振り返った。

目の前の自分を何者なのか見定めようとする警戒心の強い猫のような瞳でじっと見つめている少女がいる。確かにまでもなく、セイラ王女が連れてきたハナという侍女だ。引き結んだ唇が開きやすいように先に口を開いてやる。

「何か？」

冷たい物言いに、開かせようとしたはずの唇が強く噛み締められた。完璧な侍女を演じようとすればするほど、クロエの声は色を失い冷たく聞こえてしまうのだ。また失敗した。

その後悔は決して面には出ず、もともときりとした顔立ちは、冷たい声と相まって怒っているような印象を与えてしまう。

「貴女、何ですの？」

ハナの声は僅かばかり震えていた。

将軍にも他国の王子にも遠慮なく叱咤を飛ばす少女は、今、唯一人の侍女に対峙することに恐れを抱いていた。

最近、ジルフォードと共にいるところをたまに見かけるようになつた女性は、すらりと背が高く、美人だ。名はすぐに知れた。

彼女の後見人は昔は強い権力を持つた貴族だつたらしく侍女仲間たちが教えてくれたのだ。

貴族の後見人がついていようと、侍女には変わりない。

他国の王子より恐ろしく感じるのは、今口をついて出て行くのがハナ自身の思いだからだ。

セイラのためでもなく、ジルフォードのためでもない。

理由も分からず、平穏だつた自分たちの世界に他人の影がチラチラするのがひどく不快だつたのだ。

なんて我儘な想い。

もし、彼女が純粋にジルフォードへの好意で近づいてきたのならば、この気持ちはおさまるだろうか。

「何の目的ですか？」

「ハナさん、とお呼びしてもいいかしら。」

クロエは頷きを返したハナに笑いかける。

途端にたじろいでしまうほど印象が優しく変わつた。

「私、王族付きの侍女になりたいの」

ハナの中で何かがカツと熱を持った。

くつてかかるうとする前にクロエが続けた。

「私も孤児だつたの。そんな私が、今や侍女。手に入りそうな幸せに全力で縋る。貴女なら分からぬ？」

一度持つた熱が急速に下がつていく。

分からない。

そう叫んでしまったかつた。

けれど、それが出来ない事を見越したようにクロエは小さく笑つたのだ。

「私は貴女の気持ちがよく分かるわ」

「何を……」

「一度手に入れてしまったものは、絶対に手放したくないの。だつて他に何も持つていなかから。取り上げられたら、もう一度あの場所に突き帰されたら……怖くて、怖くてしうつがない」

全身を冷たいものが撫でていく。

頭の先から冷たさが浸透していく。

紙のように色をなくしたハナを見て、クロエは哀しげに頭を伏した。

「私も、とても怖いもの」

お前なんて拾うんじやなかつた

そういうわれる口が何時か来るんじやないかつて

その言葉は言つてしまえば本当になる気がして、口に出す事を抑え出来なかつた。

侍女頭になつたら、

もう一度愛しい人たちの家名に栄光を取り戻すことが出来たなら。そんな恐怖から逃れることが出来るに違ひない。

クロエの瞳には決然とした意志があつた。

「貴女が快く思わないのは分かつてゐるわ。でもね、どうか邪魔をしないで」

廊下に残されたハナはケイトが声をかけるまで動く事ができなかつた。

ナジユールと完全にはぐれてしまった。
子どもたちにねだられるままに話をして、気づいたときにはナジユールの姿は何処にもなかつた。

念のため、石舞台の広場まで戻つてたのだがそこにも姿はない。
どうやら騒動起にして、広場から伸びる真ん中の道を進んだと聞きつけるとセイラも後を追つたのだが、いつのまにか裏街に入つてしまつたようだ。

それまで、それなりに整然としていた路地が、いきなり半分ほどの幅になり、ぐにゃぐにゃと曲がりくねり始めた。
どこか埃っぽくて、薄暗い。

ケイトが迷路のよつなものだと言ひていたが、本当に終わりのない迷路の中に迷い込んだようだ。

途中で引き返してみても、もう一度同じ場所に戻れない。
頭上を振り仰げば、青い空が見えることだけが頼りだ。

何処までも続く茶の石畳。

視界を遮るように窓から窓へとかけられた洗濯物たちに思考能力を奪われる。

早くここから出なければと思うのに、どちらに行けばいいのか見当もつかない。生憎、ここは表街のよつに屋根から屋根へと通路が繋がつていないので上からと脱出口を探す事もできず、ひたすら歩き続けている。

ナジユールはどこへ行つてしまつたのだろう。

今更ながら、迷子になつたらそこを動かない事とハナの声が聞こえてくる。

思い出すのが遅すぎた。

生来楽天家のセイラは、こんな機会もつないかもと、ぐるりぐるり視線をめぐらせながら歩いていると、固くて大きなものにぶつか

つた。

「ん？」

振り仰いで見ると小山のようなものに手足がついている。

なんだらうと思つてゐるうちに、それはもそりと動き出したのだ。それは緩慢に起き上ると、小さな黒い瞳でセイラを探し出した。

セイラの2倍の身長がありそうな青年だ。

丈が足りなかつたのだろう。つぎはぎだらけのズボンに覆われた足を伸ばして立ち上ると、見上げるのに首が痛いほどだ。

適当に切つたような髪は氣ままに天を突き、さらに青年を大きく見せていた。

「おつ

おつきいと続けようと思つたのだが、セイラが口を開いた瞬間、そこから恐ろしいものでも飛び出すと思つてゐるのか、その人物は、大きな手のひらで顔を覆い、物陰へと隠れようとした。

しかし、大きな体はいくら縮こまつても丸見えだつたし、積み上げられていた荷物が盛大な音を立てて崩れていった。

もうもうと立ち上る砂埃の向こうでも、その青年の影はしつかりと見える。

「何やつてんだい！」

怒号が飛んだ。

音を聞きつけ、建物から出てきた老女がキンキンと響く声で怒鳴りつけ、その身を支える杖で叩きつける。

「何の役にも立たないくせに、仕事ばかり増やすんだね！　このク

ズは！

煙の向こうで痛そうな音が一度響いた。

「わっ私が悪いんだ。驚かせたから」

その声に老女は初めて、セイラに気づいたようだ。じろりと睨み付けるとふんと鼻を鳴らす。

「お前さんみたいな娘つこに驚くなんて、やっぱり誰のクズじゃないか。ほれ、ちんたらすんじゃないよ。せつとと拾いな。このノロノロ。あほたれ」

老女は思いつく限りの罵詈雑言を浴びせかけた。

大きな青年は母親から叱責におびえる子どものよがよがしゃべりをなろうと身を屈めていた。

「ちよっと待つてよ。そんな扱いひどいでしょ

振り上げられた杖の切つ先を掴んでセイラは叫んだ。

「何が悪いのさー。悪さをしたら殴られるもんさ。それともクズって呼ぶことかい？ クズをクズって言つて何が悪いのや。もともとこいつに名前なんてないんだからね」

「彼は何も悪いことなんてしていないんだから、殴られるのはおかしいでしょ。彼はクズじゃないから、そう呼ぶのはおかしい

騒ぎを聞きつけて近所の人たちがわらわらと建物から出てきたが騒ぎの元を知ると、ああまたか、そんな表情を浮かべて帰っていく。

老女もセイラの剣幕に押されたのか、もつ一度鼻を鳴らすと「わ
ざと片付けな」と怒鳴つて去つていく。

取り残されたセイラと青年の間には不思議な沈黙が居座つた。
こちらを窺つようにしているのが分かるのだが、こちらを向くと田
を背けられてしまつのだ。

「私、セイラ」

青年はそわそわとしている。

もしかしたら本当に彼には告げる名がないのかも知れない。

「トッヂドリーフのは、大樹の神様なんだ。命を司る神様なんだよ。

」

小さな田がきょろりとセイラみる。

「もし、君が嫌じやなかつたら、君の事トッヂドリて呼ぶ」

「トッヂ……ド」

長らく声を出していなかつたのかも知れない。

声はかすれ、聞き取りづらかつたら確かにそう言つたのだ。

「セラ。トッヂ」

「トッヂ」

青年の口元がふるりと揺れる。

笑みには遠く、けれど彼なりの精一杯の感情の表し方だったのかも
しない。

「セイワ」

大きな指がセイワを指差した。

「アハ。セイワ」

トツドはとてもゆっくりと話した。

大樹の葉を風が揺らしたときのように心地よい音で。

話は尽きなかつたが、路地を渡る風は少々冷たきなつてきた。

「そうだ。お城まではどつ行けばいいか教えてくれない？」

ナジユールはもう城に帰つてしまつたかもしれないし、探すのならば人手が多いほうがいい。

セイラもとりあえず裏街からは出ておきたかった。

気づけばハナに何も言わずに出てきてしまつたのだ。捜索隊が編成される前に帰らなくては。

「に、一本目の路地を右に曲がつたら、大通りに出る……」

「なんだ。結構近いところにいたんだね」

表街にまで出る事が出来れば、なんとか城まではたどり着けるだろう。

崩してしまつた荷物も綺麗に積み重ねたし、空は夕暮れの態をなしつつある。

そろそろ帰るわ。

「ありがと。トツド」

視線を彷徨わすトッドにまたねと手を振れば、おずおずと振り返してくれた。

新しい友人が出来た嬉しさに足取りは軽く、石畳を跳ねる音も楽しげだ。

そのままの勢いで、一本目の路地を曲がれば見知った顔がセイラを出迎えた。

切れ長の田舎少女の冷たさを『え、まつすぐの黒髪が鋭さを』『えている。

今日は結われていない髪がセイラが飛び込んだ勢いで起しつた風にふつと揺れて再び色のない頬を彩った。

「カイザー」

見上げた青年は一度ほど城の中で会つた事がある。

「どうしてここにいるの？」

「貴女を探しに」

短い答えにはつとめる。もう捜索隊が組織されてしまったのだろうか。

「ジョゼ将軍がルルド殿を見つけまして、貴女方が街に下りたことが分かりました。まだ城のほうへは伝わっていないでしょ？」

時間の問題であることは伝えなかつた。

「街に下つたなとは言つませんが、誰かに一言伝えていただきたいのです」

「はい」

淡々と紡がれる苦情にセイラは神妙に頷いた。

「ルルドは見つかったんだね。よかつた。……ナジユール殿ともはぐれちゃったんだけど」

「あの方ならば大丈夫でしょう」

中々に目立つ青年だ。見つけようとすればさほど難しい事ではない。石舞台の広場での大立ち回りの情報も得ているし、居るとするならば其処からそう遠くない場所に居るはずだ。

「とりあえず、ジョゼ将軍と合流しましょう」

ジョゼは表通りに面した店でルルドと共に待っていることになつている。

流れるように進むカイザーの後ろをひょこりとセイラが続く。色々気になるものが溢れていはいるのだが、カイザーを見失わないように行くのは中々の重労働だった。

今日は前夜祭。

どの通りも昼間の賑わいを上回るほど熱気が立ち込めており、遅くなればなるほど人も増え行動がしづらくなつてくる。大通りへと続く路地では一步進むごとに人にぶつかってしまう有様だった。

「あつ！」

頭につけてもらつていた魔除けの守りがすれ違う人の服に引っかか

り、カシッと高い音を立てて石畳の上に落ちた。

慌てて拾おうとしても人の流れに押され、中々手が届かない。あとちよっと。懸命に伸ばした手の先で銀に輝く球体は誰かの指先に捕らえられた。

「はい。お守りは落としちゃダメだよ」

にこやかに落し物を拾ってくれた少年はセイラに負けぬほど鮮やかな色彩を着込んでいた。

可愛らしい笑みにつられ、セイラもへろりと微笑んだ。

「ありがとう」

「ビーいたしまして」

バイバイ。カイザーに急かされていくセイラに手を振りながら少年は笑みを深くした。

セイラの姿が人に紛れて見えなくなると、笑みは獰猛なものに変わった。

「うふふ。よかつた。ルカにそっく」

外見は合格だ。
後は力量と内面。

今確かめたくて、つづつづつするけれど、いっぺんに知つてしまつのも後が面白い。

贈り物のリボンは一つずつめくつくり解くのが楽しいのだ。

「またね。ぼくらのおひこさわ」

ヒイラギはそれは楽しげに微笑んだ。

ルルドは所在無さげにずっと下を向いたままだ。

その向かいではでんと座ったジョゼが、ルルドの頭を彩る布に施された円形の模様の数を数えていたのだが飽きてしまい、店の店主を呼びつけて新たな注文をしているところだつた。

ルルドの前では手をつけられなかつた料理が冷え固まつていた。

「こここの店は汚いが味はアリオス一だぞ。食つておけ」

「汚いは余計だよ」

店主とジョゼの軽い言い合いの間もルルドは下を向いたままだつた。泣き顔を見られたことが情けないのと、あまり言葉を交わしたことのないジョゼとどう話していいのかも分からぬ。

しばらくルルドにとつて居心地の悪い沈黙が続いた後、皿の前に皿が置かれた。

それだけなら視線を上げなかつただろう。

けれど鼻孔に広がつたのは懐かしい香りだつた。

「タハルの料理だろ?」

反応を示したルルドに満足げに笑いながら、ジョゼは皿を押しやつた。

ずっと闇雲に歩き回つていたために疲れと空腹は頂点に達しており、懐かしい香りは置いていかれたとの孤独感に忘れていたはずの空腹を思い出すには十分だつた。

豆と少量の肉を煮込んで塩だけで味付けたシンプルなスープ。

恐る恐る口につければ記憶と違わぬ故郷の味がした。

「ルルの店主はジヨの国の料理だひとつと作れるや」

何故か自分「」とのよつて誇りしげに言つジヨゼはちよつとした「反発感が生まれた。

「こんなタハルの料理じゃない。もつと、ずっとタハルのものはうまい」

美味しい」と思った。じわりと広がつた暖かさが心地よかつたのに、口からは真逆の言葉が飛び出した。素直になれない自分が歯がゆい。そんなルルドの気持ちを知つてか知らずか、ジヨゼはルルドの言葉に頷いた。

「そうだそうや」

「タハルはいい国だ。こんな、こんな馬鹿みたいに生ぬるくなんかない！」

「だらうな」

ジヨゼが賛同するたびに次から次へとアリオスを否定する言葉が出てくる。

自分は使者の一人として来ているのだ。田の前の男はアリオスを代表するものといつてもいい。

止めるべきだ。分かつていてるのに言葉は止まらない。

「本当だ！」

最後の言葉は悲鳴にも似ていた。

きつと見上げた男の顔にはしじがなく相槌を打つてゐるよつたな氣配はなかつた。

タハルが小国だとあざけつてゐる様子もない。

「自分の国つてのはそういうもんだ」

ぽかんと口を開けたルルドの様子に始めてジョゼは口の端を上げた。ジョゼにも覚えのある感情だ。どんな大国よりも自分の国が一番。今でもそう思つてゐる。

エスター・アと比べればアリオスなど力だけの蛮国だ。歴史も芸術も学問も何一つ追いつけない。けれど、どちらかの国を選べといわれれば迷うことなくアリオスと言つだらう。

「だが、どうせなら他国の良いところを認めたつえで自分の国が一番だと誇るといい。そのほうが角がたたんからな」

ジョゼは了解も取らずにルルドの皿にスプーンを突っ込むと料理を口へと運ぶ。

うまそうにその一口を嚥下すると、アリオスの料理も「食べろ」「食べろ」ばかりにルルドに押し付けた。

「それで? なんでお前は路地のど真ん中で泣きべそをひいてたんだ?」

「なつ泣いてなどあらん!」

頬を真つ赤に染めたルルドを見てジョゼは喉元で笑つた。確かに涙が落ちたのを見たのだ。見られたと思つてゐるからこそルルドの頬も赤い。

「号泣する手前だつたか？」

「違ひ！ わつ私はそんなに弱くない」

弱くない。そういういつつも語気が弱くなる。

「弱音も吐けず、泣くもことも知らん。そんな奴が強いとは限らん」

「……」

ジョゼの言葉は柔らかかった。

はつきりと言つて此処は都とは思えないほどの乱雑さだ。アリオスの、しかも都に住んでいるものさえ迷わす路地。迷子になつたところで仕方ない。

かくゆうジョゼも迷つた事など数知れずだ。幼き日に初めてここで迷つたときのことを思い起させばルルドの心情など手に取るようになれる。

心細くて、寂しくて、置いていかれたのだと思つてしまつとも。

「置いていかれたと思うなら氣の済むまで追いかける。途中で疲れたんなら休むのも良いだろ。案外向こうから戻つてくるかもしないしな」

確信めた言葉にゆるゆると頭を上げジョゼの視線を追うと、人ごみの中にナジユールが見えた。

「これはこれは、将軍にルルド」

「あ、に」

つい吐き出になつた言葉をルルドは何とか飲み込むことに成功した。もしジョゼが田の前に居なかつたら口にしてしまつたに違いない。

「いきなり消えるから驚いたぞ」

ナジユールに苦笑されルルドは下を向いた。そもそも先にナジユールたちから離れたのは自分のほうなのだ。置いていかれたなど、身勝手な思いでしかない。

確かに最初の行動はルルドに非があるものの、ナジユールには彼の思惑があつたことを知らないルルド、正直に自分の行動を恥じた。弟の思考を正確に辿りながら、ナジユールは己の中だけで苦笑して、ルルドに手をのばす。

「無事なら、それでいい」

ぽんと頭に手を置かれ一三度軽く叩かれると寂しさなど吹き飛んで、今度は別の意味で涙腺が緩んでいく。

「嬢ちゃんは一緒にないのか？」

「セイラ殿とも途中ではぐれてしまつてね」

セイラ搜索にはカイザーを狩り出した。情報集め、人探しそれならカイザーの右に出るものなど居ない。ジョゼですら把握しきれない裏街も彼ならば縦横無尽に歩き回れる。

ジョゼの絶対的な自信を裏付けるよつて向こうからセイラとカイザーも加わつた。

「さて、帰りますか

ケイトから報告を受けたハナが城門で眉を怒らせて立っているなど
知らぬ一行は、前夜祭の熱気を十分に楽しみながら城へと帰つてい
つた。

「おー」「

まずジョゼが氣づき、立ち止まつたジョゼにセイラがぶつかり、よろめいたセイラを助けるために手を伸ばしたナジユールに余所見をしていたルルドが横つ面をぶつけ、カイザーだけが涼しげに城門をくぐる。

其処には苦笑を浮かべた門番とど真ん中に陣取つたハナの姿があった。

思いつきり戦闘態勢の彼女は、まずジョゼをきつと睨み付けた。全く非が無いにも関わらず思わずきくりと身を強張らしてしまつほどの迫力があつた。

今回は迷子を見つけた功労者として褒めてもうつてもいいはずなのに。

機転を利かせてカイザーに連絡を取らなければ日没までに3人が帰つてくることも出来なかつたはずだ。

「ハナ嬢、怒つてゐな

後ろからひょこつと前を覗くセイラに言えど、セイラは不明瞭な声を出した。

肯定にも否定にも取りかねる。

「ただいま。ハナ殿」と場の雰囲気も考へず、にこやかに手を振るナジユールをにらみつけるハナはどうしても怒つてゐるようにしか見えないのだけれど。

冷たい視線を降り注ぐハナの元へセイラは軽い足取りで近づいていく。

右手に揺れている袋にはハナやジルフォードへのお土産が入つてい

る。

屋台で売っていた安い菓子なのだが、アレグらいで機嫌を取る事ができるのだろうか。

「ただいま」

その言葉に、もともと吊り上っていた眉が更にきゅっと高くなつた。ハナが口を開く前に消えてしまおうか。そんな思いがジヨゼの脳裏を占めたが、彼の思い描いたような未来は訪れなかつた。

ハナの口元が揺れるより先にセイラの指先がハナの眉間にへと伸び、年頃の少女には似合わない眉間の皺を伸ばすように、くるりと円を描く。

「何があつた？」

ハナが本当に怒つてゐるときは、その想いとは逆に怖いほどの笑みを浮かべるのだ。

吊り上つた眉は怒りからではなく、懸命に何かを我慢してゐる時仕草だ。

痛みだつたり、悲しみだつたり。

「何も」

僅かに震える声に説得力などなかつた。

その様子にセイラはくすりと笑う。

「ハナの眉間は正直なのに」

「セイラ様が何も言わずに街に下りてしまつからですわ。心配しましたのよ」

「いや、お前は言葉ではあつたけれど、セイラには違うと分かった。」
「でも聞いて詰めても良いけれど、ジョゼやナジユールが居る前では
本当のことを言わないだろ。」

「うふ。『めんね』

調子を合わせて、仲直りの呪に顔をあわす。

後で聞かせてねと。

何も言わずに遅くまで出かけてしまったのは本当に悪かったと思つたから「『めんね』にはたくさんの想いを込めて。

「ほひ。やはりハナ嬢の扱いは嬢ちゃんが一番か

「ヤヒ笑つジヨゼの姿を田んじて、ハナは再びひつと視線を上げた。

「ジョゼ殿！ ナジユール殿！ 一言も告げずにセイラ様を連れ出
すなんてどうこう見なんですか」

予感していた嵐は一拍おきに吹き荒れた。

「俺関係ないんだが……」そんなジョゼの弦など綺麗に無視され
た。

何時の間にかカイザーの姿は無く、笑いを堪える門番の前で何故か
ジョゼまでもみませんと頭を下げる羽田になつた。

「ジンとカナンともお土産渡して行こうよ

苦笑と共にセイラが言つた時、やつと解放されるジョゼは少しあくため息をついた。

「ええ、やつしましょう」

にこりと笑ったハナがセイラの背中を押して、一度振り返った。
一睨みでついてくるなと釘を刺して歩き出す。

「……今でも、あんなのがタハルに居ればいいと?」

将軍と他国の王子を一睨みで黙らすほどの侍女。
煩い女は撤回しようとしたルルドは思った。

「一人ぐらいいてもいいのではないか?」

「嫌ですよ。あんな怖い女」

のほんと答えたナジユールにルルドは新たな見解を付け加えた。

城門から十分に距離をとつてセイラは背後に問いかけた。

「本当は何があつたの?」

「何でもないですよ」

ジルフォードに近づいた侍女は自分と境遇が似ていて、恐怖を言い当れら他の悔しかつたり、彼女の存在が嫌なのに彼女の心情も分かつてしまつ。

そんなどろどろとして不鮮明な「」の「」を話して聞かせるなど無理だと思つた。

こんな醜い心の「」を知られてしまつたら、きっとセイラは呆れてしまつだらう。

それならば悟られな「」ように完璧に表情を作れば良いのにそれすら出来なかつた。

「ハナが何を怖がつてゐるのか知らないけど、大丈夫だよ。」

それだけで心の「」のもやもやしたものが晴れてくる。

そうだ。怖がることなんてない。

クロエは邪魔をするなといつたけれど、自分の大切なものを守るためにならばハナの戦わなければならぬのだから。

「今度は一緒に街に行こうね。新しい友達が出来たんだよ」

「はい。…………といひでその飾りどうしましたの？」

やつと見慣れない被り物をして「」に気が回るほど余裕が出てきた。

「ナジユール殿とルルドがやつてくれたの。タハルではこうするみたいだよ。似合つ？」

「ええ」

幾重にも巻いた布はセイラに似合つよつた色を選んでいたため違和感はない。

異国風の装いが少しばかり大人びて見せてよく似合つているといえた。

「ですが、私のほうがもつとセイラ様に似合つものを探せますわ！」

「……え？」

なんか次に街に下りた時着せ替え人形と化しそうなんだけど。セイラの心配を他所にハナはごつと闘士を燃やしていた。

城門が騒がしいその頃、書庫の中はひつそりとしていた。

カナンの部屋には一人の人物がいたがどちらも言葉を発してはいなかつた。

湯気を立てるポットから湯を注ぎながらカナンはちらりとジルフォードを見た。

珍しい事に机の上に積まれた本は、ジルフォードが此処に来て一度も表紙を捲られていない。机にはしつた木目を追うように視線を下を向き、殆どあげられることは無い。

白い髪が表情を隠し、何を思つているのかも判断できなかつた。

「何か考え方ですか？」

いつもなら邪魔をすることなどないのだけれど、あまりにそうしている時間が長いからカナンはお茶を差し出すついでに問うてみた。

「うん」

声は重いのにどこか上の空。

ジルフォードは考え方をするのが嫌いではない。

15年もの時間を一人で持て余してきたのだから。

けれどその考え方の中に自分の存在が入るとなるとひどく難しくめんどくさい事になつてしまふのだ。

少し前からジルフォードの世界は変わつていつた。

広くなつたといつても良いかもしれない。

セイラが来たことによつて周りに居る人の数が格段に増えた。ナジユールにルルド。そしてクロエと名乗つた一人の侍女。

クロエとの会話はジルフォードに外の世界を示した。

文字だけで追うのではない、生きた外の世界を。

もし、彼女の語つた言葉が眞実ならばアリオスにとつて重大な問題に違ひなかつた。

このままではいけないのだと思つ。

ジルフォードにとつても王子という立場にとつても。何故、彼女がその話を自分にしたのかは分からぬけれど、これは『えられた機会なのかもしれない。けれど。

「やるべき」とあるのにどうして良いのか分からぬ

それは初めて口に出されたジルフォードの弱音だつたのかもしれない。

カナンは瞠目した後、ふつと田元を柔らかくした。

「順序だててやればいいのですよ。あれやこれもなんて無理ですかうね。出来る事から一つずつこなしていくば道は開けていくものです」

「出来る事を」

カナンの言葉を反芻するように、ジルフォードはゆっくりと呟いた。

「はい。行き止まりにぶつかつたら誰かに教えを請うのもいいでしょう。セイラ様に聞いてみるのも良いかもせんね。きっと面白い打開策を教えてくださいますよ」

耳を澄ませば、扉の外からは明るい笑い声が響いてきた。

「ただいま」

暖かな春の風が吹いたかのように明るい声だった。

セイラがどこに行つっていたのかなど知らない一人にとつて可笑しな

挨拶ではあつたのだけれど、ここが帰るべき場所だと認識されることを知るとほっと心が温かくなる。

鮮やかな色彩を纏つたセイラは部屋の中に華を添えた。

「お土産があるんだよ」

「セイラ様つたら内緒で街に下りてしまつたんですよ」

不平を言いながらもハナの表情も晴れやかで、勝手知つたる棚をあけると深い青で色づけされた大振りな皿を出した。

セイラが大事そうに掲げていた袋を傾けると、「ロンロン」と花が落ちてきた。

白い花がいくつも落ちてきて、青い背景に美しく映える。

「綺麗ですね」

シルトの花を模した焼き菓子を真白な砂糖でコーティングしたものだ。

時折、本物のシルトの花びらを砂糖漬けにしたものが落ちてくる。祭の期間にだけ作られるお菓子でなかなか定評のあるものだとカナンも記憶している。

「ん?」

一粒菓子を摘んでいたセイラはジルフォードの視線に気づいた。セイラ自身を見ているというよりも取れかかった魔除けのお守りを目で追つていていた。

一度取れたそれを何とか元の位置に戻そうとしたのだが、ナジユールがやるようにはうまくいかなかつたのだ。

僅かに引っかかっている紐に白い指先が伸びてきて、そつと取り上

げる。

見たことがあるものだと思つていたらナジユールの首元を飾つていたものだ。

「ナジユール殿からもらったんだ」

ジルフォードの考えを肯定するようにセイラが続けた。

「そう」

今度は落ちないよつに頭ではなく首へと掛けなおす。胸元で揺れる輝きに、少しだけ胸のうちがざわついた気がした。その意味など知らぬから暫く見つめていると、セイラが不思議そうに見上げてきた。

「ジンもお守り欲しい？」

見当違いな問いかけに、ジルフォードはそつなんだろうかと考えてしまつた。

特に欲しいわけではないのだけれど、セイラは一人よこことをひらめいたと手を打つた。

「そうだ。ジンも一緒に街に行こうよ。ジンに似合つお守り探しに行こう」

こともなげに15年ぶりに城の外に出よつと言つ。もしかしたら、これが今、ジルフォードに出来る事だらうか。明るい声が背中を押して、考える時間は短かつた。

「うん」

「約束だよ」

小さな頃きにはっと光りが弾けた。

暗い世界を松明が照らしている。

煌煌と焚かれる炎も全てを照らす事はできず部屋には深い陰影がついていた。

半身を闇に呑まれた男は苦しげに呼吸をしていた。

岩に開いた隙間を風が走るようにヒュー・ヒューとか細い息だった。窓にかけられた布の向こうには荒涼とした砂の世界がどこまでも続いている。

男の濁り始めた瞳はどいつも星の動きを見ようと天を睨みつけた。自分の息子たちの背負う宿命の星が滑り落ちる事のないように。その窓の向こうで見知らぬ青年が嗤つた。

闇を背負い、月明かりを浴びて。

吊り上つた唇は今しがた血をすすつたかのように赤かつた。笑みを作りながらも一切それを含まない冷たい瞳も同じような赤だつた。

「アンタの舞台はもう終わり。星読みなんて無意味でしょう。どんなに頑張つたつてもうアンタは関係ないんだから」

「この化け物め」

自分の命はそつ張くではないと、諦めていたはずなのにかけ布を握り締める拳には力が入つた。

「ああ、間違つちゃいけないよ。タハルの王様。そこはね、「この人間め」って言わなきや。人より怖い魔物なんていやしないよ」

暗い怒りを含んだ視線も青年は難なく受け止め、なお暗く深い憎し

みを宿した視線を返した。

「それにね、魔物は気の遠くなるほど昔の復讐なんてしゃしないよ。ねえ裏切り者の王様。心配しなくて大丈夫だよ。あなたの息子には相応しい最期を『えてあげる。裏切りには、裏切りを。ね?』

男の瞳がくわつと開いた。

血走った瞳からは一粒だけ涙が零れた。
やせ細った手が空をかき、口が絶叫の形に開かれる。
けれど音はなかつた。

「アンタの『骸はシルトで飾つてあげる。僕の一番好きな花だから。知つてる? シルトの花言葉。未来をつなぐだよ。……ああ、もう聞こえてないか』

はつと空気の抜ける音がすると伸ばされていた手が、ぱたりと胸の上に落ちた。
ちょうど胸を飾つていた銀の魔除けの上に。

「残念だつたね。それ、人間には効かないみたいだよ

暗い忍び笑いを消すようにびょうと風が吹いた。

風に揺れた青年の髪は月明かりを受けて白銀のように輝いた。

タハルから遠い、遠いアリオスの城の明かりの消えた部屋で誰かが
そつと天に向かつてため息をついた。
何とか天の端に縋つていた小さな光りが、流れ落ちていった後だつ
た。

第二章・夕闇に映る色

空は白み、やつと街も起きようかといつ時間帯。

静けさに満ちた空間を壊さぬように、音もなくジルフォードは進んだ。

石畳も廊下の床も彼の存在など知らぬといつたよつてわざかばかりの音も立てない。

その朝、ジルフォードの存在を示すために初めて鳴ったのは重厚な櫻の扉だった。

ゆつくりとしたノックの後「入れ」と普段どおりのルーファの声がした。

このような朝方でさえも誰かが訪ねてくる事になれているようだつた。

白い指先が、銀で飾られたドアノブを握るのをしばし戸惑い、一拍の後、決意を示すように強く握られた。

扉を開ければ、すでに身支度を整えた王は机に着いて高く積まれた書類に目を通しているところだった。

いつたい何時から仕事を始めているのか。

昨夜も随分と遅くまで執務室には明かりがついたままだつた。

ふつと起こつた風がルーファの前髪を揺らし、彼の視線を上げさせた。

ルーファの表情に疲れの色は微塵もない。

「ジルフォード」

部屋を訪ねてきた人物にルーファは驚きを露にしたが、すぐさま笑顔となり中へと導いた。

ジルフォードのほうから出むいてくるなど初めてのことだ。

再三呼びつけてやつと来るのが常だった。それも年に一、二度のことだ。

いつも扉をぐぐるとき、見えない匂いでもあるかのよつてジルフォードの足取りは不安定に見える。

本当に入つていいのかと怖れを抱いているよつて。

それが少し寂しい。

部屋の中央で止まつたジルフォードとルーファまでの距離は遠い。もう少し前へ来いと手招きすれば、おずおずとほんの数歩だけジルフォードは前進した。

まるで臆病な野生動物を手なずけよつとしているようだ。

「どうした。私に頼みごとでもあるのか？」

それは願望でもあつた。

小さく頷く姿に更に驚きが募る。

頼みごとをされたことなど一度としてない。

「保管庫に入る許可が欲しい」

「保管庫？」

地方の台帳ばかりがあるそこに何の用があるのだろう。

確かに其処を利用するものは厳しく管理されており、入るにはアリオスの紋章を持つたものに許可を貰う必要がある。

すなわち、王族や元帥、其処を管理する役職のものなのだ。

ジルフォードもマルスを表すカラスの彫り込まれた印章を持つてゐるはずだった。

「私が許可を出さなくともお前なら入れるはずだが。印章を失くし

たわけではないのだね?」「

ジルフォードの手のひらの上で、一度も使われたことの無い印章がころりと転がった。

それはインクをつけた痕すらなく、美しい乳白色を保っている。それを見つめるジルフォードの瞳はその価値を全く認めていないようだった。

時に五元帥の決定さえ覆す事ができるほどの力を持つものだというのに、己の名前が彫りこまれていてるだけで路上の石にほどの力も認めていない。

その様子に苦く笑うと、一番上の引き出しに入っていた許可証を一枚取り出した。

「いいだろ? 許可を出そ!」

ルーファは右手の中指につけた指輪の表面にインクをつけると、紙に印を押し、署名をほどこした。

ジルフォードは差し出された許可証をしばし見つめながら、ゆっくりと取つた。

「ありがとう」その言葉を聞いてルーファが浮かべたのは、優しい笑みだった。

「それで、何をしにいくんだ?」

「できる事をしに

「そりゃ

答えは抽象的で曖昧だったが、深くは問うまい。

弟なりに掴んだ道を見守るのが一番良いと思つから。

「ジルフォード」

今日から始まる春告げの祭は、新しい季節を祝うのと同時に決意を立てる時もある。

「今、やりたいことは何かあるのか?」

出来る事をしに行く弟のやりたいこととはなんだろうか。
国全体を揺るがす事もできるジルフォードの願いは。

「セイと街に行く」

「やうか」

なんて他愛のない願い。ただ伴つて門を出ればいいだけの話しだ。
けれど、城に押し込められてから一度として外に出たことのないジ
ルフォードにとつては途方もなく大きな願いに違いない。

「ナジユール殿に先を越されてしまつたな

昨日の一連の騒動はルーファの耳にも入つていた。

行き先も告げずに勝手に城を出るのはいただけないが、あまりにも
楽しそうに街の様子を語るセイラの姿を見てしまえばお小言を言つ
氣も消えてしまつ。

「祭の一「田田」にはシルトの花を空からまくのだ。中には花弁が多い
ものが混じっていて、それを取る事ができれば、幸せでいれるらし
いぞ。セイラ殿と行くとい」

祭の一番の見せ場は最終日の春乙女の舞だが、一番人気といえば二日目の花流しの行事だろう。通常五枚の花弁を持つシルトだが、中には六枚のものもある。

ルーファもダリアにねだられていつた事があるのだが、無数の花が舞い散る光景は圧巻だった。

ルーファは小さく頷いたジルフォードに特別な場所を教えると、笑みを浮かべながら明日一日ナジユールを城に足止めする計画をはじめ出した。

クロエの足取りは軽かつた。

城の中ならば絶対にしないのだが、大通りに位置する屋根へと続く階段を一段飛ばしで駆け上がり、一番高い位置までぐるぐるりと一回転した。

今日から祭が始まる。

侍女たちも交代で休みを貰う事ができるのだ。
クロエは無理を言って初めの日に休みを貰った。祭の初日へ家に帰る事が出来るように。

侍女のそれには城の中に部屋を与えられており、衣食も十分に与えられているので頻繁に街へ下りてくる事はない。
おおっぴらに街に下りる事が出来るのは年に数度の祭のときくらいだ。

窮屈な侍女服を脱ぎさつて開放的な気分だった。

軽い足取りのまま屋根の上を伝つて、居住区まで来て、家の前に立つと明るさは少し沈んだ。小さな小さな家だ。

キッチンと小さな部屋が2つあるだけの粗末な家だった。
表街で場所は悪くないけれど、地方領主だった頃の生活には程遠い。
クロエは首を振った。

せつかく久しぶりに会えるといつに暗い顔を見せるわけにはいかないのだ。

扉を叩く時、いつも緊張する。

彼らは今も自分を歓迎してくれるだろつか。

「ただいま」

ドキドキしながら扉を開けると、柔らかな笑顔が出迎えてくれた。
灰色になつた髪を丁寧に撫で付けた老夫婦。

洗こぎらじの服は清潔だけれど、随分昔の型だつた。

「お帰り。クロエ」

「ただいま。父様。母様」

両側からぎゅうっと抱きしめられてクロエは泣き出したいほど幸せだつた。

同じほど強く抱きしめ返して何度もただいまと繰り返す。

泣くのは懸命に堪えた。きっととても心配してくれるから。抱擁が終わると席へと招かれて、暖かいお茶が注がれた。家に似合わぬほど高級なお茶だ。昔、値段も知らなかつたクロエがおいしいといつてしまつたから、クロエが帰つてくる日にあわせて彼らは用意してくれているのだ。

部屋の中はとても質素で人数分の食器と机と椅子。そんなものべらいしかなかつた。

「はい。お給料もらつたの」

クロエは大事に持つっていた皮袋を差し出した。半年分のお給料。さほど多くないけれど、この家にとつては唯一の収入源だ。

「クロエ、自分のために使つてもいいんだよ」

髪飾り一つつけていないクロエの姿を見てカーサは瞳を伏せた。クロエも年頃だというのに苦労ばかりかけてしまつている。

「気にしないで。母様」

城ではお腹いっぱいに飯を食べる事ができるし、侍女服は支給さ

れるから困る事もない。

孤児だつた頃を思えば、なんて幸せなことだろう。

今回渡したお金も最低限だけを残して、全て使われてしまうことも知つてゐる。

年に一度の春告げの祭だ。

彼らは楽しみにしている子どもたちのために、おしげもなく使つてしまふに違ひない。

アリオスには孤児が多い。このタナトスとて例外ではなかつた。裏街には孤児が溢れ陰惨な時代があつた。

ルーファ王になつてから公の孤児院もできたが、とてもではないが全てを補う事はできないのだ。

クロエの両親はあぶれた子どもたちに教育を衣服を食料を与えていた。

彼らのやることは地方領主であつたときから変わることがない。けれど、権力を失つてから出来る事は格段に減つたと思つ。いくら頑張つてもクロエのわずかばかりの給料では、昔ほどたくさんの施しを与える事はできない。

正しい事をやつてゐるのに、どうしてひどい目にあつのだろう。

孤児を救うことよりも戦果を立てるほうが重要なんだろうか。

彼らには養子に取つたクロエ以外子はおらず、年老いたマークは戦場に立てない。

戦果を立てなかつた。それだけで領地を追われ、倒した敵の数ばかりを誇るブルングルと名乗る貴族に取つて代わられてしまつたのだ。せつかくつまくいつていた孤児院も、潰されたと聞く。

もしも、自分が男で戦場に立つ事ができたら何か変わつていただろうか。

叶うはずのない“もしも”は今も増え続けている。

「クロエ？」

表情の沈んだ娘のことを気にしてカーサがクロエの顔を覗きこんだ。心配そうに揺れる瞳が嬉しくて、何も出来ない自分が悔しかった。

「子どもたちのお土産は何がいいかと思って。 やっぱりシルトの砂糖菓子かな？」

「そうねえ。 酷好きだものねえ」

ありえない奇跡を願うより、手の届きそうな“もしも”を選んだ。けれど、今やそれも気持ちが折れてしまいそうだ。

ジルフォードの付の侍女頭になれれば、もっと生活は豊かになりクロエという人物の発言力も増してくる。

いつか、王にこの惨状を直接訴える事もできるだろう。

それなのに、あれほど固く決意したというのに、ジルフォードに近づくのが怖くなってきた。

利用するのが嫌なのだ。

「クロエ、侍女が嫌ならば止めても良いんだよ？ お前の好きな道を進めばいいのだから」

暖かく大きな手が背中を叩く。

彼らの前では今でも小さな子どものようにクロエは思つ。

「ひつん。 侍女の仕事は好きよ」

「そうかい？」

「そうよ。 お城の中はとても綺麗だし、侍女仲間たちは優しいし… お友達になりたい人も出来たわ」

「まあ、良かつたわ」

カーサは、ふわりと綻んだ。
クロエは人に嫌われるような子ではなかつたけれど、友の話は一度
も聞いたことがなかつたからだ。孤児だという負い目があるのか、
どこか一線を引いて人と接する子だつたから、彼女の言葉がとても
嬉しかつた。

「そろそろ行こうか。子どもたちが待つてるよ」

二人の後に続きながら、クロエは自分の言つた言葉を反芻していた。
友達。

ああ、そうか。自分はジルフォードと友達になりたいのだ。
利用するとか、されるとかそんな関係でなく話をしてみたかつたの
だ。

納得してしまえば、その事実はすとんと自分の中に落ちてきて、あ
りえない“もしも”が増えたことに気がついた。

保管庫の受付に立っていた男はどうしたものかと途方にくれた。ここで二十年も仕事をしているが、こんな困った事態になったのは初めてのことだ。

貸し出すものを聞き、裏方が用意した資料を渡すだけの簡単な仕事だったはずなのに、心臓はバクバクとなり、広い額にはびっしりと汗をかいていた。

元々狭い保管庫の中は、今や息苦しいほど狭く感じられた。保管庫を利用するものは必ず管理せよとの規則はあったが、王族ならば引き止める事もせず、通してきた。

田の前の人間は素直に通してよいものか。

王族には違いないだろうが、後で問題になつたりしないか。ぐるぐると今まで使っていなかつた脳みそがフル回転しているが、通すか通さないかの一者択一さえ出来ないでいる。

その間、田の前に立つ青年はぴくりとも表情を動かさないといふに、ちらりと見上げる角度を変えるたびに瞳の色が変わるのが恐ろしくて目を伏した。

早くしろと怒鳴られたほうが、どれほど楽か。

目の前に紛れもなく国王の署名の入つた紙が出された時には、心底安堵した。

これならば通したところで問題が起こつても責任は国王にある。男は手招きすると、棚のあるほうへ行けと身振り手振りで伝えた。

「ありがとう」

風によろよろと短い謝罪が耳に届き、顔を上げた時には白い姿は書棚の向こうに消えた後だった。

「あれ、あれれれ？」

人がいるはずのない場所に誰かいる。

保管庫の中には受付の男と自分だけだ。
切るどころか梳かす事さえしていない艶のない髪の間から、ケネットは見知らぬ来訪者を見つめた。

見慣れない容姿に連日の疲れで夢でも見ているのかもしれない何度も瞬きを繰り返し、頬を抓つても変わりはなかつた。

もしかしたら、夢ではなく幽霊だらうか。長い髪の毛も肌も怖いくらい白いからきっとそうなのだろう。

でも、保管庫に幽霊の氣を引くものなんてあるだらうか。あるのは地方ごとの台帳ぐらいだ。

「なつ、何してゐるのかな」

物陰からこいつそり覗いてみると、じつやけり資料を片つ端から見ていつてゐるようだ。

せつかく並んでいの台帳がバラバラにならはしないか。

そんな思いは杞憂で、取り出された台帳は前と同じ場所にきつちつと戻されていく。

ページを捲る手つきは優しくて、補修しようつと継つていて古の台帳も力サリとも音を立てない。

貸し出した資料が折れたり、汚れて返つてくることを嘆いていたケネットには、とても好ましく思えた。

あんなに一寧に扱ってくれるのだもの。幽靈だつていい幽靈に違いない。

そんな考えをはじき出したケネットは、幽靈を手伝つてやううと物陰から、のぞりと這い出した。

「なつ何を探してゐるの？」

もし第三者がいたら、お前のまつがよほび幽靈のよつだと言つたかもしけれない。

手足は枯れ木のよつに細く長く、長く絡まつた髪の毛は顔を隠し膝下までたれている。

貸し出す資料は、受付の男が余所見をしていの間にすつと置いてくるから、まともにケネットの姿を見たものまゝの数年ほどのまゝではない。

久しぶりに姿を曝す氣恥ずかしさが手伝つてか、言動がきこりなく幽靈に拍車をかける。

そんな人物に幽靈呼ばわりしたジルフォードが顔を上げると、ケネットはびょんと飛びのいた。

足にバネでもついているのかと疑いたくなる跳躍だった。

「田めめめめ田が紫だった！ ん？ あれ？ 縁だった？ えーと
と青いのも……」

ケネットは自分が何を言つているのか分からなくなつてきた。
一回の跳躍で物陰に逃げ帰つたケネットは、もう一度幽靈を窺つた。

「あつ縁だ。」

鮮烈に田を焼いた紫はなんだつたんだろう。
ここには台帳と壁以外の色は無いから、どの色にしてもまつとする
ほど美しいけれど。

緑色の瞳が、じらり見てくることに気づいてケネットはへりつと
笑つた。

「おおおこり、出納係なんだ。よつよかつたら、探すので、手伝つ
よ？」

「紫！」

一步近づくたびに瞳の色が変化した。

やつぱり幽靈つてす」といんだ。その喜びを声に出して表してしまつ
たかつたけれど、その前に幽靈が声を出したので止めておいた。

「ザクセン地方について知りたい」

久しぶりに聞く、受付の怒鳴りつけるような声以外の声は耳に心地
よかつた。

静かでとても澄んだ音だ。

「ザ、ザクセン地方のしつ資料なり、この段からここまでがそうだよ。あつあそこは最近領主様が変わっちゃったんだよね。前の領主様、とてもよい人だつたのに……」

そういうながら、ケネットは棚の資料に手をかける。
ちゃんと年代ごとに分かれていて、色分けもされている。

「なぜ、変わつた？」

「い、今の領主様はリグンブル様なんだけど……」

十年前の台帳を手に取つた。

分厚くずつしりと重い。

貸し出しが多いせいか、補修箇所も多く変色もしている。
一番苦労したけれど、ケネットは「この台帳が一番好きだ。

「前の領主様は、メイヤー様つていうんだ」

差し出された台帳を受け取り、中を開くとびつちつと文字が書き込まれている。

足りなくなつたのか紙を足した跡もあり、他のものにはなかつた手紙やメイヤーに贈られたお礼状といったものを含まれている。

「孤児院を立てたりね、民の生活向上のために尽力したり、とても素晴らしい人だつたんだよ」

実際に会つたことはないけれど、その文字からは人柄が滲み出してくれるようだつた。

毎年かかる台帳は一年も欠かすことなくマーク・メイヤー自身が

書いている。

ケネットには筆跡を見ればすぐに分かった。
伸びやかで優しげで、けれど怒りを含んだ内容には相応に怒りを滲まして。

城に届く嘆願も彼の筆跡だつた。

「でもね、メイヤー様はお年だし、子どもは女の子だけみたいだつたから十年前の戦には出なかつたんだよ。領地に居たのもほとんどが子どもとか、お年寄りだつたみたいだし」

その年を境に台帳の厚さはめつきり減つた。

十年分をあわせても、メイヤーの書いた一冊に及ばないだろう。
淡々と感情の含まれない文字が作物の取れだが、人口の変動。そんなものだけを伝えていく。

「そのせいで、メイヤー様は軟弱者呼ばわりされたんだ。……戦果を立てたりグンブル様に領地を取られちゃつたんだよ」

もともとザクセンは街道に沿つた豊かな土地だつた。
開発すれば、もっと豊かに主要な土地になると思つてゐる貴族は一人ではなかつた。

メイヤーも何度も打診を受けたが諾とは言わなかつた。
弱者を放つておいて豊かさや富を追い求めた結果が、他ならぬ都だと知つていたからだ。

年老いて戦いに出れなくなつたことをこれ幸いと、貴族たちは結託して叫んだ。領主の交代をと。

「……剣を振り回すだけが戦いじゃないのにね」

ケネットは労わるようすに背表紙を撫でた。それが、メイヤーの背中であるかのように優しく。

分厚い台帳はメイヤーの戦いの記録でもあった。

暴れ狂う川をどうにか治めようと奮闘し、凶作に流行り病。全てに尽力し、時に勝利をおさめ、涙を流したこともある。

「他に知りたいことがあつたら、なんでも聞いて。此処にある資料にかいてある事なら教えて上げれるよ」

ここにいるようになつて、一歩も外の世界には出でていない。けれどこの国のこととを誰よりも知つていて自信はあつた。王様だつて五元帥だつて、ここに台帳全てに目を通したことではないはずだから。

ケネットが知るのは一拍おきの歴史だけれど、組み立ててみれば未来のこともほんの少しだけ透かして見ることが出来る。

「ありがとう」

何を言われたのか分からなかつた。

この薄暗い保管庫に住み着くようになつて一度として聞いていない言葉。賛辞を受け取るのはいつも受付の役目だつた。出納係はもくもくと受付が頼まれたリストをもとに資料を出してくるのが仕事だ。

いくら頑張つても、人前に顔を曝す事などない。だから言葉の意味が瞬時には伝わらなかつた。

じわりと昔の記憶が蘇つてきて体が熱を持つ。心臓が必要以上に高くなり、頬が熱い。

耳までじわつと熱くなり、それが嬉しいといつも気持ちやえだと気がいたときには同じ言葉を言つていた。

「ありがとう。お、おこらケネットって言つんだ」

もそもそと前髪をかき分けてケネットは顔を出した。久しぶりに直接見る部屋の明かりは眩しくて細めた視線の先で、幽霊はちょっと困っていた。

ありがとうございましたを返すのは可笑しかつただろうか。

「“ありがとう”嬉しかつたから」

嬉しげに口元を綻ばすとケネットは幼く見える。

「……ジルフォード」

小さく告げられたのが名前だと知つて、ケネットは更に表情を緩めた。なんてぴつたりの名前だつた。

今は、月の姿はないけれど突然現れた彼は、“ありがとう”をくれたから。

「ジルフォード。優しい叶え人の名前だね」

びょんと跳ねると重たげな髪も浮き上がる。

彼は幽霊ではなくて、満月の晩に現れる夢幻の存在だつたのだ。

「ありがとうのお礼にいい事を教えてあげる。メイヤー様はね今、タナトスに住んでいるんだよ。ザクセン地方のこと知りたいなら、メイヤー様に聞くのが一番良いかもしれないね」

お礼を言つて帰つていぐジルフォードに背に手を振つて、ケネットは何度もその名を繰り返した。

「ジルフォード。ジルフォード。ジルフォード……ん~?ジルフォード? 確か王子様の名前もジルフォード……」

言葉少なに綴られた王子の誕生。
確かに髪の色は白かった。瞳の色は……

「どうしよう! おいら王子様に“あつがとう”って言われちゃった」

王族ならば保管庫には容易に入ることが出来る。
嬉しさと驚きとでケネットは暫く保管庫の中を飛び跳ねまわった。

セイラは全速力で廊下を駆けていた。

グラムに見つかればお小言くらこではすまないだろ？が、そんなことを気にしている余裕はない。

ぱたぱたと可愛らしい足音が背後からしないように祈つゝ、懸命に駆けた。

春乙女の舞が一応完成した。

その安堵のせいで緩んだ思考のまま口を滑らしたのがいけなかつた。どこからともなく現れた侍女たちが手に手に煌びやかな衣装を持つてにこりと微笑むのだ。

さあ相応しい衣装をあつらえましょう。

一瞬の隙を突いて逃げたのはいいものの、掴まれば絶対に逃がしてもらえない。

細くて押せば倒れてしまいそうな彼女たちに乱暴を働くことは出来ないので掴まらないことが最重要課題なのだ。

実際の彼女たちは、そこらの暴漢を撃退できるぐらい強いのだけれど。

「む～このままでも良一のに

本当にそういう気持ちで作ったのだ。
着飾つて澄まして舞うためじゃない。

「うへ。

唸りつつ走つていると、田の前を白い影が横切つた。
今はもう懐かしい雪の色。

「ジン～……っー。」

「あらびきづいて立ち上まつたジルフォードの間に飛びつく勢いで身を隠す。

「う～……」

そろりと窺つた廊下の先を数人の侍女が駆けていった。どの娘も瞳に使命感をたぎらせて、手には遠慮したいものを山のように積んで。

とつさにジルフォードの背に身を隠したものの彼女たちは目的地があるようで、ジルフォードの姿にも気づかなかつた。ほつと安堵しつつも彼女たちは進んだ方向を見て嫌な予感がした。

向こうには書庫がある。

躊躇の行き届いた彼女たちが書庫の中で騒ぐことはないけれど、唯一扉の前で目を輝かしているに違いない。

掴まれば、即連行されてしまつ。

セイラの部屋は当然押さえられている。行く場所を失つてしまつた。

「書庫に帰るとこ～。」

「う～

「そつか

それならば此処で分かれたほうが良いだらう。

そう思つて「じゃあ、またね」と手を振り背を向けると、ジルフォードが不思議そうに尋ねた。

「来ないの？」

二人が会えば、書庫に行くのが当たり前。
そんな常識が出来上がっているかのよう。

「う～ん。行きたいのは山々なんだけどね。あんまり彼女たちに捕まりたくない気分なんだよ」

どうせ衣装を選ばなければならぬと分かっているけれど、一息置いて欲しい。

ようやく形になつたものが、しつかり自分のうちに根付くまで。

「……ジン？」

何を告げるにも無く手を引かれると、びっくりしたのは一瞬で自然と足は導かれるままに進んでいく。
手をつなぐなんて可愛らしいものではなくて、袖を引っ張られていくに過ぎないのだけれど何だかちょっとだけ嬉しくなる。
それも引っ張つているという事実を伝えるために最小限の力しか入つていない。

たぶん、重力に任せてセイラが手の力を抜いてしまえば、あつと言ふ間に離れてしまう。

ほんの少しもどかしいから、指先を上に向けてちゃんと触れると驚いた白い指先が袖を離してしまった。
完全に遠くに離れてしまつ前にぎゅっと握り締める。

「何処行くの？」

「書庫に行きたいんじゃないの？」

一人して疑問符を浮かべて、セイラだけふつと笑つた。

絶対に書庫に行きたいの。

そんな気持ちはなかつたけれど、問われれば無性にあの空間が恋しくなつた。

「うん！ 行きたい」

何か失敗しただろうか。曇るジルフォードの瞳にそう言えど、セイラの力だけで繋がつていた手にちょっとだけ力が入つた。歩調に合わせて振つたつてもう離れたりしない。

導かれるまま進み足を止めた先には、特に変わつたといひのない廊下があるだけだつた。

壁も床も綺麗に磨きこまれて入るけれど、他の場所とも区別はつかなかつた。

「ジン？」

柱の裏の皇かな面。指をそつと這わして、やつと分かるほど小さな出っ張りを押すと

「わあ」

壁に小さな入り口が出来た。

この城はいつたいどうなつてているのだろう。

探検しつくしたと思っていた城の中はまだ未知のものでいっぱいなのだと嬉しくなつてセイラは歓声を上げた。

中が薄暗く先が見えないほど、狭く窮屈なほど何かがあるよつた気がしてわくわくする。

待ちきれなくて通路に飛び込むと、ふつと頭上から笑いを含んだ吐息が漏れた気がする。

「だつて秘密の通路だよ？」

気が急くのが当然とばかりに、セイラの足はパタパタと音を立てる。この通路が何処に続くのか知りたくて仕方ないのだ。

そんなセイラの様子を見て、ジルフォードは半身をすらした。その行為が先に行く栄誉を『えてくれたのだと』気づいたけれど、やはり一緒にいい。隣にいるのだから。

うつてつけなことに通路は狭いといつても一人並ぶくらい容易だ。

「一緒にね」

差し出した手の平にジルフォードの手が重なるのを待つてセイラは軽快に歩き出した。

道のりは割りと平坦で、ちょっとだけ期待していた落とし穴などの仕掛けはなかつたけれど、所々で城の廊下を除き見ることが出来て中々楽しい。セイラを探し回る侍女に心の中で詫びつつ、この通路があつて本当によかつたと思つ。

半身に伝わるぬくもりもその思いを強くした。

自然と口をついて出てきたのは式のとき広場で歌われたもの。

歌詞が終わるたびに調子を変えながら歌つていく。伸びやかに、楽しげに、ちょっとだけ重厚感を出して。

それが鼻歌に変わったとき、今まで静かに聞いていたジルフォードが口をはさんだ。

「明日、街で花流しがあるつて聞いた

「あつシルトの花を空に撒くんだよね。ハナが言つてたよ

普通のシルトよりも花弁の多いものを見つけることが出来たら幸せ

になれるとか。

恋人同士で見るといいとか。

ハナも年頃の女の子だ。同世代の侍女仲間から情報を集めては樂しげに話していた。

「……一緒に」

「行こう? 見よう?」

こうこうときはどうやって誘えばいいのだろうか。

目を瞬いて見上げてくるセイラを見つめながら続きが出てこない。誰かと何処かに行こうなんて考えた事もなかつたから、そこまで言つて言葉が途切れてしまった。

視線をぐるりとまわして記憶を辿つてみても、いい言葉は浮ばない。溶けてしまつた言葉の語尾を続けたのはセイラのほうだった。

「一緒に行つてくれるの?」

大きな瞳が驚きと期待を込めて輝いた。

その輝きに目を奪われながら、言つべき言葉をやつと見つけることが出来た。

「一緒に行つて……欲しい」

「行くよー、絶対行く。私もジンと一緒に行きたいもん」

つないだ手をふんふんと振りまわして「約束ね」と念押しを。ほつとしたようなジルフォードの顔が、ふいに真剣みを帯びた。つないだ手とは逆の手がセイラの頬の横をそつと撫でる。

視線はセイラが首を傾けた拍子に揺れた月の雫のピアスを追いかけた。

「どうしたの？」

「墓守が、これとは相性が悪いと言つてた」

白い指先がピアスの先端に触れる。その瞬間に青に緑に赤色を変え
ていく。

「ああ、墓守さんとのとこへ行くんだ」

そういえば、この薄暗さも静けさも知つてゐるような気がしてきた。
あの不思議な場所に近いのだ。あの地下墓所からは確か書庫へと続
く道があつたような気がする。

「へへん。どうしようか。引き返すにしても遠いよねえ」

その上、通路の中に入ると入り口は自然と閉じたのだ。
おそらく此方から同じ場所に出る事は出来ない。

それならば、進むしかないのだが相性が悪いとはどういふことだ
うか。

暫く立ちつくしていると、僅かな風が一人の髪を揺らし、問題の墓
守の声を運んできた。

「そこまで来ちまつたんだから、仕方ないだろ？　そのままおい
で」

消え入りそうな声はやはり彼にとつてよくないものなのだろうか。
さつと行つて、すぐに離れよう。

同じ意見に達したのか一人は同時に歩調を速めた。

先ほどの「約束」の余韻のせいか、つないだ手にこめる力は互いに

ちよつとだけ強くなっていた。

ふいに天井が高くなり、冷たい空気が全身を包む。まつとした明かりの向ひに無数の棺が静かに眠っていた。

「よくきたね」

まるで水に入った猫のようだ。

墓守の姿は半分ほどに減つてしまつたかと思うほど悄然としている。いつもの不思議な響きを持つ笑い声も洞穴のよつな口からは漏れなかつた。

「「」あんね。墓守さん。すぐに行くから」

「それよつもお姫さんが命じるまつが良いねえ」

「命じるつひ？」

しわくちゃの指先がセイラの耳元を指し示す。揺れるその輝きを目に入れないように老人は僅かに視線を外していった。

「それの主はお姫さんだ。お前さんが命じれば、その石はワシを跳ね飛ばさつとはしないよ」

本当にそんな力があるのだうか。
セイラにははなはだ不思議でならない。

「そこいらのちんけな守りと一緒にするんじゃなによ。そこつはお

前さんのためだけに存在しているんだよ。お前さんのために深い地中から掘り出され、形を成し、磨かれたんだ。それ以上に強い呪いがあるもんかい。」

「そつか

ジースの皆の思いが詰まつた月の靈。

墓守には悪いと思いつつ、耳元から全身が温かくなつていくようだつた。

「でも、命じるつてビツクあればいいの?」

「ただ念じればいい。お前さんひとつわしは悪いものではないとね」

セイラは言われた通りを心の中で唱えた。
墓守さんは悪いものじやない。友達だと。
それがうまく伝わったのか、閉じていた目を開くと墓守がほつと息をはいた。

「これで大丈夫?」

「まあね」

調子を取り戻したのか、若干質量も増えたような気がする。
声には張りが出て、ひょいと棺の上に腰を掛けた。

「それにしてもホールの場所に墓場を選ぶなんて、あまり感心しないね」

「デート？」

同じように首を傾けながらも離れる事のない一人の手に墓守は笑う。もう少ししかからかってやろうか。にやりと意地悪げに口を歪めた墓守の耳に信じられない言葉が届いた。

「デートは明日だよ。一緒に街に行くんだ」

「へ？」

月の雲に苛まれていた墓守には先ほどの一人のやり取りは見えない。

かろうじて、そのまま来いと伝える事ができたのは一人の気配が戸惑うように歩みを緩めたので地下に巡らす力を強くしたためだ。

「お、王子様も街に行くのかい？」

墓守の驚きを示すように白濁した瞳は限界まで開かれた。

ジルフォードが額ぐのを見て、これ以上開かない瞳の変わりに、かくんと口が開く。

「花流しを見に行くんだよ」

開いたままの口からは盛大に笑い声が漏れた。
広い空間にわんと響いて、一人の上に落ちてくる。

「そいつはいい」

息も絶え絶えの墓守は、棺に手をつき一人を見やる。

先ほどの墓守のように驚いて目を丸くする一人の姿が、また笑いを誘つ。

「楽しんでおいでよ」

どれほど策を巡らそうとも、こんなちっぽけな少女に誰も敵わないなんて笑うしかないだろ？

驚いて目をまん丸にしたのは此方のほうだ。

手をつなぐなんて誰がした。

一緒に街に行くなんて。

忌々しい守りを身につけた彼らを、招くなんて馬鹿なことをやつてしまつなんて。

「うんー」

昨夜落ちた星の話も、城の端でこれから告げられる哀しい物語は一人には言つまい。

せめて、一人が白い花がつれてくる幸を持つて街から帰つてくるまで。

軽く慎ましいはずのノックの音がナジユールには重く圧し掛かるよう聞こえた。

窓の外の浮き足立つ街並を見下ろしながら、出来るならば言いたくない言葉を口にした。

「入れ」

振り向くまでも無く相手はサクヤだとわかる。

無駄の無い足さばき、そして星の告げた運命の代弁者として誰よりも相応しいに違いない。

一礼をして部屋に入ってきたサクヤは正装をしているナジユールの姿に彼がこれから告げることを知っていることに気がついた。

「ナジユール様。お父上が

「逝ったか」

細めた視線の先の街並は、どこをどうみても故郷と重なるといふは無かった。

「ルルドにはまだ知らせるな」

「はい」

短い返事を残してサクヤは入ってきたと同時に静かに部屋を出て行つた。

一度も此方を向かない教え子が、どんな表情をしているかなど簡単に察しがついたから。

今はどんな慰めも必要ない。

必要なのは、その姿を隠してくれる優しい闇に違いない。

けれどサクヤには用意してやる事が出来ないのでせめても、ナジユールが一人きりになれる時間をつくるために。

「セイラ様！」

「ハッハナ」

探していた人物がひょっこりと現れるなんて思つていなかつたからハナは思わず声を上げ、セイラもまさか、いきなりハナに出てくるとは思つていたので素つ頬狂な声を上げる羽田になつた。先ほどまで外は厳戒態勢が引かれているといつにビリヤッテ書庫の中に入ったのだろう。

一応、ぐるりと書庫内を一周してみたもののセイラの姿は無かつたはずだ。

いぶかしむハナの前でセイラは冷や汗を垂らした。

「セイラ様、皆が探ししてましたわよ」

「……うーん。知つてるけどさ」

地下墓所から秘密の通路を抜けると書庫の地下の本棚の後ろに出了たのだ。

本棚の後ろは、全てどこかしかに繋がつているんだらうかとつわつときした気持ちがちょっとだけ沈んだ。

引き渡されたらどうしよう。

ジルフォードの背中に隠たセイラにハナは小さな笑みをもらした。

「お茶にしましょうか？」

「うんー。」

満面の笑みに皆には悪いがしそうがないと思つ。

自分がセイラの一一番の理解者だという自負があるから。

時にせつつく事もあるけれど、逃げ道だってちゃんと用意する。舞の日までには必ず。

そう言って侍女仲間には先ほどお帰りいただいたのだ。

「いらっしゃいませ」

にこりとカナンに招かれて、今までの嬉しさが一気に弾けた。

「明日ね、ジンと街に行くんだ」

カナンがお茶を淹れて席に着くまでが待ちきれなくて、思わず口にしてしまつと、珍しくもカナンはカップからお茶を溢れさせた。黄金色の液体が机の上に広がつていぐが、それを注意するものは居なかつた。

「本当にでござりますか？」

「まあー」

カナンは未だに手元の惨事に気がつかず、ハナは常より大きい瞳を更に大きく開いた。

「本当だよ。約束したもん」

同意を求めるようにジルフォードのほつをむくと、驚いている一人の前でジルフォードは頷いた。

それを確かめてから己の失態に気づいたカナンは慌ててポットの傾

きを直す。

部屋中に花が咲いたような華やいだ香りが広がっていた。

「ハナも行いひ

その言葉を嬉しく思いながらもハナは首を横に振った。

「お一人で行つてくださいな

「え～来ないの？」

ジルフォードまでも首を傾けるのが可笑しくてハナはふつと笑った。

「せっかくですもの。お一人だけで行つてください

「だけ」を幾分か強調して、カナンを見上げると、カナンの表情もゆるりと解け、いつも以上に柔らかな印象をもたらした。

「では、街のお勧めを紹介しましょうか

部屋を満たす香りと同じく華やいだ話題がなかった。

「サンディアさんへ早く早く」

「いひちだよう」

子どもたちに手を引かれて、サンディアは小走りになりながら石畳の上を進む。

ヤガラの孤児院の子どもたちもシルトの祭見たさにタナトスにやつてきたのだ。

毎年祭りの時期にはタナトスにある孤児院に数日お世話になることになつてゐる。

子供たちの引率にサンディアも選ばれた。

行き先を聞いて、遠慮していたのだがダリアも是非にと推したので今に至る。

子どもたちに手を引かれながら見る街に怖れていたよつたじいじは何処にもなかつた。

城に居た頃に街に下りたことの無かつたサンディアにじつて、懐かしくもなく、昔の記憶が蘇つてくる事もない。

あまりの熱氣に圧倒されるのと、子どもたちの笑い声に心が冴ぐべらいだ。

先頭を切つていぐのは、何度かタナトスを訪れた事のある年長も子どもたち。

年に一度しか訪れないというのに道を覚えていふので、細い路地も怖れることなくするりと入つていぐ。

広い路地から外れて、しばらく立つと雑多さが田立つ路地に入り、頭上に見える空の幅が急に減つた。

—こんなところに孤児院があるのかしら

ヤガラの孤児院とはまったく違つ。

ヤガラの孤児院は日の燐燐とあたる丘の上に建つていて、頭上いつぱいに広がる空がとても明るかつた。

「メイヤーさん」

路地の突き当りには、細い入り口が開いていた。

薄汚れた建物の前には微笑む老人が居て、手を振る子どもたちに答えていた。

「やあ、良くな来たね」

彼の人格を示すように子どもたちが我先にと老人を取り囲む。頭を撫でられた子どもたちは一様に笑顔となつた。

「貴方は……」

顔を上げた老人と目があつたとき、サンディアは声を上げた。見知つた顔だつた。

老人のほうもサンディアに気づいたようだつたか驚きは半分ほども無かつたようだ。

わが子を見るような優しい視線を送られて言葉に詰まる。

「メイヤー殿」

直接言葉を交わしたことは無かつたけれど、陳情を言いに城を訪れた彼の姿を何度か目にしたことがある。その頃に比べて随分とほつそりとし、老いは外見に表れているけれど瞳に含まれる優しさは変わらなかつた。

今でも、子どもたちのために、力ない者たちのために理解の無い貴族たちに熱弁を奮っているのだろうか。

昔は唯、愚かだと思つた。

貴族たちの我が身可愛さは十二分に分かつており、どれほど叫ぼうともそよ風程度の力も持たないと知つていたから。

今では、ただただ頭が下がる。

この子達が生きてこれたのは彼がいたからだ。

「お久しぶりですね。サンディア殿」

あえて様とはつけなかつた。

それを厭うていることを瞬時に見抜いたのだ。

「お久しぶりです。……メイヤー殿は、わざわざザクセンから？」

サンディアの時間は十数年前で止まつてゐる。ようやく動き出した時間も、未だ全てには追いついていない。彼女の中では今もザクセンの領主はメイヤーなのだ。

「いいえ、私はもうザクセンの領主ではありません。今では、ただのアリオスの民ですよ」

「そんな……」

それならば、理解ある優しい領主を失つたザクセンはどうなつたのだろう。

あそこにも大きな孤児院が建つてゐたはずだ。

「あの子はザクセンの孤児院にいたのですよ」

メイヤーの視線の先では青年が子どもたちに肩車をねだらっていた。

「彼は商家に賣われていつて、今では立派にお店を継いでいます」

店といつても大して裕福ではないけれど、孤児院に必要なものを寄付してくれている。

「皆強く育ちました」

メイヤーは持てるものすべてを与えてきた。

文字の読み書きは勿論のこと礼儀作法もメイヤーが今までに身につけた知識も。

子どもたちが何処へ行つても生きていけるよう。

必要だと言つてもらえるよう。

ザクセンの子どもたちの能力の高さは全国に知れわたつていった。養子として引き取られていつた子。修行して職人になる子。たくさんの子どもたちが大きくなり院を出て行つた。

そして必ず戻つてきては、他の子どもたちにたくさんのものを『え

ていく。

ザクセンに帰るべき場所がなくなつても、今も皆メイヤーの下へと帰つてくる。

その子どもたちが散り散りになつた子どもたちの詳細をもたらしてくれるの、やほび悲觀はしていなかつた。

ザクセンである「とタナトスである」とやるべれい」とに変わりはない。

そう語るメイヤーの瞳に宿る強さは、さらには磨きがかかつてこるようだつた。

子どもたちを見守るサンティアの表情にも同じ強さが宿つている事に彼女自身は気づいていない。

「ジルフォード殿下をお見かけしましたよ」

まだ雪深い季節のことだ。

あの頃もタナトスは浮き足立ち、そわそわと落ち着きがなかつた。ほんの数分だけ顔を見せた王子はメイヤーがたつた一度だけ城で見かけた少年の姿からは驚くほど成長していた。

見かけたのは10年も前か。そう思えば納得してしまえるのだが、瞳に浮ぶ心細さは色濃く残つていた。

頼るものとて誰もなく、たつた一人路地裏をねぐらに暮らす子どもたち。

それによく似ていた。

哀しさ寂しさ狂おしさ。

そんなものを隠すために子どもたちは怒りか無を纏う。

ジルフォードが選んだのは無の方だとメイヤーに瞬時に分かつた。それがふつと和らいだのは隣に陽光を受けた少女がぴたりと寄り添つて微笑んだ時だった。

「よい相手を見つけられましたね」

「ええ。私もそう思いますわ」

「すぐそこですよ」

押し付けでも問い合わせでもなく、事実を告げるための言葉には優しさが含まれていた。

貴女の子どもはすぐ其処にいますよ。会いたいと思えば、すぐに会えるほど。

「私は……」

会いたい。会いたい。胸が切実な叫びを上げるのとは反対に、緩やかに誰かが首を振るのだ。今更、会つてどうするところのだ。重荷にしかならないのに。

己のした仕打ちを忘れたのか。

「ただ名を呼んで抱きしめてあげればいいのですよ」

メイラーは膝に縋りついてぐずり始めた少女を抱き上げた。少女は少しでも温もりを得ようと小さな腕をメイラーの首へと回す。到底届かない腕の代わりに大きな手のひらが少女の背中をやわしく叩く。

それにあわせて、うつらうつらと瞳を閉じていく少女に「おやすみ。レイ」と告げると少女はふわりと微笑んだ後、全身をメイラーに預け夢の世界へと旅立つた。

「昨夜は興奮しすぎて眠れなかつたようですね」

まるで本当の親子のようだ。

その光景を見ながらサンディアのうちに暗い不安が頭をもたげた。自分は名前すら呼んであげていなかつた。

メイラーもジルフォードという名がどんな意味を持つてゐるかは知つてゐる。

サンディアが口を開かしてゐるわけも。

「ただ見つめるだけでもいいのです。其処にいると認めてあげるだけいいのです」

無を纏つたどもたちせ己の存在すらないものとしてしまつ。全てないものとする。痛みも苦しまむ。

小さな体でできる最後の防衛術。
けれど見ないふりをしても全て消え去る事はないのだ。内に凝り固
まつたものはわが身にずんと降りかかる。

「大丈夫ですよ」

どんな時も譲歩をくれるのは子どもたちのまつだつた。

「……やつ、でしょうか」

「ええ」

一步だけ踏み出やつかと勇気を振り絞るサンティアに微笑んで、背
中をぽんと押す。

「サンティアさん。マイヤーさん。早く」

潤む視線の先では、傾きかけた太陽にこうじてはいられないと騒ぎ
始めた子どもたちが大きく手を振つていた。

空には穏やかな青が広がっていて、ほのかに風がそよぐ絶好の花流し日和。

良い天気に恵まれたことに胸を撫で下ろしながらもハナの表情は次第に暗くなっていた。

二人のことが心配でならないけれど、ついていくのは憚られる。せつかく設けた一人だけの時間を邪魔するのは嫌だ。

ああ、でも突つ走るセイラと初めて街に下りるジルフォードのことだ。

何か問題に巻き込まれるんじゃないかと思いつと気が気ではない。

荒事に巻き込まれたらハナにはどうしてやることも出来ないのは十分に分かっているけれど、無意味に部屋の中を歩き回ることを止める事ができなかつた。「行つて来ます」と元気に手を振るセイラとジルフォードを送り出してから、まだ数分と経たないのに不安はどんどん膨らんでいく。

気を落ち着かせるために朝からの出来事を思い出していく。

服装はばっちりだ。せつかくの「初めての街」だ。記憶に残るものにしなくてはとシルトにあわせ白く可愛らしいスカートと、不服顔のセイラを宥めすかして髪も巻いてみた。攫われたらどうしようかと思うほどの可愛らしさ。ナジユールたちがあつらえたものより数段似合つに違ひない。

お小遣いもちゃんともらたせた。

もし「一人がはぐれた時のために集合場所も決めた。

何か遣り残した事は無いだろうかと、指折り数える様子に苦笑するカナンにも気づかない。

誰かが扉を叩いたのもカナンが応対に出るまで気づかなかつた。

「おはよハリヤコモス。カナン殿」

カナンの声に少々驚きが含まれていたのはケイトがいつも兵士の格好ではなく、平服を着込んでいたせいだろう。

年齢より幼く見える顔立ちが更に際立っているようだった。

「今日はお休みですか？」

「ええ、非番なのです」

何故か急遽昨夜決まつたのだ。

上司の「お前、明日休みだからな」の一言で。

無論口答えした。

昨日から祭が始まつたため、非常に忙しい。所構わず騒ぐ連中を取り締まるのも、他国から入つてくるものたちを見張るのもケイトたちの仕事になる。そんな時に休めだなんてと更に詰め寄らうとしているとセイラとジルフォードが街に下りることが告げられたのだ。始めから心配だから見て来いといえれば良いのに。

確かにジョゼはこつそり様子を見るのにはむかないだらう。立派な体つきは何処に行こうと田に付くし、ジョゼ・アイベリーと言つ男は有名すぎる。

あつと言つ間に将軍が居るぞと話が広まつてしまつだらう。そうなれば、こつそりなんて無理だ。

「ハナ殿は来てますか？」

「ええ」

カナンの苦笑の正体を田にして、「ああ、やはり。」と同じような

笑みを浮かべた。

うるうると円形を描きながら両面相をしているハナの姿は予想通りだった。

「ハナ殿、おはようござります」

よつよつ声が届いたのか、ハナは顔を上げ「ああ、ケイト殿」と氣の無い声で言うと、再び両面相を開始した。

「一緒に行きませんか？ シルトの祭」

その言葉はハナに両面相を止めさせる効果があった。ハナは困惑顔のまま、じっとケイトを見つめ、確かめるよつよつとケイトを交互に指差した。

「私が……貴方と？」

「ええ、心配なんでしょう？ 私もお一人のことが心配なので」

セイラとジルフォードが一人だけで街に下りると聞いてしまったら先日の迷子の件もあり、命令がなくても気になつてしまつ。自分以上にに気をもんでいるだろうハナを誘おうと思つたのは自然な成り行きだった。

「……とても心配ですわ」

見つからなければ邪魔することにはならないだろうか。そんな想いがハナの中にもぐりと沸き起る。

二人が帰つてくるまで、カナンの部屋で待つといよ。その決意はガラリと音を立てて傾いでいく。

「よい考えですね。ハナ殿も祭を楽しんでくればいいのですよ。花流しは年に一度しかありませんしね」

絶妙なバランスで何とか持ちこたえていた決意は、優しい笑顔にて完全に崩れ別の決意へと生まれ変わる。

「行きましょう！」

ハナが宣言したちょうどその頃、セイラとジルフォードは強固な城壁にぽかりと開いた門の前に居た。ここをくぐれば、街まではすぐの距離だ。

騒ぎになると困るでしょうからとハナが用意した色ガラスをはめ込んだメガネをかけているためジルフォードの表情は読み取れないけれど、つないだ手のひらからが負の感情は伝わってこない。むしろ複雑な心境を抱いていたのは門番たちに違いない。どこか落ち着きが無く互いに目配せをしあう。

十数年ぶりに味わう外とはどのような感じなのか。誰も想像する事ができなかつた。

「行け」

セイラの言葉に頷いて一步を踏み出すジルフォードの背中に声がぶつかる。

「お気をつけて」

振りかえれば言葉を発したであろう青年がわたわたと無意味に腕を動かしていた。

宙を彷徨つた指先は頬に達し、赤みを隠すように頬をかいた。

「街はとても賑わっていますから」

「うん」

「行つてきまーす~」

手を振り振り遠ざかっていくセイラとジルフォードの姿が見えなくなつて青年は、ほうとため息をついた。

すぐ近くにジルフォードがいた緊張もあるが、二人だけで大丈夫だろうかと心配だつたり、仲睦まじい姿にほつとしたり、色々なものが入り混じつた長いため息だつた。

わが子を初めて旅に出す時はこんな感じだらうか。

子どもどころか結婚もしていしないのに、そんなことをふと思つた。どうか、彼らが今と同じように笑みを浮かべて帰つてきますよう。青い青い空に青年は小さく呟いた。

セイラたちが城門をくぐる少し前のこと、ケネットは最後の食事をじつくりと味わって嚥下していた。

一週間前のパサパサしたパンは惜しむように口にも喉にも張り付きながら落ちていく。

最後に残しておいたチーズ一かけらを頬張り感謝を込めて飲み下す。昼食には、久しぶりに焼きたてのパンを食べる事ができるけれど、かひかひになつたパンへの感謝も忘れはしなかつた。

ケネットへの食料は一週間分が一度に届けられる。

ちゃんと計算して食べるため途中で無くなるなんてことはなかつたが、いつまでも一番美味しい状態を保つのは無理なのだ。

「いいわいさまでした」

しつかり手を合わせた後は、早めに下へと降りる。
秘密の階段をそろりとおりせば、保管庫の中に降りる事ができるのだ。

昨日ジルフォードに出会い、言葉を交わしてみたせいか、いつもならばしないことをやつてみる気になつたのだ。

顔も合わせなかつた受付の男にお礼を言おうと。

一週間に一度の食料運搬は彼がしてくれるのだ。

保管庫に降りてくると嗅ぎなれた紙の匂いに、今日は香ばしい匂いが混じつていた。

大きな袋を抱えた男がふうと息を吐いた。

男が袋を受付として使つている机にあらすと、カシャンヒビンが触れ合う音が響いた。

「ありがとう」

「うわー！」

突然声をかけたケネットに男は当然の反応を返した。
声を上げて、すつ転んで、心臓を高く鳴らす。

いきなり現れた人物が髪の毛のお化けなら無理からぬ事だ。

「だ、大丈夫？」

その髪の毛お化けが、机の上から自分の顔を覗きこむものだから男は再び悲鳴をあげそうになつた。

けれど、ちらりと見えた水色の瞳が、頭のどにかに引っかかった。

「おっおっおめえ、あのちつこかつた坊主か？」

前の出納係が居た時には何度か会つた事がある。

まだ男の膝くらいの少年で、もちろん髪の毛お化けなんかではなかつた。

前の出納係は孫だと言つた。

偏屈でへそ曲がりな老人だつたが、その少年だけは「可愛いだろう」と世間一般的の老人が我が孫を溺愛するように言つたものだ。

「うん。おいらのこと覚えてたの」

「おっおっ、そんな様変わりしてるとは思つてなかつたけどな」

「……そんなにかわつたかなあ」

「最後に会つたのは、おめえがコンべりーの時だぞ」

床に座り込んだ男は、自分の額くらいの高さを示した。

出納係が途中で変わったことは知っていたけれど、まさか彼の孫が仕事を継いでいるとはつとも思つてみなかつた。

いらぬ事は詮索せぬ事が一番だ。

城の中で仕事をしていれば、そんな処世術も身についていく。

深く考えずに与えられた仕事をこなしていれば、それなりの収入を得る事ができて、ぬくぬくと生活できる。

だから、一番大きな疑問も飲み込んだのだ。

保管庫に入るものを厳重に管理せよとの命令は、資料の不正流失を避けるためではなく、中にいる何者かとの接触を出来る限り抑えるためではないか。

現に身元は聞くが、資料の貸し出しは寛容だ。

前任者が死んで十年余り、否応無く想像は膨らみ中にいるのはほとんどない化け物ではないかと思うこともあつた。

何しろ顔を一切合わせていないのだから。

「ケネットだよ」

明るい声に拍子抜けする。

見た目こそ不気味だが、その声は、祖父に頭を撫でられて恥ずかしげに嬉しげに笑っていた少年のものだったから。

「ケネットか。おめえ、ちゃんと食つてんのか。がりがりじゃねえか」

風が吹けば倒れそうな細い体に申し訳程度の薄い衣一枚。

冷たい床の上を裸足でぺたりと歩いている。脆弱さを際立たせるのは十分だった。

「もつと食え

男は持つてきた袋をかき回す。

パンにハムにチーズ。ミルクにちょっとだけのお酒。なんだ。これは。これではチットモ足りはしない。

そこではたと思い出した。

この内容は前任者のためのものと一切代わりが無い。今居るのは食の細い老人ではなく、青年だといふのに。

「なんでえい、これ。こんなんじゃ力もでないだろ」つが

「大丈夫だよ」

ずっとそれでやつてきたのだ。不満なんて無かつた。

「何か、欲しいものは無いのか。厨房の奴が知り合いでからな。何かとつて来てやるよ」

「欲しいもの?……う~ん」

欲しいものつてなんだろ?

破れない紙、虫の寄り付かない紙。それとも補修用の紙の色を増やせたら……

欲しいものはいっぽいあるけれど、食べ物でと言わると瞬時に思い出せない。

「う~ん

「なつないのかよ」

うんうんと唸り続けるケネットに男は呆れ、同時に罪悪感が沸き起

」る。

こんな感じに押し込んだのは自分ではなかつたけれど、もう少し
関心を持つべきではなかつたかと。

せめて、田の前の青年が好物の名を上げる事ができるぐらうこには。

「じゃあ、おいらシルトのお菓子が欲しいよ。お祭の時にだけある
んでしょ」
「うへー」

花を食べるのってどんな感じだろう。
シルトの花も挿絵でよく見かけるけれど、実物を見たことはあった
だらうか。
どこかで、菓子の記述を見てからけよつとじばかし気になつっていたの
だ。

「そんなのいいのかよ？」

さすがに厨房に常備してあるものではないが、街に行けば容易に手
にいるものだ。

「うふ。おいらシルトのお菓子食べた事無いもの

今まで食べた事はないし、これから食べる機会があるかも分からな
い。

穏やかな世界は少しずつ変わり始めている。新しく届けられる台帳
の端々に前兆は見えていた。

花を飾つて甘い菓子を作つて春が来るのを純粋に喜べるのはいつま
でか。

「よし、待つてろよ。仕事が終わつたら街に下りて買つてきてやる
からな」

「うん。 ありがとう」

張り切つて胸を叩いた男にケネットはにこりと微笑んだ。

「……すつすつとい人ですわね」

前夜祭の熱氣を知らないハナは、路地にひしめく人の数にひくりと頬を引きつらせた。
どうやつたらこんな細い道に、これだけの人数を押し込むことが出来るのだろう。

「こゝは外国の商人たちの店が出ているので一際人気なのですよ。あちらの道を通れば多少ましですよ」

ましといつてもほんの気持ち程度しか違わないけれど。
ケイトの微妙な笑みにハナは失敗したかもと思った。
こつそり様子を見よつどこゝろか、見つけることさえできないのではないか。

門番の「つい先ほど出て行かれましたよ」との言葉に足を速めたもの、もう何処にもセイラたちの姿は見えなかつた。

「アリオス中の人間を集めたみたいですね」

「タナトスにはとてもじゃないけど、入りませんよ」

くすりと笑うケイトにハナは僅かに頬を膨らませた。

「こんなにたくさんの人を見たことがないもの

ジニスの住人を全部集めても数百人。

その数百人も一度に集まることなど稀だつたのだ。

セイラたちの式には多くの人が集まつたけれど、その中に飛び込むこと無かつたのでいまいち実感は無かつた。

「どうですか？」

むくれたハナの前に紙包みが差し出された。

ほこりと温かそうな湯気が立ち甘じ香りが広がつた。

「心配のし過ぎで朝、」はともかくに食べていなこのでしょ」。おススメですか？」、せひ」

いつの間に買ったのか二つの紙包みを持ったケイトがにこりと笑う。思わず受け取つてしまえば、口をつけないわけにもいかず、口に含めばほろつと甘さが溶けていく。

「……おこしですわ」

「それはよかつた」

丁度よこせに幸福感がじわじと全身を包む。

「今、セイラ様にも食べさせたいと想つてこのでしょ」。

図星だつた。

この甘さはセイラが好むものだつて思つていた最中だ。ぴくつと反応するハナにケイトの笑みは深くなる。

「セイラ様のことに関してはハナ殿はとても分かりやすいですね」

「こつこつのですわ！ セイラ様への気持ちを隠す必要なんてない

のですから。はつ早くセイラ様を見つけましょ「うー。」

なんだか胸の奥がむず痒い。

けほんと咳をしてみても変わりは無かった。むず痒さから逃れようと意味も無く頭を振ったハナの耳に今までに無かつた音が飛び込んできた。

「きやあ」

小さく幼い悲鳴があがつたのだ。

つられて目をやると人がひしめき合つて狭いはずの路地の中央にぽんと空間が開け、幼い少年がしりもちをついていた。

寄り添うようにもう一人少年がいる。

少年の着た大きさの合わないだぼだぼの服は擦り切れ、隙間からは肌が露出し、薄汚れた頬の上にある瞳は恐怖に揺れていた。何一つ庇護を持たない瞳。

ハナには瞬時に彼らの生い立ちが分かつた。自分と同じ路地裏の子どもたち。

むず痒さは瞬時に消え、代わりに冷たさが胸の内を満たす。

「つたぐ、何処見て歩いてんだよ。汚れちまたじやねえか」

人垣から現れた男はもとより埃を被つて、いような薄汚いズボンを叩く。

その音に怯え、少年たちは小さな肩を寄せ合つて震えている。

「なあ、どうしてくれるんだよ。ほづすども」

少年たちは、ちらりと周りを見渡しだが、誰とも視線が合わない。誰もが視線が交わる前に逸らしていく。

関わり合いになるなんて面倒だ。周りからはそんな声が聞こえてきそうだった。

助けてと喉まで出かかった言葉は行き場を失い、どにか体の奥底に落ちていった。

「これだけ込み合つていまますのよ。ぶつかるなとまほづが無理ですわ」

「はあ？」

気がつけば前に出ていた。

ハナの目の前には不快げに歪んだ髭面がある。周りがざわつき、馬鹿なことをしたものだと顔を逸らしていく。

髭面は耳に心地よくない言葉を放つた相手が少女であることを知ると口元を笑みで象つた。

「貴方、この混み具合の中で触れるもの皆を小突いて回る派ですの？」

ハナはキッと顔を上げ、遙か上にある相手の顔を見据えた。小さくなつて震えているのは昔の自分だ。

温かい腕が欲しくて、誰か助けてと声にならない悲鳴を上げていた。

「なあ、お嬢ちゃん」

男の笑みは深くなつた。

こつやつてちつぽけな正義感を振り回してしゃしゃり出でてくる奴をやり込めるのが楽しいのだ。相手が女ならなお楽しい。ずっと近づけた顔の前に人のよさそうな笑みが広がつた。

「せつかくの祭ですよ。騒ぎを起しきて白けをすなんて止めにしま
しょう？」

割つて入つたケイトに男は大きく舌打ちをする。

「いじぢだつてなあ、せつかく楽しみに来てるのに、服を汚されて
腹が立つてんだよ。てめーがあいつらの保護者か？なら詫び代でも
出しなよ。ぼうや」

「あ」

ハナは何かが軋むような音を聞いた気がした。

「せつかくの祭ですから、アリオスの牢獄見学もされていかれます
か？ 今なら底冷えのする特別房も用意できますが」

「はあ？ 何言つてんだよ。クソガキが」

ぶんと風が鳴る音がした。

太い腕がケイトの頬すれすれを通つていく。

ハナが上げた悲鳴は男の苦悶の声に打ち消された。

「貴方、アリオスの住人では在りませんね。痛くも無い腹を探られ
るのも、辛い思いをするのも嫌でしょう？ 穏便にすませませんか？」

ハナには、その一瞬で何が起つたのかわからなかつた。気がついたら男は大きな体を丸めて唸つていたのだ。

「それとも鬱憤晴らしがしたいのならば、うちの連中がお相手しま

すよ

ケイトを見上げる瞳に憎悪を燃やしていた男は瞬時に色をなくした。周りをぐるりと同じほど体格のいい男たちが取り囲んでいる。彼らの胸についている円と鳥の紋章が陽光を浴びてきらりと光った。

「おねーちゃんたちありがと」

「ありがと」

ちゅうりと近づいてきた子どもたちが頭を下げる。

男には丁重にお帰り頂いた。タナトスの何処で騒ぎを起しあうともすぐに月影が現れるといい含めて。

「御礼をするの」

「のー」

「お礼なんていいですね」

助けたかったのは少年たちばかりではない。小さく震えていた昔の自分を助けたかったのだ。

微笑むハナに、それは嫌だと少年たちは首を振った。

「おねーちゃんたち、花流しに来たんでしょう? いい場所を教えてあげるー。」

「教えてあげる」

人を探しているの。

そう言う前に少年たちは意気揚々と一人の腕をひっぱつた。自分たちにも誰かのために出来る事があることに輝く一人の顔を見てしまえば、ハナにもケイトにも止める事は出来なかつた。

「エイナの塔からはずつごく綺麗に見えるんだよ」

エイナの塔とは何処なのか。問うようにケイトの顔を見上げても、分からないと首を振られるだけ。

人の間をすり抜けて狭い路地を渡り、見知らぬ迷路に迷い込む。青い空に、もうじき花流しが始まると誰かの声が溶けていった。

祭のために奇抜な格好をしているものもなく、ジルフォードの姿はさほど目立つてはいなかつた。

見事な白に目を奪われた者もいたが、視線はすぐに別へと動いていく。

シルトの花冠を被つた歌姫が音を添え、口から火を噴く男が彩りを添える。

前夜祭の熱氣が三倍に膨れ上がつて弾けたような陽気な空間だつた。目をやりたいものばかりだから自然とセイラの歩みは遅くなり、並んでいたはずの距離がすぐに長くなる。

その度に立ち止まって待つてくれるジルフォードに「ありがとう」と言つのは何度目か。

けれど、そろそろ急がなければ。花流しを見るといつ目的を果たすために。

「ジンー。道が分かるの？」

器用に人の間を抜け先導して良きジルフォードの歩みは初めて街に来たとは思えないほどよどみが無い。

「上から見てたから」

書庫の屋根の上からずつと見下ろしていたから網の目のように広がる路地の一本一本が何処に繋がつているのか分かるのだと言つ。セイラは感心するようにため息をつくと同時に疑問が浮かんだ。ジルフォードは路地の全てを把握するほど一人きりで見下ろした街にいることなどう思つていいのだろう。

「ジンは、街に下りてみたかった？」

書庫の屋根の上がお気に入りの場所だとは知っている。
そこから見える風景の中に入りたいと思っていたのだらうか。

「下りてみたいと思つたことは……ないと想つ」

城に来たばかりのことはとにかく慣れようと思つていた。
西の離宮に居た頃は、母と自分と世話係が数人。

髪の色や瞳の変化が良く思われていないと知つていたけれど、城ほどあからさまではなかつた。

なぜ、それほど嫌うのならば西の離宮から連れてきたのかと疑問に思つほど。

罵られ、追い払われ、そして彼らは一番いい方法を思いついたのだ。
ジルフォードなど此処には居ないかのように振舞えばいいと。
最初こそは外見を変えようと努力した。

子どもの浅知恵で、外見さえ兄と同じようになればきっと認められ、母も悪く言わないと。ヒスターニアの髪を染める化粧法を試した事もあつたが、真白な髪はどうやっても濁つてはくれなかつた。
瞳の色を変える方法など、どんな文献をあさつても見つけることは出来なかつた。

自室には明かりすらいれにくる者も無く、いつの頃か諦め、しづらにも居ないよう振舞うことを覚えていた。

真つ暗な世界に浮ぶ温かそうな街の光りを見るのは好きだつたけれど、其処に行きたいという願望はなかつた。
きっと何処にいっても同じだと知つていたから。

幸せそうに笑う住民の表情を凍りつかせたいわけじゃない。

「……そつか」

見上げたジルフォードの表情は眼鏡のためにはつきりとは分からなくて、セイラはギュッと心臓が縮こまるような感覚を覚えた。

心臓が冷え切った手で驚掴みにされたように胸に鋭い痛みが走り、視線を落として胸元を見るけれど変化があるわけじゃない。

トーンの落ちたセイラの声にジルフォードは視線を下げた。

先ほどまで嬉しげに輝いていた瞳は伏せられて、ジルフォードからはセイラの頭のてっぺんしか見ることが出来ない。

垂れた頭はどこか哀しげで、ほんの少しの間に何がセイラの心を畳らせたのかジルフォードにはよく分からなかつた。

分かるのは、先ほどと同じように笑つていて欲しいと思つてゐることだけ。

顔を上げさす氣のきいた言葉など思いつかないから、今の心情をそのまま口にする。

「今は下りてきて良かつたと思つてゐる」

顔を上げたセイラの前で

『だから、そんなしょげた顔をしないで』

まるでそう言うかのようにジルフォードの口元を淡い笑みが彩り、つないだ手に力が籠る。

やはり瞳を見ることは敵わなかつたけれど、その笑みはしつかりと目に焼きつき、再び心臓が縮こまる。

同じギュッと感じなのに、今のは変な感じだ。

嬉しいような苦しいような。先ほどまでの痛さは無かつた。

「よかつた！ さあ、ルーファ殿のお勧めの場所に行こう」

互いに、ほつと温かな息を吐き、同じ歩調で歩き始めた。

ルーファが教えてくれたのは裏街にある古ぼけた塔の上だつた。

居住区が表街に移り、錆びれ打ち捨てられた一角だつたが、陰鬱な

様子は無く、どこかからりとした場所だ。

先ほどまでの熱に浮かされたような陽気とは無く、細い路地には一人の影しかない。

「誰もいないね」

遠くで祭の音がする。

その微かなに響く不明瞭な音がここは全く別の世界なのではないかと思わせた。

塔の中には何一つ生き物の存在を感じさせないが、今しがた掃き清められたかのように綺麗だつた。明かりは無かつたけれど、壁に開いた隙間から陽光が差し込み行動するのに困らない。

幾筋もの光りの帯が進むべき方向を示しているかのようだ。

さほど広くは無く、すぐに上へと続く階段を見つけることが出来た。

階段の壁面に施されたレリーフが目を奪つた。

「綺麗だねえ。この人、誰だろう

壁には数人の女性のレリーフが施してあつた。

顔の造形や衣装が同じ事から同じ人物を示しているのだと知れる。順に追つていくと女性は踊つているのだと理解でき、セイラは壁の凹凸に手を這わした。

長年の風雨に耐えたのだろう。

表面はなだらかで、形を留めていない場所もある。

それでも、その女性の周りだけは風さえもその美しさが損なわれるのを嫌つたかのようにはつきりと形が残つていた。

「エイナだと思つ」

アリオスで描かれる女性といえばエイナが一番多い。

しかも舞う姿ならほぼエイナと言つて間違いない。

初代王の妻。戦女神。

彼女がアリオスの勝利を願い舞えば必ず勝利を収めたという。

「エイナ？ でも、ちょっと雰囲気が違う気がするな」

城で見たエイナの像はもつと鄭ましい姿をしていた。
まさに戦女神、その言葉が似合つような。

けれど目の前にある女性は優雅で美しいエスターニアで描かれる女神
のようだった。

伸びやかな手足を装身具で彩つて、靈のような薄衣をはためかす。
柔らかな微笑みは誰に向けたものだらう。

彼女の視線を追つように頭上を見上げると、光りの入り口が出来て
いた。

そこからは眩しい空が覗き、早くおいでと手招きしているようだっ
た。

「エイナだよ」

先ほどからどんどん人気の無い方へと進んでいるような気がしてな

らない。

感謝を満面に表した少年たちを疑う気持ちなどないのだが、じわりと不安がこみ上げてくる。ケイトにも途中から何処に入り込んでしまったのか分からなくなつた。

人の住んでいる気配の無い建物から裏街の中でも、かなり奥まで来てしまつたといつことだけが何とか分かる程度だ。

「この辺が君たちの住んでるとこだ」

「ううん。もつと南のほうだよ。ほら、あれだよ

少年の指差した場所には塔といつには少々不格好でへしゃげかけた円形の建物があつた。

その時、街全体が鳴き始めた。

高く低く不思議な音が響いた。

「何？　この音。変な音だ」

つられるよつに階段を駆け上がつた。

視界がぐんと開けると同時に聞こえる音も大きくなる。ジルフォードが外に出ると、ふおんと音が高くなつた。

「告げ笛の音だ」

花流しの前に吹かることは知っていたけれど、ジルフォードも初めて聞く。

春を連れてくる風の音を模したものだといわれているが、陽気さに浮かれた不思議な生き物の鳴き声のようにも聞こえた。

何処から音がするのかと辺りを見渡したセイラの瞳に見知った顔が飛び込んできた。

「ハナ。それにケイトも

さきほどまで誰もいなかつた路地に四つの影が見て取れる。子どもたちは知った顔ではなかつたが、あの二人は間違いようも無くハナとケイトだ。

セイラの声に反応して、黒とオレンジの頭がきょろりと辺りを見渡している。

「上だよー!上!」

こんなところでセイラの声を聞くとは思つていなかつたハナは頭上を振り仰いで歓喜の声を上げた。

「セイラ様! ジン様!」

「やっぱりハナも花流しに来たかつたんだね」

セイラのその言葉にハナは口ごもつた。

興味が無かつたといえば嘘になるけれど、本来はこつそり二人の無事を確かめるためだつたのに先に自分たちのほうが見つかってしまったのだ。

一際高く笛の音がした。

それを合図として、表街の一画で、わあっと花が宙を舞う。群集から声が上ると、別の一画からも真白な花弁が降り注いだ。セイラたちのいる塔は花流しの中心からは大分それてしまっているが、風に乗って花たちはここまで十分流れてくる。

押し合いへし合いして、窮屈な路地で見上げるよりもずっと快適に楽しむことが出来そうだ。

皆、それぞれの場所で天上の彩を楽しんだ。まるで優しい吹雪のよう。

花弁が後から後から降つてくる。

甘い香りを纏つて視界を白く埋めていく。

容易に落ちてくる花を手にすることは出来たけれど、花弁が多いもの取るうつと思うと難しい。

「なかなか見つからないねえ」

何度も手を差し出してみるのだけれど、手に落ちてくるのは5枚の花弁のものばかり。

ジルフォードの手のひらに落ちてくるものも同じだった。

止まる事を知らず降り積もる花はハナの髪の上にも舞い落ちる。豊かな黒髪の上を鮮やかに飾ったシルトはどこか誇らしげにぴんと花弁を開いていた。

「ああ、これ六枚ですよハナ殿」

ハナの耳の辺りに舞い降りたシルトはまさしく6枚の花弁を持つていた。

「本当ですか?」

ハナの視界からは見えず、とつて確かめようとするのを押し留めてケイトは笑った。

「そのままいたらどうですか？ 春告げの花に春の女神ぴったりでしょ！」

「なつ」

「「似合ひ～」」

少年たちが掴み取ったシルトをハナの髪に乗せていくものだから、頬に走った熱と共に飛び出しそうだった言葉も何処かに消えてしまった。

ハナがシルトに埋もれていく様子を上から見つめていたセイラは声を上げて笑った。

「やつぱりハナが一番適任だよ！ 春乙女もハナがやればよかつたのにね」

同意を求めるようにジルフォードの方を向けば、何時の間にか色眼鏡は外されていて、瞳には淡い空の色が映えていた。

その瞳が一際美しい白を見つけると、手のひらに受け、隣に居るセイラの髪に挿した。

甘い香りが強くなつた。

「セイも似合ひ」

願い事の叶うシルトではないけれど、畳むことの無い白は亞麻色の髪によく映えた。

「ありがと」

はにかんだ笑顔に微笑が重なると嬉しさも増えていく。
掬われた一房の髪を耳にかけられるのがくすぐったくてセイラは声を出して笑った。

ジルフォードにもシルトが似合つのではないだろうか。
ふと浮んだ疑問の答えを探るうと、ジルフォードを見上げれば風に
攫われる白い髪がシルトの色に溶けていく。
輪郭が曖昧になり青い空に吸い込まれていくよ。

「ああ、ジンの髪はシルトの色もあるんだね」

雪の色。花の色。

見惚れるほど美しくて、するつとすり抜けていくと知つても手
を伸ばさずにはいられない。

「そんなことを言つのはセイだけだ」

彷徨つていた指先を掴まれる。
自分より少し冷たい熱が伝わる心地よ。

「それは嬉しいかな？」

「嬉しい？」

ジルフォードの首が傾いだせいで、髪がさらりと揺れた。

「ジンについては発見は私が一番が良いもの。うん。一番がいい

！」

ちょつと困り顔。

表情が読めるようになつてきたのが嬉しい。

「だから、一緒にいろんな場所に行こうね」

これから運命など全く知らずに口にした言葉は、小さな額きになつて返ってきた。

あれほど舞っていたシルトの花も最後の一片が静かに地面へと落ちていった。

花が丁度舞い終わる頃、静まり返つた廊下には扉を叩く固い音が響いたが応えは返つてこない。

訪ねた相手が中に入ることは分かつていただけれど、あまりにも静かな其処からは入つてくるなと無言の圧力が漏れているかのようで、ルルドはそれ以上足を進めることは出来なかつた。

彷徨つた視線は定まらず、目的もなく廊下を歩き始めた。

今、書庫に行つてもカナン以外は誰も居ないだらう。

花流しなんて女性が好みそうな行事をやつていてるようだから、きっとセイラもハナも街に出て行つたに違ひない。

部屋に戻るのも気が進まず、目に付いた庭へと足を進めてみると、皆同じように刈り上げられた木々が窮屈そうに空を支えていた。作られた植物の美しさがルルドには理解できなかつた。触れてみても、全く自分の知らない物質で構成されているのではないかとさえ思つてしまつ。

腰を落ち着けた一角も何処か座りが悪い。誰も居ないだらうと重いため息を付こうとしたとき、葉がわざりと揺れた。

吸い込んだ空気を吐けぬままその方向を見れば翠の瞳とぶつかった。周りを囲む緑より、直濃い色は驚き、そしてすぐさま普段を取り戻す。

「貴方……」

声を聞いて思い出した、確か王の妹君だ。

名前はテラー・ナと言つただろうか。

銀の髪をきつちりと結い上げた彼女の後ろには一人の侍女が付き従つており、瞬時に眉を顰めた彼侍女たちを見て、ルルドはわけも分からず安堵した。

おやりくアレがルルドの思い浮かべていたタハルへの対応なのだ。

「失礼します」

何かを言おうと口を開いたテラーの前を通り過ぎて廊下に戻る。この城は、迷いほどに広いくせに砂漠で育ったルルドには閉鎖感が付きまとつ。

「また迷つたのか？」

背後から聞こえてきた声は笑いを含んでいた。
からりとした笑いは決して不快ではなかつたが、今会いたい相手ではない事は明白だつた。
何時もいつも、どうして情けない気分の時に出会つてしまつのだろう。

「迷つてなんかない」

振り向きもせずに言えれば、ジョゼの笑みは深くなつた。
つこと並んで、己より背の低いルルドの顔を覗き込む。

「IJの前と同じ顔をしてるぞ」

笑われても何故か怒りは湧いてこない。

自分はそんなにも情けない顔を曝しているのだろうかと頬に触れてみた。

頬も指先もどちらも冷たかつた。

握ることの出来なかつたドアノブもきつと冷たかつただろつ。
その反応が拍子抜けだつたのか、ジョゼは片方の眉を上げた。

「ナジユール殿がらみか？ ちょっとは自立しりょ」

「どうせ氣の浮き沈みを左右するのはナジユールなのだろうと当たりをつけてみれば、案の定そうだったようでルルドはふいと視線を逸らした。

「そのナジユール殿はどうした？ 嬢ちゃんは居ないだろ？ から書庫じゃないだろ？ しな」

外にいるのならば話す機会もあるだろ？ そうなればルルドの扱いに慣れたナジユールがこんな状態で放つておくとは思えない。

「部屋か？」

反応がないのは、それが事実であると思つてもいいのだろう。それにして珍しい。

今まで昼夜今までナジユールが部屋から出でこなかつた事はない。

「何があつたか？」

「タハルで良くない」とが起つたんだ

夜遅く、サクヤがナジユールの部屋を訪ねた事は知つていて。タハルに変事が起つたに違ひない。もしかしたら父に何かあつたのかもしれない。

「おいおい、そんな事言つてもいいのかよ」

使者がぽろりと自國の立場が悪くなつてゐる事を口にするもののじや

ない。

ジョゼの言葉には少々手際の悪い弟分をたしなめるような響きがない。ジョゼの言葉には少々手際の悪い弟分をたしなめるような響きがあった。

「隠していたところで、どうせバレルだつて、それなら今ばれたところで関係ない。もともとタハルの立場はすぐぶる悪いのだから」すねた声は子どもっぽくて、感情が全て面に出るルルドは使者としては優秀とはいえないかも知れないが、自国がどう見られているかの判断は正確だった。

「一の王子ってのはどんな奴だ？」

何故、今一の王子なのだ？

見上げたジョゼの表情を見て納得した。タハルの状況が変わればアリオスもどう対処すべきか考えなければならないのだ。いつも飄々としているこの男は紛れも無く、この国を支える一つの柱だった。

「ルルダーシュは」

「ルルダーシュ？ お前の名前と似てるんだな？」

「ルルドはタハルで一番多い名だ。砂漠で貴重な水を表す言葉だからな。ルルドに慈しみを表すアーシュを足してルルダーシュだ」

この名はタハル王の第二側室となつたルルダーシュの母の苦肉の策だった。

初めの王子には太陽の名を、次の王子には水の名を。

それが、タハル王の願いだつた。

最初に王子を産んだ第一側室は誇らしげにナジユールと名づけた。

次の王子を産んだ第一側室は、誰でも名乗れるルルドなど名前からして済つてしまつと、新たな名を考えた。

王の正妃はタハルの主神であるリュオウと決まつてゐるので実質的には存在しない。

その分、側室同士の争いはし烈を極め、慈しむと詛つ名を貰いながらも、ルルダーシュはナジユールを憎むように教育されていた。憎むには途方も無く大きな存在だつたと気づいたのはこつゝ頃だろう。

「ルルダーシュは愚かで小さな存在だ。いつも、己の無力を嘆いている」

いつもいつも空回り。

ほんの手助けにもなりはしない。

もし、ほんの少しでも力があつたなら、兄の憂いを腫らす事ができたかもしれないのに。

「己の無力を知つてはいる」とはこゝとだが、

ジョゼはポンとルルドの頭を一度叩くと、己の聞いた質問の答えなどを求めていないかのように背を向けて歩き出した。

眉を寄せてこちらを見つめているのであるルルドに振り返らないまま手を振つて。

「……良くなんてなこれ」

呟いた言葉は、何處にも届く」となく冷たい床の上に落ちていつた。

ルルドが居る廊下から少し離れた城の中庭はがやがやと騒がしかつた。

各地の商人たちがここでも品物を広げ客を呼び入れているためだ。祭に行くことが出来ない侍女や兵士のために、この日ばかりは許可を貰つた商人ならば城に入ることを許されているのだ。

一際人を集めているのはエスターニアから来た商人たちのようだつた。

「案外簡単だつたね」

ヒイラギは奪つた許可証を見つめくすりと笑つた。

中庭の隅に品物を並べるふりをしながら、隅々を観察する。兵士たちはいるけれど、さほど警戒すべきものでもない。それよりも、問題は此方のほうだ。

「もうちよつと愛想よくしたら？」

表情を変えないサキに、せつかく寄つてきたお客たちも早々と去つていく。

「それを見るのが目的ではないだらつ」

確かに、許可証と一緒に奪つた品物を売つてやる必要などないけれど。

ヒイラギは珍しく渋い顔をした。

「君つてさ、楽しもうとか思わないの？ ちょっと商人の真似ごとやつてみようかあとかさ。このお城素敵～とか。……無いみたいだね」

よくもまあ、こんな無表情でとつつきにくらい相手と数年も組んだなあと感心した。

未だに分かり合えただなんて幻想を持つこともないし、相棒としての愛情を持つこともない。もともと互いにそういう感情は希薄だと知っているけれど、時々あまりの冷たさにため息をつきたくなる。

「サキつてさ、何が目的で生きてんの。あ。コザの復讐なんて言わないでよ。あれば一族の意思であつてサキや僕の目的ではないんだから」

「ただ在ることが必要だ」

「なにそれ。よく分かんないなあ。まあ、いいよ。別にサキの目的なんてどーでもいいし。僕はね夢を見るためだよ。誰かさんが描き損ねたね」

やはり変化に乏しい相棒を放つておいて、ヒイラギは廊下の先に目当ての人を見つけ、口の端を吊り上げた。

「そここの旦那～。寄つててくださいよ～」

ぴょんと飛び跳ねながら手を振るうと老人は近づいてきた。腰に巻いた毛皮がアリオスの住人ではないことを物語っていた。

瘦躯をキビキビと動かして近づいてくる老人に兵士や侍女たちは頭

を下げる、道を譲り、三人の周りには奇妙な空間が出来上がっていた。
これならば話を聞かれることも無い。

「何故、ここにいる?」

冷たく厳しい声も聞きなれてしまえば、身を震わす効果はありはしなかった。

ヒイラギはけろりと笑うと真実を告げる。

「お城の中見てみたくて、来ちゃった。それに、サクヤ殿がルルダーシュ様を苛めてないか心配だったから」

「人聞きの悪い」

「アナタの愛情は厳しいんだよ。ルルダーシュ様は傷つきやすいんだから気をつけでもらわないとね。使い物にならなくなつたら困るでしょ?」

ふうとため息をついたサクヤにヒイラギはほにまつと口元を舐めた。

「それとも、アナタにはその方がいいのかな?」

一瞬だけサクヤの瞳に黒い光りが宿つたが、それはすぐさま消え、何事も無かつたかのようにサクヤは二人に背を向けた。

「手塩にかけた王子様。捨てるには惜しくないの?」

揺るがない背中はヒイラギの問いなど跳ね返して去つていった。

「あ～あせっかく侵入したっての、もう行っちゃったよサクヤ様。
……図星だったのかなあ」

仰いだ頭上は真っ青で、同じ空の下の饗宴を思ひてヒイクギは小さく笑った。

「セイラで早く会いたいな

空を舞う白がなくなると下から声がかかり、ジルフォードとセイラは階段を下りていく。

外に出てみると感嘆が零れた。

路地一面が白い絨毯を引きつめたように真白だ。

踏んでしまうのは心苦しいと思いつつ、外に足を踏み出せば甘い香りが全身を覆い、足元をふかりとしたものが包み、小さな幸福感で満ちていた。

結局花弁の多いシルトはハナの頭に飾られている一つきり。ちょっと残念。けれど素敵な一輪を手に入れたこともあり、さつぱりとした諦めがあつた。

「あつ、おにーちゃんだ」

立ち話をしていると視界の先をのそりと大きな影が横切っていく。つんと天に向かつた髪の毛に、丈の足らない継ぎはぎズボン。

「トッヂ」

少年たちの声、セイラの呼びかけ、どちらが聞こえたか大きな青年は振り返った。

小さな瞳がぱちりと瞬いて、元気に手を振る三人と訝しげな顔をしている三人を見つけた。

「あれ？ セイラおねーちゃん。知り合いなの？」

「うん」

少年たちの間に答えて、じつじよつかと迷つている人物に走り寄る。

蹴りあげられたシルトが足元を舞つていく。

「セイラ」

セイラのことを見えていたよつで、田の前に立つと確認する。名前を呼ばれる。

「一田ぶつだね」

トッドの大きな手のひらにはいくつも小さな花が握られていた。肩にかかった袋の中には零れ落ちそうなほびシルトが詰まっている。その袋はセイラがすっぽりと入つてしまつほど大きい。

「トッド、そんなに取つたの？」

セイラの言葉に頷きながらも、オドオドしているのは見知らぬ人間がいるためだらう。

「ジンとハナとケイトだよ」

ケイトの差し出した手を恐る恐る握り返し、トッドは不器用に口を歪めた。

「おにーちゃん、メイヤーさんのところに行くの？」

一人の少年はトッドの頷きに歓声を上げた。

「おねーちゃんたちも行くつよ。シルトのお菓子食べれるよ」

聞けば、トッドが集めたシルトの花でお菓子を作るのだと。誰にも踏み荒らされていない花を取るために裏街の奥深くまでやつてきたのだと。

特に予定も無かつたものだから、少年たちに手を引かれるままにトッドの後ろについていった。

路地はぐにやりぐにやりと曲がりくねり、次第に細くなる。トッドが背負っている大きな荷物のせいで前は見えなかつた。

「おにーちゃん!」

「おつかれおにーちゃんが来たよ」

どれほど歩いただろうか。

いつの間にか子どもたちがわらわらと近づいてきて、大きな足に取りすがつた。

そのうちに一人がセイラたちに気がついたようだ。

「おねーちゃん! お話のおねえーちゃんも居る!」

何時の間にかお話のおねーちゃんで認識されているセイラは皆から歓迎を受けた。

一人ずつ挨拶を受け取りながら視線を前方へと移すと、一人の女性が目を丸くして此方を見ていた。見覚えのある顔にはつとした。

「サンディアさん」

「セイラ殿?」

思わぬ再会に一人は笑みを浮かべ、もう一人は困惑を露にした。

困惑を浮かべたサンディアは視線をどこに定めていいのか分からなくなつた。

眼と鼻の先に訪れてるとは知っていたけれど、まさか会つことにならうとは。

わざと外した視線の端に白が揺れている。

「ジン！ サンディアさんだ」

セイラの声はまざまざと現実を突きつける。

嘘だと思ったかつた。

そちらを向いてしまったかつた。

会わせる顔など無いといつのに一目見たいと願つてしまつたのだ。

長い睫に彩られた瞳がそつと開かれ目の前の青年を見た。

喉が痛いほどひりついて、言葉を発する事ができなかつた。

勝手に開閉する口が何を話したいのかサンディア自身にも分からない。

脳裏を焼くような白は昔と変わりない。

けれど己の腰ほども無かつた身長は、ぐんと高くなり見上げなければならなくなつた。

瞳はどうだらう。子どもの時のように色をえるのだろうか。どちらもぴくりとも動かないでサンディアから見えるジルフォードの瞳の色は紫から変わることはなかつた。奇妙なほどしんとしている。

サンディアの耳には世界が音を消したように何も聞こえては来ない。それは本当に辺りが静かだつたのか、それとも極度の緊張のせいか。

おそらく緊張のせいだらう。

「ここ」で子供たちがはしゃいでいる。

セイラが何かを話している。

風が駆けた。

それなのに「」内を巡る血の音さえ聞こえないのだから。

音が消えたのと同じほど唐突に音が戻ってきた。

「母上」

離れた場所に居るといつに、その声は風に乗つてサンティアの耳まで届いた。

母上と。

記憶の中にあるものより低くなつた声がその当時と同じままの響きを口の端に乗せる。

それは、ともすれば己の願望だったかも知れないけれどメイマーの言葉が背中を押した。

いつでも譲歩をくれるのは子どもたちの方だと。

「母上、お久しへりです」

最早、願望ではなく現実だつた。

「ジルフォード……」めんなさい。私は

ちゃんと名を呼んであげたいのに声が掠れて鮮明な音になつてくれない。

謝罪も感謝も一緒にになつて零れ落ちる。

涙の数が増えるほど、口から漏れる音は意味をなさなくなつた。

「傍に行つて」

ついと押されてジルフォードは数歩前に出た。
寄り添うには程遠い。

ああ、じれつたい。其処に居るのに。手が届くのに。互いの言葉が
届くのに。

背中を押す手に力が籠る。

僅かな抵抗を見せながらジルフォードが視線を下ろす。
無表情に困り果てた子どもの色を覗かせたジルフォードにこつとセ
イラは笑う。声に出さぬまま「大丈夫」と。
ぽんと再び背を押してやれば、呪縛は解かれ足は向かうべき場所へ
と進んでいく。

どちらが先に手を伸ばしたのか、離れていた影が重なつた。

「ジルフォード、ジルフォード」

名前はすべての意味を持つ。

ごめんさない。

ありがとうございます。

愛しています。

会えて嬉しいと。

崩れ落ちそうな体を支える手のひらは大きくて温かい。じわりと広
がる熱が心地よい。

その様子を見守るセイラがほつと息を吐いた。隣にはぴたりとハナ
がいる。この再会を見て、セイラが母親を思い出さないはずが無い
のだ。

「サンディアさんを泣かすなー！」

しんみりした世界に幼い怒号が響き、小さな手がぽかりとジルフォードの足を叩く。

眉を吊り上げた少年はまだ幼く、どんなに精一杯腕を伸ばしても叩こうともジルフォードに大打撃を与える事はできない。けれど、己の怒りの一片でも伝わるよつこと何度も何度もジルフォードの足を叩いた。

「サンディアさんはいい人なんだ！ 随に優しくつてお菓子だつてくれる。眠るのが怖かつたらずーっとずーつとついててくれるし……だから、だから泣かしたらダメなんだ！」

「涙は嬉しくても、幸せでも流れるものですわ。」

困り果てたジルフォードに代わりハナは腰を折り、少年に視線を合わせるとこりと笑う。

その言葉に「本当に？」という表情を浮かべた少年に更に続けた。

「優しくされると、頭を撫でられると、ずっと眠るまで手を握つていてもらひと嬉しくて胸の中が暖かくなるでしょう。ついでに鼻の奥が痛くなりません？ 怖いぐらいの幸せで」

覚えがあるのか少年は視線を彷徨わせた。

「む～……サンディアさんを苦しめたわけではないんだね。なら、許してあげる」

尊大に言ひのけた少年はにかつと笑った。

「哀しくて泣かせたらダメだからねー。」

小さく頷いたジルフォードの姿に満足したのか少年は腕組みをして
よろしくとふんぞり返った。

それが可笑しくって、やつと涙の收まりかけたサンディアもふと微笑んだ。

目尻が熱を持ち、鼻の奥が痛かったが気にはならない。
ありがとつの意味をこめて柔らかな少年の髪を撫でると口元が緩んでいく。

そこに親しみのこもった笑い声がした。

「積もる話もあるでしょう。どうでしょう。暖かいお茶をお供にするのは」

メイヤーの提案に誰も反対するものはいなかつた。

案内された扉をくぐると天井の高い大きな部屋に出た。入り口の小ささから見ればアンバランスなほど広い空間はどこか清廉で祈りの場のような雰囲気がある。

高い位置にある窓から差し込む光の筋は何処を照らすべきなのか知つてゐるよう一体の像を照らし出す。

少女の面影を残したその像は凜とした佇まいに天を見つめていた。一箇所だけはめ込まれた赤い色ガラスから差し込む一筋は彼女の持つ剣を照らしており、空が変化するたびに赤い光が揺らぎ、炎が踊つてゐるかのようだ。

その剣は彼女の身長を越すほど大きい。

それなのに少女の像には今にも駆け出していきそうな躍動感があった。エイナの像とはまた違う。

「リン・オニキスですよ」

不思議そうに像を見上げていたセイラにメイヤーが告げた。

「リン……」

聞いたことのある名前だった。

彼女の話をしてくれたのは姉のユリザだつただろうか。

「初代『陽炎』の将軍……」このような像があるなんて知りませんでした」

ケイトは呆然と呟いた。

おそらくマルスに次いで伝説の多い人だつたが、像はあまりない。

城の中にさえ一体としてなかつたのだ。本人が嫌つたからと言われているが眞偽のほどは分からぬ。

「初代つて事は国始めのころの方ですか？」

「いえ、我が軍が『陽炎』『月影』の二軍構成になつたのは三百年ほど前のことです。それまでは『アカツキ』と十二将で構成されたいたばです。彼女の時代が初めてなんですよ、対の魔剣が揃つたのは」

その禍々しい伝説に、美しさに惹かれ、対の魔剣を手にしたものが多いと聞く。

そして、誰一人使いこなせたものはないのだと。

二つを離すことによつよう扱えるようになった。

月影はカイ・サーフェイス。陽炎はリン・オニキス。この二人が後の『月影』『陽炎』の初代将軍となつたのだ。

「へえ。今、キース将軍が持つてゐる剣だよね」

「ええ

長身のキースが持つても大きく見える剣だ。

どれほど大柄な女性が持つても手に余る。それなのに、像の少女は華奢といつても良かつた。

「彼女も戦乱で親を亡くした孤児だつたようですよ。彼女の持つ剣はすべてを守るためのものです。子どもたちの守護にはよいでしょう？」

元は信仰の場所だったのであらう。生活の場が表街に移るにしたが

つて打ち捨てられた場所を借りてはいるのだといつ。

磨り減つた像の足にかつての信仰の深さが伝わつて來るようだつた。

「貴女がハナさんですか？」

ほつと像に見入るハナにメイヤーが声をかけた。

何故己の名前を見知らぬ場所で出会つた老人が口にするのか検討もつかないハナは少々まごつきながら頷いた。

「ええ、そうですわ。……どこかでお会いしましたかしら？」

「セイラ様と一緒に居られたので、きっとそうではないかと思つていたのですがね。ハナさんることはクロエに聞いたのですよ」

「クロエ……ああ！」

つい先日、ハナが宣戦布告をしてしまつた相手のことだ。

「では……」

クロエの養い親のことは侍女仲間から多少は聞いていた。
昔は名の通つた地方貴族だつたことや最近では領地を追われ没落したということ。

クロエは美人の上、そつが無い。

そして、少々冷たく見える態度のせいか、彼女たちの言葉には少なからずやつかみがはいつてゐる事を知つていて話半分に止めていたのだが、没落したというのは嘘では無さそうだ。

洗いざらしの服は、貴族が好む絢爛豪華なものからは程遠く、節くれだち荒れた手のひらはジニースの男たちのものとよく似ていた。
何もかも貴族からは程遠く見えた。その慈愛に満ちた優しい微笑さ

えも。

「挨拶が遅れましたね。マーク・メイヤーと申します。クロエは私の娘になります」

目の前の老人は娘の名前を告げるとき^誇らしげに微笑んだ。ハナは得心した。

これが彼女の守りたいものなのだ。

失いたくないと願っているものなのだ。

どんなに口をさがない影口を叩かれても完璧な侍女を演じ続けて必死に守っているもの。

分からぬなんて完全に言えなくなつたしました。

クロエがハナの気持ちが分かるといったように、ハナにも彼女の心情が手に取るように分かつてしまつ。

それと同時にもつと話してみればよかつたという思いに駆られたのだ。あの時は、威嚇するよつての想いだけを打ちつけた。

「マーク・メイヤー様ですか。あのザクセンの」

隣に居たケイトは驚いて声を上げた。

彼が想像通りのマーク・メイヤーならばリン・オニキスと同じほど有名人ということになる。

マイヤーがザクセンの領主であり、その手腕が今でも語り草になつていることはケイトもよく知つてゐる事だつたが、彼が城に顔を出していたのはずいぶん前のことで、ほわりと笑う老人がその人だと実感は出来なかつた。

なにしろマイヤーは百戦錬磨でマルスの再来とまで言われた先王に怯む事無く口答えできた数少ない一人なのだ。

もつと苛烈な人物を想像していた。

目の前にいる人物はケイトの故郷にもいる氣の良い老人に似ていた。

「もう十年も前の話です」

メイヤーが微笑むと目尻には深い皺がはいる。

「まさかタナトスにお住まいだとは」

ザクセンを追われてからの行方はようとして知れなかつた。
メイヤーさんを領主に戻して欲しい。

その嘆願は日々届いてきたし、領主といわぬまでも知恵を借りた
いという地方はいくらでもあつたのだ。
こんなに近くにひつそりと暮らしていたなんて。

「目的地はたくさんありました。ジオス、タルダン、スーサ。助け
を必要としているところはいくらでも。一番助けの必要な場所は哀
しい事にござりますよ」

光が強ければ闇もまた強い。

富むものは富み、貧しいものは生きるのさえ困難だ。
入り組んだ街並みの向こうに打ち捨てられた人々がどれほどいるか。

「ルーファ王は賢明です。けれど全てのものに一度に手を差し伸べ
ることは出来ません」

タナトスには国営の孤児院が出来た。

それは画期的ではあつたけれど、全てをまかなう事などできないの
だ。

それを聞きつけ地方が流れ込んだ孤児たちが裏街に溢れていく。こ
こにいる子どもたちは孤児院にさえ居場所の無かつた子どもたちだ。
場が沈んだところで子どもたちの笑い声が弾けた。

「マイヤーさん、お菓子作のつよー。」

「早くー、早くー。」

材料がそろつたので子どもたちは待ちきれないらしい。
子どもたちを引き止める」ことが出来なかつたトッドは申し訳無れり
うに扉の向こうから顔をのぞかせてくる。

「おにーちゃんもおねーちゃんもサントイアさんも早くー。」

「お茶はお菓子が出来てからこじましょつか」

そのマイヤーの言葉を合図に子どもたちは近くにいたサントイアの
手を引き、ハナとケイトを早くと迫り立てていく。

「おねーちゃんたちもね」

それだけ言って子どもたちは突風のよつに去つていった。
ぽつんと残された三人の間にマイヤーの笑い声が響く。

「待ちきれなかつたよつですね」

ずっと楽しみにしていたことだ。無理もない。
笑いをおさめるとマイヤーは一人に向き合ひ、居住まいを正す。

「申し遅れましたね。」結婚おめでとうござまわ

「あつがとうー。」

寄り添うように隣に居るのが自然な一人に眦が緩んでいくのが自分で感じ取れる事ができる。すべてうまくいっているように見えた。ルーファ王は賢く、戦を好まない。国は安定し、形だけでもエスターの支援を受けることになつてゐる。

一番懸念していたジルフォードにも寄り添うべき相手が見つかり、母親との再会もうまくいった。

一抹の不安はうまく行き過ぎてゐるからだろうか。

安心しきつたところで、大波に攫われてしまうのではないかと思つてゐる自分にメイヤーは首を振つた。今は田の前の幸せを喜ぼう。

「皆さんを導いてくれたシルトに感謝しなくてはなりませんね」

「クロエにも感謝しなくちゃ」

「クロエにですか？」

「うん。たぶんジンが外に出ようと思つたのは彼女のせいじゃないかな」

メイヤーのところまで行き着いたのはシルトのおかげに違いない。シルトをあつて裏街へ。そしてシルトをとりに来たトッドに導かれて此処に着たのだから。

けれど、直接の理由はクロエがザクセンのことを話したから。

「……先王を恨んでいますか」

ジルフォードの口から出たのは静かな声だつた。

父と言わずに先王と言つたことに永遠に離れてしまつた二人の間には修復される事のない溝が見えるような気がしてメイヤーはきつく瞼を閉じた。

「いいえ」

それは本心だった。

例え貴族がメイマーを領主から引き摺り下ろそうとしても、王が諾と言わなければ成立はしないのだ。

先王は処分理由も薄っぺらな紙切れに印を押したのだ。

怒りもあつた。哀しみもあつた。けれど、もう過去の事で恨むなんてことは一度たりとも無かつた。

「あれは彼が出来た最善の策だったのでしょう。対外関係は落ち着いてきたといつてもまだまだ不安定な時期でした。国内でも揉め事は誰もが避けたかった。街道を整備し、産業を活性化する、国を豊かにするためだと言われば反対する理由などありません」

そして、まさしくそうなった。産業が発展し国は豊かになった。全てが正しかったとは言えないけれど、エスターニアを交渉の席に引つ張り出すことができるまでの国力はついたのだ。

「クロエに聞きましたか？」

ジルフォードの頷きにメイマーは小さく笑った。

自分がコレほどまでに穏やかでいることが出来るのは代わりにクロエが怒ってくれたせいもあるのだ。

小さな賛同者はいつでもメイマーの味方だった。今でもそれは変わらない。

「ケネットという青年にザクセンの事を知りたいのならば貴方に会えと聞きました」

あまり耳馴染みの無い名前にメイヤーはふと目を細めた。
記憶の宮殿からその名を取り出すと納得したように頷く。

「ああ、記録者にお会いになつたのですね」

「……記録者？」

「ええ、表向きは保管庫の管理をしていますがね、記録者といった方がよいでしょう。この国の歴史をくまなく知つてているのは彼だけでしょうね。過去。現在。全ての記録を飲み込んで、彼等は未来を垣間見るそつですよ。不思議な人物ではありませんでしたか？」

極端に人との関わりが少なかつたジルフォードにはケネットが不思議なのかはいまいち分からぬ。

外見だけならば、あまり見かけるタイプではなさそつだつた。少なぐとも城には彼と同じ格好をしたものはいなかつた。

「……どうだろ？。けれど、名を告げると不思議なことを言つていた」

「優しい叶え人」

メイヤーはくすりと笑つた。

「叶え人？」

首をかしげたセイラにメイヤーは笑みを浮かべたまま話し始めた。

「願い事を叶えてくれる“ジルフォード”のことですよ。私の知っているのは先代ですがね、彼はその話がとても好きでした。おそらく

く次代にも告げたのだと思いましてね

満月の夜に現れる夢幻の話。

闇夜から現れる影のような存在はどんな願いでも叶えてくれる代わりに相応の代償を持つていく。

どこかで揃れた物語は、その存在を唯の恐ろしい魔物へと変えてしまつたのだ。

「優しい叶え人。いい呼び方だね。その記憶者さん、会いたいなあ」

「台帳の保管庫にいる」

「そこで働いてるの？」

台帳の保存庫つて感じだけ。

城の地図を頭のなかで広げているセイラの上に重い声が降ってきた。

「記録者は、あの小さな部屋から出る事が出来ないのですよ。何代も前の王が怖れたのです。未来を読むことができる一族を。彼等の先祖は一族の命をつなぐ代わりに、あの部屋に縛られ王家のためだけに歴史を編み、未来を読むことになつたそうです。」

「ずっと？ 外に出れないの？」

「ええ、記録者に選ばれてしまつと城より先には出れないと」

「そんなのひどい。

あんまりだ。

「私、記録者さんに会いに行く

頬を膨らませ宣言したセイラにメイマーはふっと笑いかけた。

「それがいいでしょ。きっと喜びますから。」

先代の記録者は偏屈で、いつも憎まれ口をきいたけれど誰かが訪ねてくるのを心待ちにしていた。

最後に会った時、彼は己の跡継ぎを見つけたことをとても後悔していた。

それは石の部屋にその子が次代を見つけるまで閉じ込めると決めるのと同義だからだ。

ああ、そうか。

もう彼はいないのだ。

メイマーはあつと言つ間に過ぎていった10年の重みがずしりと圧し掛かってくるような気がするのと同時に、新しい時代が動くのを感じていた。

外には大きな鍋が用意されていた。

シルトと砂糖が入れられぐつぐつと音を立てており、鍋をかき回している年長の子どもたちの額には汗が浮いていた。

「ジャムを作るのでですか？」

ハナに問い合わせられたカーサはふわりと笑った。

「ええ、保存もきますからね。向こうではクッキーに砂糖漬けも作っているのよ。手伝ってくださるかしり」

「もちろん！ まあケイト殿も行きますわよ」

俄然やる気を出したハナは袖を捲り上げた。

菓子作りは可愛らしく見えて中々の重労働なのだ。
子どもたちのお腹を満たすほど作るうと思えばなお更だ。
日々鍛えていた腕を存分に使ってもらおうと子どもたちと一緒にケイトを追い立てる。

「そっ、そんなに押さなくても行きますよー！」

「では、早く歩いてくださいまし」

微笑ましい光景に頬を緩ませているカーサについてサンディアも微笑んだ。

目尻の赤くなっているサンディアに事の成り行きを見て取った聰いカーサは何も言わなかつたが、眼差しには暖かさが満ちていた。
何処の手伝いに行こうかと思案しているサンディアの元に一人の少年が駆けてきた。

「サンティアさん

「どうしました?」

「これね、サンティアさんに渡してって言われたの」

少年が手渡したのは一通の手紙だ。

指先に感じるのは、長らく触つていなかつた最高級の紙質だつた。
シミひとつないシルトのじとき真白な紙に映える赤い封蠅。
白い花に埋め尽くされた世界にぽつりと異彩を放つ赤が心の奥をざ
わつかせた。

「何か目を引くものがありますか？」

ルーファは窓際に佇む男に声をかけた。
いつからそこに立っていたのか、用意されたお茶も菓子も手をつけられないまま机の上で冷えきっていた。
せっかくのダリア手製の菓子も装飾以外の意味を持ち合わせていいな
い。

ルーファの声に振り返ったのは、鷹の様に鋭い瞳の男だった。
豪奢な衣装に彩られた彫りの深い顔は、未だ若々しく実際の年齢よりも男を若く見せている。

「いや、どこもかしこも浮かれてきっていますな」

外の喧騒に耳を澄ませた男は堂々としており、部屋の主めいていた。
実際、本人もそう見えるべく装っている。

「年に一度の祭ですから」

アリオスの長い冬が開ける。

それを盛大に祝う気持ちはルーファにはよく分かる。
祭りが華やかであればあるほど、国中に活気が漲つてゐるよつな気が
がするのだ。

祭りの期間中ばかりは城内が陽気なのも仕方がない。けれど、目の
前の男の意見は違うようだ。

一瞬だけ苦々しげに瞳を細めるとマントを翻して、許可も無く席に
着いた。

わざわざお茶の用意された席を外し別の席へと腰を下ろす。

中には王妃自ら入れたお茶など恐れ多いと嘆つ者もいるが、これは全く別の意思表示にも取れた。

「ところで、お話とは？ リグンブル殿

こんなに忙しいときにわざわざ訪ねてくるのだ。余程の用事でしょうね？と笑顔に滲ませながら問い合わせた。

笑顔が何時もの一割り増しなのは、リグンブルが失礼な態度で、ダリアのお茶を拒絶したためだらう。

レイドス・リグンブル。

アリオスの五大貴族の一つ、リグンブル家の血を引くのもさぬ」とながら、主要な街道、産業を集約するザクセンを納めているこの男は非常に厄介な相手だった。

前の領主を半ば引きずり下ろすようにして領主になつた男ではあつたが、彼の功績を見ると一概に責める事もできない。

もともとアリオスでは武器を作るための金属類は豊富であり、加工の技術も優れていた。

その技術を応用して日用品の生産を手がけたのだ。

装飾重視のエスターニアのものと違い実用性に優、品質のよいザクセンのものはどこの商人もこそつて仕入れに来る。

エスターニアも例外ではなく、強力な貴族とのつながりもつくり、今やアリオスで最も外貨を稼ぐ場所となつてている。

もう一つ厄介な事がある。

彼が殊更、見えるように傍らに置いた剣だ。

銀で彩られたその剣にはマルスの紋章が彫られている。

王から下賜された証だ。

紋章の下に彫られた名前はロード。

先王であり、ルーファの父、戦王と名高かつた彼の名の記された紋章を見せれば、未だ誰もが頭を下げる威力があつた。

「ルーファ王。今のアリオスの状況が分かつておられるか？」

彼にルーファ王と呼ばれたたびに、問題点が山のように見えてくる気がした。

自分はまだ認められていない。

リグンブルは先王のことを“我が君”と呼んでいた。
実際、今もそうだ。

自分は未だ彼等の王ではない。

リグンブルに認められないということは、少なくとも大貴族の一つに認められていないと云ふことだ。

「……どうこういとでしょ、うへ。」

慎重に言葉を選んだ。

嘆かわしいとため息をつかれると知りながら。

「アリオスは非常に不安定であります。エスターニアと婚姻による和睦を得たといつても、いつ覆されるか分からぬ。失礼と承知して言いますが、セイラ殿はそれほどエスターニアで重要視されとはいひでしよう。母親など田舎娘と言うではありませんか。なぜ、王妃の娘か、せめて聖母の娘を嫁がせなかつたのか不思議で仕方がありますな」

本当に失礼だと思ひながらも口には出さずに先を促した。
さつと本題に入ってくれなければ、やることはたくさんあるのだ。

「あんな小娘を寄越したくせに、ジキルドとの関係が悪くなれば、すぐさまわが国に援軍をと言つてくるに違いありません」

「リグンブル殿、手短にお願いしたい」

翠の瞳が煌いた。

鋭いその輝きには先王と同じものがあり、時にはつと息を呑むことがある。

「……タハルの王が倒れたようです」

「なに」

「タハルとの関係は今までどおりと言つわけにはいかなくなるでしょう。未だ国を治めて日の浅い貴方、3人しかいない元帥。その元帥も皆、『じ高齢だ。これではこの国は土台から搖るべく

言い放たれた言葉は忠告ばかりではなかつた。

確かにルーファが王についてから日は浅い。そこに、ことさら元帥の話を盛り込むとなると。

「元帥を増やせと？」

ちらほらと出ている意見ではあった。もちろん、国を思つての事ばかりではない。利権や出世、そんなものが絡みつく。確かに皆年を取つた。ハマナ・ローランドなど政に関わるものとしては最高齢だ。

けれど、年月は彼等に経験を「えより強固な支えとなつたと信じている。

「そう聞こえたのでしたら、一人良い人物を紹介しましょう

「良い人材の確保は我々の責務だ」

話は聞こつ。

そつ態度に出しながらも嫌な予感しかしなかつた。

「サンディア殿を」

「言つてゐる意味が分かつておられるか」

「ええ、勿論です。不当に奪われた彼女の権利を回復するまたない機会でもあります。今ならば、彼女が産んだのは恐ろしい化け物だという認識が薄れていますからね」

全身が総毛立ちそつだつた。

「ルーファ王もさう思つたから、彼女をヤガラへと移したのでしょう」

「私は、彼女を此方の世界に戻す氣はない」

壊れしていくのは母だけで十分だ。

側室である事をなじられて、王妃より先に妊娠した事で罵られ、王妃がいなくなつたその後も、彼女の支援者からの嫌がらせは絶えず、次第に母は体を壊していった。

母は最期の息で言つたのだ。「サンディア様は、さぞや悲しいでしょう。己の子の成長を見守れないなんて」と。

今、サンディアを政に引き込めば、同じ事がおこるに違ひなかつた。

「そう、ですか。ならば、ジルフォード殿はどうなるのです? いつまでも、いつまでも、王宮に閉じ込められた魔物のように暮らせと? サンディア様が後見人となれば怖いものなどないでしょ。」

彼女の血は未だに力を持ち、アリオスにとつて有益ですよ

だからこそ厄介なのだ。

彼女が唯の母親で居ることが出来るのならば、この石の城もせほど
冷たくないだらう。

「ジルフォードについては私も考えがある」

「そうですか。それが、よい策となればよいのですがね」

冷めた笑みでそう言つてコブングルはさつと席を立つ。

「先ほどの話は、覚えておいて頂きたい。サンディア様には打診する予定ですので。……ああ、それともう一つ。これは忠告です。王妃様に給仕の真似事など止めさせなさい。王家の品位が下がりますぞ」

眉を吊り上げたルーファを一瞥すりせずに部屋を出て行くと、しんと冷えた沈黙が居座つた。

ルーファは手をつけられず冷たくなつたお茶をじくじくと嚥下すると部屋の隅へと呼びかけた。

「それも頂こつ」

視線の先では肩を落とすダリアの姿があつた。

「すみませんわ。……私のせいでルーファ様の立場が悪くなつてしまつなんて」

ルーファにもお茶を用意したのだらう。

道具の一式を持ち申し訳無むをつに顔を伏せるダリアを手招きする
と隣に座らせた。

元々華奢なため力なく頭を垂れていると、消えてしまいそうなほど
儚く見える。

いつもは光の弾ける金の髪も今では彼女の輪郭を消してしまつかの
ようだ。

ルーファはダリアを引き寄せる慰めるよつて頭を撫でる。そうす
ることで、己の怒りも戻いでいくようだつた。

「ダリアのお茶を飲む栄誉を逃すなんて可哀相な人だ。さあ、私に
も栄光の一杯を入れてもらえないだろうか」

「ええ、もちろん」

れが王より下賜されたことを如実に表していた。

紋章で武装した彼の行く手を阻むものなどこの国には居ないはずだつた。

僅かばかりの来訪者を除けば。

「これは、これはサクヤ殿」

リグンブルは田の前に現れた細身の老人に声をかけた。
腰に巻かれた毛皮に「なんと野蛮な」と叫びたいところをつまんで
まかして、微笑んだ。

けれど、サクヤは怪訝な顔をしただけだ。
気安く声をかけてきた人物など記憶に無い。
挨拶に来た貴族たちを逐一覚えているサクヤだが、記憶に無いもの
はどうやつたつて蘇らせるとはできない。

「どちら様ですか」

「ああ、これは失礼。私、リグンブルと申します。先日は挨拶に行
けずすみませんでしたね」

ああ、金杯の。

サクヤの頭の中には田にも眩しい装飾が施された杯の姿が浮んだ。
そして、挨拶を間違えた二人の貴族。

「いいえ、貴方方が忙しいことは承知していますから」

「忙しいのはそちらも同じでしょ？？」

意味ありげな言葉にもサクヤは反応を示さない。

それも予想していたのか、リグングルは口の端を吊り上げて続けた。

「星が落ちたとか」

抽象的な言葉だが、空を読む砂漠の民には十分だった。

星のヒトカケラは誰かの運命。

星が落ちるとは、すなわち誰かの運命が終わつたことを示している。互いに探し合う時間は、ほんの一瞬。

先に背を向けたのはリグンブルの方だった。

「では、また」

腹のうちは見せぬまま、何事もなかつたかのようにすれ違う。薄く笑みを貼り付けながらも面倒な相手だと思つた。

リグンブルは相手の出方をみるために選んだ手駒のように砂漠の使者たちを軽んじてはいなかつた。

戦場での彼等の獰猛さは身にしみて分かっている。どれほどの仲間を奪われたか。豪奢な服に隠れ見えないが、彼の体には残酷な傷口が今も生々しく残つてゐる。

そして彼等は愚かではない。あの苛烈な砂漠を生き抜く強さと知恵を持つてゐる。

それは他者を飲み込むことで手に入ってきたものだ。

気をつけねばあつと言う間にアリオスは飲まれてしまう。

絶対に揺るがない基盤を作る前に己の王は逝つてしまつた。

ルーフア王は先王の片鱗を見せながらもまだまだ経験値が少ないので、先ほど少し痛いところを突いた時の反応でわかる。少々大人気ないこともした。

反応を見るためとはいゝ、何かと話題の王妃の菓子を不意にしたのはもつたいたいことをしたなども思つ。

足早に廊下を渡るリグンブルの耳に楽しげな声が届く。甲高い、その声は若い侍女の中のだろう。

ふいに視線をやつた先で数人の侍女に囲まれながらナジューが笑つていた。

「怖いのはあの王子だ」

彼の部屋に父親の凶報が届いたのは昨晩のはずだ。
リグンブルは貼り付けたような完璧な笑みに寒気さえ覚えた。

何処をどう歩いたのか、どれほどの時間が経っているのかルルドには分からなかつた。

気がついたら、そこに立つていたのだ。

人が忙しく歩く廊下なので何時間もそこで、ぼうとしていたわけではないのだろうが、全くもつて我に返るまでの記憶がない。ジョゼに会つてから一体どうしたのだろう。

タハルの砂漠では、時に魂が体から抜き出たのではないかと思ううな時間を過ごすことがある。

満天の星空に呑まれるときや、暁が砂の山を赤く染める瞬間。けれど、今は日を奪つよう光景などありはしなかつた。

石の壁ばかり。庭に出たところで同じ事。

そう思いながら、視線を向けた先には日を奪つものがあつた。先ほど訪ねたときは返事すらしてくれなかつた兄の姿だ。庭の一角に腰を下ろしたナジユールの周りには数人の侍女が円を描いていた。

「タハルってどんなところです？」

「どんなイメージを？」

逆に問い合わせられた侍女一人は「ん……」と考える仕草はしたものの具体的なイメージなど殆ど浮ばないのだろう。辛うじて浮んだのは見放された地という言葉から連想されるもので、そこに住んでいる住人に言つては憚られるものだつた。

「砂漠……ですか？」

とりあえず漠然として良し悪しを含まない内容を口にする。

砂漠といつても貴族育ちの侍女たちには子どもたちが遊ぶ砂場を大きくしたようなイメージしか持てていない。

そこに怪鳥や獸が跋扈するなど夢物語でしかないのだ。日々に感想を言いながら触れる獸の毛皮も彼女たちから見れば小汚いマントのようなものだ。

「砂漠……確かにタハルの大半は砂が埋め尽くしていますよ。だが、タハルには他にも見所はたくさんあります。例えば満天の星空など、どの国にも負けません」

「まあ、それは見てみたいですね」

「それならばタハルに招待いたしましょ、う」

「約束でしてよ」

くすくすと華やかな笑いが場を満たす。社交辞令であることは互いにきつちりと分かっている。

彼女たちは、王子という立場の人間との会話を楽しんでいるだけなのだ。

誰一人、本氣でタハルに行きたいなどと思つてゐる娘などいないことをナジユールは理解しつつ、彼女たちが望む笑みを浮かべるのだ。

「そうだわ。ナジユール様」

「ずずいと幾人かの侍女が前に出た。その顔には好奇心がたつぱりと含まれている。

今日はせつかくの花流しの日。

それなのに今日休みを取れなかつた娘たちの不満は募り、そこに話しやすい話題の人物がいれば饒舌にある。

それに相手は他国の使者。暇つぶしの相手をしてあげているのと大義名分もたつ。

その証拠に話に加わつてくるものはとても苦情を言つて来るものはない。

「セイラ様のこと、どうお思い？」

「……セイラ殿を？」

互いに顔を見合せ声を上げる娘たちに驚きながら反芻した。

「一緒に街に行かれたのでしょうか？」

意味ありげな印配せをしつつ興味津々だと顔に書いてある。彼女たちの耳には街に言つた事ばかりではなく、広間で抱き合つた、日が暮れてから共にいたなどの多少歪んだ情報が届いていた。ルーファとダリアが仲睦まじいのはいつもの事で噂話をしたところさほど心は躍らない。

セイラとジルフォードも似たようなものだ。それに彼の話をすることは古参のものが嫌うのであまりすることはできないし、どうせなら他国の王子との禁断の愛に発展させるほうが面白い。

ハナなど牙を剥きそうな話ではあるがあくまでも、ちょっとした暇つぶしだ。

「ええ、案内してもうございましたよ」

結局、早々に離れ離れになつて彼女たちの望むような話などなかつたのだが、彼女たちの期待には添えたらしい。

黄色い悲鳴を上げた彼女たちは、ルルドが共に居たことも、途中で

ジョゼが合流した事も知らないのだろう。

その時に、セイラが選んだ腕輪へと視線を落とす。鈍いくすんだ玉が今の己の心情のよくな気がした。

「セイラ殿はとても素敵な方だと思いますよ」

出てくる言葉は本心であるはずなのに別の誰かが話しているような感覚だった。

「セイラ殿とするへインズの話は楽しい……」

視線を上げたナジユールに見えた光景はまるでスローモーションのようだった。

向こうから肩を怒らせてやつてくるのはルルドだ。まだ侍女たちは彼の存在には気づいていない。

「ルルド」と名を呼ぶ前に侍女たちが作った輪が崩れ、非難めいた悲鳴は一拍置きにナジユールの耳を打つ。

腕に感じた鈍い痛みがルルドが力任せに腕を引いたからだと気づいたのは、ルルドの手の下でしづくちゃになつた服を視界に入れてからだ。

「ルルド？」

声が出たのは更に一拍後だった。

ナジユールの体は侍女の輪を半分抜け出していた。ルルドの思考と行動は連動などしていなかつた。

驚く侍女の顔にも気づいていない。

ナジユールの声さえ耳に入つていなかつたに違いない。ただ掴んだ腕をぐいとひっぱる。

抵抗というよりも戸惑いから歩みの遅いナジユールの腕を叱咤する

「おこ、ルルド？ 一体どうした？」

ダメだ。ダメだ。ダメだ。

この言葉ばかりがルルドをせかす。

ナジユールに宛がわれた部屋の扉を開くと有無を言わせずに押し込んだ。

「ルルド…」

流石にナジユールの声にも苛立ちが混じる。

どこか兄の形をしたまがい物を見ているようなぞわついた気持ちはおさまってきたが、ルルドは扉の前に陣取つて動じつとはしなかつた。

何時になく強い眼差しは、ここからナジユールを出してはいけないとこう使命に燃えているかのよつだつた。

「あんなの兄上ではありません…」

この国にきて堪えに堪えていた兄上と言つて言葉を口に出した。タハルの話をしたとき、貼り付けた笑みをはずるつと落ちたよつな気がしたのだ。

セイラの話をしたときに、決定的となつた。

あれほど好きなヘインズの話しさえ何の意味も持たないよつな無表情。ルルドにはそう見えた。

「今日の兄上はおかしい！ 何故、隠すのですか！」

「何も隠してなどない。本当にどうしたと言つのだ」

「父上が逝つた！ そりでしょ？」

ナジユールは一瞬驚いたような顔をしたもの、何も言わなかつた。

「西の端、リュオウの横にあつた星が落ちた！」

リュオウは砂漠の女神の星。その横で最も気高く光つっていた星は力をなくし、ついには闇に呑まれていつた。

ルルドに唯一つ、兄より優れたものがあるとしたら星読みの能力だ。無謀だと罵られたがたつた一人で砂漠を渡つた事もある。数多の星から運命を読み解く方法は砂漠の端にあつた今にも消えてしまいそうなオアシスで出会つた老婆から教わつた。

小さな赤い星が流れるのを指差して、今私の運命が流れたと言つた老婆は次の日にはもう冷たくなつっていた。

ナジユールでさえ、サクヤの訪問がなければ間違いないと判断できなかつたものをルルドは一人で読み解き、抱えていたのだ。

「僕は……頼りない。分かつて。兄上の支えなど到底なれない！
だけど僕だつてタハルの王子だ！」

先ほどまで黒い瞳の表面を潤していただけの涙は、堪えきれなくなつたのか大粒の零となつて落ちていく。

ルルドが叫ぶのを止めれば、しんと静まつた部屋の床に叩きつける涙の音がしそうだつた。

タハルの王子と言う立場ならばルルドは完全に失格だつた。次の砂漠の王となる資格を持つものは、いかなる時も人前で弱い姿など見せてはいけない。

それが例え親兄弟であつても。

「あまり泣くな。涸れてしまつ」

タハルでは泣く事は弱さの象徴でもあり、砂漠で貴重な水分を己の体から溢れさすなど愚かな行為だとみなされていた。

それなのにこの弟はよく泣くのだ。

唇を噛み締めて、手のひらに爪を立てて。

そこまで我慢したくせに、涙など瞬時に干上がつてしまつ灼熱の砂の上で、涙さえ凍える夜の闇で一人になつてボロボロと泣くのだ。見つけるたびに涸れてしまうと諭すのだが効果はありません。

何度も何度も袖口で拭つても、止まる事を知らない零はルルドの意思に反して溢れてくる。

水の道をいくつも頬に這わせ、まだ新たに湧いてくる水を溜めながらそれでも視線を逸らさないルルドを見て弟に限つては涸れることなどないのかもしれないと思うときがある。

ルルド自体が水源なのだ。溢れて、溢れて、溢れて。他のものを慈しむ。

誰かが戯れに言つた事がある。お前が泣かないからルルダーシュが代わりに泣くのだと。

「ここでは涸れないか」

作り物の表情を完全に取り払つたナジユールは氣の抜けたように椅子に腰を下ろした。

柔らかく背中を支える椅子が居心地が悪い。豊かな自然に陽気さ。有り余る食料に娛樂の数々。水の心配もしなくて良い。

望んでいた世界のはずなのに何もないタハルが懐かしい。空と砂ばかりの世界。だからこそ、王は絶大だった。父親は一番の支えだった。

じわじわと己のうちで広がつていいくのはどうしようもない焦燥感。感情が揺れるのを悟られまいとしていたのに、一番知られたくない

弟に指摘されてしまつとは。

「父上は亡くなられた」

先ほどのルルドの叫びを遅まきながら肯定した。

タハル人の寿命はアリオスやエスターニアに比べれば短い。

医療体制も十分とはいえない。

けれど、タハル王は今や男盛りといって風体で力ではナジユールにさえ引けをとらなかつた。

いつからだつたか、命の泉が涸れたように力をなくしたのは。日に焼けてたくましかつた頬が色を失くしていき、寝付いてからは手足の筋力も一気に落ちた。紫になつた唇からは言葉さえも消えていく。それなのに落ち窪んだ眼だけには砂漠を駆けていたときのようにギラギラと火が灯る。

彼が最後に下した決断はナジユールだけが心に秘めた。

「お前の言つとおり、お前はタハルの王子だ。時期が来ればすべて話そうと思った。だが、私が時期を決めるなどおこがましかつたようだ」

ナジユールは座るように促した。

これからする話は立つて聞くには長すぎる。

裏街の一角に夕闇が迫つてくる頃には、大量の菓子が出来上がつていた。

少ない材料のなかでハナが編み出した菓子は殊更人気で尊敬の念を集め、セイラがおはなしのおねーちゃんならば、ハナはおかしのおねーちゃんと呼ばれるようになつた。

出来たものの半分は明日子どもたちが売りに行くのだといつ。子どもたちの貴重な収入源を少しばかりお土産に貰つと監に挨拶をして裏街を後にした。

だいぶ奥にまで来てしまつたので早く帰らなければ真つ暗になつてしまつ。

祭りの期間中なので表街では煌煌と明かりが焚かれているが、闇に浸され始めた裏街にはほとんど明かりらしきものが無い。視界の利くうちにと少々名残惜しいながらも「また会いに来るから」と約束して皆と別れた。

「サンデイアさん元気そつだつたね」

西の離宮に居るときよりもずっと元気そつだつた。

別れの際のぎこちない親子の抱擁。

互いにどこまで力をこめていいのか考えあぐねてほんの触れる程度。十分だつた。長い月日を埋め合わせはゆっくりとすればいい。

いつでも会うことができるのだから。

ルーファとダリアの対応に感謝しながらセイラもぎゅっと抱きついた。

そのときのことを思い出しながらセイラは、鼻歌を歌いつつくるくると円を描く。

スカートが広がつて、ふんわりと空から落ちてきた花のよつだ。

白いはずのスカートには暮れゆく空がプレゼントしてくれた藍と紅の混ざり合った色が映りこむ。

「わっ」

地面に積もったシルトに足をとられバランスを崩したセイラが倒れこんだのはジルフォードの腕の中。

頭を打ちつける前にやわりと抱きとめられた。わざと力を抜いてもたれかかっても変わらず受け止めてくれる。

「ジン。 ありがと」

笑ったセイラはぴょんと立つとまたゆるつと円を描きながら前に進む。

「もひ、セイラ様また滑つてしましますわよ」

「ん~大丈夫。 たぶんこけても痛くないよ」

積もった花びらの上をたたんと軽いステップで駆けていく。いつたいどういった理屈なのや~。

「こぐら花びらの上でも痛いですよよ」

セイラ様つたら!ため息に愚痴を滲ませたハナの前でセイラの動きがしばし止まつた。

もちろんハナの諦めきつたため息に効果があつたわけでも、ケイトのハラハラした視線のせいでもない。

原因は無造作にさしだされた白い手のひら。

「危ないから」

起伏のない声に頬が緩んでいく。

「うふ

セイラも手を伸ばすも後一步分足りない。

いつもならすぐに飛びつくれど、かわいいわがままを許してくれ
るならば、その一步分はジルフォードがつめて欲しい。

一番星が主張を始めた空の下、ひらりと指先を揺らせば、すぐに暖
かな指先が重なった。

「ああお城に帰ろつ。お土産も届けなくちゃね」

門をぐぐつた所でケイトとは別れ、三人は記録者がいるといつ保管
庫へと向かった。

瞬時に保管庫の場所が記憶の中から蘇らなかつたのが何故なのか入り口についてようやくわかつた。

小さくて質素。あまりにも地味だ。

指摘されなければ、重要なものがある場所だとは思わない。けれど、扉を開けると書庫の殊更古い本が並ぶ一画のように独特の匂いがした。

「わあ、王子様！」

視界にジルフォードの姿を認める、一度目に会つた時と同じようケネットは驚くべき跳躍を見せて本棚の影に半分だけ隠れた。ちょっととかがみ氣味なので、長くもつたりした髪の毛は床の上で渦を巻いている。

なんか鳥の巣みたい。

跳躍の驚きから立ち直つたセイラの印象はそんなものだつた。本棚をがつしりと掴んだ青白い指先はガタガタとふるえ、いきなり来たのは良くなかったらうかと思つていたら、おずと足が出され少しだけ距離が縮まつた。

「おっおっ王子様……それに、お姫様も」

声も若干震えている。

三人が中に入りたいといふれば、外にいた男も大層驚いていた。

シルトのお菓子を届けたいといふれば何も言わずに通してくれたけれど。

「君がケネット？」

恐る恐る影から出てきたケネットはぺたりぺたりと足音を立てて近

づいてきた。

その様子を見ながらハナはひくりと口元を振るさせた。

いくらなんでも髪の毛が長すぎる。

どこをどう見ても髪の毛が話しているようしか見えなかつた。しかも目の前に見えない壁が行く手を阻止している幻想でも見ているのか、細い腕を前に突き出して探し探し近づいてくるので非常に怖い。

なんでセイラはあんなものと普通に会話が出来るのか。ハナのなかでセイラを尊敬する度合いがぐつと高まつた。

「う、ん。オイラはケネットだよ

これで本日名前を呼ばれたのは一人目だ。

なんだかすごく不思議な気分だ。

石の床を歩いているはずなのに、足元がふわふわしているような気がして、胸の辺りが春の陽光を集めたかのように暖かい。

「私、セイラだよ。よろしくね」

突き出された手のひらにケネットは戸惑つた。

お姫様は何がしたいのだろう。

物事を把握するには、五感を働かせる事が大事だとケネットの祖父は言つていた。

なので、ケネットはお姫様の真意を探るためにさし伸ばされた手のひらに顔をぐいと近づけた。

「ひつ！」

短く息を吸い込んだ少女は誰だろう。

黒い大きな瞳が歪んで、顔は強張つている。

きょとりと顔を、もとい髪の毛で覆われた顔を少女のほうに向けると、少女は喉の奥で変な音を出した。

鳥の物真似でもやっているのかしら。

失礼な事を思いつつ首をかしげると、重たげな髪がもてんと揺れる。

「ハナだよ」

壁に張り付いているハナの代わりにセイラが名を告げた。彼女の着ているものはアリオスではあまり見かけない服だ。その上、可愛らしくせに機能性を重視した形。

信頼しきつたようにお姫様が名を呼ぶからきっとお姫様の侍女なのだろうと当たりをつけて、一步分ハナの方に近づいた。

「ケネットだよ」

「よつよひお願いしますわ」

明らかにそつとは思っていない顔を向けられてもケネットは嬉しくなつて微笑んだ。

当然、周りから笑つているなど分からぬけれど。

ああ、そうだ。お姫様の手。

くりんと体の向きを変えたケネットはじっとセイラの手を眺めた。

「握手だよ。手を握つて仲良くしてねつて伝える挨拶だよ」

「あくしゅ」

セイラの指先が己の指先に触るとケネットの体はびくつと揺れたが飛び上る事はなく、セイラのなすがままになっていた。握られた手からはじんわりと温もりが伝わってくる。

「よろしくね。ケネット」

「オイラもよろしくー！ お姫様」

暖かい手のひらが離れていく時、けよつぴり寂しさも感じたけれど、握手したほつの手はずつと暖かい気がした。

「ああ、今日はどうしたの？ 調べるとなれば、お土産もつづつよ。」

とつぱりと田も暮れる頃合だけれど大歓迎だ。

「今日はね、お土産もつづいたのー。」

「おみやげ？」

「ケネットに言われたとおり、メイヤー殿に会つてきた

人数分の椅子をひこづりながら持つてきたケネットは飛び上がった。今日は驚きではなく嬉しさのせいか、飛び上がる距離は少ない。

「メイヤー様に会つたのー！ そつ、よかつた」

何が良かつたかなとケネットにもよく分からぬ。

けれど、彼の人となりは出会えば何かと学ぶ事は多いと思うのだ。そこで、ふと飛び跳ねるのを止めた。メイヤー様とお土産がどう繋がるのだろう。

「メイヤーさんのところで作つたんだよ。前の記録者が好きだったから君も気に入るのじゃないかって」

セイラが差し出した紙袋を覗き込みケネットはわっと叫んだ。

「シルトのお菓子！」

紙袋に頭から突っ込んでしまったようなケネットから、恐々袋を受け取ったハナは手早く用意を始めた。

保管庫にろくな茶器があろうはずもなく、それを察していたハナは此処を訪れる前にカナンのところへ寄っていたのだ。

菓子にはそれに合った飲み物というものがある。

カナンが選んでくれたお茶をたっぷりといれたポットを取り出して、これまた持参したカップに注いでいく。

何か手伝おうとオロオロするケネットに席についているように頼むと微動だにせずに座っている。

ハナはちゃんと背を伸ばしていても床に着くほど長い髪を結い上げてやりたいという衝動が湧き上がったが、目の前の茶器にだけ集中しようと口に言い聞かせ、ポットの傾きを調整していく。

「ああ、どうぞ」

わさわさと作つた髪の隙間からお茶の温度を覚ましているケネットがちょっとばかり、可愛らしく見えてハナは頭を振った。

あんのが可愛く見えるはずが無い！

きっとカナン特製の茶葉の香りが見せる幻想だ。

けれど、恐怖心を薄らげるには大きな効果があつたようだ。

火気厳禁の保管室には調理器具なんてない。

保管庫の上を改造して作つたケネットの部屋にもそんなものはないため、彼が温かいものを口にするということは、ほとんど無かつたのだ。

そのため、慎重にお茶を冷ました後、恐る恐る口をつけた。

「いかがです？」

ハナの問いに暫し考えた後、ケネットはぽつんと答えを出した。

「お風呂のお湯みたい」

「あつあなた何て事を言うのー？」

すごい剣幕でカップを取り上げられたケネット驚いて椅子から転げ落ちた。

肉の無い尻を打ち付けてなんとも痛かったが、どうして怒らせてしまつたかの方が気がかりだ。

「だつ、だつて……温かくて、何だか幸せだから？」

人目を忍ぶように暮らしているのだから、風呂に入るのも一苦労。自分だけが知っている通路を通つてこつそり誰もが寝静まつた頃城の風呂に行く事もある。

ケネットにとっては至福のときであり、最高の贅沢を送つたつもりだった。

ちなみに、時折風呂場で見かけられる黒い大きな影は城の七不思議にも数えられていることは本人は知らない。

「あら…… そうでしたの」

気まずそうに呟いた後、ハナは元通りカップを戻した。

幸せだと言われば納得せざるを得ないのだ。

確かにカナンのお茶には幸せになるための成分が入っているに違いないと思うから。

お土産に持ってきたお菓子は一粒ずつ飽きるほど見回した後、指先でこねくりまわされてやつと口の中に入つていく。ハナとしては「止めてください！」と叫んでしまったが、なんだか嬉しそうに髪の束が揺れてるので止めておいた。

「こんなに固いのに口に入れるとじわっと溶けちゃうね。これは虫の寄り付かない紙をレスカが発明した時の驚きと同じくらいだ！何十年もぼつて置かれた本に日焼けもなくて、虫食い一つないときの幸福感！」

独創的な褒め言葉（？）に誰も口を出せないまま、次々に菓子はケネットの口の中に入つていぐ。

「お菓子って美味しいねえ。初めて食べたよ

「シルトのお菓子でなくともよろしいなら、また持つてきますわ」

シルトのお菓子ならば、少なくとも来年まで待たなくてはいけないが、他のものでいいならばいつでももつてくる事ができる。褒められれば悪い気はしない上、セイラに気に入られたのだからもうお茶のみ友達に入れられているはずだ。

「本当？ えへへ。嬉しいなあ。ハナは優しいね

いきなり呼び捨てにされることも褒められることにも慣れていないハナは不覚にもセイラのカップにお茶を注ぎなおす時に、ポットとカップをぶつけてしまった。

「なつ！ 優しくなんてありませんわ！ 新作の味見をさせよつとの魂胆ですわ

「ハナ……魂胆つて」

「新作食べさせてくれるの？ ありがと！」

ハナの混乱振りにセイラもつい口を出したのだが、ケネットだけは嬉しそうだ。

「とつとんでもなく不味くても知りませんからね！」

「お花をこんなに美味しく出来るのだから大丈夫だよ」

何とか言つてくださいと視線でセイラに訴えるのだが、にっこりと笑い、つまんだ菓子を口に入れてケネットに同意するように頷く。「おいしいよね」というセイラの問いかけにジルフォードまで頷き、ハナには逃げ場所がない。

「いいですわ！ 覚悟してくださいまし！」

憤然と言い放つたハナにこくりとケネットは頷いた。

お菓子がすかすかつり無くなつてしまつた後もケネットは他愛も無い話を嬉しげに聞いていた。

空の色に、そこに映えるシルトの色。

子供たちの甲高い声。

旅芸人のパフォーマンス。

ケネットが聞き上手なのか、樂しことがりすぎたのか話は死きることなく、あふれるように口からついて出でていたのだが、その流れを止めたのもケネットだつた。

「王様たち明日の交遊会に出てんじやないの？」

何だそれはとセイラもケネットを真似て首を傾げてみると、その横ではつとしたハナは両手を打ちつけた。
パンと響いた音がお楽しみの時間は終わりだと告げてこようつだつた。

「やつでしたわ！　お一人とも夜更かしはいけませんわ。寝不足の顔で出るなんていけませんもの」

ただでさえ街で騒いできたのだから疲労も溜まつていい。

セイラなど昨日の夜から、楽しみだとなかなか寝つけていなかつた。時間を告げるものが無い部屋では今が何時ごろなのか知ることは出来なかつたが、訪れた時点ではとつぱりと暮れていたのだからかなり遅くなつてしまつただろう。

自分が居る限りセイラに不調など起こしてはならないと決意しているハナにとつて食事と睡眠の管理は最重要課題なのだ。

部屋に帰りますわよと追い立てるハナを制しながら、意味のわから

なかつたケネットの言葉を繰り返す。

「ハナ。交遊会つて?」

セイラの言葉を受けて、ハナは重いため息をついた。

「グランさんから聞きませんでしたか。各地から貴族やら有力者が集まつて交遊をといつ名田でお祭りの騒ぎに便乗しようつてことですわ」

「うえ~」

挨拶の練習をみつちつやらされたのはそのためか。

ハナは手早く持つてきたものをまとめあげ、早々に挨拶を交わすと渋い顔をしたセイラをせつづいた。

仕方なくセイラとジルフォードが「おやすみ」を告げようとケネットの方へと向き直ると、ケネットの長い指先がジルフォードを指差した。

ちょうど心臓の辺り。

けして届くような距離ではないと同時にジルフォードはとんと突かれたような気がした。

「王様。外に出来とこ

「外?」

ジルフォードの問いにケネット小むく頷いた。

「外つて街のこと?」

セイラの問いかけには首を横に振る。

「もっと、もっと大きな外のことだよ」

街なんかでは狭すぎる。

アリオスだつて窮屈だ。

ササン大陸なら釣り合いが取れるだろ？

瞳の奥にたくさんの色を湛えているのだから、きっと王子様の見える世界は人とは違う。

それは大きな糧となる。

「外に行って、世界を見るといい」

預言者めいた言葉を言い、ケネットはさよならの代わりに手を振つた。

顔が見えないせいか、もう何も聞くなと悶ぜられてしまつたようだ。

「おやすみ。ケネット。いい夢を」

おやすみと言つてもらつたのはいつぶりだろ？

夢の中の安寧さえ願つてくれるなんて。

嬉しくつて恥ずかしくつてシルトのお菓子のよつに溶けてしまつそうだ。

「王子様もお姫様もハナも。いい夢を見てね」

廊下は静まり返り、三人の足音だけが響いている。

「ジンへ 明日のこと知つてた？」

考えるとちょっとばかり気が重い。

「兄上に聞いていた」

「セイ。ん~ドレス着て慎ましやかにおほほって笑うのは面倒だな
あ」

窮屈な衣装はもちろん嫌だ。

と言つてもセイラに合わせてアリーたちが考案してくれたドレスは
軽く機能的だ。きらきら、ひろひらが付いてくるけれど。

「口の端をちよつと上げるだけ。大口開けて笑っちゃダメだつて

人差し指を使って口の端をこすりと上げてみる。

先ほどグランの名を聞いたせいか、頭の奥底に閉じ込めていた記憶
が浮かび上がってくる。

大きくていた息が前髪をふわりと揺らし、それを田で追つていると
頭上に手のひらが落ちてきた。

「セイはそのままでいいと思ひ」

やさしく頭を撫でるジルフォードの顔には淡い笑みが広がった。
頭を撫でていた指先は頬を掠めて離れていく、その指先の後を追
うように頬が熱を持つていく。

どうしてジルフォードは嬉しいことをぽろりと言つてくれるのだろう

う。

「ジンは私を喜ばせすぎだ」

首を傾げるジルフォードの手を取つてぐいぐいと歩き出す。顔が赤い自信があるから、「また明日」と別れを告げるまで半歩先を歩き続けた。

闇にまぎれてサンティアはそつと馬車に乗り込んだ。
子供たちはすっかり夢の中だ。

年長組みも今日は騒ぎ疲れたのだろう。
早々にベッドの中にもぐりこんでいた。

昼間に受け取つた手紙で指定された場所に来てみると、夜の闇に紛れるように一台の馬車が停まっていた。

向こうもサンティアの姿を認める、音も無く馬車の扉を開けた。
乗り込むのを手伝ってくれた親切な従者に行き先を聞いても答えは返つてはこず、サンティアが席につくと滑るように走り出した。
窓の外には闇が踊つていて。

表街ならば煌煌と火が焚かれ明るいに違ひなかつたが裏街にはその微かな欠片さえなかつた。

遠くから聞こえる楽しげな祭りの音は別世界からの音のよひで胸のうちが騒ぐ。

夜の寒さと募る不安から身を守るようにサンティアはぎゅっと肩を抱いた。

どれほど時間は走り続けたのかサンティアにはわからなかつたけれど、さほど長い時間ではなかつたのだろう。

己を招待した相手への第一声を決めるほどの時間も無かつた。

闇に慣れた目には大きな屋敷が窓を外を流れていくのが見えてきた。
どこの屋敷も大きく、門の前には火が焚かれ、いかつい男たちが門番をしている。

表街の中でも貴族の屋敷ばかりが立ち並ぶ地区のよひだ。

馬車が停まつた屋敷は殊更大きく、門には百合の文章が描かれている。封蝸にあつた印と同じものだ。

案内された部屋に座つていたのは懐かしいと呼ぶほどには親しくは無いけれど、全く知らぬ顔ではなかつた。

「お久しぶりでござりますね。サンディア様」

「リグンブル殿」

夫が彼に剣を下賜するとき、サンディアもそこにいた。そのころと比べれば、彼の生きた年月が如実に体に刻まれていたが、鋭い眼光は変わりない。

人を射すくめるように見るこの男がサンディアは、あまり好きではなかった。

「急にお呼びして申し訳ありませんね。しかし、貴女がヤガラから出でているのは好都合だったもので。ヤガラにも何度も足を運んだのですがね、門前払いをくらいましてね」

「権力を纏つてヤガラには入れない。貴方方はよく知っているでしょう」

ヤガラの門番の青年から貴族が何度か訪ねてきたことは聞かされていたが、まさかリグンブル家の者だとは思つていなかつた。しかし、リグンブル家ならば秘密裏に移されたサンディアの行方を知つているのは納得せざるを得ない。

大貴族ともなれば情報網は蜘蛛の巣のごとく緻密に張り巡らされているのだろう。

「貴女も権力をお持ちだ。」

さあお座りくださいと薄い笑みを貼り付けて席を指す。

「例え、貴女が農民の真似事をしようとは変わりありません」

もしかしたらヤガラの中にある情報網を持っているのかもしれないと思わせるような聲音だった。

「私は、ただのアリオスの民の一人です。それ以上の力など」

サンディアに睨み付けられ、リグンブルはのどの奥でくつと笑う。

「そんなこと誰が認めるのです？ 誰が納得すると言つのです？ 特にリディア殿が納得するとは思えません」

サンディアはその名にまつと息を飲んだ。

「伯父は……リディア殿は」

「相変わらずですよ。ルーファ王の戴冠式の前には正當な繼承者を差し置いて何たることかと殴りこみにやつてこられましたし、ジルフォード様の婚約の時には、聖母の娘しか認めないと騒いでおられた。あの方は未だ一国の主のつもりでいるのですよ」

サンディアはきつくまぶたを閉じた。

サンディアの故郷はローラ山脈とアリオスの間に合つた吹けば飛ぶほどの小国だった。

もともと土地はやせており、少数民族との小競り合いは絶えなかつたが何とか生き残つていた国もリディアが王についてから急速に国力を落としていった。

もともとの浪費癖とあいまつて政の能力は無かつたのだ。

サンディアがローダの目に留まつてからは、さらに浪費は酷くなり、ついには国は立ち行かなくなつた。

ロードの温情でアリオスの一領地として迎えられ、今では盛り返し

てきているが、アリオスでも1、2を争う財政難の土地だ。

「リディア殿も明日の交遊会にはお越しなるでしょう。これまでも幾度と無くジルフォード殿に会わせろと言つてきましたからね。今まではジルフォード殿も公の場には出てこなかつたために、のらりくらりとかわせましたが、明日はそういうかないでしょ？」

明日の皿玉はなんと言つても王弟夫婦。ここぞとばかりにつかまつて何を吹き込まれるか分かつたものではない。

「貴女の親族は今でも害を生むのですよ」

ロードの側室であったショラが死んだのは、彼ら暗殺したのだとう噂も付きまとっている。サンディアが都から遠ざけられた時から、彼らの発言権は無いに等しかつたが、今も返り咲くことを心の底から願つているのだ。

「そんな忠告をするためにわざわざ呼び出したのですか？」

それならば拍子抜けだ。

リディアの脅威ならばルーファ王もわかつてゐるはず、何も出来ないサンディアに話を通すよりもっと有効な手段がありそうな気がするのだが。

「いいえ、全く関係ない話ではありますんが。今宵はサンディア様に五元帥のお一人になつて頂こうと思いまして打診を」

明日は雨になるそうだよ。それぐらいの意味しかないかのように軽く言われた言葉をサンディアはうつかり聞き逃すところだった。

拾い上げた言葉を何度も反芻して、やつと「はあ」と吐息に似た間抜けな音を出すことが出来た。

五元帥とは王と並ぶ国の最高位。現在はハマナ・ローランドを筆頭にモーズ・シェリンとエンの三人しか居ない。

空いたままの2席のうち一つにサンディアを座らせようとしたのだ。

「貴方、今更自分で言つたことを理解していなかつたの？私の血は災いとなる。そんな私に権力を与えるなんてどうかしています」

「ルーファ王は周りを若い力で固めてしまつてゐる。両将軍しかり。別に若さへの嫉妬ではありませんよ。理想に燃える力は強いです。けれど彼らは追従することも知らず、厄介な相手をうまく手のひらで転がす術も持ち合わせてはいない」

「ハマナ様方は概ねルーファ王指示のようですが」

「確かに彼らは大きな力でしょ。どの有力貴族にも意見が出来る。けれど、彼らは公平を期さねばならない地位にいるといつてもいい。また、おいそれと地方貴族が口を出せる相手でもありませんしね。つもりに積もつた不満はどこへ？ うちに溜まつていつか噴出すことになるでしょう」

「……」

確かにルーファ王はまだ若い。

彼の父であるロードが王位を継いだのは28の時だ。
しかも先王が健在のとき地盤を固めてから王冠をかぶつた。

「そこで貴女の登場なのです。貴女になら不満を言いやすい。元王妃様への挨拶は礼儀ですからねいつ訪問してもおかしいことではあ

りませんし。何しろルーファ王はショラ殿の息子ですから、貴女は快く思つていないと考へるでしょ。」

リグンブルは笑みを深めた。

「溜まつた膚は一気に取り除くほうがいいですからね」

「私の元に不穏分子を集めて一掃を？」

返答は無い。けれど、沈黙がそうだと告げていた。

互いに言葉を発しない時間がしばしば続き、先に動きを見せたのはサンディアの方だった。

首を弱く振ると立ち上がった。

「帰りますわ。帰りも送つて下さるのかしら？」

返事も聞かず、サンディアは歩き出した。ピンと張り詰めた背中は昔のままだ。

いつもぴりりと緊張していた王妃だった頃のサンディアを知つてゐるリブングルは、誰にも気づかれないほど小さくため息をついた。

「ローデ様は貴女のことを愛していらした」

故郷に帰さなかつたのは、側室よりも先に王子を産まなかつたとのしられることを知つていたためだ。

西の離宮に住まいを与えたのはサンディアが、あの場所が好きだと言つたことがあつたためだ。

背中にぶつかつた言葉は、サンディアを振り向かせる力はなかつたが、ほんの少しばかり強張りをなくす効果はあつたようだ。

「……知っています。あの人は、気位ばかり高い馬鹿な娘のどんなわがままでも叶えてくれた。けれど、側室をとらないで欲しい。この願いだけは叶えてくれなかつたわ」

「それは」

「分かつています。私とて生まれたときから政のそばに居た。必要なことだつたのしよう。あの人は以前と変わらず愛情を注いでくれました。けれど、私は何もしなかつたの。シェラが、人の傷を癒し、暖かく包んでいたときに、私は今までどおりソシンとそっぽを向いていた。愛情がシェラに傾いていくのは当然でした」

本当に嫌になるぐらいに可愛げのない娘だつた。

「それなのに、すべてあの人せいにしたの。貴方が悪い。シェラなんてつれてくるからいけないと。それでも許してくれたわ。それが煩わしくて、悲しくて、悔しくて。どんなに大きな愛情で包まれていたか気づいたとき、『めんなさい』もありがとうも届かない場所に行つてしまつていた」

振り返つたサンディアは、ふわりと笑つた。

王妃としては見せなかつた慈愛に満ちた顔。

「だから、ジルフォードを幸せにするのが唯一私に出来るお返しなのよ。リブングル殿。」

だから先ほどの話は了承は出来ないと告げたサンディアの瞳に搖らぎは無かつた。

「私もロードを愛してたわ。同じほどの国も愛しいと思えるよう

になつたの。貴方はビリ~」

「ええ、私もアリオスを大切に思つていますよ」

もちろん問われるまでも無いことだ。

主と共に半生を費やして育ててきた国が愛しくないわけがない。

「ならば、月影、陽炎の両将軍を差し置いてロードに右腕と言わしめた貴方の頭脳で最善を考えてください。本当は、私を五元帥になじするつもりはないのでしょうか」

ぽかりと間が空いた。

ほんの一瞬だつたが、リブングルから薄い笑みが滑り落ち、初めて素を見たような気がした。

「何故ですか?」

そう問うた時には、リブングルの口元にはいつもの食えない笑みが浮かんではいたが「この考えていることが的外れではないと思えてきた。

「貴方がそうと決めたなら、逃げ道など用意するはずがないもの。周りをじわじわと固めてまつていいのしよう。ちょうどいいタイミングを。そして、それを実行する者を。本当に貴方が私をお飾りの五元帥にしたいのならば、國のためだと言わずジルフォードのためだと言えばいい」

ジルフォードを取引の材料にされたなら、きっと惱んでしまつたこと違ひない。

ザクセンの領主におさまたのがこの男だと聞いたときから、ビリ

か違和感があつたのだ。

「送りましょう。風邪でもひかれたら大変ですからね」

話を遮るようにリグンブルは立ち上がると扉を開けた。すれ違いざまにふと視線を上げたサンディアはリグンブルを見つめるとふと目を細めた。

もう、会うことも無いかもしない。最後に言いたいことを言ってやるつと思つたのだ。

「私、貴方が嫌いだつたわ。ロードはいつも貴方と一緒に。貴方もいつもロードを気にかけてた。今もそうね。こんなことを告げるためにはわざわざ危険をおかすなんて、貴方馬鹿よ。」

きつとロードが残してしまつた想いを彼は律儀にも届けてくれたのだ。

サンディアは居住まいを正すと流れるような動作で頭を下げる。以前のサンディアならば想像も出来ないことだ。歯をかみ締めて、しゃんと上を向いていることだけが彼女の矜持だつた。

廊下に消えていくサンディアを見送りながらリグンブルはポツリと呟いた。

「私も貴女が嫌いでしたよ」

互いに相手を嫌つてゐるのを薄々感じていたから、距離をとりあつてきた。

まともに言葉を交わしたのはほんの数回だけ。

それなのに、たつた一礼で全てを任せたと帰つていく背中が恨めしい。

「馬鹿呼ばわりとは」

感謝されるよりましかもしれないと自嘲気味に笑った。

確かに主の想いを代弁する形にはなったけれど、サンティアの立場を利用しない手はないのだから。

通りから石畳の上を馬車が走り出す音がした。

空は黒を通り越して青みがかつてきていた。

休息をとった太陽が世界の端に昇り始めたのだ。

一晩中語り明かしたのはルルドではないといつのこと、ルルドの喉はからからに干上がっていた。

「それは」

かされた声はひどく聞き取りにくい。

けれど喉が潤つたところで、何か意味のあることを口に出来そうにはなかつた。

ナジユールの語つたのは、壮大な子どもの夢だ。

話は何処までも広がりを見せ、舞台は世界中を巡るのだが、どこか現実味が薄い。

時々、はつとするほど現実に重なるのだが、次の瞬間ありえないと誰かが否定する。

思考はぐるぐると円を描き、答えは何処にもない。

「信じなくてもいい。私とて信じれなかつたさ。だが、父上は倒れた」

己が抱えていたものを吐露したと、元のうのは少しも減らない。

そればかりか、己でも持て余すものを弟にも背負わせてしまつたといふ苦悩がすしつとがかつてくる。

「いいえ、信じます」

ルルダーシュにとつて兄は絶大な存在。その名が示すとおり天空を支配する太陽と同じほど明確で力強い道しるべ。

否定する気などありはしない。

けれど、蜃氣楼のようことらえどいふの無い悪夢が、そつくりそのまま現実だとしたら。

「タハルは……」

「帰るまでは無事だわ。とりあえずタハルを滅ぼすのが目的ではなさうだ」

安堵にしては重いため息を吐きながら力を無くす弟にグラスを渡す。喉は同じほど干上がつていてるに違いない。

飲み物を見ると乾きはいよいよ強くなり、ルルダーシュは素直に口をつけた。

つと流れ込んできたのはさわやかな甘みのある液体だった。
とろりと心地よく体内に落ちていくそれにほつと息をつひとつして
鼻腔を擦ったのは酒の香りだった。

「兄上、これ」

カツと胃の腑と頬が熱を持つ。

視界が揺れて、体の奥底から疲労を引っ張り出し重く重く圧し掛か
る。

瞼が完全に閉じてしまつ前に、「ああまだ」と小さく呟いた。
途切れた言葉の向こうにまた、情けないと続くのだろう。

「これで酔つのか」

ナジユールにとつて見れば果汁のようなもの。
喉を潤すことは出来ても酔つことは無い。

悪い夢を見ないほど深く深く眠つてしまえばいい。

ルルダーシュを寝台に移すと、ナジユールも瞼を閉じた。
日が昇りければ、責務が待つている。

完璧な仮面をかぶるにはもう少し時間が必要だった。

耳の痛くなるような静寂を獸の鳴き声が裂いていく。
冷え切った砂の上に群れなして、腹が減つたと恨めしげに此方を見
ているのだろう。

凍えるような夜の中、なお冷たい瞳を虚無に向か青年はくすりと笑
う。

笑みの浮かぶ頬は月の面のように白い。

冷笑を聞き取ったのは、老人と死者だけ。

老人は白濁して生まれたときから一度も外の世界を映したことの無
い眼で青年を睨み付けた。その瞳は未来を見るための眼。
だが今は一秒先の出来事も分かりはしない。

ただ、新月の夜の闇を煮詰めたような底知れぬ影が目の前にいるこ
とだけが感じと取れた。

「ねえ、導きの星。そんなものに何の価値がある？ アンタが一晩

中そこで通せんぼしている理由があるのかい？ ただの『ゴミ』だ」

導きの星と呼ばれた老人は体を強張らせた。

それが怒りからなのか恐怖からなのか「ゴミ」でも判断しかねる。
けれど、青年に占者の最高位の尊称である導きの星と呼ばれた時、
背中を駆け抜けたのは羞恥だったに違いない。
この事態は己の力なさが招いたことだ。

青年の赤い瞳は老人の後ろに安置されたものを見ていた。
かさかさに乾いたそれは木の皮のようだ。

触れればぼろりと壊れてしまいそうなその以前の姿を忍ばせるの
は巻きつけたようにだらりと全体を覆う複雑な模様で染め抜かれた
布と、茶色く変色した表面に残る赤いイレズミ。
タハル王の遺体にはもはや生前の面影は無い。

話すことも考えることもしない。

食えた獣の腹を満たすこともなく、植物の苗床になることもない。青年には、ただ干からびて縮んでいくその体に何の意味あいも見出せなかつた。

「お前さまには慈悲は無いか。愛情もないか」

老人の指先に震えがはしる。

ここは自分ひとりで守り抜かなければ無らない。

せめて、王子たちが帰つてくるまでは王の死をひた隠しにしなければ。

ここまで順調のはずだつた。

王が寝付いてからは自分以外誰も近づけはしなかつた。

占者の言つことは絶大。

遺体を安静のためだと偽つてここまで持つてくるのはさほど大変なことではなかつた。

すべての手はずが整つた後に彼が望んだように新たな王を向かえればいいはずだつた。

「そりやつて馬鹿みたいに両手を広げて通せんぼするのがアンタの愛情？ 王が毒の杯をあおると知つていてとめなかつたくせに？ まあ、心配しなくて良いよ。僕はソレに興味は無い。今のところタハルにも興味は無い。」

滅びようが新たな王が立とうがさして問題ではない。

「別にあんたが望むように王子たちが無事に帰つてきて、王位を継いだつて関係ないんだよ」

「では……なぜ」

王を奪つたのだ。

「新しい舞台には新しい主人公が必要でしょ。ソレはひょっと長く玉座にすわり過ぎたつてだけの話だよ」

もしも玉座を得て数年ならば。
そうアリオスのルーファ王と同じほど王になつてからの期間が短かつたならば。

「ねえ、導きの星。愛情つてなあに？」

青年が首をかしげた拍子に白い髪が風に舞い、赤い瞳を隠した。
強烈な怒りを秘めた瞳が見えなければ、まるで迷子になつた幼子のようになつた。

「抜け殻を守ること？ 全部の責任を押し付けて毒杯をあおる事？」

勝てもしない相手の前に両手を広げ、意味のないものを守る行為。
己が死んだ後、王位争いで苦惱するであろうことを知りながら自ら毒を飲む。

どちらも不可解だ。

意味の無い愚かしい行為。

「どちらも愛情から生じた行為です。愛情とは何かを愛しいと思つ心です。誰もが持つてゐるものです」

そつと欲しいとすがるような声に笑い声が重なつた。
不吉な月のような赤い瞳が細く弧を描く。

「うふふ。空言を言え、力を無くしてしまつよ？」

少なくともコザにはそんなものはない。

ひとしきり笑うと青年の瞳からは、老人への興味も消え失せた。

後のことは任せである。

もうこんな砂だらけの場所に居る必要は無い。

さあ、帰ろう。われらの地へ。

見放された地へ。

「なぜ、あのよつなことになつたかご存知か？」

身のうちに巢くう憎しみの根源を。

憎しみはどこから生まれたのか。

老人は、去り行く背中に必死に問い合わせた。

水に沈む間際のようにあえぎ、助けを求めるよつこ。

「理解できなかつたんだよ。お互にお互をね

まるで種が違つよつて。

「^{ヘインズ}人間と竜のよつにね」^{リュウ}

「……暇だな」

独り言にしては大きな声は、幸いなことにざわめきに紛れ、誰の耳にも届かなかつた。

一部の隙もなく着込まれた漆黒の軍服に真紅の腕章。

片目を覆う眼帯。

いつも腰にある愛剣こそ今は無いが、ジョゼ・アイベリーの存在感は大きい。

同じく風格のある存在感をかもし出すラルド・キースが隣にいるため相乗効果となつて人の目を引いた。

けれど、注目度とすれば話題の一人には遠く及ばない。

ジョゼがサボるのを見越して、王直々に出席することを命じられたが、貴族のお相手をすることもなさそうだ。

暇をもてあましたジョゼは、大型の獣がするよつてくわりと大きな口をあけてあぐいをした。

「その腑抜けた顔をなんとかしろ。」

だらけたジョゼとは対照的なラルドは軍服同様、自身さえも糊付けされたかのようにぴしりと立つてゐる。

高い位置で一本に結んだ髪さえも乱れることなどなく、直線に背に垂れる。

もう少し暑くなれば、前髪ぱつつんのおかっぱ頭に変わるだらうと思ひながらも、主催者側の意見としては最もなラルドの言をきれいさっぱり無視して広間へと視線を巡らせる。

一度でも返事をしようものならば小言が次から次へとびだしてくるのだから相手をしないのが一番だ。

全く、妹にしるケイトにしるゼリヒの少ひるむこのが多いのか。

「貴方がしつかりしていれば言わなくてすむんです！」と口を揃えて言いそうだな。あいつら。まったく面倒な連中だ。

ジョゼは自分のことは完全に棚に上げて、小さく息を吐いた。

「大丈夫だろ？ ジルフォード殿下はつまくやつてしる」

ジョゼの視線を辿つて、ため息の意味をジルフォードへの心配と取つたラルドは太鼓判を押した。

広間の中央にはジルフォードを中心として人だかりが出来てている。まさか、あの中の会話をえ拾える地獄耳なのかと怖くなつたが口にはしなかつた。

あつさり「そうだが」なんて言われてしまいそうだ。

ジョゼには会話をころか、誰がいるのかさえ分からぬ状態だが、さほど気にはしていなかつた。

ルーファが間にいるのだから万が一にも問題は起きないだろ？

「俺が心配なのは嬢ちゃんのほう」

「セイラ殿？」

ジョゼの指先をたどると女性陣に囲まれているセイラの姿が眼に入る。

こちらは慎ましやかに皆椅子に座つての談笑だが、ちょっとやそつとでは離さないという気迫が伝わつてくる。

交遊会なる馬鹿げた集まりがあると聞いた時、一人を取り巻く空気が不穏なものに代わつたら、すぐさま割つて入るうと構えていたの

だが、いかにジョゼといえどもあの女性陣の輪に入つていくことは出来ない。

頼みの綱はダリアなのだが、先ほどから老婦人に捕まつている。話が長いことで有名な老婦人に捕まれば、しばらく放してはくれまい。

「嬢ちゃんは温室育ちだからな。いらん」とを吹き込まれて、気落ちしないといいが

今日招待されたのは貴族の中でも位の高いものたちばかり。言葉の端々にたぐらみがあり、笑顔の向こうに毒がある。

貴族のいない鉱山の街で守られながら育つてきた少女にとつて対峙したことがない相手だ。

今は耳打ちして情報を『えてくれる者も、問い合わせを教えてくれる者もいない。

剣の腕も無邪気な笑顔も通用しない。

いくらグランがみつちり教育したとしても、所詮は付け焼刃。彼女の一番の教え子であるテラー・ナでさえ窮する相手ににわか仕込みの王女様が太刀打ちできるはずが無い。あまりにも分の悪い初陣だ。

「……いつか通らねばなるまい」

ラルドの声も苦い。

キース家は大貴族にも数えられる名門一家。

あの華やかな笑みが心からのものではないことぐらい身に沁みて分かっている。

「そつだがな」

ジヨゼの脳裏には、完璧な笑みを浮かべたヨリザの顔がふいに浮かんだ。

なんだつてあのお姫様は、貴族のあしらい方を可愛い妹に教えなかつたのだろう。

口角の角度、視線一つで相手を怯ます方法を。

「あ～……似合わないか」

「何の話だ？」

「いやいや、嬢ちゃんが『婦人方を手玉にとつて、おほほなんて笑つてたら怖いなと思つてな』

怖いというよりも想像が出来ない。

二重三重に悪意から遠ざけられて育つたのだ。

今ままでいて欲しいとも思う。

けれど、今まで良いとは言つてやることが出来ない。

彼女はアリオス王弟の妻なのだ。

いつまでも自由奔放な唯の小娘であつてもらつては困る。

嫌つているはずの貴族の思考が己の中にも確かににあることを突きつけられ、全身に苦いものが広がつた。

玉になつた氣分だ。

それも磨きこまれてピカピカに光つてゐるキレイな玉じやない。
長でさえ初めて見た原石。

正体を探ろうと、どのように加工しようかと興味津々の視線が四方
から突き刺さる。

いつそのこと玉ならばよかつたのに。

頬が痙攣しそうな愛想笑いも、背中を伝つ冷や汗もきにしなくても
いいのだから。

「では、リントン殿はご存知？」

「……いえ」

彼女たちに囲まれてから幾度、同じような質問をされたことか。
エスターの誰々は知つてゐるか。の方はどうかと質問攻めにあ
つてゐるうちにセイラは数十回のため息を押し殺した。

気楽な会だから肩肘を張らなくても良いと言つたのは誰だつただろ
う。

広間への出入りは自由で嫌になれば退散してもいいと聞いていたの
に、貴族の奥様方にお話をしましようよと椅子に導かれて、かれこ
れ2時間は同じようなやりとりを続けてゐる。

ジルフォードとも引き離されたままだ。

視界の端にルーファと共に挨拶を受けているジルフォードの姿が入
る。

今すぐにでも駆けていきたいけれど質問は途切れることが無い。

濃紺の衣装に垂れる真白な髪のコントラストに見入つていれば、ずいと化粧の濃い顔が近づいた。

「ヤード殿はどうかしら。『ナートの領主様なのだけど」

「残念ながらお会いしたことはありません」

「……そう」

残念そうなため息。

グラントの付け焼刃の授業で、『ナートがエスターイア随一の芸術の街であり、その領主が強い発言権を持つことは知識として持つて入るが、親しいかと言わればそんなことは全く無い。

相手はセイラの存在を知っているかさえ危うい状況だ。

何度も何度も質問されるつむじ、やつとセイラにも彼女たちの思惑が分かつてきた。

セイラ・リュー・デリスク＝リーズ・エスターイアの力はどこまで及ぶのかを知りたいのだ。

どこの誰と繋がりがあるか。

誰に意見を言うことが出来るか。

夫の出世のためにどれだけ利用できるか。

期待のこもった眼差しが落胆に変わり、次第に苛立ちに変化していくのが肌で感じ取れる。

囮まれているのだから非常に居心地が悪い。

後ずさりして少しでも距離をとりたいけれど、後ろはすぐ壁だ。

ヨリザとグラントの小言を半日聞き続けてもいいから逃げ出したい。おそらく一日中質問され続けても彼女たちの望む答えなどセイラの口から出るはずも無い。

「セイラ様の髪は綺麗な色よね。お母様に似たのかしら」

話しかけてきたのは、セイラを取り囲む女性陣の中で一番若い女性だ。

おそれらく二十歳ぐらいだろう。

胸元のざつくり開いた大胆なドレスが良く似合つてゐる。

「……そうでしょうね。母様も同じ色でした」

話題が変わつたことにじまつと詰めていた息を吐き出すると、彼女の口角がニイッと上がつた。

グラントが理想の笑みといった唇の形。

紅で彩つたふつくらとした唇が描き出す上品な笑みなのがくづとする冷たさがあつた。

「やはりそうなのね。エスター・ア王家の方は美しい漆黒の髪と象牙色の肌が特徴と聞きましたもの。ねえ、セイラ様のお母様は、どちらの方？」

前方に座つていた数人がはつと息を呑んだのが伝わつてきた。

それがなくてもセイラにはこの質問の意図が分かつた。

グラントにも散々言われていたことだ。

貴族の中には、セイラの母の出生をよく思つていらないものがいる。

彼女たちに「どちらの」と聞かれれば、何々家のと答えるのが普通だ。

貴族出身ではないセイラの母を騒つため質問。

よしんば、何家のと答えたといひで、あら存じ上げませんわと言わるのが落ちだ。

「ジースです

今までの沈んだ顔を紛れもない笑みに変えたセイラに女性は鼻白む。
「この血筋で生まれたかなどで母を誇るつもりなど毛頭ない。
ジースのルカ。それで十分。

「ジースを存知ですか？」

「……ええ。もちろん」

労働者ばかりの小さな街だがジースの玉の加工技術は大陸一。
知らぬと言えば今度は此方が笑われる。
そう頷くより仕方がない。
相手が扇の後ろで悔しげに唇を噛んだことなど知らずに、セイラは
とろりと微笑んだ。

「もう一つ、質問してもいいかしら」

女性の挑むような瞳に更に力を入れた。
見えない口元には牙がちらついているかのよう。
セイラが頷くより先に鋭い言葉が耳朶を打つ。

「なぜ、アナタなの？」

バルコニーからは庭に降りれるよう階段がついている。そこに座り込んでしまえば、広間からは完全に死角に入る。庭に咲いているシルトを見ないかというダリアの提案で女性陣は、さぞめきながら庭へと消えていった。

一番後ろをついて歩いていたセイラはここまで来ると、ぴたりと足を止め、わざとはぐれたのだ。

広間から漏れるぞわめきも風がかき消してくれる。

青く澄んだ空に向かってセイラは曇つたため息を吐いた。

「……はあ。疲れた」

誰も聞いているものなどいないけれど自然と声は小さくなる。目に映った真白な靴。

特別にあつらえてもらつた靴は足に吸い付くような最高の履き心地。傷一つ曇りひとつ見当たらない。

ジースのセイラには過ぎた代物。

『どうしてアナタなの』

反論なんて出来るはずも無く、何か言おうとした時には、長いおしゃべりから開放されたダリアが輪の中に入ってきた。

するりと風のように入ってきて「お庭の花をみませんか」と花びらをさらう様にご婦人方を引き連れて行ってしまったのだ。

『どうしてアナタなの』

そんなのこっちが聞きたいくらいだ。

姉はいつか分かると言つたけれど、いつになれば分かるのだろう。

愚痴は音になることなく口の中で消えていく。

靴を見つめていると、地面に影がさした。

ご婦人方が帰ってきたのかと思い、はっと顔を上げるとそこには見知った顔があった。

「おや、セイラ殿。アロー」

ナジユールのなめした皮のように重かな褐色の上のイレズミと、大きな笑みに一瞬張り詰めた空気が、ふしゅりと抜けていく。彼も、あの空間が嫌になって出てきたのだろうか。

ちょっとした期待も、余裕のある態度を見れば広間で出されたお茶のようになつて、熱を失つてしまつ。

子どもみたいに逃げ出したいなんて思ったのは自分だけに違いない。ジルフォードだって、うまく会話をしていた。

内容までは分からぬが普段より口数が多いのは見て取れた。

元々、読書量のおかげかさまざまな知識が豊富なのだ。

糸口さえ見つけて話をふれば会話は弾む。

相手が何を求めているのか知りながら、「いいえ」と「すみません」しか口にしていない自分が少々情けない。

「あらー」

力なく上がる両手を見て、ナジユールの片眉がついと上がる。

「元気が無いな。慣れない集まりに出て疲れが出たかい？」

「ん。そうかも」

冷え切つて味も分からぬようなお茶ではなくて、カナンの淹れたおいしいお茶が飲みたい。

ハナの焼いたお菓子でお腹を満たして、クッショソの山に倒れこみたい。

それが出来るのは、まだ当分先のことだ。

下げる頭をぽんぽんと叩かれる。

視線を上げると気遣うような小さな笑みを向けられて恥ずかしくなって、無理やり話題を探した。

「ナジユール殿が、それ巻いてるの初めて見るよ」

ルルドはいつも頭を隠すように布を巻いていたがナジユールがしているのは初めてだ。

深い黒の髪はすっぽりと覆われてしまっている。

「面倒だが、一応タハルの戦士の正装なのでね

ナジユールが肩をすくめた拍子に腰に差したナイフが見えた。小ぶりだが湾曲したそれは美しく存在を主張する。

装飾をそぎ落としたそれは、これから友好と称する場所に行くには実用的だった。

「そのナイフも」

「ん？ まざいかな？ ターバンと毛皮とナイフは一そろいなのだが」

一族の娘が染めた布は神聖とされる頭を守り、腰を覆う毛皮は強さを示し、初めて狩った獣の骨で作ったナイフは勇気の証。

「こいつの骨で作った」

ナジユールは腰の毛皮をぽんと叩く。

凶暴なルーガの骨は強靱でどれほど細く研いでも強度を失わない。鞘から抜いてみると、薄氷のように薄い。

爪の先で弾けば壊れてしまいそうな纖細さなのに、幾度と無く共に戦場を駆けたが刃こぼれひとつ無い。

「骨で？」

「骨も皮も肉も全部使う。タハルには物資がないからね。生きるためににはどんなものでも利用しなくてはいけない。私たちは楽しみで獣を殺すわけではないよ。やむ終えなく奪つてしまつたものだから、全てを活かしてやるのが礼儀だと思わないかい？」

「うん。素敵な考え方だ」

セイラにつられて微笑んだナジユールの顔には影があつた。彫りの深さがもたらす陰影でもターバンの作る影でもない。重い何かがぎつしりと压し掛かっているようだ。

先ほどまでの笑みにはなかつたものだ。

「ナジユール殿も元気が無いね。何かあつた？」

「なぜ？」

「ん？」

「なぜセイラ殿には分かつてしまつたのだろうな」

もう大丈夫だと思つて部屋を出てきた。

今までの会話にもおかしなところは無かつたはずなのに、いつもどおりを演じたつもりなのになつたりと、どこかおかしいと感づかれてしまった。今だつて、「そんなことはない」で済ますこともできたのに。

「それはナジユール殿が教えてくれるからだよ」

セイラはハナのように細やかな気配りが出来るわけではない。相手が何がしかのサインを出していないと気づくことはできないのだ。

「私が？」

まさか人に弱みを見せるなんて。

「やつ」

にこりと微笑まれれば、驚きは次第に苦笑へと変わる。無意識に甘えてしまつていてるかもしね。それなのに、別にいいかと思つてしまつていてる自分もいる。認めてしまえば、すとんとわだかまつていていた想いは落ち着いてく。告げてしまおう。「また、いつか」があるかななんて分からぬのだから。

「前にタハルに誘つたことがあるだろ？？」

「うん」

「今もそれは変わりない」

「ん？ 私もいきたいと思つてるよ」

砂ばかりの世界。

見たことの無い生き物たちが生きる場所。

そこで暮らす人々の生活。

どれもじかに見て触れてみたいものばかりだ。

行きたいと言つた言葉に嘘はない。

「ではもう一度誘おう。セイラ殿。私の妻となつて共にタハルに来て欲しい」

思わず行くよと言いそうになつて何とか持ちこたえた。
今、なんだかおかしな単語が入つてはいなかつたか。

……妻！

見上げた顔は冗談なんて言つている様には見えない。
吸い込まれそうなほど深い闇夜色の瞳には、しっかりとセイラを捕らえられており、そこに映るセイラは困惑をあらわにしていた。
ナジユールの瞳に映る己の姿が別人のような気がしながら、言葉を探つたが満足のいくようなものは思い浮かばない。

「なつナジユール殿？ えつと……私は……ジンと結婚しているんだけど……な

結婚式なんてつい数ヶ月前に挙げたばかりだ。

ナジユールたちはその時に、来ることが出来なかつたからという理由で今回アリオスに来たはずではなかつたか。

「知つてゐる」

あえぐように事実を伝えるとさうぱりと肯定され言葉が出てこなくなつた。

口に出したもののいまいち実感が伴つていのを指摘されたかのようだ。

「私はセイラ殿がいい。エスターの王女でもジースとの繋ぎ役でもない。セイラ殿だから妻に欲しい」

声がない。

広間でも出来事を全て見られてしまったかのようだ。

「嫌いなドレスも愛想笑いも強要したりしない。共に馬を駆つてヘinzの話がしたい。アリオスは第八王女など嫁がせてと不満たらなのだから別の王女を嫁がせればいい。それともタハルまで攫つていけばいいだろうか」

見たことの無い物騒な笑みがナジユールの顔面に広がつた。戸惑うセイラの頬に手が添えられたかと思ひと右頬に暖かなものが触れた。

啄ばむように触れたものが何だったのか考える余裕など全くない。それがナジユールの唇だと知つたのは、至近距離でニッと笑つたナジユールが「頬への口付けは求婚の印だ」とささやいたからだ。頬が熱い。真つ赤だなんて想像するまでもない。

「なつんで！」

嫌われてはいなかつたと思う。

ちよつと強気になつて好意をもたれていたと考えることも出来る。だけど、求婚されるほど何かをした覚えなんてなかつた。

「 まあ 」

「 ああって…… 」

なんだ。やっぱり冗談か。
ほつと息をつこうとした時、再びナジユールの顔が近づいた。
本能的に身を引こうとするけれど、すぐに階段に退路を阻まれる。
セイラの瞳には己の姿しか映っていないことを確かめると全てを呑み込む漆黒が蕩けた。

「 たぶん、セイラ殿に初めて会ったときかな 」

「 は、じめて? 」

何があった。頭の中はフル回転。
何日も前の記憶を巻き戻すが、特別何かをした覚えなど全くないのだ。

初めて会ったのは今日と同じ広間。

たくさんの人が固唾を飲んで見守る中、マント姿の5人が前に進み出る。

ざわめきが起じたり……

「 アロー 」

「 え? 」

「 私が挨拶をした時、セイラ殿はちゃんと返してくれただろう? 」

ああ、そうだ。

見よう見まねで挨拶を返した。

「くーくと何度も頷くセイラの田の前に、ナジユールの手の甲が晒される。

しなやかだけれど、『じつじつとした大きな手。

いたるところに着いた細かな傷から戦うことを行っている人だと教えてくれる。

手の甲の中央の文様は太陽の意味。

周りを取り囲むの紋章は、ナジユールの誇る全て。

一目で全てが分かると言つた。

「アロー」

ーあなたの前に全てを曝け出しましょつ

「たぶん。その時からだ」

呆然とするセイラをおいてナジユールはゆつたりと歩き出した。

「セイ」

「……うつ？ あつ、ジン」

庭に立ち尽くすセイラを見つけ、何度もかの呼びかけの後、もつ手を伸ばせば届く位置に来て、セイラはやつと反応を返した。ジルフォードの姿を見つけ、ほつと詰めていた息を吐く。

「どうしたの？」

「えつ？ ううん。なつなんでもない。うん。何でもないよ」

先ほどの出来事は、きっとナジユール殿の悪ふざけだ。
そうに違いない。

そう思えば思うほど触れられた頬が熱を持つ。
何だこれ。変な感じがいて袖口で力任せに頬をねぐつていると、やんわりと静止の手が入る。

「頬どうかした？」

親指がこすれて赤くなつた部分をすいと撫でる。

触れるか触れないか微妙な力加減。

ジルフォードの白い指先に熱が伝わつてしまいそうで、セイラは顔を背けた。

「だつ大丈夫！」

一瞬宙に取り残された指先が一度ぎゅっと握られると再び頬に添えられ、セイラの顔を上に向かせた。

思いのほか強い力をかけられ驚いたセイラの視線の先には僅かに眉を寄せたジルフォードの顔があった。白い髪が降りかかり、他のものは何も見えない。

白い檻の中にいるようだ。

「どうしたの？」

その問いは頬のことでは無かつた。

心配の濃くなつた声が聞こえると、先ほど熱を持った頬のように胸の奥がじくりと痛む。

告白を受けたばかりの頬が熱を孕むのは当然として、痛むなどおかしなことだ。

その理由に思い至つて、セイラは本当に情けなくて泣き出したくなつた。

「セイ」

ジルフォードの瞳がゆらと揺れる。

青から深い緑。

一瞬、金が混じつたことと思うと耳を飾る紅玉のピアスのように鮮やかな赤になつた。

心の奥底まで晒されているようだ。

きつと嘘をついてもすぐにばれてしまつ。

思いついた当たり障りの無い言葉を噛み碎いて飲み込み、口を開くまで待つてくれるジルフォードに安堵して、ほうと大きく息を吐いた。

「あのね」

「見つけたわ。ジルフォードー。」

セイラの声に被さるようにして高い女性の声がした。

「あつ……」

「あら」

広間から続く階段を駆け下りて、ジルフォードに飛びついてきた女性には覚えがある。

先ほどセイラの母のことを聞いた人だ。

名前は……確か名乗つてはいない。

ダリアたちとシルトのハナを見に行つたわけではなさそうだ。
そこに思い至つて相手をじつと見ているとやつとある」とと思いつつた。

彼女のドレスは穢れのない真白。

祭りの期間中は春乙女にだけに許されるシルトの色。

ここで白い衣装の女性はセイラだけのはずだった。

肩を覆うショールにこそ薄く色がついてはいたが、優雅に裾の広がつたスカートは禁忌の色。

何も知らないものが見たら、ジルフォードに取りすがる女性をセイラ王女だと間違えたに違いない。

彼女が質問した時に、幾人かが息を呑んだのは、もしかしたら彼女のドレスのせいかもしれなかつた。

言葉に窮しているセイラに向かつて彼女はにっこりと笑つた。

「初めてまして。私はキアと申します。ジルフォードとは母方の親戚になるの。よろしくお願ひしますわ」

広間での出来事など無かつたかのように彼女は友好的だ。

親戚の言葉にジルフォードの視線が己に移つたことに気を良くしたのかキアの笑みは深くなる。

対称的にセイラの表情は曇つた。

サンディアが幽閉されたとき、彼女の一族からの風当たりはとても厳しかつたと聞く。

彼女の私物の一切金財を都から運び出した後は、西の離宮には一度として訪れたこともないとも聞いた。

「……母上の」

「ええ、彼女とはじこじこ回すよ」

そつまつキアは一度としてサンディアには会つたことがないだろ。彼女が生まれたときには、サンディアはアリオスの王妃で、その後も一度として故郷の地を踏んでいないのだから。

「お父様がジルフォードに会いたいってわざわざ来ているのよ。会つて頂戴」

答えも聞かず、絡めた腕を引っ張つて歩いていくキアの後ろで、セイラは吐き出せなかつた言葉の気持ち悪さと、嫌な胸騒ぎを感じていた。

ヒューロムはローラ山脈とアリオスに挟まれた小さな国だった。山脈から吹き降ろす厳しい風に晒された土地は荒れ、豊かとは言えなかつた。

山岳地帯で何とか育てることが出来るリューアと呼ばれる動物から取れる毛で紡いだ布を売り外貨を得ていたが、それも僅かばかり。唯一、赤い染料として高く売れていた植物の根も、各国が自国での染料開発に成功してからの需要は全盛期の三分の一にも満たなかつた。キアが生まれた頃には、もう国ではなくアリオスの領地となつていた。

母はいつも恨みのこもつた声で言つた。

「あの女さえうまくやつていれば、お前は今頃王女だつたのに」と。母は王妃になるはずだつた。

あの錆付いたガラクタのように意味のない場所の。

名前を呼ぶことさえ忌々しいのか、母はアリオスに嫁いだと言つサンドイアのことを頑なに「あの女」と言い続けた。かつて城と呼ばれた湿つぼくて陰鬱な屋敷には彼女の姿形を語るものは何一つ無い。

ある者は、とても美しい方だつたと言い、ある者はとても冷たい方だつたと言う。

彼女は一族のどんな要求にも応えなかつたそうだ。

誰々をアリオスの有力者にしろ。タナトスに屋敷をかまえて呼び寄せろ。

応じなかつた彼女を母は今でも裏切り者だと詰つている。

キアはサンディアの行動が正しいと思う。

自分も絶対に、全てを捨てて行くだろう。

妄執にとりつかれた母も過去ばかりを懐かしむ馬鹿な父も。

ガラクタの国の王女なんて冗談じやない。

獣臭い布も赤い汁を垂らす植物も必要じやない。

欲しいのはたくさんの流行のドレスに傷一つない靴。

磨きこまれた床の美しい城に思いのままに動かせる侍女。

ヒューロムでは手に入らない。

今回、新調できたドレスは今着ている一着だけだ。

しかもシルトのように純白のドレスが欲しかったのに、春乙女の色

だからと、気に入らない色を入れられた。

欲しいものを好きなだけ手に入れる。

そのために父に無理やりついてきたのだ。

自分のところで手に入らないのなら、手に入れることの出来る誰か

に取り入ればいいのだから。

だけど、アリオスは少し期待と違つ。

ヒューロムよりましには違い無かつたけれど、夢物語に出てくるお城ではないのだ。

真白で皇かで完璧なお城。

エスターの白バラと呼ばれる城のようだ。

そこではたと氣づいたのだ。

アリオスでダメならば、エスターの貴族に取り入ればいい。

広間にはエスターから招待された貴族たちもたくさんいた。

それに、今日会うメインの一人は憧れの国の王女。

彼女を味方につければ怖いものなんてなにもない。

貴族どころか王族だつて紹介してもらえるかもしれない。

そう思つていたのに、現れたのは唯の小娘だった。

綺麗なドレス。

傷一つない靴。

特別な玉で作られたピアス。

キアの欲しいものを全て身につけているのは、あきれ返るほど普通の小姑娘だった。

貴族の一人さえ紹介できない。

嬉しそうに故郷のことを語るけれど、巖原の貴族や有力者に近づけないなら意味は無い。

せいぜい、噂に高い技術を使って荒稼ぎをするくらいしかできやしない。

王妃か聖母の娘でないといけないと言った父の言葉がようやく理解できた。

不安顔で後ろからついてくるセイラには利用価値がないのだ。

こうなつたら、ジルフォードに頼るしかないだろうか。

キアはちらりとジルフォードを見上げた。

一步を踏み出すごとに、瞳の色が水の上に張った油のようにならへる。確かに気味が悪い。

己の瞳と同じもので出来てているとは信じがたいが関係ない。

利用できるなら魔物だろうが、色なしだろうが受け入れよう。

キアは組んだ腕に力を込めて後ろを振り返るジルフォードを無理やり引っ張った。

広間に入ると、一際目立つ色彩があった。

金の刺繡が入った赤いマント。

かつては珍重されたヒューロムの赤。

白い花で飾られた空間で何層にも塗りこめたように深い赤は、真白な布の上に滴つた血のようでもあった。

それを厭うように周りの人々とも僅かばかり距離がある。

マントの主は小柄だが全身についた肉のせいで存在感を示す男性だった。

撫で付けた髪も口ひげも白くなつてはいるが、眼光は鋭い。

「父様」キアの言葉を受けて振り返つた男は相好を崩す。

「おおう。ジルフォード！ 久しぶりじゃなあ。息災であつたか？」

キアが離れると、男は肉のついた腕を回しジルフォードを抱きしめた。

久しぶりと言われたが、ジルフォードはこの男に全く見覚えが無い。懸命に記憶を探つては見たが、姿形、声の調子、どれも当てはまる人物がない。

キアがそばに張り付いているため、彼が彼女の父、ひいては母の伯父にあたるということがかるうじて分かるくらいだ。

親子でさえ似通つたところを探すのが難しい彼らから、母親や「」と血の繋がりを探り出そうとするのは困難だ。

「リティア様。よつこおいで下わこました」

すばやく間に入つたルーファはやわらかく微笑んだ。

やはり来たかとどれほど彼らの登場を苦々しく思つても表情に

も声にも響りは無い。

「なに、ジルフォードに会うためじゃ。長い道中なぞ苦もないわい」

リディアの視線はルーファの顔を一撫でした後、ルーファの指元に落ちた。

鈍い銀色に光る指輪にはマルスの紋章が彫りこまれており、この持ち主はアリオスを統べるべき者だと告げている。

一瞬強くなつた瞳の色はすぐに作り笑いの奥に隠れてしまった。ジルフォードには彼に歓迎される理由など分からなかつた。責められてしかるべきだというのに。

ジルフォードの誕生はサンディアの立場を、しいてはサンディア一族の立場を悪くしたに違いない。

ジルフォードの存在だけのせいではないが、彼らはもともとからうじて国の体裁を保つていたが、今では一領地を治める一族へと格下げされてしまったのだ。

「ジルフォード。リディア殿だ」

いつのまにか貴族たちは二人を遠巻きにして、今までの楽しげな笑いも引つ込めていた。

静まつた広間に樂師団が奏でる明るい音楽が響いている。愉快な祭の曲だが、場の雰囲気とは全くといって良いほど合っていない。

「お田にかかるて光榮です」

「何を他人行儀な！ お前が生まれた時わしもおつたのだが」

皆が聞こえと耳を澄ませていた。

ジルフォードが生まれたときの話は暗黙の了解で誰も話さない」とになつてゐる。

胸の奥底に沈めた記憶を呼び覚ますよつこ、跳ね回る音とコディアの笑い声ばかりが広間に響く。

「積もる話もあるのでな。部屋に行こうじゃないか。——ではちと煩すぎる」

興味津々と耳を澄ます聴衆がいては、どんな話も自由には出来ない。あてがわれた部屋にジルフォードを誘つリコディアをルーファが制した。

「ああ、お待ち下さい。リディア殿。もう一人出会わなければならない方がいますよ。セイラ殿」

視線が一気に集中して居心地が悪いながら、セイラは彼らのほうへと進む。

なんとか転ばないうちにたどり着けてほつと一息。

「お初にお目にかかります。セイラです」

グラムに教えられた通り上品に見えるよつこと祈りながら微笑むも、返ってきたのは突き刺すような視線だった。

背の低いリディアはセイラと視線も近いためより眼光が鋭く感じられせつかく上げた口角も力なく下がる。

「セイラ殿はジースの出身だとか

「ええ」

何度も聞かれた質問に次の言葉が予想できて、自然と答える声が固くなる。

「ジースの玉の質の良さと加工技術のすばらしさは聞き及んでゐる」

「ありがとうございます！」

思つていなかつた贅辞に掛け值なしに浮かんだ笑顔は長くは続かなかつた。

「だがそのジースの全権を持参金にしたとしても、あまりにも不当な扱いだとは思わないかね」

凍りついたような静けさだつた。

もはや好奇心旺盛な聴衆はいない。

皆、雪像のように固まつて関わらまいと努めていた。

同意でも求められたら身の破滅だ。

幸いなことに扉の近くにいたものはそつと広間から逃げ去り、彼らの話を少しでも多く聞こうと近くに屈座つてしまつた人々は「」の浅はかさを呪い、あらぬ方向へと視線を向けた。

一方のセイラは何を言られたのか分かつてはいなかつた。

持参金？

一体何のことだ。

不当な扱い？

一体誰が？

「……あの、おっしゃつている意味が」

言葉に被さるようついリティアは酒臭い息を吐いた。

氷のように冷たい瞳は言葉も理解できないのかと蔑んでいるようにも見える。

「そなたはジースの出身だと聞いたが？」

「……そうです」

同じ質問に何の意味があるのか分からぬまま再び肯定のために小さく頷いた。
たまりかねたルーファが間に入ろうとした時、高い声がそれを遮った。

「ダメですわよ。お父様。セイラ様つたら、ちつとも意味が分かっていないみたいだもの。あのね、セイラ様」

キアはねつとりと微笑んだ。

「ジルフォードにアナタみたいな小娘似合わないって言つてているのよ。ジニスなんて、労働者の街よ。玉の加工がなければ、何の意味も無い街だわ。そんなところの小娘にいつたい何の価値があるの？聖母の娘でも正妃の娘でもないアナタに全権をくつつけたからつて私たちは納得していないの。でも、まあ使いようよね。せっかくだから私たちがうまく使ってあげる」

一息に言つたキアはセイラの耳元を目指して腕を伸ばした。
その指先が大切なピアスを目指していると知つて伸びてきた腕から逃げるために一步分身を引くと、キアは眉を吊り上げた。

「冗談じゃない。

本当なら払いのけてしまいたかった。

「何を勘違いしているのが分かりませんが、ジニースは私の付属品ではありません。ジニースのことで私が口出せることなんてひとつもありません」

セイラは決然と言い放った。

これだけは譲れない。

ジニースの皆は誰よりも誇り高い。

同じ想いを共有しあつた一族と言つてもいい。

エスターニアの王でさえ彼らの仕事に口は出せない。

彼らは駆け引きの道具じゃない。

「なあに、それ。ますます、役立たずじゃない。アナタ、一体何が出来るの?」

じぐじくと頬が痛む。

理由は分かっている。

自分が無力だと知つていながら、「そのままでいい」と言われたことに甘えたくなつたからだ。

己の無力は大切な人まで貶める。

何度もグランに忠告されたといつに分かつた気になつていただけだ。

ダメだ。頭の中がぐちゃぐちゃだ。

たくさんの絵の具をぶちまけたみたいに鮮やかな色が渦を巻いていきる。

それなのに視界に映る世界はどんどん色をなくしていく。

キアの嘲りを含んだ声もどんどんと遠くなる。

聞こえるのは耳の奥のほうで聞こえる脈打つ血潮の音だけ。

その音が大きくなるにつれ、のどの奥から何かがせりあがつてくる。

それが怒りだつたのか嫌悪だつたのか、はたまた唯の吐き気だつたのか考える間もなく体がぐいと引つ張られ、白い靴を履いた足が己のものではないよう勝手に歩き始めた。

世界の端で聞こえた「失礼します」という言葉は今は懐かしい雪の冷たさを含んでいた。

石の床の感触はいつのまにか土へと変わっていた。

一時、体に吹き付けた風も今は木々に遮られて届かない。
庭の一角にある東屋は祭りとは無縁と思われるほど静かだった。
セイラの手を引いてここまで連れてきたジルフォードは振り返った。
セイラは俯いているため結い上げられた髪の毛しか見ることが出来ない。

「セイ」

腕を掴んで自分のほうへ向かせる。
ほんの少し前と同じ体勢。

違うのはセイラの表情だ。

いつもは光を含んだ瞳は暗く、周りの景色を写す鏡としてしか機能していない。

映りこむ空の色がどれほど明るくとも救いになどなるはずもない。

「セイ、こっち見て」

瞳の表面にはジルフォードの姿が映りこんではいるが、セイラ自身がその姿を見ているかは分からなかつた。

それほどまでにセイラの顔から表情というものが抜け落ちていた。これほどまでに表情に無い人をはじめて見た。

今まで、ジルフォードに対峙した人の顔には無関心を装いながらも何かしかの感情が含まれていた。

怒り、嘲りに恐れ。

今ならばセイラの顔に浮かぶのが恐れでさえいいと思つた。どうか、こっちを見て。

「セイ」

胸の奥がじりじりと焦げ付くように痛い。

祈るように何度も名を呼んだ。

キアの言葉をすぐに否定することが出来なかつた。

ジルフォードはアリオスとエスター・アがどんな契約を結んだのか知らない。

今まで知らうともしなかつた。

傷つけた。

セイラだけでなく、セイラが何より大切に想つている人たちさえも。

「セイ。ごめん」

小さな肩を抱くとぴくつと揺れる。

「セイ？」

「ジンもコリザねえたちの方がよかつた。ルリザねえさまや
イベラねえさまみたいに」

美しくて教養も権力もある本当の王女様。

セイラにはエスターの聖母のことも王妃のこともよく分からない
けれど、彼女たちには誰もが認める価値がある。
そして、どんな質問をされても難なく答えられて、相手の望むもの
を差し出すことも出来る。
セイラには無いものばかり。

「そんなことはない。私は」

「ジン。……お願いだから今は放つておいて」

開きかけた唇を制して背を向ける。

怒りと悲しさと悔しさと、なんだか分からぬものが交じり合つた
気持ちでは何を言い出すか分からない。
自分から望んだはずなのに、ジルフォードの手が離れるとき、そこか
ら全身が冷えていく気がした。

今日は無表情で威圧感をかもし出すサキがいないために密足はずいぶんといい。

次第に増えていく銀貨を見ながら、ヒイラギは商人も案外向いてい るかもしれないと笑みを浮かべた。

いやいや、ダメだ。

今日は良いお客さんに恵まれて いるけれど、すぐ嫌な客が来たら思わず手を出してしまつだらう。

「やつぱり無理、無理」

己の性格を熟知しているヒイラギは、転職の機会を投げ出した。

残りの品物も三分の一ほどになつた頃、田の前を一人の少女がずん ずんと歩いてくる。

肩を怒らせて、けれども爆発しそうな感情を押し込めようと下を向 いたまま歩く少女の髪は亞麻色だ。

元々丁寧に結い上げていたのだろう髪は、手櫛で下ろしたのか装飾 品を垂らしながら四方へとはねていた。どう接触しようかと考えをめぐらせていた相手が、自らひじひじこや つてくる。

なんて好都合。

「お嬢さん」

田の前でひらりと手のひらを揺らせば、潤んだ瞳がヒイラギを見上げる。

きつくかみ締めた唇は、今にもぶつりとむけて血が滲んできそうだ

つた。

その表情に驚いたヒイラギを見て、セイラの瞳にも驚きが浮かんだ。

「君は……街であったよね？」

落つことしてしまったお守りを拾つてくれた青年だ。
人ごみにまぎれてのほんの一瞬の出来事。

互いの全身さえ見えないような窮屈な空間でのことだが、丁寧に拾つてくれた彼のことはしっかりと覚えていた。
鮮やかな色彩の見かけない服装のせいかもしれなかつたが、今日はアリオスの街の人々とさほど変わらない格好をしている。
目立つといえば、肩口でゆれる小さな三つ編みにピンクのリボンがついていることぐらいだ。

「覚えていてくれたんだ。嬉しいなあ」

底抜けに明るい笑顔に明るいリボンの色が良く似合つている。

「あの時はありがと」

「どういたしまして」

おどけてお辞儀をするヒイラギを見て、口元に微かに笑み浮かぶと皿じりが熱を持つのは、ほぼ同時だった。

「あれ。どういたしたの？ 大丈夫？」

「だいじょ、ぶ」

「やうこう」とはね、にっこり笑顔で言わないと意味ないんだよ。うん。よし、お嬢さんには気晴らしが必要だ。街に行こうー。 軍資

金もある」とだしね

呻くと景気の良い音がする皮袋とセイラの腕を掴んでヒイラギは踊るよつに軽い足取りで歩き出した。

「えつ、ちゅうと

「惑つセイラなどお構いなし。

店じまいもせずことつと庭を抜け出した。

「なつ、おまえ

「あ。おこーさんも一緒に行ひよ

回廊で出会つたルルドを道すれに数分後には二人の姿は城の外にあつた。

「おこー！ 一体何を考えているんだ？」

ほてほてと前方を歩くセイラが振り向く気配がないのを確認して、ルルドはヒイラギの胸倉を掴むが、勝手の分からぬ異国の服装で

は思つようになにかが入りまくって、ヒイラギの服が乱れてしまつただつた。

ヒイラギは怒りでふるふると震える手をやんわりと外すと「もう、やだなあ」と呟きながら、服を直していく。

「嫌だなあ。ルルダーシュ様、怖い顔しないでくださいよ。お嬢さんは、ちょっとした気晴らしが必要だつたんだよ。貴族連中に挨拶。貴族連中と世間話に陰湿な質問攻め。考えただけでぞつとするでしょ？」

「だからって城から連れ出さやつがあるか！」

セイラに氣づかれないように小さく怒鳴るルルドを尻目に、屋台の親父に銀貨を一枚渡して、ほこりと湯気の立つパンにかぶりつく。幸せそうに唸ると氣楽に一言。

「ばれる前に帰れば平氣ですよ

「何を悠長なことを言つているんだ。もうとっくにばれているかもしれん」

いくら城の中も浮かれきつてはいるといつても、メインの一人が姿を消せばきづかれないはずもない。タハルの人間が連れ出したとなれば大問題だ。ルルドは広間でのやり取りを知らないので心底心配しているといつにヒイラギの口調は軽い。

「大丈夫ですつて。あんなに広いお城だもん。隠れていただつて言えば通りますよ。現に楽に逃げ出せたでしょ」

ルルドはぐつと言葉に詰まつた。

確かに拍子抜けするほど問題なく城からは逃げ出る」とが出来たのだ。

許可証さえ首からぶら下げておけば、それほど厳重に調べられるといつことはなかつた。

仮に調べられてもヒイラギの持つている許可証は本物なのだから問題は無い。

田立つルルドの頭の布を解き、逆にセイラの亞麻色を隠すために深い青の布を田深に被らせたがあまり意味は無かつたかも知れない。

「……それで、ビニまで行くつもりなんだ」

この街は複雑怪奇。

人の多さも考えれば、この取り合わせで街に繰り出すなど無謀とか思えない。

一番ましかと思われるセイラがあの状態ならば城から離れるのは危険だ。

「すぐそこですよ。お城の門が見えるところだから心配いりませんつて。蜂蜜パンのおいしいお店でね。蜂蜜酒も最高なんですよ」

「……今、食べているのもパンだらうが」

「これはこれ、蜂蜜パンは蜂蜜パン。何を言つているんですか、ルルダーシュ様は」

馬鹿のかしら。そんな哀れみを含んだ視線を向けられてルルドは歯をぎしりと鳴らした。

「それにね、甘いものは疲れにもイライラにも利く万能薬なんです

から！

お前がいないほうがイラつかなくてすむ。

そんな言葉をなんとか飲み込んでルルドはそっぽを向いた。

そんな態度をくすりと笑いながら前方行くセイラに声をかける。

「セーだよー 蜜蜂の看板の店ー！」

人の声がしない広間。

楽師団もどこか気もそぞろで、ずれた音がいつまでも取り残される。さざめきが戻ったのは、ものの数秒後だったが、沈黙の瞬間は空気が硬化したかのようだった。

あまり仲のよく無い者同士もこのときばかりは力を合わせ、「庭を拝見しましょうとか」と肩を揃えて去っていく。

酒臭いため息。

眉を吊り上げる隻眼の将軍。

心を痛める義姉。

そして、笑みを深める兄。

それを目にするとテラーナは広間を後にしたが、誰も一人の少女が消えたことなど気づかなかつた。

やつと姿を見つけるとジルフォードは一人だった。

彫像のように動きを止めている彼の横にはセイラの姿は無い。

すぐさま声をかけようと思っていたのに、舌が乾き声が出ない。

ゆらゆらと立ち上る陽炎のように目の前に浮かぶ状景に、心の奥がひどくざわついた。

それが怖さからだとは認めたくないテラーナはぎゅっと目を瞑る。

尚、鮮明になつた状景の中にいるのはまだ幼い自分とジルフォード。あの時も、動きを止めたジルフォードは何を見ているのか、何を思つているか分からなかつた。

テラーナは母との約束を守りうとした。

「仲良くしてちょうだい」母はそう言った。

血は半分しか繋がっていないといつても兄には変わりない。

幼いテラーナには大人たちが言う『色なし』なんてよく分からなかつた。

多少、違つた外見ではあるけれど氣になど留めてはいなかつた。それどころか、兄の友人たちのように騒がしくなく、いつも難しそうな本をすらすらと読んでいるジルフォードに好意すら抱いていた。だから庭の隅に、ひつそりと隠れるようにあるテラーナのお気に入りの東屋に彼が現れるようになつても、シルトの意匠が施してある大好きな椅子を一日中取られても、ちつとも怒りは沸いてこなかつた。

その日、ジルフォードが持つていた本の表紙はすばらしいものだつた。

だから何を読んでいるのか気になつたのだ。

しばらく声をかけようかどうしようかと、もじもじしていたのが母の言葉が背中を押した。

小走りで近づいていくと、宙を見ていたジルフォードの瞳が此方を向く。

冴えた紫の瞳。

初めて見る色にテラーナはさつと顔を伏せてしまつた。

初めて声をかけるときは緊張するものだ。

手にはじつとり汗をかき、絡まつた舌はうまく動かない。

「何を読んでいるの？」その一言が中々でない。

どれほどの時間、そうやつていたのかは今になつては定かではない。覚えてているのは冷え切つた拒絶の言葉。

「関わるな」

その言葉は、母との約束もテラーナの決意も本のすばらしさも消し飛ぶほどの効力をもつていた。

それ以来、テラーナはジルフォードと関わりあいになることから必

死に逃げてきた。

ダリアにお茶に誘われても、その場にジルフォードがいると知ると無理やり理由を作つて断つっていた。

兄に困つたように苦笑されるよりも、ダリアの悲しそうな顔を見るよりも、あの言葉をもう一度聞くのが恐ろしい。

忘れてしまいたいのに、視界に入つてきは思考力を奪つていく。感嘆さえして見つめていた色が己のコンプレックスを刺激するようになるなんて考えてもみなかつた。

そんな相手にどうして自分から関わるうと思つてはいるのだろう。今すぐにでも自室に逃げ込みたいのに、どうして視線を外すことが出来ないのだろう。どうして、憎らしげほど明るい色の髪が彼の隣にあるはずだと思つてしまふのだろう。

「いつまで、やつしているつもりなの？ これ以上、兄様一人に相手をさせないでちょうどいい」

震えそうになる声にうまく怒りを紛らせて、やり過ごす。それはあまり難しいことではなかつた。

兄を嘲るよつにいやらしく笑うリティアの顔を思い浮かべれば、怒りなど無尽蔵に沸いてくる。

テラーナに気づいたジルフォードは振り向くと、見まごと思つていた瞳の色を正面から見てしまった。

あの日と同じ冴えた紫。

けれど、その色は風にあおられた炎のよつにうねりと揺れていた。静かな怒りを示すよつに。

「あなた、怒つているの？」

何故か知りもしないくせに、ジルフォードは怒つているのだと思つ

てしまつた。

口に出してはまつとしたが、もはや取り消すことは出来ない。

テラーナの言葉を受けてジルフォードは考えた。

体の奥に溜まつていく酷く冷たいものが怒りだとこうのならばそつなのだらつ。

否定はしなかつた。

分からぬとも言わなかつた。

ただ、セイラの温かさを忘れてしまふやうな毎日、口の内外も外もどんどん冷えていく。

怖れも怒りも消えつせて、テラーナの内に生まれたのは紛れも無く呆れだつた。

もつと酷い仕打ちをされてきたはずだ。

むりやり母親と引き離され、刺客を送られ、存在されないものとして扱われた。

そんなときでさえ、変化など見せなかつたくせに、駆け引きとも呼べない戯言のせいでぐらついているなんて。

対象が変わるだけで、なんて弱い。

なんて脆い。

なんだか急にジルフォードに恐れを抱いていたなんて、拒絶されることを怖がっていたなんて馬鹿らしくなつてきた。

「あの娘なら帰つてきます」

何故、そんなことをわざわざしてやうなればならないのだらつと思つた。

他にどこに行くといつのだらつ。

セイラに故郷があつても、もつと軽に帰ることのできる場所ではない。

彼女はここに生きていくしかないのだ。ほんの少し考えれば分かる

ことだ。

そんなことをえ分からぬほど動搖しているのだろうか。
否、そうではない。

ジルフォードもまた怖いのだ。

ここは帰りたい場所ではないと拒絕されてしまうことが。
ああ、なんて馬鹿なんだろう。
私も。彼も。そしてセイラも。
怖がつて、傷ついて、傷つけて。

「兄様のところに行つてよく話し合いなさい。あの娘が帰つてきた
ときにはじつていればいいか考えておくことね!」

もう少し、うまく言葉が出てきたらしい。
テラーナの頬はうつすらと染まった。

「ありがとう」

届いた感謝の言葉に、ふんとそっぽを向いた。
ジルフォードが通り過ぎる時に起こつた風がテラーナの髪を揺らす。
大好きなシルトの彫り込まれた椅子。お気に入りの場所。
本当は好きだった色が田の端を過ぎていく。
ゆらゆらと不安定に揺れていた昔の状景はテラーナの前から一つの
間にか消え去つた。

ぐつと引き結ばれた口元のせいでの、ラルドの精悍な顔がより引き締まる。

副官として常に共にいたコーリは、ラルドの表情の中に苦々しいものを見つけ、そつと唇を噛んだ。

彼の視線を追うと、苦々しく思っているのは、セイラを蔑むような態度をとつたりディアではなく、広間から去つた二人のことだと知れた。

確かに一人の行動は正しいとは言えない。言いたい放題言われて、逃げ去つたようなものだ。

かといって言葉を弄して相手を丸め込んでみせたところで同じような顔をするに違いない。コーリには、どうすれば合格点が貢えるのか分からなかつた。

ラルドが貴族の顔を見せるたびに、自分とは途方も無く遠い人なんだと思つてしまつ。

キース家は大貴族の一つ。陽炎に入つていなければ、貧しい田舎町から出てきたリースと重なり合つことは無いだらう。

「どうした？ コーリ」

ジョゼは、自分よりずいぶん背の低いコーリを見下ろしているとうのに、どこか覗き込まれているような気がしてくる。

それに不快感が伴わないのは、こちらを労わる気持ちが、彼の瞳から伝わつてくるからだらう。

ラルドが真に安心しきつて背中を預けることが出来るのはジョゼなのだらう。

実力の差を痛いほど知つてゐるといふのに、やつ思つたびに悔しさがこみ上げる。

いつか追いつく。

肩を並べよう。

硬く決心したはずなのに、こんな場面に出会いつぐぐぐぐと揺れるのだ。

ラルドの考へ一つ分からぬで、どうしてそんな大それたことを想つたのだろうと。

答えを促すように首を傾げたジョゼから視線を外し、大きな窓に視線を向ける。

明るい空の色を背景に、白い雲が流れしていく。

「とても遠く感じることがあるのです」

あの雲と同じほどに。

「何がだ？」

「……キース将軍」

「私が？」

突拍子もないことを言い出した副官を見るラルドの瞳は驚きに満ち、いつもの2割り増しで大きく開かれている。

穴が開くほど見つめた相手は、ラルドの驚きなど知らずに、ほっと遠くを見ている。

「私なんかが、こんなことを言つのはおじがましいかもしませんが、さつきのセイラ様の気持ちがわかる気がします。……自分のせいで誰かが傷つけられるのは悔しくて悲しくて。文句の一つくらい……どうすれば合格点ですか？　どう対応していればキース将軍は、そんな顔をしていなかつたか……私には分かりません

ジョゼは納得したように頷き「そうか」とユーリの頭をわざりと撫でた。

髪が引っ張られ少し痛かったがユーリは文句を言わなかつた。底抜けに明るいユーリも悔しくて唇を噛んで涙を流したことがある。そんな時も、彼は頭を撫でてくれた。

ユーリは女だ。

その上、小さくて細い身体では軍服を脱いでしまえば誰も軍人だとは思わないだろう。

そんな彼女が陽炎の副官である飛炎に選ばれた時は非難の的だつた。選んだのが五大貴族であるキース家の嫡男だつたため表面上は波風は少なく見えてはいたけれど。

どれほど頑張つても女だからと陰口を叩かれ、功績をあげれば女のくせにと難癖をつけられる。

時には貧しい出生のことまでネタにされた。

ユーリの家は貧しい地方の田舎町の中でもらはれ貧しい家だつた。子どもばかり多くていつも空腹を抱えているような家だつた。

兄弟の何人かは売られていき、ついにはユーリの番が来た。

がりがりに痩せた子どもを一人を売つたところで得られる金は少ない。

すぐに妹たちの番が来てしまう。

娼館にいつたつて己の器量は知れている。

どうにか妹たちが自立できるまで家を支えることはできないだろうか。

思い悩むユーリの前に現れたのは軍の広告だつた。

武の国であるアリオスでは常に探している上、給料もなかなかよい。

男だけという規定は無いが、やはり圧倒的に女は少ない。

彼女が城門をくぐった時から、何日持つかはかつこうの賭けの対象だつた。

最長でも十日間。それを見事に破つた時は拍手をえらつたものだ。泥まみれ、傷まみれ、襤襪のようになりながらも立ち続けることが出来たのは、どうしてなのかユーリ自身にも分からない。ただ、天を割る赤い刀身に魂の奥までも揺さぶられたことは覚えている。

どんなに蔑まれても、どれほど傷を負つても泣かなかつたのに、その時は外聞もなく大きな声で泣いた。

その刀身の分身を任された時の高揚感と不安。決して互いを裏切らない陽炎と飛炎。

その関係に少しでも近づいているだらうか。

鎌首をもたげた不安は常にユーリの側に居座つている。

「……そうだなあ、俺なら自分の意思で此處に戻つてきたならギリギリ合格だ」

にやりと笑うジヨゼの視線を連れ、入り口にジルフォードの姿が見えた。

もはや広間にリディアは居ない。

誰も彼の足取りを乱すことなく、ルーファの前へと歩み寄つた。ほつとしたのもつかの間、隣のいるはずのセイラの姿が無い。

「お？ 嬢ちゃんがいないな

「どうしたのでしょ？」

いつもと違つ状況が、さわさわとユーリの不安のもとを撫でていく。

「ちょっと探しできます」

駆けて行くユーリを呼び止めたよつとして止めた。

やのうひ、せひひの少女もけろつとした顔で帰つてくれるだらう。

「気にしてゐるか？」

腹心の部下に遠い存在だと言われてしまつたラルドは硬く閉ぢていた口元を開く。

眉間にしつかりと刻まれた皺は「――一番の深さだ。

「じてゐる」

真面目に答えたといふのに噴出され、敵ならば一睨みで凍りつかせることの出来る眼光でジョゼを睨む。

腰を折つて笑い転げかねないジョゼの姿に、ラルドの口角はべつと下がつた。

「何が可笑しい？」

「いやいや、せひひも贅沢な悩みをお持ひのことだ」

「は？」

『どうすれば合格点ですか？』言ふ換えるならば、ラルドに合格点を出して欲しいことこのじだ。

認めて欲しい。

望むものを差し出したい。

それなのに望むものが分からないと言つ。

一方のラルドは認めきつている相手に遠いと言われ、憤り焦つている。

どちらも一途に相手を想つてこつもすれ違うのだからおかしなものだ。

「大いに悩め」

ラルドの大きな背中を打つ。

意地悪そうな笑みを目にし、ラルドは眉間の皺を解いた。

ジョゼ相手に口論をする労力は無駄だと悟ったのだ。

ヨーリとしつかり向き合って、話をすればもやもやとした思いはすぐ
にでも消えてしまうだろう。

「お？ 何だ。もう止めるのか。つまらん」

「何故、お前は副官を持たないのだ？」

陽炎の将軍に副官がいるように、当然月影の将軍にも副官はいる。
月影の副官には飛炎のように象徴するものがないため歴代の将軍の
中で副官を選ばないものもいたが、選ぶ権利はある。
いきなり矛先が自分に向かつたことに驚きつつも、ジョゼは肩をす
くめると軽く答えた。

「お守りされるのは好きではないからな」

「私はカイザーを副官にすると思つていたが」

カイザーはあまり目立つ男ではない。

外見もどちらかと言えば線が細い。

けれど、居て欲しい場所に視線を向けると必ず居る。此方が注文を
つける前に必要なものはそろえてある。

剣の腕も悪くない。足裁きに音がしない。気がついたときには急所
を押さえている。冷や汗が流れるような静かで恐ろしい剣を使つ。
先に目をつけて陽炎に誘えばよかつたと何度も思つたことが。

「俺は使い勝手の良い奴は距離を置いて使うのが好きなんだ。それにアイツはグラードの一族だ。一族の意に反せば上司だろうと牙をむく。人の副官を心配するよりも自分の副官を心配したらどうだ？」

広間には人もまばら。

馬鹿げた会もこれで解散となるだろ？

将軍が一人もここにいる必要は無い。

笑みを背に受けながら、ラルドは走り去った少女の後を追うように歩き出した。

店主はヒイラギのことを良く覚えていた。

いくらおいしからと言つて、棒切れのように細いヒイラギが5人前の蜂蜜パンをぺろりと食べたのが印象的だったのだろう。友達を連れてきたと言つヒイラギの言葉に笑みを浮かべ、店で一番良い席へと案内してくれた。

一番といつても通りが見下ろせる他ほんの少し机が大きなくらいだが、他の席からは距離があり話の邪魔をされることはなさそうだ。注文はもちろん蜂蜜パン。

ついでに蜂蜜酒も人数分頼んでおいた。

ヒイラギと自分の関係をどうセイラに説明しようかと悩んでいたルルドのことなどお構いなしに、ヒイラギは自分がタハルの人間であることをあっさりと話してしまった。

さすがにルルドが二の王子であり、自分がその付き人であることは話さなかつたけれど、うつかりと話してしまいそうな軽さがルルドの頭を悩ました。

ルルドがため息をついている間に頼んだものは早々にヒイラギの胃袋へとおさまり、蜂蜜酒を飲んだセイラは机の上に、ぐてりと伸びる。

飲んだくれたオヤジのような姿に頭さえ抱えたくなった。

「お前は何を氣落ちしているんだ！ 貴族からの陰湿な扱いなど日常茶飯事だろ？」

セイラの足がぶらんと揺れる。
反論する気力さえ無いらしい。

「セイラは、エスター亞の小さな街の生まれなんだよ。貴族はいな

いし、彼女の意地悪する人なんていなかつた。やつと慣れてきたところで、手痛い仕打ちを仕掛けたのが夫の一派となると悲しいでしょ？」

察してあげてよ。そんな視線を受けてルルドはむすと眉をしかめる。

「何でそんなに詳しいんだ。お前は

タハルに何か伝わつてくるとしたらノースの道からしかない。物資だつて情報だつて手に入るのは極端に遅い。

入ってきたところで自分のところに回つてくるのはずいぶん後のこ

とだ。

エスターニアの王女がアリオスに嫁いだという情報だつて、タハルを経つ少し前に聞かされただけだつた。

広間に行つていないルルドに、セイラに一番ダメージを『えたのがジルフォードの一族だつたなんて知る由も無い。

「僕は盗み聞きが得意なの」

ヒイラギはくすくすと笑つて蜂蜜酒を一口飲んだ。

甘い甘い蜜色の飲み物は喉の奥をとろりと落ちていく。

体の中心に落ちるとそこから全身がふおんと緩やかに温かくなつて心地がいい。

タハルの地だつて嫌いではないけれど、食べ物となると話は別だ。自國のものが一番だと言い張る可憐らしい主もこの時ばかりは可哀想になる。

いやいや、ルルダーシュの場合、何だかんだといつも可哀想な気がしないでもない。

肩肘を張らずに認めてしまえば楽なのに。

まあ、今大事なのは主よりセイラの方だ。

ジースに帰りたいなんて言われたら、面倒なことになる。

「セイラはさ、自分が悪かったと思つて居るのでしょ？だからそんな顔してると

「……んー」

「一体、どんな顔をして居るのだろう。

目じりの熱っぽさから赤くなつて居ることも予想が出来るけど、他はよく分からぬ。

でも、きっと情けない顔なのだろう。

「自覚できているならもう少し勉強しなきゃね。いくらセイラとHスター王室との関係が希薄だからって、セイラは王女様だつて認められて、その看板背負つているんだからね。周りへの影響力を知つておかなくっちゃ」

「影響力？」

身体を伏せたまま視線だけでヒイラギを見上げると、蜂蜜酒を飲むのを止めて、組んだ指の上に顎を乗せて笑つて居る。

先ほどまでと同じ軽い笑みだというのに、グラント対峙したときのような気持ちになつて、セイラは身体を起こした。

「間違つても、格下の国の一臣下に役立たずなんて公衆の面前で言われちゃいけない立場なんだよ。言われたとしても、あら羽虫がうるさいわねぐらいの態度を取らなくちゃ。ほくのお勧めとしては、まあ、あの方頭大丈夫かしらつていう態度だけね」

うふふとヒイラギの口元が不気味に弧を描く。

「確かに、お前じゃなかつたら相手はそんな態度には出なかつただ
「ひ

セイラの要領を得ない説明と、ヒイラギの言葉だけで状況を察した
ルルドもどつやらヒイラギと同じ答えを導き出したよつだ。

「……そつなの?」

「有利な立場にいるエスターニアが、お土産持たせて王女様を嫁がせ
る必要なんてないでしょ? ジニスつてカンタスやデナートと同じ
くらい有名な街なんだよ。そこの権利を気前よくあげちゃう? そ
んな寛大なことが出来るなら、聖母の娘をお嫁にくれたよ。三人も
いるんだし。だから、ヒューロムの何とかっていう人たちが、セイ
ラの故郷に口出しあは出来ないし、アリオスだつて同じことなんだ。
セイラはそこで、怒つちやダメだよ。ましてや逃げたりしちやもつ
とダメ」

「……はい」

「お前はただ笑つて立つていいだけよかつたんだ。それだけで周
りの人間は、あの馬鹿は何を言い出すんだと思つてくれただろう。
あつとすぐにアリオス王も口を出したはずだ。それなのに、お前が
わめくし、逃げるしでジニスの件は本当なのかと周りが思い始めた
ら厄介だぞ」

「やつかこつて……」

「ジニスの利権が絡んでいるならヒューロムに力を貸そじやない
かつて思つ連中も出てくるつて事。ヒューロムが力を持つてこと

は、王子様にも関わつてくるよね

セイラは身体をしつかりと起こして慎重に頷いていたと思つたら急に頭を抱えて机に突つ伏し、ルルドとヒイラギを驚かせた。

「ああ～ジンを置いて来ちゃつた……心配してくれたのに、ほつとけなんて言つたし、他の王女様がよかつたかなんて愚痴を言つし。呆れられたかなあ……嫌われたかも」

「もうすこ～し、重要な話をしていたはずなんだけどなあ

「どうしよう…」

政にも関わるような利権の話をしていたはずなのに、いつのまにかお悩み相談と化している。

まあ、いいのだけれどと蜂蜜酒をすするヒイラギの横でルルドは半眼になつた。

眞面目に話を聞いてやつたのが馬鹿らしい。

「さつさと帰つて、謝るなりなんなりすればいいだろ？」

どうして少しでも心配してやつたのだろうか。
もしかして唯、空腹で元気が無かつただけなのではないかとも思つてしまつ。

「そつか。そだよね。帰つたほうがいいよね。うん。帰ろう。そ
うじょう

あわただしく帰り支度を始めたセイラの前にヒイラギが人差し指を立てて見せた。

「セイラー、ついでにもう一つアドバイスしてあげるよ」

「ん？」

「あのね、今日広間に来てた人たちはね、貴族の中でも外交に長けている人たちなんだよ。話し方歩き方からみつちり計算づくの人たち。彼らの一言で戦になりかねないんだから、そりやあ神経もピリピリしてる。そんな人にさ、ほんの数ヶ月前にお姫様生活を始めたセイラが勝てるわけなんてないんだよ。むしろ勝っちゃつたら、あのおじさんたち可哀想だよ」

言われてみればそうなのだ。

グランだつて所詮は付け焼刃だが無いよりましたからとセイラの小さな頭に情報を入れ込もうと苦心したのだから。

セイラは、こつくりと頷いた。

疲れきつた頭にも身体にも温かく甘い飲み物が効いたのだろう。素直に言葉が頭の中に入つてくる。

「相手の領地で勝てないなら、勝てるところに誘い込むことを考えなきやね。自分の分からない話題をふられたら、それに詳しい人間を引っ張り込むとか、うまく話題を摩り替えたりとかね。コリザ王女はそういうのうまいと思つよ」

「ねえさま？」

姉の有能ぶりはタハルにまで届くほどなのか。

今回のセイラの失態を厳しい目つきで見つめるコリザの姿が用意に脳裏に浮かび上がった。

「そ。一度、じっくり観察して真似してみればいいんだけど。コリザ王女じゃなくても、この人いいかもと思ったら真似してごらんよ。さあ、ルルド様も何かアドバイス！」

「なつ何で僕が」

「ついでに？」

何か言いたげに口を開きかけたが、ぎゅっと引き結び、おもむろに耳飾を外すとセイラに向かつて転がした。

耳飾の先についていた球体の飾りはセイラがナジユールから貰つた物よりは小ぶりだが透かし彫りの細工は緻密で、回転するたびにカラカラと乾いた音がした。

「ルルド？」

「開けてみる」

言われたとおり、小さなつまみを見つけ引っ張ると球体はぱくりと一つに割れた。

中から出てきたのは橢円の粒だった。

茶の地に赤い縞がある。

目の前に翳してもセイラには、これが何なのか分からぬ。

「何これ？」

「植物の種だ」

つるりとした表面は、ガラスのよう種のよつには見えなかつた。心もとない小ささなのに、見た目よりも重さがある。

「砂漠に強いもの同士を掛け合わせた。まだ試作段階だが」

「試作段階つて、ルルドがやつてゐるのー。」

「やうだ」

ルルドはむすつと顔をゆがめたまま頷いた。
セイラから種を受け取つたヒイラギは手のひらの上でそれを転がした。

「す』いー。」

「なんて馬鹿なことをやつてこるのか

「え?」

「タハルの人間の大半はそう考える。あの地はもう死んでいて植物
なんて生えない。……誰からも好かれるなんて無理は話だ。誰か
らも理解されるのもな。やれることはやつておけ。それでもダメな
ら認められることを諦めろ」

「それじゃ、分かんないよ。まったく言葉が足りないんだから。時
には自分らしく我を通すことも必要だつて言つているんだよ

「うん。分かった。お礼にルルドにも良いこと教えてあげる。植物
のことならカナンに聞くといいかも」

「カナン?」

ルルドより先に反応を示したのはヒイラギの方だった。大きな目をさらに開いてセイラを見つめている。

「もしかして、カナン・スフィア？」

「あ……ごめん。下の名前は知らないや」

「そういうばなんと書うのだろう。いつもカナンとしか呼ばないから知らなかつた。いつもカナンとしか呼ばないから知らなかつた。」

「その人物がどうかしたのか？」

「嫌だなあ。知らないんですか？ ルルド様。彼は『夜のお茶会事件』の主犯ですよ！」

はて、厳しいタハルの歴史上にそんな可愛らしい名前をつけられた事件があつただろうか。しかも他国の人物が関わっているとなつたら、かなり大きな事件だが。

「夜のお茶会事件？」

眉を寄せるルルドの隣でセイラは瞳を輝かせながら身体を乗り出した。

「もう二十数年前の話だけど、タハルがアリオスに奇襲をかけたことがあるんだ。その年は本当に凶作で年が越せるかどうかも分からぬほどタハルは弱つてた。どうにか命を繋ぐだけの作物を奪うためにローラ山脈の辺りを荒らしてた。そしたら当然アリオスが出てくるよね。野営してた彼らの背後から少數精銳で突っ込むはずだつ

たのに……」

「……」「

「一人の兵士にお茶に誘われちゃったんだ」

「はあ？」

ルルドの眉間の皺は深くなつた。

「暗闇に紛れて忍び込んだのを見つけられただけで、もうダメだと
思つたのに「お茶しませんか」つてのほんと誘われたらしいよ。つ
いでに今度の飢饉をしのげるだけの援助をするから戦いをしばらく
止めましょうなんて言い出した」

なんだかとつてもセイラの知つているカナンっぽい。

「当然、そんなにいい条件なんてありえない、何故だと聞き返した
らなんて言ったと思う?」

「なんて言ったの?」

「もうすぐ畑に植えた作物の収穫時期だから、それまでに帰らない
とだつて」

ヒイラギはケラケラと声高く笑つた。

「確かに、それでアリオスには損は無いんだよ。恩は売れるし、そ
の年は豊作だつたし、今まで貯めていたものを考えるとそう難しい
ことじやない。軍を出すほどお金はかかるないし、彼らにはノース

の道を通りつてまでタハルに攻め込む気は無かったから、どうしたつて荒らされるのは自国でしょ？ その負担を考えると援助のほうがましつてこと。最初からそう言わっていたらむつとしてただろうけど、作物のためなんて言つから拍子抜けしちゃつたんだろうね。彼らは友好条約を結んで今に至るつてわけだよ」

「……今？」

「そう友好条約を結んだのは我らがウォーダン王とアリオスの先代のロード王だよ。珍しくタハルとアリオスの関係が友好なのはこの条約があるからだよ。だけど、条約はウォーダン王が在位にある間つている条件があるけどね」

ウォーダン王。タハルの現国王。

その名にルルドは唇を噛み締めた。それを見ないふりをしてヒライギは笑う。

「名前まで知つている人は少ないかもしだれだけど、そういうことがあつたのは事実だよ。良かつたら、セイラの知つているカナンに聞いてみてよ」

「うん。 そうする！ 色々ありがと。もう帰るよ。ジンに謝りに行かないといけないし」

空は赤みを越えて青くなりつつある。

活気に満ちていた路地は、暖かい灯りに照らされて別の色彩を得てきらきらと輝いている。

遠くに見える城門にも松明が燃え始めていた。世界が夜の装いへと姿を変える。

「勉強もむりやんとする」

頑張つてと手を振られて、セイラは笑顔になった。

今にも倒れてしまいそうだった青白い顔はどうにもない。

「早く行けよ。ソフィアたもんは時間が経つほど難しいんだからな

「うふ。ありがとね。ルルド」

「ー。いいから行けよー。」

怒鳴るように言い放つ、ルルドにもう一度礼を言つて走り出す。真白な靴には羽が生えているのかと思つほど足取りは軽い。

「うふふ

顔を真っ赤に染めたルルドをこよなく見つめると、彼の頬はさらりに赤くなつた。

「その気味の悪い笑いを止めるー。」

「誰の受け売りですかねえ」

記憶が正しければ、仲直りは時間が経つほど難しいと教えてやつたのはヒイラギだ。

ナジユールとたわいも無い喧嘩をして、ぐずぐずと泣いていた幼いルルダーシュに。

「ふんー。」

「それにしても品種改良なんてね。最近、いじいじと何かしていることは知つてましたけど」

「言つたところで、馬鹿にするだりつ」

「しませんよ。ちなみに、これセリオンとトイをかけました?」

「よくわかつたな……なんだ、すでに実験済みか」

ヒイラギの故郷にはすでにある。

だか、何人もの技術者を使ってやつと出来た代物だ。暑さにはとても強いたが、予測不可能な寒波には弱い。砂嵐の多い地域では、根付く前に飛ばされてしまう。

結局は失敗作だ。

家族を人質に勧かされていた技術者たちは、もろとも砂の下で眠つている。

ルルドは落胆するもヒイラギが感嘆したのは事実だ。

「あと、リュオウもかけた」

「リュオウつて……リュウの願に行つたんですか」

タハルの中で一番過酷な地帯。

絶え間ない砂嵐に、そこにだけ棲む獣たちに剣は通じない。屈強な兵士でも踏み入れることを拒む場所。

そこには小さなオアシスがある。

王が即位するとそこを訪れ禊をするのが慣わしだ。

けれど、何百と護衛を連れて行つても帰つてこなかつた王もいる。リュオウはそのオアシスに生える植物だ。

砂漠の女神リュオウの化身と呼ばれているその植物は、何十メート

ルも根を伸ばし、砂嵐でも飛ばされない。

柔らかな茎にはたっぷりと水分が含まれており、切れれば甘い水が零れ落ちる。

残った茎は纖維を解いて織ることも出来る。

魅力的な植物には違いは無いが、行くまでの労力に見合つかどうかは分からない。

「あそこにはいるのはルーガのやうな可愛い獣ではないんですよ？
ああ、もう本当に馬鹿なんだからルルダーシュ様は！　あまりの馬鹿っぷりに獣も食べるのを止めたのかしら」

「あいつらは香を焚いていたら、襲つてはこない」

「だから、馬鹿だつて言つてるの！　確かに香は効くけど、消えてしまつたらもうお終い！　ちょっとでも風向きが変わつたら背中からばくつとやられるんだから」

「風向きが変われば、嵐の合図だ。奴らも己の腹具合より命が大事だろ？？」

「はあ、もう知らないよ」

呆れた顔を作りながらも、背中を冷たい何かが撫でていく。
たつた一人で砂漠を渡る技術を誰が教えた。

獣が嫌う香の配合は誰に教わった。

星読みの方法は。

ルルダーシュの近くに居たのはヒイラギとサキだけのはずだった。
大事に育てたはずの甘ったれの泣き虫王子が、どこか違う生き物の
ようにさえ思えてきた。

本当にコザの下した選択は正しかったのだろうか。

狂いのないはずの計画が、とうの間に破綻しているのではないか。
蜂蜜酒のおかげで温かくなつたはずの身体がすつと冷めていくのを感じながら、どこか面白いと思つてしまつていてる自分がいることにヒイラギは気がついた。

店から出ると冷たい空気が纏わりつきセイラは小さく身震いをした。春と言つてもまだ十分に寒い。口が齧ると寒さもぐつと増してくる。白く煙る息をおつて視線を空に向けると、満月には足らない月がふかりと浮かんでいた。

それはひどく赤い。

「お前やんにはどう見える?」

口をきいたのは店と店の間の狭く、じめりとした通路にはまり込むようにして座り込んでいる老婆だ。シルトで飾ったベールの下からはうねつた髪がぞろりと流れ地面上まで這つている。

しわくちゃの唇を彩る紅は月の色より鮮やかで目を引いた。目深に被つたベールのせいで彼女の表情をうかがい知ることができない。

ただあまりにも鮮やか過ぎる唇が別の生き物のようでも、ひと動くさまが可笑しくて、そなへ見つめていた。

目が離せない。

それなのに、見えないはずの頭上の月の姿が脳裏には浮いている。地上の熱気に焦がされた赤い月が、沈んでいく空の色に取り残されていいく。

「……哀しそう」

孤独に耐えかねて泣きはらした田のようにもみえる。

その答えを聞いて、老婆は口角を上げた。しわくちゃで節くれだつた細い指先が天を指す。

唇と同じ色に染められた爪先は見事に磨がれておりナイフのような

鋭さを持つていた。

「アレは人の想いを吸うのよ。哀しいと想うなら、お前さんの大事な人がそう想つているのかもしないねえ」

「ジン」

咄嗟に思いついたのは、置き去りにしてきたジルフォードのことだつた。

「ジン？ お前さんの想い人のことかね」

ベールの向こう側に爛々と輝く瞳が見えた。

鳥肌がさつと立つたのは、風の冷たさばかりではないだろう。地面から何本もの手が伸びてきて足を掴まれているかのように身動きができない。

蜂蜜酒とヒイラギの言葉のおかげで温かくなつた身体は、真冬の湖に落ちたかのように急激に冷めていく。

呼吸すら苦しくなつてきた。

それを救つてくれたのは右腕を覆つた熱だ。

唯の人肌の温度が熱いとさえ感じるほどセイラの身体は冷えていた。雑踏に紛れ、人を押しのけながら一心不乱にセイラの手を引いている女性は、白いコートの下にここ数ヶ月で見慣れた青い侍女服を着込んでいた。

「クックロエ？ なんでここに？」

「黙つて歩いてください」

押し殺した声で告げるとクロエは歩く速度を上げた。

走っているといつてもいい速度で路地を抜けると一軒の家の前で立ち止まり、突き飛ばすような勢いでセイラを中に押しやり背後にはばやく視線を送ると、自らも身体を滑り込ませた。

先の体験から開放され気が抜けたのか床に座り込んでいるセイラのことなど放置して、鍵をかけ尚且つドアノブをありつたけの力で引つ張つたまま、扉の外を透視でもしているのかと想つほどじつと扉を見つめていた。

「イリジルヘ..」

「私の家です」

そつけないクロエの返答に重なるよじ足音がした。

「まあまあ、クロエ。大きな音を立ててじりじったの」

部屋に入ってきたのはカーサだ。

床にへたり込んでいるセイラを見つけるといつも笑っているように見える垂れた目元がはつと見開かれた。

人の波の中を無理やり渡ってきたセイラは、髪型も服もくちやくちやになつてしまつていたが、その顔は見間違えようも無い。

「セイラ様！ まあ、どうなさつたの」

駆け寄つて無事を確かめるよじに、荒れた手のひらがセイラの頬を包んでいく。

色をなくした頬のあまりの冷たさにカーサの瞳が曇る。

「母様。ジキルドの術士に会つたの」

クロエの言葉を聞いて、セイラの様子とクロエが外を気にしていることに合点がいったカーサはセイラを暖炉の前へと導くと娘には安心するようにと微笑み、湯気をたてるヤカンを手に取った。中には数種類の薬草を煮出して作ったお茶が入っており仄かに甘い香りがした。

ヒスイ色のお茶をカップになみなみと注ぎ、砂糖を一カケラ。銀のスプーンで一度円を描くと、セイラへと差し出した。

「お飲みなさい。身体が温かくなりますよ」

言われるがままに一口飲んだセイラの表情が弛んだのを見て、クロエもほっと息をついた。

これで大丈夫。

セイラの心臓は取られてしまわなかつた。

「手荒なまねをしてすみませんでした。あそこをすぐに離れる必要があつたので」

「どうして？」

「セイラ様が話していたのはジキルドの術士です。不可思議な術を使つて人を惑わし貶める者ですので関わり合いにならないほうがよいのです。名を取られてしまえば相手の意のままに操られてしまつとも言われています」

術士に出会つたら、質問に答えてはいけない。

目を見てはいけない。

名を明かしてはいけない。

名を取られ、身体の自由を奪われてしまつことをアリオスでは心臓が取られたと表現するのだとクロエは告げた。

「こんな街中まで入り込むなんて、何を企んでいるのか」

「クロエおやめなさい。ただ祭りを楽しみに来ただけかもしないわ。それに彼らは千ノ眼とキキ///を持つているの。めったなことを言つものではないわ」

いつになく厳しいカーサの声にクロエは唇を噛んだ。

「ジキルドには怖いものがいるの？」

「ジキルドは占い師の国もあるのですよ。それぞれ風読み、月読み、水読みなどのグループに属しているようです。その一つの闇読みは人心を操る術がうまいと聞いたことがあります。彼らのことを持て術士と言っているのですよ」

カーサはもう一口と促し、娘のためにもたっぷりとお茶を注いだ。

「けして術が恐ろしいわけではありませんわ。恐ろしくするのは使い手の心です」

さきほど冷えた手で掴まれたように悲鳴を上げていたセイラの心臓の上をカーサがトンと突くと、注ぎすぎたお茶がカップから溢れ机の上を伝うよに、何か温かいものがあふれ出し、身体の内側に沿つて全身へと巡っていく。

「アリオスの剣も激情のままに振るえばただ人を傷つけるものになりますよ。エスターの舞で邪心を持つて惑わせば国を傾けさせることもできましょ」

「ぐりと頷いたセイラを見てカーサは微笑んだ。

甘い液体を口に含み緊張の糸が切れたクロエはやっと重要なことに気がついた。

なぜ、セイラが此処にいる。

路地で亞麻色の髪を見かけても思いもしなかつた疑問が湧き上がる。それは喉元をせりあがり、ついには爆発した。

「何故、街にいるのですか！」

広間へ入ることの許された一部の侍女たちはセイラが姿を消した成り行きをある程度知っている。

マキナが公言するなど命を出していたので大騒ぎになつてはいなが、ヨーリが探していたこともありクロエの耳にも自然と届いていた。

ハナの耳にも当然入つているだろう。

今頃、可哀想なあの少女は半狂乱かもしれない。

「ちょっと……」

「ハナさんはご存知なのですか」

ハナの名を聞いた途端、油の足りないおもちゃの様にセイラの動きはぎこちなくなつた。

スカートを見下ろしてしまつたと顔を曇らせたセイラにため息一つ。

「あまり心配をかけないで上げてください」

「……いつの間に仲良くなつたの」

「仲が良いわけではありません。……ただ彼女の気持ちが分かるだ

けです「

ハナとクロエは鏡のようなものだ。

お互いのことは良く見える。

ただそれだけ。

いや、見えすぎるといいのは案外厄介なことかもしれない。
自分のことだけで精一杯だというのにハナの不安や焦りが伝染して、
クロエまでため息の数が多くなってしまう。

「クロエはなんで街に？」

「私は……」

クロエはさつと自分の手元を見下ろした。

ない！
いつから。

セイラを見つけるまでは確かに持っていたはずだ。
祈るような気持ちで部屋の中に視線を走らせるが、それはドアの近くにちゃんと置かれてあつた。

倒れてもいいし、割れてもいい。

ごじごじとし、多少不恰好に見えるジンは暖炉の明かりを受けて鈍く光っている。

「お使いの途中です。リティア様がヒューロムの赤酒を」所望だと
かで」

酒に詳しくないセイラは、クロエの困った顔に首をひねったが、ヒューロムの赤酒は中々手に入らないのだ。
もともとヒューロムのものは手に入りづらい。
痩せて小さな土地では食物にしろ酒にしろ自分たちで食べるの精

一杯な量しか作っていない上にアリオスの舌には合わないのか需要が少ないので出回つたりもしない。

その中でも赤酒となれば随分前からヒューロムでさえ造らなくなつた酒だ。

手に入ったのは奇跡に近い。

路地が入り乱れ異界にでも通じてゐるのではないかと思わせる裏街のそのまた奥の酒屋でやつと見つけたのだ。

城に貴族を招く時は、いつも無理難題を押し付けられて侍女たちは四苦八苦するのだが、今回はリディアが一番面倒な相手だ。リディアは部屋の内装から食事、酒にいたるまで全てヒューロムのものにしろと言い出したのだ。

何ヶ月も前から考え抜き見事に整えた部屋のものたちは今頃、喉元まででかかつた文句を飲み込んだ侍女たちにより運び出され、代わりにヒューロムの古臭い絨毯が運び込まれていことだらう。

「夕食にジン様を招くそつです」

ジルフォードに母親の故郷の味を。

そう言わればよいお考えですわと微笑むしか他は無い。

「ジンを……」

彼らは一体どんな話をするのだろう。

「セイラ様もです」

「お招きされてないよ?」

それどころか喚いて逃げ出してしまつた。

「夫婦ですもの。当然といった顔でいけばよろしいですわ。ジン様のことも心配でしょ」「う

密室ではどんな話を吹き込まれるのか分かつたものではない。手回しのいいものでリティアたちは用意だけさせると後の給仕はこちらの侍女がやると侍女の立ち入りさえ禁止したのだ。

「うん」

「では、さっそく城へ帰りましょ」「う

クロエの心配は杞憂だつたのだろう。

誰かがドアをぶち破ることも無く、外の喧騒に変わりは無い。カーサの言つたとおり、たまたま居合わせた術士だつたのだ。外が安全だと分かれば、出来るだけ早く城に辿りついたほうがいい。酔っ払いの横行する夜の街も中々に危険だ。

「母様、ありがとうございます」

続いて礼を言おうとしたセイラの瞳をカーサがじっと見つめた。

「セイラ様には術士が、どんな姿で見えましたか？」

「……ベールを被つたおばあさん」

花嫁が被るような長いベール。

眩しいような白い衣装から伸びるカサカサの手が、どこか奇妙に見えて赤くぬめつた唇が毒々しいほど赤い。その説明を聞いて眉を寄せたのはクロエだ。

「私には灰色のマントを被つた人影にしか見えませんでした」

叩けば埃だ立ちそうなほどボロボロのマント。路地の陽気さとはかけ離れ、そこだけ陰鬱としていたから余計に眼を引いたのだ。

マントは術士の証。

それを知っていたからクロエはすぐに気づくことが出来た。きっとセイラが眼にしたような人物を目にしていたら、奇妙だとは思つたかもしれないが、術士だとは気づかなかつただろう。祭りにはもつと奇抜な格好をしたものがたくさんいるのだから。

「ええ～！……隣にいたのかなあ？」

周りの状景を思い浮かべようとしてもうまくいかなかつた。

赤い月。

白いベール。

洞のようでいて炎のように輝く眼。

「……セイラ様。こちらにおいでください」

セイラはカーサに導かれて別の部屋へと入つた。

大きな鏡の前に立つと、肩から赤い布をかけられた。

ところと光沢を持つたその布は液体と見紛うばかりの滑らかさを持つていた。

指先を差し込めば、とふんと沈んでしまいそうだ。

体のラインに沿つて曲線を描きながら垂れる赤は、形を得て生き物のようにさえ見える。

セイラが体を揺らせば、光が当たる角度が変わり色が少しづつ変化する。

「カーサ？」

そのまま器用に巻きつけられ腰の位置を飾り帯で結ばれ、異国の娘が着る神秘的なドレスのよう。

「ヒューロムの赤です。かつてにはエイナのマントの色でした」

「エイナの。綺麗」

「これはヒューロムがまだ国だった頃のものです。あの頃はまだ……いいえ。ハーディア様がご存命ならば」

カーサの声には懐かしさとビビりじょりもない哀しみが滲んでいた。

「ハーディア様って？」

「……サンティア様のお父上でござりますよ。の方は、本当にヒューロムを愛していました」

痩せた土地も。

僅かな天の恵みに縋つて生きているヒューロムの人々も。あの小国がアリオスからもエスターイアからも他のどの部族からも攻められる事が無かつたのは、一重にヒューロムの赤を創り出したためだ。

身体を巡る命の色に等しい美しい色を。

そこにより重い意味を持たせたのがエイナやエスターイアのゴズロス王であったのは間違いないが、ヒューロムの赤は畏れ敬われる色だった。

ヒューロムにはこんこんと湧き上がる命の泉があり、そこで染めているのだと噂され、攻め入り罰を受けるのを畏れ誰も手を出さなか

つた。

ヒューロムの赤を創ることが許されたのは王族の娘たちだけだった。真冬の冷たい水に手先を沈め、色をなくしていく肌の上を染料が染めていく。幾度真水で濯ごうとも染まつたままの指先はヒューロムの誉れと称えられた。

ハーディアはその伝統を守るうとした。

それこそがヒューロムの存在意義なのだと。

カーサはサンディアから、たつた一度だけ命の色に指先を沈めたことがあると聞かされていた。

それは十歳で初めて許された。

真の王族の娘だと認められた瞬間、これからもずっとこの厳かな儀式は続いていくのだと信じて疑わなかつた。

だが、ハーディアは若くして亡くなつた。

リディアが王位に就くと、彼らの娘は真白な指先を染めることを嫌つた。

ハーディアの心を誰よりも汲んでいたサンディアは心を凍らしたままアリオスへと嫁ぎ、民が見よう見まねで染めた布に他国の人々さえも魅了した色は宿るはずもなく、ヒューロムはただの荒れ果てた場所になつた。

「あの方ならば、ジルフォード様の中にヒューロムを見たでしょうに」

残念だとカーサは眼を伏せた。

世の中はままならない。

ほんの数年、数日、誰かの時間が狂つていれば全てがうまくいったのに。

この布はヒューロムの最後の布だ。

サンディアの母が手を浸し、サンディアもまた手を浸した。

それを今、彼女の息子を支える娘が身に纏つ。

時が狂つていればと願いつつ、そうではないことの幸福を知りせめ
ぎあつ。

ああ、すべてがままならない。

それを諦めを含んだまま飲み込む術も長い年月がカーサに教えてく
れた。

「これはどうかセイラ様がお持ちください」

この色は命の色。

悪しきものを遠ざける魔よけの色。

術士は姿を隠すためにマントを被る。

己を隠し、闇の中から相手を見定める。

もし術士が姿を晒したのなら術をかけるべき相手をすでに知つてい
るということだ。

なぜ、今ジキルドの術士がセイラを狙つかなどカーサには知りよう
も無い。

けれど、上に立つところとは標的にされやすい。

嘗ての夫もそうだった。

カーサは術士の恐ろしさを十分に知つている。

だから、己の持てる最高の守りをセイラへと渡したのだ。

「ありがとう」

跳ね回っていた髪を綺麗に梳いてやるとセイラは照れたように笑つ
た。

この瞬間、カーサにはもう一人娘が出来た。

今までに数え切れないほど多くの子どもを持った。

その中のどの子より厳しい道を進むだろう。

亞麻色の髪を一本に結い上げ背中へと垂らし、目じりにそつと赤を
添える。

アリオスの女の戦化粧だ。

どんな闇の中でも眼がくもる」とのないよう願いを込めて。

「なんだか強そうだね」

ぴりと全身が引き締まる。
どこか自分ではないようで、ひらひらせりめりとしたお姫様の格好
をしていた頃よりずっとしつくつとくる。
カーサはふつと微笑んだ。

「わあ、クロヒと共に帰りなさい」

「ここまでそういうふんだ。返せよ」

セイラが居なくなつたことにより少々氣詰まりになつた空氣を押しやるように、ルルドはヒイラギから耳飾を取り上げる。

乱暴氣味だつたせいで種が一粒だけヒイラギの手のひらに残された。それはヒイラギの内で湧き上がつた疑惑と同じくとても小さなものがつたけれど、確かに存在を示していた。

これが芽吹けば一体どのようになるのだ。これが芽吹けば一体どのようになるのだ。

ヒイラギには想像もつかなかつた。

「ルルド様……つづん。ルルダーシュ様はどんな王になりたいですか？」

「こきなり何を言い出すんだ？」

酔いでもしたのだろうか。

けれど、ヒイラギの頬には赤みがさす事もなく至つて真面目な表情だ。

年中ふざけているヒイラギのその様が逆に可笑しくて、やつぱり酔つてゐるのかと疑つてみたが逸らされるにとの無い視線に折れ、考えてみた。

だが、幾らもしないうちに答えは出た。

「僕は……王になんてなりたくない。王になつた兄上の補佐をしたいんだ」

どんな王になりたいかどこのか王にならうとさえ思つたことが無い

のではないだろうか。

ルルドの中にある漠然とした王のイメージは父親であり、母や彼女を支える貴族たちの理想に他ならない。

一番心惹かれるのはナジユールの姿だ。きっとナジユールが王になれば歴代のどの王よりも強い王になる。容易に想像できるその姿は、ルルドにとって最も理想のタハル王だが、己にはなれない事を重々知っている。

「ナジユール様の補佐ですか」

ヒイラギの声には珍しく笑いを一切含まない非難めいた響きがあった。

それが気にくわなくて、ルルドは眉をしかめたまま詰め寄った。

「何が不満だ。僕には無理だと言いたいのか？」

この被害妄想めいた考えはどこから來るのだろう。

ルルドことルルダーシュは自分のことになると過小評価もいいところだ。

ルルダーシュは殊更小さく生まれた。

医療の十分ではないタハルでは生き残ることが出来ないと危ぶまれるほど弱弱しく、母親の嘆きは酷かつた。

方々に手を伸ばし何とか命を繋いだ息子に母親は惜しみない愛を注ぐよりも鞭を打つことでルルダーシュの行く末を照らし出した。お前はナジユールに劣るから倍の時間を勉強に費やしなさい。剣術の稽古もより多くと。

それを実行してもナジユールには敵わない。

誰も教えなかつた。

十歳も年の離れたルルダーシュの筋力ではナジユールとは対等に戦えない。

ルルダーシェの頭脳がよくても10年先を行つてゐるナジユールに追いつくのは容易ではないと。

伝えなかつたのは自分も同じかとふうと思が漏れた。

「ねえ、ルルダーシェ様？ 僕もサキもルルダーシェ様が2番目でいいやなんて思つて仕えていませんよ。ううん。補佐なんて2番目ですらない。僕たちはルルダーシェ様を王にしたいんだ」

「何を言つてゐるんだ！ 兄上以外にふさわしい者なんていない

「なぜです？」

「なぜつて

そんな当然のことを今更説明しなければならないのか。驚愕に開かれた瞳はそう語つていた。

「ナジユール様はそりや、剣術も馬の扱いにも長けていますよ。サクヤ殿が先生ですからね、頭も悪いわけが無い。だけど、傲慢さは力ではない」

「お前、兄上を侮辱する気か！」

ルルドが机を叩きつけ立ち上るとと鋭い音が店内に木靈し、何事かと人々の視線が二人へと集中する。

笑顔でなんでもないと周りに伝えながら、ヒイラギは机の下からルルドの脛を蹴り上げた。

痛みに小さく声を上げたルルドはヒイラギの目立たないでくださいよとのメッセージを受け取りしぶしぶ腰を下ろした。

腹の中で煮えたぎる怒りは出口を探して喉元辺りを行つたり来たり

している。

「別にね、お一人を仲たがいさせたくて言つてはいるわけじゃありませんからね。そのところ分かっておいてもらわないと」

今更そんなこと言われるまでもない。

ナジユールを慕いきつてはいるのを一番知つてはいるのはヒイラギだと自覚している。

「そりや、仕えている訳だからちょっと甘めの採点だけど、タハルのためを思えば次の王はルルダーシュ様が良いと思うんですよ。」

「……何をもつてそんな馬鹿なことを」

「ナジユール様はタハルを守りつとしてる。だけど、タハルのことはちつとも信用してはいない。あつ、口出すのは全部説明が終わつてからにしてくださいよ」

手振りでルルドを制したヒイラギは残つていた蜂蜜酒を一口で飲みきつた。

「ナジユール様のやり方は歴代の王のほとんどと同じ。力でもつて必要なものは他から取つてくる方法。食料にしても人材にしてもね。いい方法だ。取つて来る労力だけですむもの。だけど一過性のものだよね。この先、何十年何百年タハルの血肉になるものじゃない」

一粒取り残されていた種を机の上に置いた。

「王様は信じてなきや。この国は死んでないって」

街でのことがほんやりと思に出された。
死んでいるのと同じだとナジューは言つたのだ。

「まあ、なりたい。なりたくない。で決まるものではありませんけど。それにしても、この中に入れておいたはずの香は何処へやつたんですか」

本来、香がはいっているはずの耳飾には種が入つている。

「ああ、邪魔だつたから捨てた」

「……ん~なんだか空耳が聞こえたけど、氣のせいだよね? ねえ、ルルダーシュ様。中身はどこへやつたんですか?」

「だから、捨てたと言つていい」

「使つたの間違えではなく? 今なら訂正する時間をあげますよ?」

「捨てたといつたら捨てたんだ! 何が問題なんだ。必要なら直ぐに配合できる」

「ぱつか! あの香がどれだけ高価か!今、配合出来ると
言つましたか?」

「何なんだ? いつの間にそんなに耳が遠くなつたんだ。お前は

「その中に入つていたのは獣除けの香ではないんですよ?ルルダーシュ様に配合が出来る?」

ルルドの苛立ちは頂点に達した。

香の配合も出来ないと嘲つてゐるくせに何が王にだ。

「狂いの香だらうー 僕にだつてそのくらゐ出来るセ

獸を追い払うのではなく、逆に引き寄せて意のままに操るための香だ。
獸ごとに微調整が必要だが、獸払いの香と難しさはあまり変わらない。

それなのに出来るはずがないといつた響きの声がルルドを突き刺した。

悔しくてキッと睨みつけた先でヒイラギは珍妙なものを見るような顔をしていた。

いつもの三割り増しでしまりの無い顔だ。
もしルーガがいきなり人語を操つたら人はこんな表情になるのかもしない。

「僕にはできませんよ。ルルダーシュ様。サキにだつて……ナジユール様、つうん。歴代のどの王にも出来なかつたはずです」

「はつ？」

今度、間抜け面を晒すのはルルドの方だつた。
ぎゅつと吊り上つていた眉がすとんと落ちる。

その様子を見て少しばかり余裕の出たヒイラギは考えを巡らせた。
この世間知らずの王子様にどこから説明したらいいのだろう。
そして、自分は何を聞き出せばいいのだろう。

「いいですか。タハルで狂いの香の配合が出来るのはドルジュとセイオンの一族だけです。まあ、セイオンはちょっと前に滅びてしまつたから関係ないですけど。門外不出の配合率の香は田ん玉飛び出

そうなほど高価ですよ。だけど、他の誰も配合が出来ないから王族だつてドルジューから買わなきゃいけない。ここまでお分かりですか？」

あまり分かつていないうな顔だ。

ルルドの表情を見るかぎり、砂漠の水に等しいほど価値のある香の作り方は、厳重に守られている割には簡単に作れるものなのかもしれない。

「強欲なドルジューが教えてくれるわけありませんからね。……誰に教わったんです？」

「リュウの頃に行く手前で会ったサルーという男だが」

その名を聞いて、今日はよくよく驚きを誘つ名前が出てくるなと思った。

「知り合いか？」

「知り合いつてほどではありませんが。生きていたことにびっくりです。もうとつぐに死んだものだと思っていました。まだ廟を作つていましたか」

「うん」

その男はたつた一人で砂漠の真ん中で日干し煉瓦を作り、一つ一つ積み上げては「もう少しだ」と呟いていた。

日干し煉瓦で作っていたのは人が十人ほど入れる大きな建物だつた。

丸屋根の質素な祈りの場。

リュオウの慈悲を請う場所。

それが建てられている場所は人の行きかう場所とは離れている。ルルドもまたま通つただけで普段なら足を向けるところではない。そんなところに何故作っているのかと聞けば約束なのだと、真黒な顔でサルーは笑つた。

「彼はね禁を犯したんですよ。香の配合率をタハル以外に持ち出そうとした。だからあれば罰なんです」

「罰？」

「砂嵐がもつとも酷い場所に一人で廟を立てリュオウの怒りを鎮めろと。そうすればお前の罪を赦し一族がその責めを負うことはないつてね。永遠に終わらない罰です。作つても作つても砂嵐が飛ばしてしまう。近くにオアシスもないでしょう？　とっくの前に死んじやつたとばかり」

「約束だと言つていたのはそのことか」

「死んでいたほうが楽だつたのに」

ヒライラギは薄く笑つた。

「どうことだ？　サルーは罪を償つために一生懸命なのだぞ」

「彼が作つてているのは一族のお墓ですよ。完成したあかつきには一族百数十人の頭蓋骨で埋め尽くされる運命です」

「サルーの一族は免責されるはずだろ？？」

「先ほど言つたでしよう？ セイオンは滅びてしまったと。サルーがもし万が一廟を完成させたとして赦されるのは配合率を外に出そうとしたことだけ。セイオンはサルーという男を生み出した筈で皆殺しにされました」

「そんな、馬鹿な！ 誰がそんなことを！」

「誰つて……」

ヒイラギはルルドの一 番嫌いな顔で笑つた。

「ルルダーシエ様の大好きな兄上ですよ。……もしかしたらサルーは知つていたのかもしれませんね。だから、ルルダーシエ様に香の作り方を教えたのかも」

サルーが笑つている。

太陽に焦がされ真黒になつた顔で。

もう、十七つめの廟だと言つた。

水を分けてやるとありがたいと拝み、全てリュオウに捧げた。お礼にと彼は獣を操る香の作り方を教えてくれた。

もう自分には必要ないからと。

部屋の中からは椅子や机といった調度品が運び出され、厚い絨毯が敷かれた床の上に円を描いて座る。中央には山と盛られた料理に、リューイの乳から作った酒が置かれている。

絨毯の鮮やかさに比べれば、料理はどこか色あせて見える。その光景にうんざりしたキアは一人だけ椅子を窓際に置き、侍女を呼びつけて用意させたエスターのぶどう酒を口の中で転がしていった。

なんて馬鹿らしい。

ここにはエスター、アリオスの最高級のものがそろっているというのに、なぜ不味い自國のものをわざわざ作れというのか。思い出しただけで気分が悪くなりそうな赤酒も用意しろと言つたのだ。

内装まで湿っぽいヒューロムのものを持ち出して、キアは父親の馬鹿さ加減にめまいがしそうだった。

アリオスのものを食べなれているジルフォードなどもつと辟易としているのではないか。

先ほどから全くといつていいくほど食が進んでいない。利用するために取り入ろうと思うのならば、少しでも心象を良くしておきたかったけれど、父親と彼の連れてきた取り巻きに囲われているので手出しが出来ない。

仕方なけれど、横目で様子を探るのがせいぜいだ。きっとジルフォードは酒が好きではない。

くせの強い乳酒を断つたのは当然としても、エスターのぶどう酒さえ遠ざけた。

部屋の中で異彩を放つジルフォードの白は別の世界のものようだ。とうとうと語る父の言葉など、届いているかどうかも歎しこ。

「のう、ジルフォード。サンディアの、お前の母親のことだが」

伏せていた瞳が上げられ、リディアを見る。

リディアの部屋に招待されてから、かなり酒盃を干し、やつと本題に入る気になつたようだ。

正面から視線を受けたリディアは一瞬、ぎくりと身を竦ませたが、酒の力に押されて調子を取り戻す。

いつこうに減らないジルフォードの胸に無理やり酒を注ぎ足すと反応を待つた。

「何でしょう」

冷えた声だった。

ジルフォードが広間を後にする時に発した言葉より、さらに冷たく硬い。

明確に線引きされた世界に無遠慮に足を踏み入れた男を拒絶するような声だ。

酔いの回つたリディアにはその違いなどもはや区別がつかなかつたのかも知れないが、キアは咄嗟に鳥肌の立つ腕を擦つた。

「哀れだとは思わんか。王妃を務めた人間が寂れた屋敷に取り残されているなどと。サンディアは聰い娘だつた。田舎で朽ちるには忍びない」

ジルフォードの西の離宮の思い出は、おぼろげで擦り切れてしまつた夢のようだ。

まだ数人の侍女がいてサンディアが笑つている。

遠い遠い暖かな夢。

けれど、その中に先日見たほど嬉しそうな母の姿はあつただろうか。

どれほど鮮明に記憶が甦つても、きっと見当たらない。
哀れだなんてついとも思わない。

一度として尋ねたことも、手紙すら出したことの無い彼らにはサンディアの近況を知る手立ては無い。

リティアも、また彼の取り巻き立ちも彼女がどうして、どんな生活を送っているかなど知らないのだ。

「母上は、西の離宮を離れました」

「なに！ では城にいるのか？」

「いえ」

言葉少なのジルフォードに苛立ちが増す。

それに比例するようにリティアの酒で赤くなつた頬の色が更に増した。

ゆっくりと間を持たせた深呼吸は深く考え込んでいるように見せかけていたが、キアには怒鳴りつけるのを我慢しているようにしか見えなかつた。

「ジルフォード。サンディアを城へ連れ戻せ。お前にはそれが出来るはずだ。今まで無下に扱われていた母親の権利を取り戻すのだ」

傍から見ているとリティアが熱を上げるたびに、ジルフォードは冷めていくような気がした。

「サンディアを五元帥の一人にするのだ。それがこの国のために。お前のためだ」

「やうだ」と相槌が打たれる中、首が振られた。リディアの言葉に反抗するために。

「なぜだ！」

首をすくませるとりまきたちの横でジルフォードは雪像のように瞬きさえしない。

「母上はそんなことを願つてなどいません」

彼女がやつと手に入れた場所は、ただのサンティアを受け入れてくれる。

背伸びをして、いつもピンと神経を張り詰めていなくともあるがままを受け入れ、慕ってくれる。

見返りなど求めない愛情の温かさに再び触れることが出来たのだ。あの幸せな空間を奪うつもりは無い。

そのためには見知らぬ親族を拒絶するのは難しいことではない。

「力が欲しいのは貴方だ」

爆ぜる寸前の果実のような赤い顔がどす黒く濁る。

やりとりを傍観していたキアは、いけないと思った。

此方が怒鳴りつけ、お前になど頼まないといつてしまえば、向こうは嗚呼良かつたと手を打つに決まっている。

向こうには憂いが一つなくなり、此方は貴重な金づるを失うことになる。

ジルフォードは馬鹿じゃない。

母親を盾にして傀儡にはなりえない。

父は選択を間違えたのだ。

いいや、目の前の人間をあまりにも軽く見ていたのだ。サンティア

もジルフォードも。

一度怒りに我を忘れた父を止めるのはおじぼれを頂戴しよつと張り付いている馬鹿共には無理は話だ。追随して怒りを大きくする役にはたつが、冷静さを取り戻すようにやんわりと言葉を挟むことなど出来たためしがない。

「ジルフォード」

本当は新しいドレスで小汚い絨毯の上になど座りたくは無かつたけれど、彼らの間に割り込むにはそうするより他は無い。

膝が絨毯の上についたとき嫌悪感がせりあがつてきたけれど、ジルフォードの顔を見れば少しばかり和らいでいく。

ジルフォードにはヒューロムを思い出せるものは何も無い。ちらりと向けられた娘の視線にリティアは開きかけていた唇をぎゅつと閉じる。

可愛い一人娘に手を上げるビビリか怒鳴り声一つ上げることが出来ないことを知っているキアは、その一瞥だけで父を関心から切り離した。

膝の上の白い手にそつと手を添える。

触れられることに慣れていないのだろう。憎らしいほど重かな手がびくりと震え、手の下で拳を握る力が強くなつた。

この青年は、此方の意のままに操れるほど愚かではない。けれど、その脅威を完全に跳ね除けることが出来るほど人にも慣れていはない。

「ヒューロムがどんなに貧しいか貴方に分かる？ 皆を生かすために少しでも力が欲しいわ」

ヒューロムの貧しさは一夜中語り続けることが出来る。

苦しそうに寄つた眉は本物だ。

望むままに生きるために力が欲しいのも本当のことだから自然と声に力が入る。

見上げたジルフォードの無表情が少しばかり乱れた気がして心臓の音がとんと跳ねた。

「私、勉強がしたいの。生きていくためには必要な。大切なものを守るためにも必要なのよ。ねえ、お願ひよ。ジルフォード。ここにはすばらしい教師がたくさんいるのでしょうか？ 私をここに置いて勉強させて」

縋るような視線などお手の物。

貴族たちの間を渡つていいく上での知識が圧倒的に足らないのは確かだ。

もともと苦労することは大嫌いだが、欲しいものを得るための労力を惜しむつもりは無い。

戸惑つたように瞳の色が揺れた。やはりそうだと表面上は今にも泣きそうな表情を作りながら、心の奥底でくすりと笑う。

助けて欲しいと縋る方がこの可哀想で優しい青年は心が揺らぐのだ。もう一押し。

涙でも流して見せようか。

キアの背後で来訪を告げるため、扉を叩く硬質な音がした。

扉を叩く音は思いのほか室内に響き、ジルフォードの意識も一瞬向こうへと向いてしまった。

そうなれば、今涙を流したところで効果は薄い。

ため息を飲み込んだキアも憤然と扉へと視線を送る。射るような視線を受け、びくついた侍女が扉を開けると一つの人影が見えた。

手前の女性は深い青色をしたアリオスの侍女服を着ており、少し後ろにいる少女は息を呑むほど美しい赤を纏っていた。

実際その色を曰にしたヒューロムの侍女は禁忌の色を見てしまったかのように小さな悲鳴のようなものを上げて目を伏せた。

顔を伏せたままの侍女に代わり、クロエがセイラを中心へ入るように促した。

客を前にして何も出来ないなど侍女にあるまじき失態だと僅かに咎めるような視線を送つたがまだ少女のような侍女は気づくことは無かつた。

「遅れてしましましたか」

クロエに導かれて部屋に入ってきたセイラに一同ははつとなつた。今日中に再び目の前に現れるることは無いだろう。この予想を打ち破られたこともあるが、彼らの表情に感嘆が含まれていたのは、きりりとした立ち姿のためだろう。

昼間の甘く柔らかな雰囲気をかもし出していた少女は一変して勇ましい。

その姿を見てキアは何故か歯噛みしたいほど悔しかった。自分が捨て去るとしているものを身に纏い輝かしいセイラが疎ましい。

振り向いた拍子にジルフォードから離れた手に我知らず力が入る。握り締め皺の寄ったドレスは自分が望んだものだというのに、急に価値の無いガラクタになってしまったような気がした。

「赤酒をお持ちいたしました」

差し出されたビンを受け取つたりディアの侍女はうろたえた。

他のものを入れるなどいう命を受けているが、まさか侍女の身分で王女に出て行けなど言えるはずが無い。

そろりと主を伺つてもリディアはセイラを見つめて、いや、彼女の纏う色を見つめたまま指示をする素振りも見せない。

うろたえた侍女が声を上げる頃にはセイラはクロエによつてジルフォードの傍へと導かれている。

扉が開いた瞬間からジルフォードの視線も思考も完全に奪われたままだ。

揺れていた色は、もうセイラしか見ていない。

セイラが微笑めば、ぞくりと震える。

慄いたよう。元のよう。

ああ、なんて気にくわない。

キアは立ち上がるジルフォードの視界を遮るよつて前に出る。セイラに詰め寄つてみても昼間の弱さは何処にもない。

キアを見つめる瞳には憤りも怯えもない。

それがまた怒りを生む。

「ちよつと、セイラ様をお呼びしたつもりは無いのだけれど。これはヒューロムの一族のための集まりなのよ」

出て行け。

ただの小娘などお呼びではない。

キアの言葉は強く、クロエでさえ不快感で眉が寄る。

「お前もよ。誰も通すなと言つたでしょ。」

飛び上がつた侍女は顔を伏せて唇を噛んだ。

彼女の顔にはどうにか失敗を取り戻そうといつ思つよつも、もうダメだと絶望で色付けがされてる。

クロエの見た限りキアに主を務まらない。

アリオスを足がかりにしようとするとならばなお更だ。

アリオスでは女主と侍女は一つの隊に等しい。

侍女に慕われない女主はやつていけない。

どうにかうまく擦り寄つてキアがここで暮らすよつになつてもいくらももたないだろつ。

「クロエ。君は帰つて」

小さく告げられた言葉に撫然とした。

こんな状態で置いていけるわけがない。

そんなクロエの心情を呼んだのか、セイラは頼みたいことがあるのだと微笑んだ。

「ハナにね、心配かけてごめんつて伝えといへ」

「……わかりました」

大丈夫だろつ。

今のセイラにはハナを気遣う余裕もある。

この部屋の中で一番落ち着いているのはセイラだった。ここは彼女の舞台だ。張り合えるものなど誰もいない。

「貴女もよー セイラ様」

背後からヒステリックな声がクロエを襲つ。伴つて部屋から出て行かなかつたことが腹立たしくて仕方がないらしい。

主の言葉は絶対。今ならばセイラの言葉を忠実に実行するのがクロエにとつては正しいことだ。

すばやく部屋を出て、伝言をハナへ。

無駄な動きは一切しないこと。

けれど、クロエは一度だけ後ろを振り返つた。

閉じていく扉の向こうでセイラの腰に白い腕が巻きついた。

「セイラは妻です。それでも認めないとこつなれば、此処にいる必要はない」

そこには心優しい青年の顔は無かつた。

「ジルフォードー」

「招かれもしていないので、来てごめんなさい。気に入らないのなら直ぐに出て行きます。だけど、先ほどの非礼に対する謝罪の時間をどうか与えてください」

そういふとセイラは居住まいを正した。

「遠いところをわざわざお越しへださったのに、話も聞かず飛び出してしまって申し訳ありません」

セイラは深々と腰を折つた。

「一つだけ訂正をさせていただきたいのです。ジニースが私の持ち物ではないことは事実です。どうかこれだけは知つておいてください。けれど、双方が納得しヒューロムとジニースが手を組むことに否やはりません」

「なに?」

「互いの技術をうまく使って新たな商品を作り出すことには賛成です。けれど、私が出来るのは相談の場を設けるだけ。一方的にジニースの誇りを切り売りしろと言われても彼らは納得しないでしょう」

「セイ。今回の和睦にジニースは関係ない」

ルーファに確かめたのだから間違いは無い。

「国間で交わされたのは婚姻による和睦をはかるといつことのみ。ジニースを引き合いにだす必要はないと告げたジルフォードを見上げてセイラは微笑んだ。

「そ。だから、これは純粹に商売の話。親族とか故郷とか関係なくね。利益が絡んだ複雑な話は私向きではないし、ジニースには優秀な商売人がいっぱいいるから彼らに任すよ」

昼間は一瞬で頭に血が上つてしまつたけれど、ジニースの利益になることをセイラがつぶしてしまつるのはもつたいたいない。

「交渉の場を持ちたいという話ならばいつでも伺います」

言いたいことを言い終えた後はさつさと退散することにじよつ。

長く居座つて彼らの機嫌を損ねたいわけではないのだから。

「では失礼しますね」

どうするかと視線だけでジルフォードに問えば、同じ結論を出した
ようで無言で頭を下げ退室することを告げる。

怒りに歪んだ顔をしたキアなど視界にも入ってはいない。
差し出された手に口の手のひらを重ね歩き出す。

扉をくぐる寸前、今まで黙つていたリディアが口を開いた。

「それはヒューロムの色だ」

「はい。とても美しい」

リディアが何を想つたのか、きつくり引き結んだ口元から読み取ることは出来ない。

部屋から出てしまつるのは簡単だった。

二人の足取りを鈍らしたのはキアの焼け付くような視線と、リディアの一言だけだったから。

「ねえ、ジンったら、ちょっと待つてよ」

セイラの言葉に反応して歩みは次第に遅くなつていいく。
狙つたわけでもないのに、そこは毎間に分かれたきりとなつていて
東屋の近くだつた。

存在を確かめるようにいつもより強く握つた手の力を緩め、二人の
距離が広がつた。

宙ぶらりんの手の先は薄闇の中を彷徨つて結局どこにも行きつづけ
とは無かつた。

振り向くのが怖い。

セイラの顔に浮かぶのがあの時と同じように無表情だつたらどうし
たらいいのだろう。

それどころか拒絶の色がそこにあつたとしたら。
全身を巡つた冷たい血が心臓を襲つ。

冷たささえ通り越し、ぎちぎちと痛かつた。

慣れっこになつた無関心は、セイラが絡むと何故かうまく使えない
のだ。

「ジン」

「ジン、こっち見て」

ジルフォードを呼ぶ声にはいつもどおりの温度があつた。

いつもならこう言えれば振り向いてくれるはずなのに、ジルフォード
は背中を見せたまだ。

頑なに動かない背中からは、振り向きたい衝動と拒絶される恐怖が

せめぎあつてこむ」となど云わるはすも無く、セイラは急に不安になつた。

やはり、呆られたのだろうか。我儘ばかりの役立たずで嫌われてしまつたのだろうか。

先ほどまでの決然とした気持ちは、しおしおと沈んでいく。せめて指先だけでも繋がつていれば、ジルフォードの心情が読めただろうか。

「嫌いにならないでよ」

暗闇を彷徨つように両手を前に突き出した。

セイラの手が伸びきると、ジルフォードが振り向くのどさうが速かつたか。

「セイ。『めん』

気がついたときに痛いほどに抱きこまれていた。

今までのようくに触れるか触れないか、羽で包むかのように優しくではない。

背中に回された指の形さえはつきりと分かるほど強く。

鼓動が聞こえる。痛い痛いと叫ぶようにいつもより速い。耳朶に触れる声は悲痛なほど掠れていた。

「『めん』

「どうしてジンが謝るの。君は何も悪くないじゃない

「セイに不快な思いをさせた」

今までに無かつた状態のせいがバランスを崩して、一人してしりも

ちをつくる。

それでも腕が離れる」とはない。

長い一日だった。

昨日見たはずの花流しなども「向年も前の」となのではないかと思つてしまつ。

全ての感覚が、今このときに埋め尽くされ、ほかの事はおまほばにならぬ。

胸に走つた痛みも悔しさも、頬に受けた熱も。

「ねえ、顔をみせて」

その言葉に肩に押し当たられた頭がおずと動く。髪が首元を撫でていくのがくすぐつた。

白い頬に手を伸ばせば一瞬の躊躇の後受け入れられた。伏せられたジルフォードの瞳の色は分からぬ。

瞼の裏に隠れた瞳はどんな色なのか無性に知りたくなつて、瞼にそつと口付ける。

それには絵本の中にいた魔術師の魔法ほど効果があった。

驚いたジルフォードが目を開き、一瞬のうちに瞳の上を数多の色が駆けていく。

「私も謝らなきやいけない」とがある

「なに?」

謝られる」となど無いはずだとジルフォードが首を傾げながら尋ねる。

「私、ジンにやつあたりしたの。他の王女様が良かつたかなんて馬

鹿なこと聞いたちやつた。『めんね

一選べるはずないものね。

声に出すことが出来ないまま口の中に残つた言葉が、誤つて入つてしまつた砂のようにつまでも居心地悪く居座つた。そうだと肯定されてしまえば、きっと蜂蜜酒の効果もカーサからもらつた温かさも消えてなくなつてしまつ。

頬に添えたセイラの手のひらをジルフォードの手が覆う。

「私は」

強い強い赤い瞳。

けつしてそらされる」とは無い。

「セイがいい。セイ以外はいらない」

他の何もかも。

言外の言葉にはつと息を飲む。

セイラがしたように、瞼の上に口付けが落とされた。田じりに溜まつた涙にも。

「……ダメだよ。ジンは大切なものをいっぱい持つているんだよ。だから大事にして。自分のことも、アリオスのことも。それで、私の手をとつて」

きゅつと手を握りこまれると、頬から手が離れてしまう寂しさと、包み込まれる心地よさが同時にやつてくる。

「大切なものは一つでいいと思っていた。たくさんあつても守れな

いから」

「大切なものはたくさんあつてもいいんだよ。もっと強くなれるから。もっと優しくなれるからってカエテが言つてたよ。」

「私は自分の無力さを思い知らされた」

「あつ。それは、私も同じだな。弱くて矛盾だらけで我慢だつて思い知らされたよ」

額をあわせたままセイラが笑えばジルフォードにまで柔らかな振動がくる。

「そつだ！ ジン平氣？ デジか変なところはない？」

首をかしげるジルフォードに術士に会つたこと、思わずジンの名前を出してしまつたことを告げたが本人は可笑しなところはないといつ。

「そつか。それはよかつた」

ほつと息をつき倒れこむ。
温かい。

これがあの時の自分と同じほど冷たくなつてしまつたらと思つてじつとした。

ぐいぐいぐいと頬を寄せる。

ああ、良かつた。失わずにすんだのだ。

「術士のことが心配？」

「……ん。ジンに何があつたら嫌だ」

「私はセイになにかある方が嫌だ。墓守のところに行ひつ。彼はそ
ういったことに詳しいから」

「ああ、懐かしい。エイナの色だ」

ほつと零れ落ちたため息には千年の月日で濯いでも一向に薄れるとの無い愛情が含まれていた。

濁つた眼の上に衣の赤を映し、溶けていく。

今でも昨日のことのように思い出せる。

あれは美しい舞だった。

誰もが畏れ慄き見惚れる戦女神の舞だ。

翻る衣の一つ一つが彼女の血潮のようだった。

金色の光を閉じ込めた瞳は遙か彼方を想っていた。

それはいつなのか。

百年先か千年先か。

それとも今、この時なのか。

目の前の少女は戦女神というには幼すぎる。

それなのに、瞳には同じ色を宿している。

いつも、そんな瞳をするのは女なのだ。

墓守には、それがどうしてなのか分からなかつた。

あの人は言った。

女は悠久を編むのだと。

彼女の言うことは分からぬことだらけだった。おそれぐどんな賢者に聞いたところで一生、頭を悩ますことになるに違いない。

墓守は決して人では出来ないほど長い時間存在し、数多の賢者に出会つたけれど答えを見つけることが出来ていない。

なぜか『色なし』の近くには、そういう瞳のものが多いのだ。

墓守はセイラの瞳の中にエイナには無かつたものを見つけた。

「おや、姫さん。術士に会つたね。それも魔女だ。印をつけられて
いる」

「魔女？　印？」

「（）から説明が必要なのかと浮かんだ疑問を飲み込んで、ふむと唸
る。

「闇読みのことを術士（）のことは知つてゐるみたいだね。その中で
も女は特別だよ。恐ろしくてとても強い。彼女たちのことを魔女と
いふんだよ。狙いをつけられちゃ、ちょっとやそつとじや逃げ出せ
ないよ。お姫さんの田の中には魔女の鎖が見えちまつてゐる。視線を
合わせただろう」

「うん。……なにかまづい」とが

「まあいといえぱまあいし、やつでもないと思えぱそつでもない」

曖昧な言葉を吐くと墓守は再び唸つた。

「セイの身になにか危険な」とが？」

墓守はにひょと笑つた。

王子様が他の人を心配している。

彼にとつて何かを守るのは無関心が一番良いはずだった。ほんの少
し前までは。

「魔女も昔に比べ弱くなつた。すぐに姫さんを（）出来るほど
の力はな（）た。鎮の契約を結ぶとね姫さんの見たものを向こつも見

る」ことが出来るのさ。契約の度合にもよるけどねえ、想いまで云わつちまつことある」

本来は怖ろしいものではないのだ。

鎖は絆。血の螺旋。

遠く離れた友に無事だと知らせるためのもの。長い月日でその意味合いを失い、一部の者のみがその能力を失わなかつたために忌避される。

「わつそれつて拙いよね。お城の中も見えてるつてことでしょ？」

自分たちは秘密の通路を歩いていく。

この情報が漏れてしまつては一大事だ。蒼白となるセイラに比べ、墓守は大事だとは思つていらない様子だった。

「やうさね。だけど、そんなに悪いものでは無せやうだが。時間が経てば消えてしまつよ」

「本當? 大丈夫かな?」

「安心おし。それよりも姉さんの友人のことを心配するんだね。可哀想なぼつやを絞め殺しそうな勢いだよ」

「絞められ……ぼつや?」

そんな物騒な友人をいつのまに持つたのだろう。

それに、ぼつやとは誰だらう。城の中にはセイラより年齢の低いものはそういうない。

首を傾げるセイラと反対にジルフォードには心当たりがあつたようで、ちらりと墓守を見るとジルフォードの考えを肯定するようだ。口

元がニイとつりあがつた。

「……ハナ殿とケイト殿」

「あつー！」

「早く行つてやつたりどつだい？ まつせひとつたら、とことどまつちりだよ？」

秘密の通路を走る足音が一人分。

同じ速度で離れていく。

『ハナー早まつちやダメだ！』 そんな言葉が響くのはもう少し後のこと。

淡く発光しているかのように闇に浮かび上がる数多の棺。視界の悪い場所を危なげなく歩く影は、棺に刻まれた数字を逆に辿り始まりの場所にたどり着くと足を止めた。

一際大きな棺の表面には装飾文字で1と番号がふられ、太陽を咥えたカラスの紋章が刻まれている。

寄り添うように置かれている一回り小さな棺には雷が彫り込まれていて、

いる。

それぞれの模様は初代王マルスと、その妻エイナを表している。

けれど、これは探し求めていたものではない。

「今日はよくよく客の来る日だ。それにしても、お前さんよく来たねえ。」

いつの間にか傍らには己の腰ほどの身長しかない老人が立っていた。咄嗟に腰のナイフを抜き、臨戦態勢に入つたがその行為がさも可笑しいというように老人はヒヨヒヨと奇妙な声で笑う。

「姫さんの鎖を辿つて来たんだねえ」

白濁した瞳がぐわりと大きくなつた気がした。

ナイフを構えたまま、逃げの体勢に入りたがる右足を叱咤して老人を睨みつけたが、彼に変化はない。

「お前さん、ローダの棺を探しているんだろう？ 残念だが此処にはないよ。いや、言葉を変えたほうがよさそうだ。ローダの棺なんぞ、どこを探しても見つかってこないよ」

仮面のようないい表情の変わらない女の眉がぴくりと動いた。

普段の彼女を知るものからすれば奇跡に近い僅かな変化に墓守は気にも留めていなかつた。

「そんなわけが無い」

「そんなことを言つたって無いものはないんだよ。お前さんが残りの人生をつぎ込んで探したところで見つかるまいよ」

「マルスの血筋から『色なし』が生まれるはずが無い」

墓は無いと言つた墓守の声と同じほど女の声にも確固たる自信が伺えた。

そこまで知つているのか。

墓守はすんと鼻を鳴らしながら、体いっぱいに空気を吸い込んだ。

「そうだね。マルスの血から『色なし』は生まれない。それにエイナは魔女だ。子はなせない。……おや、これは知らないようだね」

これは削られてしまつた記憶。

国始めの英雄の妻はジキルドの魔女だった。

かつての魔女は不思議な舞と共に酩酊状態に入り、未来を垣間見ることを許された。

ただし、己の血を次世代に残すことは出来ない。

「確かに今の王たちはローダの血を引いているよ。マルスの後を継いだのはローダの子どもなんだからね」

墓守が2と刻まれた棺の角を杖で叩くと、一瞬だけ棺が光つた。

「お前さんからは魔女のにおいがする。タハルの匂いもする。その上、コザカ。どっちつかずの放れもの。身を滅ぼすよ?」

「お前には関係ない」

「そうさね。だけど一つだけ教えておいてやるよ。年長者の言葉に聞いていて損は無い。人の復讐の肩代わりをやってやつても誰も救われやしないよ。そのくせ、それは復讐ですらないのだから」

墓守はもし、女がナイフを振りかざしたらいこの空間から弾き飛ばしてやろうかと思っていた。

魔女と同じく墓守も夢物語の住人になりつつある。

日増しに衰え、力を無くす。

けれど、この場所の支配者は墓守だ。

女をたたき出すのは容易いが、不気味に光っていた刃は音を立てることもなく鞘に収まった。

「ソレにもう用はない」

他の檻には田もぐれず、女はもときた道を引き返す。

「ローダはコザを愛していた。お前さん古代語は出来るかい? アリオスの意味を? 知らぬなら調べてみるといい」

「返答はない。」

足音さえも闇に紛れ、墓守だけが取り残された。

「ローダ」

久しぶりに口にした主の名前は、まだ耐え難いほどの中の哀しみを引き起こした。

「やあ、サキお帰り。用事はすんだの？」

新たに注文した品をぱくつきながら、ヒイラギがひらつと手を振つた。

ヒイラギとサキは仲間ではあるけれど、馴れ合にはしない。店までやつてくるなんて珍しいと思いつながらも、こつもの無表情からは何も読み取れはしなかつた。

「ルルダーシュ様は帰つたようだな」

街に連れ出しだなんて報告してやしないのこサキには何でもお見通しだ。

「ん~半べそかきながら帰つちゃつたよ。サーの話をしたら兄上がそんなことするはずが無いって言いかけてね。今日はお月様が赤

いから情緒不安定なのかな?」

赤い月は魔物の眼。

遙か上空から誰に災いを落とすかと画策しているのだ。
その作り話を幼いルルダーシュに教えたのはヒイラギだけれど、彼
は未だにそれを信じている。

そんなところは甘ったれのお馬鹿さんのままだ。

「ヒイラギ。アリオスの意味を知っているか?」

珍しいことがあるものだ。

サキがヒイラギに事実確認ではなく質問をしている。

「んん? 古代語のお勉強? うふふ。いいよ。ヒイラギ先生が教
えてあげる」

ヒイラギは水の入ったグラスに指先を突っ込み、机の上に水の線を
描き出す。

「アリオスは元々一つの単語だよ。『アリーート』と『オズ』のね。
『アリーート』が約束つていう意味でしょ。『オズ』は土地とか場所
つて訳すよ。つまりアリオスは約束の土地つていう意味だよ」

「約束の地」

「そう。タハルは『タ』がたくさんで、『ハル』が命で、多くの命
つていう意味。今の荒涼とした土地からは考えられないけどね。ル
ルダーシュ様が言つには、もっと縁が多かつたはずだつて言つけど
……点在するオアシスは全部繋がつていて一つの川だつたとか。本
当かなあ? ねえ、聞いてる? ねえ? サキ? エスターニアはい

いの？ ジキルドは？」

瞬きさえしない田は消えていく文字を食い入るよう見つめていた。せっかく教えてあげて、もう少し反応ぐらい返したらいどうなのだと怒り出すヒイラギにサキはまつ一つ質問をした。

「ゴザは？」

「もう。ゴザはそのまんま『ゴザ』で力つていう意味だよ。中には畏れと訳す人もいるけどね。それにしても、やつと古代語に興味もつてくれたの？ いい加減面倒くさいんだよねえ。あの長い文章を訳していくの。早く覚えて変わってくれると嬉しいんだけど？」

約束の地。

「ん~地名を足がかりにするのはいい考え方かもしれないよ？ カンタスは兄弟つて言つ意味だし。……都に兄弟か~ちょっと変わってるね」

兄弟、約束の地。

あの老人は何を伝えたかったのか、頭の隅を過ぎる影はあまりにほんやりとしていて掴みどころがない。

「あつ知つてる？ 裏街の奥のねエイナの塔がある辺りのことをゴザつて呼ぶらしいよ」

サキの瞳には未来は映らない。

過去を覗くことも叶わない。

ヒイラギの言葉にどれほどの意味があるのかも分からぬままだ。

高らかに響く竜琴の音。

甲高く眩暈を起こしそうな異国の旋律は、エスターニアの上流階級には下賤だと罵られ、上層街では聞かれることはない。
ましてや、ここはエスターニアの白バラと呼ばれた城だ。

竜琴の存在さえないはずだった。

けれど、稀代の彫刻家、アルシニオンのレリーフに彩られた豪奢な
扉の向こうからは確かにその旋律が聞こえてきた。
ユリザは、相容れない異国の文化を切つて捨てるつもりは無い。
たとえそれがジキルドのものでも。

けれど、扉の向こうの狂宴を思つて小さく息を吐いた。

どうして、あの子だけはいつも馬鹿なのかしら

「入りますよ」

扉を開くと、むつと甘い酒の匂いが襲つてきた。

部屋の中央には十人ほどが泳ぐ円形の池があり、匂いの発生源はそ
こだった。

頬をばら色に染めた娘たちが、ボトルから乳白色の液体を注いでいる。

ボトルに描かれている酒の神ロットの杯は、その酒が王族御用達の
最高級の酒であることを物語つていた。

池の横では露出の多い踊り子が竜琴の音にあわせて身をくねらせて
いる。

「やあ、ユリザねえ」

部屋の前方の一段高くなつた場所に設けられた椅子に腰をかけた青年が、右手をあげた。

肘掛け彫られたレリーフもアルシニオンの作で、子どもの握りこぶしほどもある大きな玉がはめ込まれていて、エスターイアで最も豪奢な椅子といえば、このイサリの椅子だ。

その名を戴いた青年は、シバ・リューデリスク・イサリ・エスターイサリは特別な名だ。

彼は運命の輪を持つ刻の王。エスターイア神話で唯一神々の仲間入りを果たした人間なのだから。

その名を冠したシバは期待を背負つたエスターイアの第一王子で、ながら、エスターイア王家最大の頭痛の種でもある。

乙女さえ嫉妬する艶やかな黒髪に、アルシニオンが彫り上げたのではなくかと言われるほど均整のとれた体つき、いつも氣だるげな表情が素敵だともてはやされてはいるが、ある悲しい前提が付く。

「ただ椅子に座つていれば」と。

シバは、ある画家に言わしめた「彼は最も額縁が似合つ王になる」と。

それは額縁の中のみならば、すばらしい王だということなのかと論争を巻き起こしたが決着は付いていない。

そんな意味不明な言葉を吐いた当人は赤い顔をして床に伸びていた。

「見てくれ！ 本で読んだ酒の池を作つてみた。面白そうだつたつたからな」

その割にはシバの顔は楽しいそには見えなかつた。

それどころか、池の中で笑い続ける若者たちを理解しがたいとばかりに眉を吊り上げた。

「さう。期待通り楽しかったのかしら」

「いいや。臭いし、べたつくし、いいところなしだね。その前に俺は酒があまり好きではないらし」

耳を突く笑い声が起る。

こんな無駄なことに一体いくら繰りあわれたのだろう。考えるだけで怖ろしい。

シバの体にユリザの魂が入つていれば申し分ない王になるだろうと誰もが言つが、ユリザにしてみればいい迷惑だ。

「で？ 何の用？ もしかしてイベラたちの作戦のこと？」

「イベラたちの作戦？」

僅かに眉を顰めたユリザにシバはしまったと思いつつ、平素を変わらぬ笑みを浮かべたが、ユリザはすいと近づいた。

シバが組んだ指の親指を回すのは隠し事があるときのサインだ。

「どうこいつ」となのかしら。説明してもらいましょう

「ああ、いや……勝手に話すのもなあ」

あの双子は血の繋がつた兄でも扱いが難しい。

彼女たちの意向に沿わない行動をしたときの反応を思い出してシバは身を震わせた。

「もう水牢には入りたくないし」

「あら、肺を満たすのは海水がいいかしら。それともお酒？」

切れ長の瞳が意味ありげに床に出来た池をちらりとみた。

シバは好きな果汁で池を作ればよかつたと今更ながらに後悔をした。どうせ沈むなら好きなもののほうが良いに決まっている。どちらにしても苦しいに違いないけれど。

炎が灯る女神の瞳。たかが人間などが敵うはずがないのだ。

哀れな人間は、ほんの少しでも苦痛が後に来るよう女神が望むままに口を開いた。

後の災いは二人分だということをすっかり失念していたのだ。

窓から差し込む青い光に照らされた部屋には安らかな寝息と暖炉でぱちりと爆ぜる薪の音しかしなかつた。

炎の上にすえられた鍋からは微かに湯気が立ち上つていた。

朝の匂いがした。

いつからだろうか。

何もかもを洗い流したように澄ましきつたこの空気が嫌ではなくなつたのは。

朝は嫌いだつた。

空を割つて太陽が世界を白々と浮かび上がらせると、他の人とは外れた姿を覆い隠し、闇と一体化していた安堵感は消え急速に心細さに苛まれる。

厚いカーテンをひいた部屋に閉じこもつても同じこと。

太陽は容赦なく全てを浮き彫りにするのだ。

部屋中を物で満たし、自分だけの隠れ家を作り出し、嘘の闇で身を包んでつかの間の安心を手に入れる。太陽が最後の足掻きとばかりに空を焦がすとやつと息をつくことができた。

暖かくなるといけない。

闇の領分が少なくなる。

夜明けは早まり、日暮れは遅い。

今、感じるのは暖かな朝の気配。

厭うていたはずのものなのに、逃げ出したい気持ちは起きなかつた。それどころか、夜の終わる瞬間の静けさが心地よくさえ感じられた。

暖かさの理由の半分はジルフォードの肩にもたれかかる様にして眠

つているセイラだろう。

いつのまに眠りに落ちたのか昨夜の記憶は曖昧だつたけれど、二人は大きな毛布を分け合つようにして眠つていた。

向かいにはハナとケイトの姿があつた。

居ないのは部屋の主であるカナンだけだ。

朝の早いカナンはきっと庭の菜園に出かけたのだろう。

身じろぎしたのが悪かつたのか、肩で支えていたセイラの体がずり下がつてきた。

頭の位置をジルフォードの膝の上に決めるとまた規則正しく吐息を零す。

きゅつと丸めていた体を毛布でつつみなおしてやると体のこわばりが解け、表情が弛む。

額にかかる前髪を避けてやるとその行為が心地よいのか擦り寄るようにして近づいた。

頬を撫でれば、にひやりと笑う。

起きているのかと思えばそうではない。対応に困る。離れてしまえばむずがる前の幼子のように眉が寄り、不満だと小さな声をあげる。

彷徨つた指先はそれを言い訳にして再び頬を撫でる。

無性に名前を呼んで欲しい。もう少しこのままで。セイラに関しては矛盾する想いをいつも持て余す。なんて臆病なんだろう。

無表情なセイラを思い出すと心臓が音をたてて縮まつた。

机を枕にして眠つているハナの田元は、この薄明かりの中で見えないだけでうつすらと赤い。

セイラのことが心配で、セイラの受けた仕打ちが悔しくつて泣いて怒つて、そして安堵した証だ。

すりなした頬も痛々しいほど赤かった。

カナン特製の薬草を混ぜ込んだ液で冷やしたため腫れは引いているだろう。

セイラの下唇にはぐつと噛んだであろう痕があった。

それをつけさせたのは自分だ。

回避できたはずだった。

少なくとも一度目を招かないためにどうすべきかは分かっている。その覚悟はもう出来た。

ひやりとした空気が頬の上を流れた。

ドアが開いて、かごいっぱいに野菜を詰め込んだカナンが顔をのぞかせる。

朝露を纏つてつやつやと輝く野菜たちはカナンの菜園で育つたものだ。

カナンが動くとシルトの仄かな香りがした。

「ああ、ジン様。おはようございます。よく眠れましたか

「おはよう。うん。大丈夫」

カナンはくすりと笑う。

ジルフォードが人前で無防備な寝顔を晒すことはまず無い。慣れているカナンの前では浅い眠りに落ちることはあるけれど、いつも神経をとがらせていて小さな物音で起きてしまう。

今朝のように部屋の出入りをしても気づかぬことは初めてだった。この良き日にジルフォードに訪れた安らぎに涙腺が弛む。それを与えた少女に感謝を。

「ユーズ・タラーク・リュウシェン。ジン様」

それは喜びを分け合ひ言葉。
命の芽吹きに言祝ぎを。

『アナタの幸せを願ひ

アリオスに生まれた全てのものへ贈られる言葉。

「……………ゴーズ・タラーク・リュウシーン。カナン」

小突かれ倒れこんだ床は少しばかり冷たく、痛みが過ぎ去った後は心地よくすらあつた。

けれど、すぐに新たな痛みが襲い掛かってくるなど考へるまでもなく体が知つていて、無意識のうちに痛みを逃がそうと体を小さく折りたたむ。

いつものように瞼をきつくつむり、奥歯を噛み締める。

奴らは手を抜いているものの相手が自分より随分幼いといつことには綺麗さっぱりと忘れているのだ。

立ち上がり返すのは得策じやない。

痛みを与えられる時間が長くなるだけだ。

右手に痛みが走った後、ルルダーシュは反射的に手を払いのけた。

右手を踏みつけていた少年は無様にしりもちを着き、獸のような奇妙な悲鳴を上げた。

「お前っ！」

怒氣で赤く変じた少年の顔には羞恥も混じつていて、ルルダーシュの怒気に比べれば可愛いものだつた。

少年は手の甲に彫られたイレズミを踏んだのだ。

紋章は己の証明。一族の歴史。全てをひつくるめた誇り。それを足蹴にされた。

飛び掛つて頭突きをした。

ごつんという鈍い音がして頭の中にキンとした痛みが駆け巡つたが、ルルダーシュは止まらなかつた。

呻いている少年めがけて拳を突き上げる。

むちやくちやに振り回すと次第に少年の呻きには涙が混じる。

呆然と見ていた少年の仲間たちが、やつと正気づきルルダーシュを

後ろから羽交い絞めにしようとしたら、黒い瞳に射すべられて逃げ去った。

もつやめてくれと顔を覆う少年の手の甲のイレーズ!!。

同じように踏みつけてやりたかった。

爪先を突きたてて削り取つてやりたかった。

ルルダーシュは手を振りあげて、やめた。

憎らしいのはこの少年だ。

彼らの一族を貶したいわけではない。

激情のままに彼らの一族を汚したら、ひどく惨めな気分になるのは自分だと幼いながらもルルダーシュには分かつていた。

少年はきっと悪夢を見るだろう。

他の一族を貶めることがどれほど卑劣で怖ろしいことか生まれたときから叩き込まれているのだから。

ルルダーシュは王の血を引いている。つた草の紋章は王家の印。

今宵の夢はひどく怖ろしいだろう。それで十分だ。

ぱちぱちぱち

聞こえてきた拍手に視線を巡らせた。

「ルルドよくやつた！」

灼熱の太陽を背にした人影は光の世界に突然生じた災いのように黒かつた。

闇の色を纏つた人影は誰だか語らないが、ここでルルダーシュのことをルルドと呼ぶものはナジユールだけだ。

とんと一つ跳躍して同じ地面に足を落とせば、まじりことなくナジユールの姿があつた。

闇色は髪と瞳に集約され、色彩を得た肌は褐色に輝いた。

「なじゅー……」

少年の言葉は最後まで吐き出されることは無かつた。滑らかな乳白色の刃が首元に迫る。

切つ先が肌に触れ、ひゅっとか細い息が漏れた。

その刃の切れ味はこの国の誰もが知っている。

一人で獣を狩ったとき、この国ではやつと一人前だと認められる。一の王子であるナジユールの狩りは早かつた。

十歳に成る前には見事に群れの頭であるルーガを仕留め、今握っている刃を作った。

この刃でつい先日、ルーガよつさうに大きく凶暴な獣を狩つたばかりだ。

「お前らが父親の命令で勝手に私にまとわりつるのは構わない。尾っぽを振られたくらいでお前たちにやるものもないしな。だが選択を間違えたな」

切つ先は少年の甲に近づいた。

恐怖で小さな体ががたがたを震えた。

「与えられたものと同等を返さなければならない。サクヤに厳しく教わった。そだらう?」

切つ先が滑つた。

イレズミを分断するよつに赤い線が走つた。

盛り上がつた赤が甲を伝つて乾いた砂にじくじくと呑みこまれた。

いつもは夜明け前には日が覚めるのに、ルルダーシュが目覚めた時には太陽はもう姿を現していた。

部屋にたどり着いたままの姿で眠ってしまったので寝台の上には頭の被り物が解けて色鮮やかな川を描いている。癖のない黒髪がその上を這いつ。

早く起きて身を整えなければ、そう思つのに起き上がるのも億劫で布地を巻き込みながらいろいろと転がると、石鹼の泡のようにふわふわと全身を包んでしまう寝具がいけないのだと言つて詰じみたことを考えながら唸つた。

子供のころの夢を見るだなんて。きっと昨夜、サルーのことをナジユールに尋ねることが出来なかつたせ이다。

門をくぐるそのときまで、「何を馬鹿なことを言つてゐるのだ」とヒイラギの作り話を笑つてくれると呟つていた。

けれど赤い月を見上げて思つたのだ。

「当たり前だらう?」そう笑うナジユールの姿も容易に想像出来る

と。

耳を澄ましても隣の部屋からは物音一つしない。ナジユールにどう接すればいいのか。考えあぐねた答えは結局見つからなかつた。

優しい夢に揺らされてセイラはやつくり顔を開けた。

暖かくて心地よい。

頬をすべるのはジルフォード指先だ。

その気持ちよさに瞼がとろりと落ちてくれる。

けれど、眠ってしまうのはもったいない。

もう少し。あと、ほんの少しだけ。

夢と現実が交差した曖昧な視界の中でジルフォードが笑う。

淡い。でも、ちゃんとした笑み。

夢と現実どちらが幸福だろう。

「セイ

選ぶべくもない。

幻は名を呼んではくれない。頬を撫でる指先に熱は無い。見つめる瞳の色はきっと嘘つこだ。

親指が唇をなぞる。なんだか名前を呼んで欲しいと言われた気がした。

「ジン。おはよ

「とつぐに朝ですよ。セイラ様

「あつハナ。おはよ

「はー、おはよう」「わこまく

いつのまにジルフォードの膝を枕にして眠ってしまったのだらう。ハナもカナンの部屋も逆さにみえる。

そもそも起き上がりなればカナンは朝食を用意し終わつたところで、ケイトが申し訳なさ方に頭をかいいていた。

起き抜けのぼうとしたセイラの前にカツプippaiのお茶が運ばれてきた。

「何とか無事に年齢を重ねることができたのです」

そう言いながら笑うケイトの頬には影があった。

無視から始まり、怒鳴られ詰られ、溢れたお茶をかけられ、泣かれたかと思えば、いつのまにかマントを引っ張られていて危うくあの世に旅立つてしまいそうだつた昨夜の出来事を思い出せば笑い声も乾いていく。

せめてもの救いは、そんな惨事を引き起こしたハナが少しばかり悪かつたと思つて余分にケイトの皿に菓子を盛つてくれたことだらうか。

セイラが帰つて来たことによつてお役御免となつたケイトだが、なんだか逃げ出す機会を失つて明け方近くまで、お説教を聞く羽目になつた。

ケイトとセイラの元氣を吸い取つたハナは潰刺として元氣だ。

「まったく、いつまで根に持つてゐるのですか？ そんな器の小ささでは出世なんて出来ませんわよ！」

「数時間ぐらいい根に持たせてくださいよ」

あの酷い出来事はほんの数時間前のことだ。

固い壁に寄りかかつて、少しばかりつらつらと夢の世界に足

を引っ掛けたぐらいでは忘れ去ることは出来ない。

苦笑を浮かべるカナンが入れてくれた濃い目のお茶が有難い。

一口飲めば体が軽くなる。頭がすっきりしてくれれば昨夜の記憶は鮮明に甦り、よかつたのかは微妙なところだけれど。

「んん~？ ケイトって今日がお誕生日なの？」

引き金となつたセイラも一睡してけろりとしている。お茶を冷ましながら首を傾げた。

「お誕生日といこますか……今日はトワルなので」

「トワル？」

どうやらエスター二ア生まれの一人にはなじみの無い言葉のようだ。助けを求めるようにカナンに視線を向けると、カナンはこつこつと微笑み説明役を買って出た。

「エスター二アでは、季節の四女神のお祭りで、生まれた季節ごとに年をとるのでしょうか？」

「そうですね。セイラ様はハナメリーの第一月生まれですから、春雷祭で年をとりますもの」

エスター二アではハナメリーの第一月、第二月、第三月が春とされてい。

トウーラ、フープ、ユノーもそれぞれ三月あり、十一月で一年が巡る。それぞれの第一月には各地で盛大な祭りが行われ、そこで皆、年をとる。

アリオスも十一月で一年となるがエスター二アほど季節ははつきりと

せず、夏はほんの数週間だ。

「アリオスではトワルと呼ばれる日、つまりシルトの祭りの中の日に一斉に年をとるのですよ」

「へえ～じゃあカナンも今日がお誕生日?」

「ええ正確に言つならば今日、明日のうちですが」

「ジンも?」

「そう」

「ハナさん」

「何でしう?」

二人はこそこそと額を合わせた。
どうしたのでしうといつケイトの問いにカナンはくすりと笑う。
彼女たちの心情は手に取るようになかる。

「これは、贈り物が必要だとは思いませんか?」

「ええ。思いますとも」

二人はにんまりと笑つた。

思い立つたら即実行の一人だが、カナン手製の朝食の誘惑に勝てるわけも無く食後のお茶もたっぷり飲んでから飛びよつた勢いで書庫を後にした。

アリオスではトワルに贈り物をする習慣が無いため、一人の急ぎように頭をひねつていたケイトも仕事があると何度も朝食の礼を言いながら帰つていった。

今、部屋にはカナン一人だ。

少し前にジルフォードも何処へ行くとも告げずにふらりと姿を消した。

何処へ行くのかは見当がついていた。決断を下したのだ。

ジルフォードと幾度、共にトワルを過ごしただろう。

初めて会つたのは、カナンの腰ほどの背も無い幼い子どもだった。瞳を隠すようにいつも下を向いていたから更に小さく見えたものだ。その子どもが今やカナンの背を抜き、自分の道を歩もうとしている。こぼりと湯が沸いた。

もう少ししたら、控えめなノックが部屋の中に響くだらう。

互いに老いた身体を詰り、その年月を愛おしむための潤滑油としてこの日のために取つておいた最高の茶葉をふんだんに使つてやる。勿論、取り寄せた時の代金は相手持ちだけれど。

全ての準備が整い、さあ後は客人が来るだけという段になると、思つたとおり控えめに扉が鳴つた。

ジルフォードは前を見据えた。

午前中の透明な光を受けて輝く廊下が長く続いている。

今までならば人通りが無い時を狙つて、月の明りを頼りに歩いてい

た廊下。

今でこそ人の姿は見えないけれど、そこ此処で人の気配がして、忙しげに歩き回っている。

ほんの少し歩いていけば、誰かに出会うだろ？

何もかも見ないふり聞こえないふり、月夜に現れる夢幻そのもののように戦にも姿を見せないふりはもう止めた。

正面から向き合えばぎくじと体を軋ませるのは相手のほうで、慌てて視線を逸らしていく。

怖ろしいのだろ？ 気味が悪いのだろ？

ジルフォード自身も鏡を覗くたびに違う瞳の色が怖ろしかった。

何度もたつた一つの色を留めようと努力しては失敗し、絶望した。本当に魔物のように血を吹いたように真っ赤な瞳ならいいのだと何度も思つたか。

その色がどれほど禍々しくとも、ただ一色ならば憂いは半分にもならない。

いつそのこと無ければよかつた。

優しい孤独を手に入れるために突いてしまおうか。きっと自ら作り出した暗闇は、シーツに包まって震えて過ごす夜よりは暖かい。

その誘惑は常にジルフォードに付きまとつた。

今でも、夜中にはつと目が覚めた時などは、確かに形となつてジルフォードの横に居座つた。

部屋の闇に目が慣れてしまつ前に、ぎゅっと瞼を閉じれば脳裏に輝くものが走る。

陽光を弾く髪の色。

セイの色。それ以外に思いつく名はなかつた。

どうしてセイラは一つの色にたくさんの名をおくつてくれるのだろう。

セイラの付ける色の名は優しくぼんぼりと心に沁みた。

干からびた瞳を暖かな水がとぶりと沈めたのは一度や一度ではない。

思考を中断したのは重い靴音だった。

「よひ、ジルフォード。珍しいな。お前が「こ」いら辺を歩いているなんて」

「こ」は王の執務室が近い。

ジルフォードに話しかけるジョゼを見かけた幾人かが眉を顰めて通り過ぎる。

立ち話は得策ではない。会釈だけですませよつと思つたジルフォードの心情を呼んだように逞しい腕がジルフォードの腕を掴む。

「あんまり気にするんじゃねえよ。貴族連中に俺の評判が悪いのは元々だ」

いくら武の国だと言えども、国が安定してからに戦果よりも政の中で力を伸ばしてきた貴族も多い。

そんな貴族の中には、昔のアリオスの体质そのものの軍部は力だけの能無しだと思われている節がある。

特にジョゼは貴族上がりではないためにその風当たりは同じ将軍といふ地位にあるキースよりもずっと強い。

軍部改革と称して、貴族の子息だけで両軍を編成しなおそうという動きもあつたそうだが、「これだから頭でっかちの坊ちゃん方は」と失笑と共に立ち消えたそうだ。

もしも実現していたら、アリオスは縮小していつたに違いない。

その他もろもろもあつて、ジョゼ・アイベリーと一部の貴族とは仲が悪いのだ。

事ある「」とジョゼを將軍から引きずり下ろすと画策しているらしいが一向に成功しない。

「あいつらが何を言おうとやすやす月影から降りろなんて言えねえんだよ。俺を選んだのは月影なんだからな」

ジョゼの腰の漆黒の剣。

月影、陽炎両軍の將軍を選ぶのは貴族でも、王でもない。軍の象徴でもある剣そのものが選ぶのだ。扱えなければ將軍には選ばれない。

ふさわしくないものが持つと、その刃によつて命を落とすといつ尊もある。

そして、ふさわしい主を見つけたとき、共鳴したようにキーンと高い声で鳴くという。

ジョゼが月影を受け取ったのは怒号に悲鳴、大地が轟く音に金属がぶつかる音が渦巻いていた戦場だったため、そんな音がしたかどうかは定かではない。

けれど、手にした瞬間に思つたのだ。これは「」のものだと。

「俺より月影に氣に入られるやつがいたら、躊躇なく譲つてやる。だがな、それまでは誰がなんと言おうが俺が月影の持ち主だ。お前が気にすることじゃない」

ジョゼは細い背中を力強く叩く。

自分の身の振り方は心得ている。やつと殻を抜け出した雛に心配してもらわなければならぬほど弱いつもりはない。

「お前、もつと欲張れよ。全部、叶いやしないだらつが、願うのは悪いことじやない」

ジルフォードが他人のことばかり思つて身を引く必要なんて無いのだ。

俯いたままのジルフォードのちょつと強く叩きすぎたかと危惧して

いふと、紫色の瞳がジョゼを見た。

「……たぶん私はジョゼが思つてゐるより欲張りだ」

正確には欲張りになつたといつぼうが正しい。
以前のジルフォードの願いは、サンディアが生きていることだけだ
つた。

ほんの少し前までは、その願いにカナンが用意した空間が加わつた
だけ。

それだけで十分だと思っていた。

居心地の良い書庫は、願いすぎだとさえ思つていた。けれど、雪の
降る頃から願いはどんどん増えていた。
願うばかりではないことも分かつてゐる。

「ここに居て良いと胸の張れるよつ……努力してみよつと想つ」

につとジョゼの口の端があがる。

「頑張れ」と同じところをはたかれてじんと痛んだ。
ジョゼと分かれた場所から執務室までは日と鼻の先だ。
ドアの前には数人の貴族が陣取つていた。

見覚えのある兄の取り巻きたちだ。

何処で会つたことがあるのか鮮明に思い出すことが出来るところの
に、彼らの名前も役職も全く分からぬ。
自分の無関心さを改めて知つた。

「王に何用ですか？」

一步踏み出して問つた鷺鼻の男は、集団の中でいつも真つ先に行動
を起す。

ルーファと初めて対面といつても、偶然廊下で出会つてしまつたと

きも、誰よりも早く進み出てジルフォードの視界を遮った男だ。今も、扉の前に立ちふさがって執務室に近づけてなるものかと息巻いている。

だが今日は弟としてではなくアリオスの一臣下として扉を叩く。初めてのことだ。

「ジルフォード・アリオスからルーファ王に謁見を申し入れる」

相手はジルフォードを執務室にいれるものかと口角から泡を飛ばす。

「ルーファ王は多忙だ。お分かりでしょう?」

「長くはかかりない。時間が空くまで待たせてもらいます」

「そんな時間はないと言つてているのです!」

「お前たち私を過労死させたいのか?」

「ぬつルーファ王」

次第に声が大きくなれば、執務室の中にもう聞こえるのは当然のこと。

ルーファはジルフォードを手招きした。

「私が呼んだのだ。しばらく下がつてくれ」

「しかし...」

更に言じ慕る男に満面の笑みを浮かべると、男はしぶしぶ一歩下がつた。

あの笑みの時は何を言つても無駄なことを知つてゐるのだ。

王に何かあれば、ジルフォードを八つ裂きにすると言わんばかりの
厳しい顔の前でびしゃりと扉は閉められた。

「よく來たな。さあ、こちらへおいで」

ルーファが体を伸し、ソファを指し示す。朝から凝り固まつた身体
がポキリと音をたてる。

時折、体を動かしてはいるのだが、机仕事ばかりだと体がなまつて
くる。

「兄上は仕事のし過ぎです」

「なに、今日は逃げ出すタイミングを見失つただけだよ。外に怖い
連中が張り付いていだらう? まあ、おかげでお前に会えたけれ
どね。ああ、そうだ。注文の品が出来てゐるよ」

ルーファが棚が取り出したのは小ぶりな瑠璃色の箱だつた。
開けてみれば銀の指輪が入つてゐる。

「セイラ殿は月の女神だからね。マルスと月の紋章にしてみたよ」

この指輪は王族であるといふ証であり、サインをする時に使つもの
だ。

ルーファの指にもはまつてゐるものは歴代の王に受け継がれて
るものだ。王族それに違つ意匠が使われてゐる。

「今日はどうした? これが目的ではないだろ?」

まだ出来上がったとは告げていない。

先ほど届いたばかりで、トワルに間に合つたことにルーファも胸を撫で下ろしていたところだ。

「これを」

手渡されたものをみて驚いた。

そこに連ねられた二人分の名前。

「……これは」

最後に押されたのはジルフォードの印だ。

この間インクをつけた痕さえなかつた印章が頭に浮んだ。

これが意味するのはジルフォードが始めてアリオスの王子として決断を下したということだ。

通された部屋の豪奢なこと。

ここにある全ての装飾品を持って帰れば、ほゞのタハルの民の腹を満たすことが出来るだろう。

そんなことを思いながら、ナジユールは歩を進めた。

朝食をとりながらお話でもと声をかけられたのは、昨日の広間でだ。丁度、セイラたちの一悶着の後あたりのこと。

そのときは、まさか城から出ることになるとは思っていなかつた。今、ナジユールはタナトスの街の貴族の屋敷が立ち並ぶ一画にあるリグンブル家にいるのだ。

薦められた椅子と相手の間にあるテーブルは不必要なほゞ長く互いを隔てている。

これならば腹を割った話し合いなど出来ないだろう。

いや、そんな話をする相手ではないからこの装飾なのか。

砂漠の変化を見分ける優れた目をもつタハルの民でなければ相手の眉の僅かな変化、口の端の角度などを逐一気づくことは出来ないだろつ。

現に先に席についていた二人はナジユールの辟易した表情には気づいていない。

見たことのある顔だがどうもはつきりしない。

エリオだと、マリオなんて名前だったような気がするのだが、要らぬ災いの種を背負い込むことは無い。軽く会釈するのに留めた。

「さて揃いましたかな」

最後に入ってきた男は口元を僅かにほこりばせた。

少しばかり彼の印象を柔らかくすることに成功したが、元より厳しさ

を湛えた瞳の角が取れることは無い。

レイドス・リグンブル。前アリオス国王の右腕だと称された男。両国間で小競り合いが耐えない日々にはタハルの戦士も彼には手痛い教訓を与えた。

ロードの名と並んでタハルでは悪名を轟かせているが、ゆつたりとした普段着で現れた男をナジユールは嫌いではなかつた。全身着飾つてこられると此方も構えてしまふし、目も痛い。

「朝から申し訳ありませんね。招きに応じてくれて嬉しく思いますよ」

「いえ、そちらもじつ多忙でしょ」

お茶を一口飲めばふわりと立ち上る花の香り。申し分なくおいしいのだが、脳裏に甦つたのはカナンの淹れたお茶のことだつた。

自然と口角が上がる。どれほど贅沢な部屋を作りうともあの空間には敵うまい。笑うと全身から力が抜けた。

「先日、わが父であり、タハルの王であつたウォーダンが亡くなりました」

レイドスは口元まで運んだカップをそのまま下ろした。

ウォーダン王の死は絶対に認めないものだと思っていた。

その事実が両国にもたらす影響を考えれば、少なくとも祭りが終わり使者一同が無事に帰るまでは黙つている方が得策だ。

「それはお氣の毒に」

ウォーダンはまだ若かつた。

自身の親を亡くし、長年仕えていた王を亡くした経験を持つレイドスの言葉に嘘は無かつた。

ナジユールは曖昧に頷き、口の腕に視線を落とした。

床についたウォーダンの腕はナジユールの腕の半分ほどの太さしかなかつた。いや最期の時には3分の一ほどの細さだったのかもしない。

日増しにやせ細りひびく苦しそうな呼吸をするよつになつた。

タハルを出る時に、あの姿をしばらく見なくてすむと安堵感があつたのを覚えている。

星が落ちて訃報を知つた時、リュオウはウォーダンに慈悲を『えたのだと思つた。

無駄な感傷は捨て去る。ここは敵の真っ只中、味方は居らず、隠れる場所も無い。

「次の王は貴方でしょうか。ナジユール殿？」

「さて、どうでしよう」

二人の王子の力は拮抗している。

ナジユールは自身の力で支持者を集め、ルルダーシュには強力な母親の一族がついている。

幼い王子を傀儡にすれば自分たちの一族に有利な政をと思う貴族たちはルルダーシュの下へと集まりつつあるという話も聞いている。弟の忌々しげに歪んだ顔が脳裏に浮ぶ。

「我々は、あなたに全面的に協力をしてもいいと思つています」

「見返りは何をお望みで？ サンディア殿の復権でしたか？」

「いいえ、あの件は本人に断られてしましましたので。今回お願いしたいのはウォーダン王と結んだ同盟の継続を」

『タハル国王ウォーダンの命がある限りローラ山脈より北をタハル、南をアリオスと定めその境界を軍事力によつて侵すことのないよう、ここに記す』

「あの同盟を？ タハルにとつてはあまり良い条件とは言えないが、ローラ山脈を越えぬことには、タハルはエスターニアにもジキルドにも手を出すことができない。

天然の檻の中だ。

元々、食糧支援の見返りに結んだ短期の同盟はタハルにとつてはあまり面白みのないものだった。

「人材支援もお付けしましょう」

「……なぜ私を？」

アリオスにとつてみれば、どちらの王子も条件は同じだ。たまたま近くにいたナジユールに声をかけたとは思えない。

「貴方はどうやらアリオスを嫌つてはいないうつなのでね。その原因はセイラ様でしょうか」

「ほう。なぜそう思うので？」

「貴方の耳飾。どこにいったのでしょうかね」

ナジユールがセイラに贈つたことを知つていながらほくそ笑んだ。

「貴方が望むならば、あの娘をタハルにやつてもいい。そうすればタハルはエスター・アとも繋がりが出来るでしょう?」

「は?」

人好きのする笑みで武装していたナジユールも怪訝な声を抑えることは出来なかつた。

ついでに目を丸くした。言葉を反芻しようにもどこかに引っかかつて上手く飲み込めない。

「わが国が貰い受けたはずの王女の候補は一人だつた。その片方がセイラ様。もう一人は第7王女様でしたかな。なぜ彼女が選ばれたのかは単純明解、文句を言う後継者がいないから。けれど、エスター・アは一人とも差し出してもよいと言つていましたからね。かの国もタハルと友好的になりたいと思つてゐるでしょうね」

「話が読めないな。それならばタハルに嫁ぐのは別の王女では」

「真に王女としてそだてられた女性がタハルで暮らしていけると?」
無理に決まつてゐる。

互いに飲み込んだ言葉はきつと同じ言葉だ。

「アリオスにもセイラ殿が必要でしょ?」

「セイラ王女はわが国での役目を果たしたのですよ。彼女は思つた以上に働いてくれました」

アリオスの王子とエスター・アの王女の婚姻は、表面上、両国が友好

関係にあることにしてくれれば良かつたのだ。

今や、長く引きずっていた王家の闇を民衆の前にさらしたばかりか、受け入れられさえしている。

それで十分だ。いや、それ以上かき回されては堪らない。

「本当にそう思つてゐるのならば、私は貴方を過大評価しすぎていたようだ」

射る様な視線を送られてもレイドスには痛くも痒くもない。薄く笑みを浮かべるとお茶のお代わりを薦めた。

ナジユールは朝食を終えるまで、レイドスの食えない笑みを崩すことは出来なかつた。

「城までお送りいたします」

屋敷から出てきたナジユールに向かつて馬車の傍らで頭を下げたのは、まだ若いであろう女性だつた。

見た目に反して声はひび割れ落ち込んでいた。

「女か。それにタハルの生まれだな」

浅黒く焼けた女の手の甲は覆われていたが、動いた拍子にイレズミの跡が見えた。

タハルを嫌つて出て行つたものは初めに、有無を言わさず入れられた刺青を消すというけれど抉れた傷跡は尚強くタハルの証を刻み付ける。

あれは誇り以上に枷だ。

タハルの地に、己の一族に、名に繋ぎとめるための鎖に等しい。かつて女を縛った一族の名は、引きつれた傷跡からは知ることは出来なかつた。

「なぜ、タハルを捨てた」

「タハルが私たちを必要ないと判断したから。ただ一片の慈悲すら無しに」

女の瞳は暗く曇つた。

世界を拒絶して、脳裏に浮ぶ世界へと閉じこもる。

「慈悲が無ければお前が生きていることがおかしいな。タハルは小娘一人を生かすほど軟くは無い」

「生きていることが慈悲だとでも？」

女は鼻で笑う。

暗かつた瞳には怒りを原料に嘲りが宿つた。

「さあ無駄話は終わりです。タハルの王子様。はやくお乗りください」

女は背を向け、場所の扉を引いた。

狭苦しい馬車の中は息が詰まる。

「一人で帰れる」

「貴方はいつもそうでした。人のことなどお構いなし。ですが、容認できません。貴方を城へつれて帰るのが私の役目ですから」

まるでお前のことなど全て知っていると言わんばかりの口調にナジ
コールの眉が上がる。

チリツと米神に走る痛みは不快だ。

「命からがらタハルから去り、アリオスで飼われるか

「何とでも」

もはや女の顔に怒りも嘲りもない。

己の世界に閉じこもつた時のように無表情だ。

ほんの少しの我慢だと自分に言い聞かせて馬車の中へと入る。

一瞬香つた、どこか懐かしい匂いは何だつたのか誰も答えをくれそうにはなかつた。

馬車が動き始めて少し経つと、重心が傾いだ。

目の中の光が灯り、平衡感覚が掴めない。

車輪が音をたてるたび体が四方に飛び支えていることが出来ない。

「なん、だ」

「ご安心を。毒ではありませんから。元より貴方が毒に強いことは知っていますからね。お父上が倒れてからは他国の毒にも体を慣らしておられたのでしょうか？ それはね、王子様。狂いの香ですよ」

女の笑い声が遠くなる。

「狂いの……」

砂漠の獣を操る狂いの香。

「配合をほんの少し変えるだけで人間にも使えるのよ。王子様」

脳裏に煌く光も急速に迫つて暗闇に飲まれていく。
最後の一つが飲まれると同時に女の傷跡の正体を知つた。

「セイオンか

たつた一言で消え去つた獣使いの一族。
それを知つたところで鉛のように重くなる身体を自由にする術は無
かつた。

「贈り物を用意するのが良いのですけれど、一体何にするのかが問題ですわ」

「そうだね。何がいいかなあ」

「定番のケーキもいいけれど、それでは普段やつてることとやつ変わらないからつまらない。」

それに厨房は客人の料理をつくるのにてんやわんやで、快くスペースを貸してくれるとは思えなかつた。

「うへん」

せつかく贈るのならば今日か明日でなければ意味が半減してしまう。

あまり時間はなさそうだ。このがジニスならばいいのに。玉の色合いと形を合わせて、たつた一人への贈り物を作るのは難しくない。

「そうだ！ お守りはどうかな？ アリオスではどんなものがあるのか分からぬけど」

「お守りですか」

「この前、ナジユール殿から貰つたのをジンがずーっと見てたから、欲しいのかなつて」

銀で作られた透かし彫りが施された球体に嗅ぎなれない異国の香り。

今もセイラの首にかかっているそれに視線を向けながらハナはふうと息を吐いた。

「欲しいわけではないと思いますわ」

「そういうの？　じゃあ珍しいからかなあ」

球体がセイラの手の中をこりこりと転がった。

「嫉妬ではないですか？」

果たしてジルフォードにその感情があるのかどうかはハナには分からぬ。

ハナの願望に近いものだが、あながち間違えでもないのではと思えた。

けれどセイラは怪訝な顔だ。

「えっ？　何に対しても？　私だけもひっかけたから？」

セイラのこの鈍感ぶりは何だろ？

ハナの脳裏には一人の男の顔が浮んだ。筋骨隆しい露面の男。セイラの育ての父親を自負する鉱山の長。

彼が悪い虫など付かないよう大切に大切に育てたのだ。鉱山の皆は皆兄妹、家族として育つたからちょっとばかし危機感も薄い。

「うふふ。恨みますわよ。ダン！」

「違います！　他の方が贈ったものをセイラ様が身につけているからですわ」

「ええ？」

「私だつて気に入りません。最近、セイラ様つたら他の方が選んだものばかり」

タハルの髪飾りにヒューロムの赤のドレス。自分が一番似合つものを提供できるという想いがあるのに。見知らぬ一面を突きつけられてぐつと唇を噛むのもしばしば。

一番辛い時に一緒にいることさえ出来なかつた。

さんざんケイトで発散したはずの鬱憤がまたもや体の奥から湧きあがる。

つらやましい。悔しい。哀しい。名前をつけるには複雑すぎる気持ち。

知らんふりするにも飲み下してしまうにも大きすぎる。おどけて言うはずだったのに、つい拗ねた口調になつてしまつた。セイラの呆れ顔が眼に入つて余計に口元が歪む。

「何年一緒にいると思つてるの？ ハナ以上に私の好みを理解してくれる人は母様しかいないよ」

つまりこちらではハナが一番だということだ。

どんなに言つてみてもハナの表情は晴れない。それどころか口を引き結び押し黙つてしまつた。

セイラが身に着けているものはセイラの身に馴染んでいるだろつ。色も肌触りもセイラの好みどおりのはずだ。見た目の愛らしさにも胸を張れる。

けれど、最近ハナが用意したものといつたらいかにセイラの好みに合いながらもアリオスの王弟夫人として相応しい格好になるかと考えたものだ。

どんなに外見を飾り立ててもセイラは傷ついた。

何の役にもたたなかつた。

ほつと心を和まることも、相手に立ち向かう勇気を『与える』ことも出来なかつた。

自分の仕事で負けたのだ。

「ハナ？」

「私、ダメダメですわ。私だけ何も出来ていらないんですもの」

「ジンもねナジユール殿もそのまままでいって言ってくれたの。でもね、そのままじゃダメなのは知つていてるの。だから頑張れって、やらなきゃダメ
だよつていつてくれるハナが必要なんだよ」

頬が熱くなつた。
ぐずぐずと泣いてしまいたい。

「甘やかして欲しくつて叱つても欲しくつて。我慢だよね。でもいいやつて思つたの。ハナはずつと私の甘さを諒めてくれるでしょう？」

「勿論ですわ」

それ以外にどんな答えがあるところのだらつ。
ぐすりと鼻をすするといやな考へは吹き飛ばす。

「さつきナジユール殿もと言いましたよね？ ピッピ」とですか？

いつの間にそんな話をしたのだ。

セイラが弱つてゐる時にあの不埒な男が一緒に居ただなんて到底

許せる」とではない。

「あ～求婚された？　その時にね。そのままでいいよつて」

「はあ？　求婚？　何を考えているんですか。あの変態！」

威嚇する猫のよつに髪を逆立てたハナにセイラは冷や汗を垂らした。

「そのまま殴りこみにいきかねない気迫だ。

「あつあつはナジユール殿の[冗談]だと思つよ。ね、だから落ち着こつ」

「冗談で求婚などする馬鹿なうば、誰じやおきません！」

逆効果。火に油。そんな言葉がぐるぐる巡る。

「それにセイラ様」

急にハナの顔から怒りが抜けて、真剣な目がセイラを捕らえた。

「求婚なんて軽々しく口に出来る事ではありませんわ。ナジユール殿を擁護する気持ちなんてこれっぽっちもありませんが、あの方冗談でそんなことを言つようとは見えません」

「うん？」

「だからセイラ様も真剣に答えを出すべきですの」

どんな答えだつて構わない。

セイフとナジユールがそのままのセイラがいいと言つたのは本心だ
らしい。

真綿でくるむように大切にしてどんな害からも遠ざけて、今のセイラのままにしててくれるだろう。

「ねえ、セイラ様。何もかも抜きで考えてみてくださいな。アリオスもエスター・アモ王女である立場もですよ」

「……うん？」

「今、幸せですか？」

「うん」

「それならいいのです。たとえ茨の道だつてセイラ様が幸せだとうのなら私はついて行きますからね」

「茨は嫌だなあ。痛そうだもん。それより街の道を知つている案内人を見つけなきやね」

落ち着いたハナにほつと一息ついたセイラは名案を思いついたと走り出す。

もうつと頬を膨らませながらもハナもその後を追つて走り出した。しばらくすると田舎の人物が見つかったようでセイラが声を上げた。

「クロエー」

前方にはいきなり呼び止められ困惑顔のクロエの姿があった。

話を聞いたクロエは一人を街へと案内した。
お守りをつくりたいというセイラの希望に沿つて心当たりがあつたのだ。

「まあ

通りを馬車が走つていく。

庶民の生活には似合わぬような大きな馬車だ。

祭りで混雑する通りにもやはり不釣合いで迷惑顔が馬車をにらみ付けてはつと田を反らす。

「珍しいですね」

クロエの口から漏れた呟きを拾つてセイラは首を傾げた。

「何が珍しいのです？」

クロエのことを嫌つていたハナも昨夜、彼女がセイラを助けた話を聞いてからは態度を軟化させていた。

セイラのことさえ絡まなければクロエのことは、まるで自分のことのようによく分かる。

「あの馬車の紋様はリブングル家のものです。こんな街中を通らなくともお屋敷がある辺りから専用の道があります」

戦になれば軍馬がかける。

大型の馬車が余裕ですれ違える大きな道だ。

祭りといえども警備上一般人が入ることは許されない貴族専用の

道。ほんの少し進むたびに立ち往生を強いられる」となんてない。

「お祭り見学じゃないかな?」

「あんなに大きな馬車ですか? 邪魔になるのは分かりきつているのに」

「……そうですわね」

不思議顔の三人娘を置いて馬車は雑踏の中に紛れていった。

「まあ、貴族の方の考えることなんて分かりませんわ。時間がないのですからさっさと行きますよ」

クロエの意見に同意した一人は馬車のことなど忘れてクロエの後を追つた。

案内されたのはうねうねと入り組んだ裏街の通りにある小さな店だった。

「うつわあ。綺麗」

店先には染物が所狭しとかけられている。

「これを作のですか」

「いいえ。それは少し時間がかかりすぎますから。こちらなんていががかと思いまして」

クロエが差し出したのは色とりどりの紐を編んでつくる飾りだつた。手首や足首につけるらしい。

ちよつと頑張れば飾り帯にすることも出来る。

昔は戦地に旅立つ夫や恋人に編んで渡したものが今は装飾品として残っているのだという。

「クロエちゃん。いらっしゃい」

店主は随分若かった。笑えばもっと幼さが際立つた。

イリヤと名乗った彼もメイマーの孤児院で育つた一人だ。

「へえ贈り物。エスターにはそんな習慣があるんだ。うちの商品を選んでもらえるなんて嬉しいなあ。完成が明日になつてもいいのなら染からやってみる?」

「いいの?」

「もちろん」

瞳を輝かせながら振り返ったセイラにハナは苦笑しながら頷いた。

「セイラ様のお好きなよう

王宮の一角で盛大にため息をついたものがいた。

せつかく美しく整えた爪も一晩でぼろぼろになってしまった。
イラついた時に爪を噛んでしまうのがキアの悪癖だ。

エスターのデナー発の流行色も不恰好な爪には似合わない。
どれもこれもみんなセイラのせいだ。思い出しただけでも腹が立つ。

どうにかこの鬱憤を晴らすことが出来ないだろうか。ひとしきり
爪を噛むと指先にはじわりと赤が浮いた。

痛みに僅かに細めた視線の先に商人風の青年が立っていた。
ああ、とてもいいことを思いついた。

「ねえ、そこのアナタ。頼みがあるのだけれど」

「なんでしょう？」

たくさんの色彩を纏つた青年はこつこつと微笑んだ。

贈り物作りは順調に終わり色止めの作業をお願いしてセイラたちが城へと戻ってきたときには太陽が沈みかけていた。

明日の朝一に受け取りに行く手はずとなつていて。

鼻歌交じりに意気揚々と街で仕入れたお菓子をお供に書庫への道のりを急ぐ。

「よかつたね。 素敵なものが出来て」

「そうですね。 本当によかつた。 クロエに感謝しなくてはいけませんわ」

「クロエも来ればよかつたのに」

書庫に誘つたのだが、 クロエは仕事があるからと断つたのだ。

「セイラ様。 うれしいからつて話してしまってはいけませんよ！
明日、 渡すのですからね」

「分かつてゐよ。 びっくりせられるんだからね」

そう言いながらも口元から言葉が飛び出してしまいそうだ。
案の定、 ジルフォードの姿を見てしまえば口は自然に開く。

「ジン！ あのね、あのね」

ちちりと痛いハナの視線を受けて、 慌てて口を押さえてもふるつと口角は上を向く。

ああ、言つてしまいたい。「うあうあ」と言葉が喉元からでかかってもどかしい。

けれど、明日まで我慢。

ぐつと息と共に言葉を飲み込んだセイラの様子にジルフォードは首を傾げた。

「どうしたの?」

「ううん。明日まで内緒」

「うう」

セイラの行動の意味が分からないのは良くあることだ。

キラキラと光る瞳は嬉しくて仕方がないと語つていいのだから良いことなのだろう。

「明日には教えてくれるの?」

ジルフォードの問いにセイラはぱつと顔をほほほせた。

「うん! 明日。お昼までにはねー!」

「うう。楽しみにしてる」

セイラはぽかんと口を開けてしまった。

手で押さえていなくとも言葉は落ちてこない。

代わりに心臓が高く鳴った。

ジルフォードが浮かべているのはまぎれもなく笑みだ。

錯覚かと思つてしまつほど一瞬のものでも、初雪のよつて消え入りそうなほど淡くもない。

蜜の色の瞳がとけた。

「セイ?」

「……うん。楽しみにしておいて」

ハナもカナンもお茶の準備に忙しくて今の姿を用意してはいない。嬉しさを共有したくって、けれども独り占めできたところ不思議な気分。

分かるのは鼓動がひらくて頬が熱いこと。これは……

「ハナ」

「何ですか?」

「私、病気かも」

「ええっ! 寒かったのですか? セイラ様。ああ、そひ言えば若干、顔が赤いような……」

寝台を差し出すカナンに布団をつくねるハナ。

心配げに覗き込むジルフォードに心臓がまたはねる。

早く、早く明日になればいい。

ジルフォードに頭を撫でられながらセイラはぎゅっと瞳を閉じた。

「サルーを知っているか？」

「何でしょ？」

「のままでは気持ち悪い。」

「サクヤー！」

もう夕刻だが話が弾んでいるのだろうか。
宙ぶらりんになってしまった決意をどうじょつ。

「……そつか」

「

「今朝、リブングル家に招待されたまま、まだお戻りではないのですよ」

やはり明日までは待てない。
後回しにすればするほど口に出すことが出来なくなる。
ルルドは意を決して部屋を出た。折りよくサクヤを見つけナジュー
ールの居場所を尋ねれば珍しくサクヤは言葉を濁した。

頭の中の記憶の箱の中を探るようサクヤはしばし田を細め、ようやく求めた情報を見つけたようだ。

「セイオンの放蕩息子ですか。懐かしい名を聞きました」

「放蕩……息子？」

ルルドのサルー像からは最もかけ離れた言葉だ。

「ええ、遊ぶ金欲しさに一族の秘儀を他国に売り渡そうとした馬鹿息子ですよ」

「サルーはリュオウの廟を作っているのだろう？ だが、一族は……」

…

サクヤの視線を受けてルルドの舌は凍りついた。
何か失敗をしてかした時の視線と同じだった。

「誰にどんな話を聞いたのか知りませんがサルーはとうの昔に死にましたよ」

「え？」

「セイオンは狂いの香の製法のおかげで栄えた一族です。その長の子のサルーは苦労知らずの浪費家で長がそれを諫めるために一切の施しをしなくなつたのか事の発端です。告発のため未然に防ぐことができましたが、罪は大きい。廟を一人で作れと命じられたのは本当ですよ。だが、サルーは逃げ出した。行方をくらましそれつきり」

「それでは……」

「どうするべきかは一族に預けることになりました。サルーを見つけ出して連れてくるもよし、一族から追い出すもよし。だがセイオンは全く別の方法をとりました」

「別の方法ってなんだ?」

「一族を滅ぼすこと。皆、永遠に口を閉ざすこと」を選びました。謝罪も弁明も一切せぬままに。」

「そんな

脳裏に浮ぶサルーの笑みがぐにゃりと歪んだ。

「可笑しなのは、村で皆が事切れていたことが発見された翌日のことです。こんどはサルーがみつかった。がりがりにやせ細った姿で息も絶え絶えの彼は三日三晩うなされながら咳いたそうです。自分はリュオウに会った。砂漠の女神に会ったのだと。リュオウが怒っている。赦しを請つために廟を作らねばと」

「それでサルーはどうなったの?」

「そのまま死んでしまいましたよ。もう十年も前のことですよ。それ以来、砂漠にはサルーが現れて夜な夜な廟を作っているといつ太話を出来ましたがね」

そのサルーがどうしたのかと聞かれルルドは返答に困った。なんでもないと首を振るので精一杯だ。

今の話の中に欲しかった答えがあつたのかルルドには分からぬ

まだつた。

「うめんよ。今日はもう店じまいなんだ」

薄闇の広がり始めた路地から店に入ってきた気配を感じてイリヤは顔を上げた。

「聞きたいことがあるんだけど、いいかなあ」

「ああ、なんだい？」

祭りの時期になると裏街に迷い込んでしまつ観光客は多い。あまり見かけない恰好なので顔を覗かせた青年もそういうのだろうと快く答えると、少年はニイツと口角を上げた。

「今日セイラが来たでしょ？」

「セイラさんの知り合いで？」

「うん。まあね」

少年の含み笑いは、吹き付けてきた風と同じようになつて冷たかった。

「あれ？ セイラさん一人で来たの？」

店主であるイリヤは田を丸くした。

息を切らしているのは昨日クロエが連れてきた少女だ。

昨日は別にハナと言う少女もいたが、今田は見当たらず思わずたりを見渡した。

「ううん。クロエも一緒に来ただけ？」

人ごみに紛れて見失ってしまったのだ。

もう少し早くに城を出でてくるつもりだったのだが、心配性のハナが中々許可を出してくれなかつた。

原因不明の激しい動悸は今朝には綺麗やつぱりと治つていいところに。

少し遅れれば、通りにはいつの間にか観光客が溢れでいるところの始末。

何とか店までたどり着ければ合流できると思つていたのだが、当のクロエはまだついていなかつたようだ。

「まあ、やうのうち来るでしょ。出来上がり見てる？」

「うん」

ぱあと表情を明るくしたセイラを店のまへく案内する。

「じゃあ、中にドウヅ」

「うん」

染物のカーテンを潜り抜け行き着いた先には少年が立っていた。セイラの姿を認めると、人懐っこい笑みを浮かべた。

「やあ、セイラ」

「ヒイラギー！」

警戒心もなく近づいてくるセイラに苦笑が漏れる。アリオスの連中はもう少しセイラに慎重になれと教えるべきだった。少なくとも微妙な関係にある隣国の人間とは。

「ヒイラギは買い物？」

「ちよつと頼まれごとをしちゃってね」

「へえ」

背後で店主の体が強張った気配が伝わってきた。どうしたのかと振り返りかけたセイラの耳に届いたのは舌足らずで甘いくせに息吹のように冷たい響きを持っていた。

「ヒューロムのお嬢さんからセイラを攫つてちょうどだいってね」

田の前いっぱいに広がったヒイラギの笑顔。

細まつた瞳に浮ぶのは紛れもない悦で、開きかけたセイラの口を塞いだのは死人のように冷たい手だった。

同時に走った首筋への痛みでセイラは完全に意識を飛ばした。長く尾を引いた悲鳴は外の喧騒に紛れて意味を成さない。

「へんなことよ。君」

先ほどままでとまつりて変わつて熱を失つた瞳が青年を射抜く。冷や汗に溺れそうになりながらも青年は何とか声を絞り出した。

「ら、乱暴な」とはしないつて言つたじやないか！」

情けないほど震えた声。
同じように膝が震える。

「乱暴？ ちよつと眠つて貰つただけじゃない。五体満足。なにしろ生きてるよ。人聞きの悪いこと言わないでくれるかなあ」

がちがちと歯がかち合つ音がする。

青年の見開いた瞳に涙が盛り上がるのを何か面白い見世物であるかのようにヒイラギはとくと見つめた。

「協力ありがと。君の妹に乱暴なことはしないであげるよ

ヒイラギは手近にあつた布を引つつかむと器用にセイカの身体を包んで抱えあげる。

「かえせよ！ ちよつ協力したら無事に帰すつて言つたじやないか！」

「うん。帰してあげるよ。君と僕との間で無事の概念が同じだといいんだけどね」

果然とする青年にひらりと手を振つてヒイラギは雑踏に消えていく。

その後に息を切らしたクロトが店の中へと飛び込んだ。

「なんてこと」

心臓の音がひるさずぎて吐き気がした。

不明瞭な説明を何とか噛み砕き事態を把握した途端に全身から血の気が引いていく。

死人のような顔色のイリヤを見ながらクロエは己の顔色を悟った。

「どうして田を離したの」

ほんの一瞬、雜踏の中にあのマントを見た気がしたのだ。
セイラを掴まえていたマントの主を。

氣をやれば、あつという間にセイラの姿は見えなくなつた。店まではすぐ其処だ。

駆け出した割には心の奥底で大丈夫だという気持ちもあつた。

「クロエねえちゃ……どうしよう。おれ……」

恐ろしい人物に妹を人質に取られ、セイラまで泣かれてしまつた。彼が誰なのか、なんのためにこんなことをしたのかも分からぬ。昨日の夕刻に突然現れた少年は、協力しなければ妹の命はないよと言つたのだ。

妹のメルはたつた一人の肉親だ。

どんなことをしても守らなければと思つていた。
なのに、なのに。

「にーや？」

入り口から此方を覗き込んだのはイリヤによく似た女の子だった。床に座り込んでいる兄を心配そうに見つめている。

「……メル？」

「「」一や。どうしたの？ お腹痛い？」

とてとてと足音を立ててメルがやつてくる。
「」にも怪我をしたようではな。

「お前、」

震える手が小さな肩を掴む。

ちょっとぴり痛くてメルは顔をしかめたが、もつと辛そうな顔をしている兄の頭を、かつて母にしてもらつたように優しく撫でた。

「トッシュ一やと一緒にマイヤーさんとのじゅに行つていたのよ」

「トッシュ……」

セイラに名を貰つた青年は子どもたちから見れば小山のように大きくて大人気だ。

彼に肩車をしてもうれば空を飛んでいるような心地がするのでわざ先に子どもたちが集まつてくる。

「わわ。トッシュ一やは誰かを追いかけて行つちゃつた。セイねーやが居たつて言つナビメルには分からなかつたの」

メルはしゅんと肩を落とした。

メルは不思議なお話をしてくれたセイねーも大好きだ。

「つしょに追いかけよつとしたのだけれど、イリヤが心配するから帰れと言われば無理についていくことは出来なかつた。

けれどそれはよかつたのだ。にーやがボロボロと泣くのだからメルは涙を拭いてあげなければいけないのだ。

メルはささやくと抱き込まれて笑つた。にーやはいつもお前は子どもだからと罵づけれど、これではにーやの方が小さな子みたいだ。

「どうしよう。クロエねえちゃん。俺、セイラをここにひどいと

耳鳴りがうるわー。

けれどもクロエの頬には熱が戻つてきた。

「裏街の道に伝えてー。トッシュを探してつて

トッシュの姿ならまじめに居ても困に付く。

これから月影軍に知らせよ。情報が多い方がいい。

「わつ、分かつた」

「でも、危ないと思つたら身を引いて。無茶だけはしないでつて云えてよ」

「うんー。メル、マサおぼれんのといひにいつてる」

「うん。にーやこいつてひきこしゃー」

背後にメルの声援を受け震える足を懸命に動かしてイリヤは裏街を走つた。

ケイトに事情を話し終わった時、クロ工の喉はひゅーひゅーと音を立て、かつてないほど酷使した足は震えていた。

初めて出会えたのがケイトでよかつた。彼ならばきっと一番良い方法を取ってくれる。

背後に心配げなケイトの声を置き去りにしてクロ工は足を引きずるようにして歩き始めた。

汗のか涙のかよく分からぬものが頬を伝づ。鉄の靴でも履いたかのように足は重かつた。

伝えなければ。あの人にだけは自分から伝えなければいけない。目的地の入り口が内側から開いた時、クロ工は崩れ落ちそうになつた。

「クロ工？」

「……ジンさま」

言葉が喉に絡む。

「セイラ様が泣きました……申し訳ありません。私のせいで」

耳元を風が掠めた。

白い風が視界を横切っていく。

軽やかな白を引きとめたのは対のよつた不動の黒だつた。

「ちょっと、待ちな」

「……ジョゼ将軍」

自分の声が音になつていてるのかもはやクロエには分からなかつた。

「ジョゼ。離して」

「待てつて言つているだろ。状況把握もせずに、どこへ飛び出していくつもりだよ。ケイトに聞いたが嬢ちゃんが浚われたつてのは本当か？」

頷いたクロエを見てジョゼは眉間に皺を深くした。

「知り合いの一人が追つているようです。彼を裏街の人間で探してもらっています。少しば足取りが掴めるかとは思いますが……」

それがどれほど助けるになるだらう。

「上出来だ。後は俺たちに任せろ」

「……はい」

力強く言われ少しだけほつとする。

「もう一つ、聞きたいことがあるのだが、ナジユール殿は一緒になかつたか？」

「……いいえ

「隣国王子が一体どうしたというのだらう。

「ナジユール殿もいないの？」

「そのようだ」

昨日、リブングル家に招待されたところまでは分かっているのだが、その後のことがようと知れない。

おかしなことにセイラのことが知れ始めてから、ナジユールの姿が見えないことが話題になり始めた。

このままでは済ったのはナジユールだという噂が流れかねない。早速、緘口令がでてセイラの行方が分からぬことを知っているのはまだ僅かな人数にとどまっている。それがいつまでもつかは分からぬ。城の中には醜聞好きの貴族たちがたくさんいるのだ。

「セイラ様の行方を捜さないのですか」

「おおっぴらにはな

「そんな

「街は祭りでわいている。そんな時にこんな話が漏れてみろ。酷い騒ぎになるだろうさ」

「それは分かります！　だけど……」

将軍に歯向かっている。

普段ならけつしてそんな怖ろしい行動など取る事は出来ないのだけれど、クロエは詰め寄った。

頭に響く金切り声がまるで自分のものではないように響く。

「幸いなことに、警備のために街中に月影の人間を配備してある。

街を出れば陽炎の連中もうようよしているからな。あんたに知り合
いだつていう奴に情報を貰えれば見つけるのはそんなに苦労はしない
だろうよ。俺も今から街へ降りる

「私も行く」

逆に腕をつかみ返されたジョゼはしばし声を失い、にやりと笑う。
「よし。行くぞ」

頷きを一つ返したジルフォードはクロエへと視線を向けた。
どくりと心臓が跳ねる。自分の失態が情けなくて顔を上げること
ができなかつた。

「クロエはハナ殿についていて」

頭上から降り注いだ言葉にはつと顔を上げたときには、ジルフォ
ードの後姿はもう小さくなつていた。

おかしい。おかしい。これはおかしな事態だ。

ナジユールがまだ帰つてこない。

連絡も無しに丸一日も姿を消すだなんて賢明なナジユールからは考えられない。

ここがタハルならまだしも友好関係が危うい均衡で保たれているアリオスなのだ。

本当に貴族の屋敷で過ごしているのならば心配をかけないよう連絡の一つでも寄越しそうなものだ。

今朝からサクヤの姿もない。

すつかりアリオスの待遇に骨抜きにされた他の付き人たちもサクヤの行方は知らないといつ。

「なんであんな奴らを連れてきたんだよ！」

残りの一人は家柄は良いが凡庸だ。

侍女たちにタハルなどやめてアリオスで暮らせばいいの」と言わ
れ鼻の下を伸ばしその気になってしまつてゐる。

出来損ないのルルドが言うのもなんだが、剣の腕も良いとは言え
ないだろ？。

あくまでもルルドの基準がナジユールなのでそう思つてしまつ
かもしけないが。

それにしても何故サクヤは残りのメンバーに彼らを選んだのだろ

う。

悪態はそつくりそのまま自分に戻ってきて、ルルドは「」を小さく罵った。

誰か一人の行方を知っているものがいないだろうかと巡らした視線の先を、弱弱しいところばかり曝してしまい顔を合わせるのが恥ずかしいと思っていたジョゼが通り過ぎた。駆けてこそいなが急いでいると分かる速度。

その後をジルフォードが追う。

彼の姿を書庫以外で見かけたのは初めてかもしれない。

いつも壁の向こうにでもいるかのように自分の世界の中にはいるジルフォードの顔に浮ぶのは焦りで、そんな表情が出来ることになぜかほっとする。

それもつかの間、彼らが急いでいることにナジユールが関係しているのかもしれない。

ルルドは被り物を脱いだ。

色鮮やかな布を取り払ってしまえば自分に視線を送るものは半減する。

流れの髪をそのままにルルドは砂漠の獣が狩りをする時のように気配を殺し、一人のあとにすばやく続いた。

耳元に水滴が落ちる音で目が覚めた。
けれど、目を見開いてもあるのは暗闇ばかり。目隠しなどされて
は居ない。

セイラは本当の闇に一人、取り残されていた。
ひやりとした空気が頬を打つ。

手には湿った石の感触。

時折、水滴の落ちる音がする以外は何も聞こえてはこない。

「どう?」

セイラの声は細くうねり、暗闇の先まで流れていった。
どこか細く奥行きのある場所だとしか感じ取ることが出来ない。
まるでジニースの坑道のような場所だ。右も左も分からない。
何処へ続いているかも定かではない。
セイラは深く息を吸つた。そして、細く吐く。ドキドキと跳ねる
心臓をなだめるために。

「暗い。湿った匂い」

自分にいい聞かせるように現在持っている情報を口にする。
次は何か持つていなかつたかと体中を探つた。ポケットから飴玉
が2つ出てきたきりだった。
何か灯りに出来るものがあればよかつたのに。
最後の記憶を呼び覚まそうと目を閉じれば、からからと笑うタハ
ルの青年の顔が思い出された。

「ヒイラギ」

呼ぶも応えはない。

他に生きたものの気配はない。立ち上がりつて壁に手を這わすと、セイラは瞼を閉じた。

目を開いてもどうせ見えない。それならばいつそ聴覚に頼つた方がいい。

右の方からヒューと細い風の音がする。セイラは迷つゝとなくそちらに足を向けた。

なんだか躊躇ながら、そろそろと進む。

手を這わせた壁は相変わらずじつじつとしている。時折、水滴が落ちてきて小さな悲鳴を上げさせた。

ジニスの歌をちょうど二回歌い終えた時、開けた場所に出た。最後の一音がほうと遠くまで響いたのだ。

目を開けると巨大な空間があった。薄ぼんやりとした青い光が天上から注いでいる。足元は闇のままだ。

「なにあれ？」

「ほ

小さな吐息は笑いを含んでいた。

背を振るわせたセイラは辺りを見渡したが人影は見当たらない。

「珍しい。じりやあ、珍しい。こんなところに娘つこがあるわ」

重くひび割れた声。

それなのに面白いとガラガラと空間を無遠慮に揺らす。

懸命に目を凝らせば一際濃い闇の中にそれはいた。

蹲つたそれには確かに手足があつた。

岩のように見えていたのはロープを頭から被つていたためだ。ぬ

らじと光る眼珠がセイラを食い入るように見つめている。

「……あなたはだれ？」

「ジユードー」

「じゅどー？」

それが名前なのかその存在自体なのか響きから知ることが出来なかつた。

「私はセイラだよ。ジユードー」

「！」の中で名前などあまり重要ではないのだよ。お嬢さん

そう言しながらもジユードーと呼べばジユードーの瞳は細まった。

「！」がどこだか教えてくれる？

「ほ。ほ。亡者の道だよ。お嬢さん。外れれば、死者の国」

脳裏に浮んだのは田の前の闇と同じ色をした一冊の本。グランが大切そうに抱えていたあの本だ。

一度迷えば死者の国。そう言われたのは、確か……。

「ノースの道？」

「そうぞ。アリオスとタハルを繋ぐ希望の道。一步踏み外せばカト
ウーデイ」

「カトウ？」

「迷路の」とか。お嬢さん。亡者が手招く死國へのね

笑い声が地を揺する。

地 자체が囁つていてるかのようだ。

「それは困る！」

「まつ」

「迷路で遊んでる暇なんてないんだ。早く帰らないと」

「正しい道を全て知つていってもノースの道を越えるには三日三晩かかるのだよ。お嬢さん」

「それも困る！」

三日も留守にすればちょっとした騒ぎでは済むはずがない。
ほんの少し街に下りるだけだったのだ。夕刻までには帰るとハナ
だつて思つて居る。

「どうにかならないかなあ？ ねえジユードー！」

「まつまつ。お嬢さん、方法があるとして私の言葉を信じるのかい
？」

「まつ」

「何故？ 今あつたばかりの得体の知れないものだよ？」

試すよつな声に少しおもひとじて口を尖らせる。

「ジユドーは私に嘘を教えるの？」

「ああて」

「じゃあ、秘密を一つ教えてあげるからジユドーは真実を教えて」

必死な顔にふふと忍び笑いが漏れた。

「いいだらう。お嬢さんがノースの道の真実より重たい秘密をくれるのならね」

「いいよ。まあ、メモの用意はいいですか？ かりん1、オージイ2、蜂蜜1を交ぜると。とっても美味しい！…」

「はつ？」

「メイオンの花びらを加えてもなおよし！ カナンのスペシャルレシピだよ。お茶にまぜてもパンに塗つても絶品なんだから」

「……かなん」

ジユドーは喉の奥でぐふりと笑つた。

しばらくの沈黙の後、ジユドーが頷く気配がした。

「いいだらう。貴重な秘密をありがとつ。お嬢さん。風を頼りに行きなさい。風はタハル側からアリオス側に向けてしか吹かないのだよ。一番あつい風を辿るんだ。最も早く抜けられるからね。それで

も直ぐに出でられるとは思わないことだ

「分かった。ありがとう…」

駆け出して立ち止まる。

振り向けば不思議そうに瞳が此方を見る。

「ジユードーも行かない？」

「遠慮しておくよ。お嬢さん。出て行きくなつたら私には足があるのだから大丈夫。闇に飽きたら出て行くさ」

「そう。またね。ジユードー」

「また？」

「」のお嬢さんはまたここへ戻つてくるつもりなのか。

「闇に飽きたら会いに来て。今ねアリオスのお城にいるの。上手くいけば2日後の夜には春乙女の舞を踊つてるんだ」

「ほう。エイナの舞か。2日後は大月だ。それはそれは美しかろう。頑張りたまえ。お嬢さん」

「うん。じゃあね」

風を感じてセイラは走り出す。

暗く開けた空間に残されたジユードーがぼつりと零した。

「もうそんな時期か」

外はシルトの花盛りか。

最後に見たエイナの舞はジュドーの娘が舞つた時だつた。
あの誰よりも強かつた王が病に侵される前だつた。

「はてさて、ハマナやエンは健在かのう？」

一人だけ元気そうだ。
カナン・スフィア。

「そうか、あの香りはオージィイか

久しぶりに空腹を感じて、ジュドーの薄い腹がぐうと鳴いた。

「厄介な場所に入り込んだものだ」

暮れゆく空を背景にジョゼ・アイベリーは忌々しげに頭を搔き垂つた。

ばかりと不吉な闇を広げているのはノースの道への入り口だ。
時折、ひょおおおと不気味な音が迫つてくる。

この中は小さな道が入り組んでおり、誰も全容を把握していない。
どれほど人数を裂いてみても全ての道を探せるとは思えなかつた。

「仕方ない。目印を付けながら進むしかないな」

將軍の言葉を承認するものいなかつた。

それは見知った闇だった。

湿っぽく冷ややかな風の吹く暗い洞穴の闇だ。
ノースの道。

一度しか通ったことがない道だが、太陽に焦がされた世界から飛び込んだときの衝撃は忘れない。

じつとりと圧し掛かる水気を含んだ空気がまるで亡者を背負っているかのように感じられたものだ。

唯一自由になる瞳だけを開けて状況を把握しようと試みたが僅かな効果も得ることは出来なかつた。

深い闇はどこも同じで、ノースの道のどの位置にいるかなど到底わからぬ。

手足は鎖で繋がれたかのように重く、自由には動かない。まとわりつく甘い香りのせいだろう。

愚かな女だ。本当に憎いのならば意識のないうちに首を落とせばよかつたのに。

土を踏みしめる音がした。

やつと決心して帰つて来たのか。

耳を澄ませばそれは違うと分かった。足の運びに無駄がない。獣のようにしなやかに。

その足音の主をナジユールは知っていた。オレンジの光が暗闇を切り裂きながら近づいてくる。

松明に照らされた顔はやはり想像通りのものだつた。

「……サクヤ」

搾り出した声は己のものとは思えないほど悄然としている。

「「」」無事で何よ」

ナジユールは笑った。

その笑みは彼には似合わない自嘲じみたものだつた。
炎がちらりと暴いたナジユールの横顔は急に力を無くしたようだつた。

「私も愚かになつたものだな」

女一人に没されて、自由を奪われ動くことも出来ないなんて。
女の素性を知つた途端、死ぬ理由をちらりとでも考えた。

「ナジユール様。過ちは誰にでもあるものです。ただ、過ちは正されば」

重たいものが落下する音とともにナジユールの頬に何かが飛び散り、
先ほどからあたりに漂つっていた死の匂いが急に濃くなり圧し掛かる。
力なく垂れた女の手にある抉れた傷跡の下には、狼の紋章があつた
はずだ。

「セイオンの生き残りがいたとは知らなかつた」

一夜にして消え去つた獣使いの一族。

村の全員が寝床で眠るよう死んでいた。今尚、直接の死因は判明
していないがセイオンにだけ伝わる毒薬のせいだろうと言われてい
る。

原因を作つたのはナジユールだ。

秘儀を他国へと持ち出そつとした放蕩息子の処分を長に任せた翌朝
のことだつた。

今思えばその情報とて正しいものだつたのかは分からぬ。

真黒に日焼けし、節くれだつた指をしたあの青年は本当に放蕩息子だつたのか。

息も絶え絶えに砂漠から戻つてきたサルー。

女の面差しは彼に似ていたかもしない。

「サルーの妹かもしけないな」

物言わぬ死体になつてしまつては確かめようがない。

「サルーはリュオウに会つたと言つていたな」

砂漠をさ迷い歩き、意識も途切れ途切れながらサルーはリュオウにあつたと語つた。

彼女のために廟を作るとも言つていた。

いつのまにか話は変容し、廟を作れと命じたのはナジユールだとう噂が広まつているがナジユール自身はそんな無益なことを言つはずがない。

「熱に浮かされた戯言ではありませんか」

「砂漠の女神の髪の色は亞麻色だつたと言つていたぞ」

サクヤの頬から色が抜けた気がした。

「リュオウは妹を救つてくれるはずだと」

「悪夢でも見たのでしあつ

「私は一族の命を差し出せとは言つてこない」

「彼らは愚かな判断を自ら下してしまったのです」

サクヤは主を助け起そうと身をかがめた。
その耳元で掠れた笑い声がうねる。

「分かつていたはずなんだ。黒幕はあんただつて

サクヤの瞳が一瞬、細まった。

闇に染まつた手の内のナイフに力が入る。

「だけど、夢を見た。サクヤと一緒にタハルを豊かな国に出来る
かもしれないとな」

実際は一つとてまともに行かなかつたけれど。
違和感を感じるようになつたのいつのことだろ。う。
ぴたりと沿つっていたはずなのに、いつの間にか離れていく。
思い通りにことが運んだと思つても僅かな輝が生じてゐる。
その元を連れればいつも中心にはサクヤがいる。セイオンのことにして
てもそうだ。

やはり愚かになつたのだろう。

認めたくなくて目を瞑ろうとしたのだ。そんなことはないと言い聞
かせようとしていたのだ。

疑惑が確信に変わつたのは、父と最期に顔を合わせたときだ。
ウォーダンはタハルの王としてササン大陸の埋もれた記憶の一片を
語つてくれた。

そこから導き出された答えに愕然としながら、怒りも沸いて出た。
弟までも巻き込むなんて。

だがそれは杞憂だ。もうルルダーシュは幼い子ビもではない。

「ルルドを王につけるか」

「……はい」

ナジユールは目を閉じた。

瞼の向こうには荒涼と広がる砂の世界がある。

一面砂の色。

輝かしいものなど何一つないわが故郷。
身を焦がす熱は此処にはないけれど、いつでも肌がじりじりと焦げる
感触を思い出すことが出来る。

「ルルドが王になればタハルは強く優しい国になるだらう」

サクヤの眉間の深い皺は更にきつく刻まれた。

ルルダーシュは傀儡の王。弱く泣き虫のルルダーシュに一体何が出来るといつのか。

「あれはたった一人である砂漠を緑に変える氣でいるぞ。誰よりも
鮮やかに美しく豊かなタハルの未来図を描いている」

「どれも子供もの戯言です」

「ではお前の目指すものは何だ？ 死人の妄言ではないか。本当に
ユザとやらが復興すると思っているのか？ 寝物語ですら語られな
い忘れ去られた国だ」

「忘れてなどいませんよ。まだこの国は『色なし』を恐れている。
己が犯した罪が田の前に現れることが怖いのですよ」

「恐れているのはお前たちではないのか？ あの女は番の配合を話
はしなかつただろう。セイオンの連中はお前たちに情報を取られる

のを嫌い自ら口を閉じた。サルーでさえ口を噤んだ。思い通りにはいかない。悔つていれば痛い目を見るぞ」

一人の間には奇妙な空白が生じた。

その一瞬の隙を突いて全身の力を集約してサクヤの喉元に噛み付くとぶちりと肉が裂ける音がした。

どつと口の中に溢れる血の味に吐き氣を覚えながらも更に噛み付く。

「ぐうつー。」

互いに獣のような唸り声を発しつつのたうち回る。

上に下にと視界が回る。

そのうちナジユールの右腿に激痛が走った。

無理やり引き離して痛む箇所を見下ろせば、ナイフが突き刺さっている。

止血を施したが痛みは増すばかり。この足を引きずりながら不慣れな洞窟を行く自信は少しばかりぐらついた。

喉元を押さえ蹲つたサクヤは、肺に侵入した血液を追い出そうと苦しげにせきここんでいる。

「さよならだ。サクヤ」

どうと仰向けに倒れたサクヤの心臓の上に切つ先が当てられた。裏切り者を野放しには出来ない。ルルダーシュも彼を慕っている。きっとナジユールと同じように煩悶するに違いない。少しでも憂いを断ち切らなければいけない。

沈む刹那血に染まるサクヤの口元が薄く笑つたような気がした。風が吹く。

死の匂いを追いやるよう。

岩の隙間に入り込んだ風が、ひょおおおおうと物悲しげな音を立て

る。

身体を縛る香りは薄れたといつに身体の動きは更に鈍くなる。使い慣れたはずのナイフが重い。

もう一度、地に伏してしまえば一度と立ち上がる事が出来なくななるような気がした。

縛るように視線をやつた先にちらりと光が見えた。

「ありやりや、予想より起きちゃうのが早かったみたい」

ヒイラギの体内時計は正確だ。

こんなあなんぐらで過ごすのはもつ慣れっこになつてゐるため、外の様子もなんなく察することが出来た。

青い闇が無慈悲な太陽に貫かれ色を失つていく。夜明けだ。

後ろから軽快な足音がする。

暗闇に怯えた様子は微塵も無い。

入り組み、ほとんど光の入らないノースの道は何かを隠すのにはもつてこいの場所なのだが、それがセイラとなると別だつたようだ。今回は教訓を与えるためにも手加減はしなかつた。

丸一日眠つていても可笑しくない力を込めたはずなのにヒイラギのすぐ後ろに迫つているということは、予想の半分の時間で目覚め、なおかつ正確な道をすばやく選んですすんできたことになる。嬉しいのだか悲しむべきか悩むところだ。

セイラが予想以上に出来ることにはぞくぞくする。

鍛え上げればきっとルカに並ぶだろう。

懸念は一つ。その優秀さがあだとなる。

「不味いなあ。鉢合わせしちゃつかな?」

それはほんの少し困るのだ。

任された計画はちゃんとやり遂げなければ意味がない。

今回のセイラの件はほんのおまけだ。

飽きずに商人のふりをして城へ紛れ込めば、一人の娘が声をかけてきた。

それがヒューロムのキアだということは事前にセイラの話を聞いて

いたため疑いようがない。

彼女のお願いを聞いて思わず笑ってしまった。

険しい顔をされてすぐに引っ込めたけれど、嘲りは田にも宿る。

馬鹿な娘だ。

「えられたものでは満足できない。

もつともつともつと。

不相応のものを望み続ける愚か者。

もう少し賢ければユザに向いていたかもしれないけれど、間抜けな

小娘など寂れた田舎がお似合いだ。

今頃、報酬を求める手紙を受け取つて青くなつてゐる」ことだらう。

ああ、愉快愉快。

「ふふ。……うん？」

セイラの足取りが鈍つた。

この辺は一本道が続き、迷う場所など無いのに。

途中には祈りの場と呼ばれる空間が数箇所ある。

どういう仕掛けなのか、そこにだけ外の光が入つてくる場所があるのだ。

その一つには変なものが住みついていることは知つていたが、そこは随分と前に通り過ぎた。

先ほど通り過ぎた祈りの場はノースの道の中で最も開けた空間だ。

そこが山脈に穿たれた道だということなど忘れてしまった。うなほど広い。

そこに夜明けの光が入り込み、その光景に魅入つてゐるのかと思つたがぼそぼそと話しそうなものがする。

「んん？ まさかサクヤ殿がしくじつた？ そんなまさかなあ……
ねえ」

でも、もしも万が一にも情が移つてしまつていたら。

十年以上も共に過ごしてきたのだから絶対にありえないと言えない。ヒイラギだって、役立たずのルルダーシュを押し付けられて辟易していたのに、今では別にいいかだなんて思つてゐるのだから。

想像以上に成長した可愛い生徒をサクヤは手にかけることが出来るだろうか。ヒイラギはとんと跳躍し祈りの場へと急いだ。

その場所まではさほど遠くない。

たどり着いた時にヒイラギは思わず奇妙な表情を浮かべてしまった。セイラと話しているのは背がとても高いことを除けば凡庸とした青年だった。話し方ものろくてヒイラギは苛立つた。

あんなのに街から付けられていて気がつかなかつた！

羞恥で頬が熱を持ったのが分かる。

「セイラ。戻るつ。ここは良くない」

「うん」

あんなのにセイラが手を引かれているのを見て苛立ちは頂点に達した。

懷に隠していた鉢が唸つた。

目にも見えない速さで打ち出された鉢は青年の腕を傷つける。次の鉢は足の皮膚を裂いた。

「トックトック」

沈みこむトックトックで慌てて声をかければ血の匂いがする。

「どうしたの？」

セイラがもう一つの気配を察して辺りを見回した。

闇の一点と田が合つた。

それが見知った青年の姿をとるのに時間はかかるない。

天井から降り注ぐ青白い光が不気味に青年を闇から切り離す。

「ヒイラギ……」

「やあ、セイラ」

ヒイラギが進み出れば、顔を歪めたトッドが広い背中へセイラを隠す。

気に入らない。気に入らない。

「君、邪魔だよ」

微かな音と共に無数の鉈が打ち込まれた。

それは、とてもゆっくりに見えた。大きな体が傾いでいく様も、立ち上る砂煙も。

ずんと地が揺れた。

「トッドー！」

地に伏した体に力はなく、無数の傷からは血が滲み出している。鉈の一つはトッドの身体を貫通して背後の壁へと刺さっていた。

「トッドー、待って、起きてよ。ねえ」

血塊が零れ落ちた。

咽るたびに、大量の血液が全身から噴出した。
いくらきつく押さえようとも、セイラの小さな手では限界がある。
両手はすぐに真っ赤に染まった。

「セイラあ。無理だよ。」

目の前にヒイラギの足が見えた。
視線を上げてこくと、困ったように口の端を上げるヒイラギの姿がある。

「それ、かして！」

「えつ？ちよつ……あ～それ取られると肌蹻ちやうんだけど

油断している間に、腰に巻いていた紐をひつたくられる。
その紐で結んでいるだけなので、でろりと衣ははだけてしまう。返して欲しいと言つ前に、それはどつぶり赤に染まっていた。

「そつち持つて！」

「あ、うん」

勢いに押され、差し出された紐の一片を持たせているのだが。可笑しな状態だ。

「あ～セイラあ？ あのさ、その人傷つけたの、ボクなんだけど……そんな奴に治療の手伝いをせる？」

「君が怪我させたんだから、君が責任持つのは当たり前だろ？」

「うへん

とんでもなく、正論の氣もあるのだが、果たしてどうなのだ？

「ボクが、ここに殺そうと思つたんだけど」

「アハ

なんだかとても馬鹿らしくなつてくる。

言われたとおり、引つ張つてやる必要なんかないのだ。

「離したら許せないから」

その言葉にヒイラギの表情が動いた。

にっこりと口角がつりあがる。

「許せないって、どうすんの？ ボクと勝負する？」

「絶交する」

「ふへ？」

「それ離したら、絶交するから。もう一緒に遊ばないし、話もしないし、名前も呼ばない」

「……それは、ちょっと嫌かも」

セイラヒライザリヒライセイと呼んでもいいのは好きな氣がある。
そばにいるのこちつとも呼んでもられないとしたら、さつと嫌だ。
むむつと唸る。手を放すか放すまい。天秤がぐらぐら揺れる。

「でもサキの術使えば、意味無いんだけどね。街で会つたでしょ？
術士。セイラにヒイラギ大好きとも言わせることが出来るよ？」

「そうしたい？」

「うーん。それも嫌かな？」

サキの術は人心を操れる。

けれど操られた人間はどこか生気がなく、ガラス玉のような瞳をしているように思う。

セイラはどうでもよいことにコロコロと表情を変えるのが面白いのだ。それが失われるのは良くない。

「ヒイラギ大好き」

「へ？」

「ヒイラギ大好きだよ。だから、離さないでよ」

「そんな取つてつけたように言われても」

セイラはヒイラギを見上げもせずに処置を続けている。
ヒイラギもほうと感心する手さばきのおかげで噴出していた血は次第に勢いをなくした。

セイラも安心したのだろう。一度トッドの頬を撫でると視線を上げヒイラギを瞳の中に捉える。

「トッドに死んでほしくないし、ヒイラギにトッドを殺した人になつてほしくない」

予想だにしなかつた強い視線にたじろいでしまった。
なんだがばつが悪くて下を向く。

「……何言つてんのさ。ボクはずーっとこいつやつて生きてきたんだ
よ。今トッドを殺した人にならなくとも、きつと何処かでセイラの
会つたことのある人殺してるよ?」

嘘だ。

「きつと」ではない。

自分はセイラの大切な人を手にかけたことがある。

そのことを知れば、絶交だなんて可憐うしいことは言えないに違
ない。

自分の歩んできた道を嘆くつもりも悔いるつもり全くありはしない
のだけれど、このことだけは知られたくないかも知れない。
トッドを殺した人の方が百倍ましだ。

「それでも、嫌だよ」

力を抜こうとしたまさにその時、被さるよつに告げられた言葉にも
う一度布地を握りこんでしまった。

ああ、なんて馬鹿なんだろう。

またタイミングを失つてしまつ。

「わがまま」

「わがままでのー！」

「開き直るの？ まつたくいい性格してるよね。ルカそっくり！」

息を飲む。

それはどちらだつただろう。

「母様を知つてゐるの?」

ヒイラギの表情が歪んだのはほんの一瞬。まだそこまで教えてあげるつもりは無かつたのだけれど、珍しく乱れた感情の性でいらぬことまで口走つてしまつた。

光を帯びるセイラの瞳にとぼける気持ちは消えてしまつ。

「ん~まあね」

「なんで知つてゐるの? 会つたことがあるの? タハルに居たことがあるの?」

「ん~……」

矢継ぎ早の質問に答えないままでいるとじれつたそうに身をよじる。話してしまおうか。それともこのまま消えてしまおうか。きっと丫头を置いてまではヒイラギの後を追つてはこないだらう。そろりと浮かしかけた足を地面へと縫い付けたのはセイラではなかつた。

それは白い白い軌跡。

強烈な光の残像でもあり、無慈悲な影そのものでもあつた。

急に膨れ上がつた人の形をした気配にヒイラギの心臓は冷たい鉤爪で握りしめられたように縮む。

伸ばされた腕が向かう先を予想できたのに身体はぴくりとも動かない。

ようやく肺にたまつた空氣が出口を見つけたのは、ヒイラギの頬に

温かなものが飛び散り、セイラの悲鳴が聞こえてからだつた。

「君、何やつてるの？」

白い魔物。

天上からの光を受けて真白に輝く髪。

白い頬を彩るのはセイラのおかげで生きながらえていた青年の赤。それより尚鮮烈な赤がヒイラギを睥睨する。

目の前の青年は片手でセイラの髪を掴み、引き倒しているのを除けばあまりにも無防備に立っている。

彼の持つていたであろう剣はトッドの胸に深々と刺さつたまま放置されたままだ。

それなのに敵わないと思い知らされる。声をえ出ない。

「いた……」

セイラにはまだ何が起つたのか分かっていない。ぎしぎしこと痛む頭に涙が浮く瞳をようやく開けば、白い檻が見えた。

「ジ……」

名を呼ぼうとして凍りつく。

これは誰だ。

もしも髪をつかまれば、すぐさま距離をとつたことだらう。

流れる髪は天から注ぐ僅かな光を受けて白く輝いている。それ自体が淡く発光しているのかと見紛うほどだ。

セイラを見下ろす赤い瞳も火でも灯したかのように綺羅と光る。けれど、美しいなどとは少しも思わない。

力任せに引かれて瞳を覗き込まれると魂の奥まで覗かれたようで総

毛立つ。

「うう、ああ」

痛みで声が漏れる。

「これがセイラ？ ふうん？ ルカに似てる？ どうかなあ」

「なんで……母様を」

「母様……母様ねえ。まるで何も知らないの？ ねえ？」

更に力を込めて引き寄せられれば、全身が引きつるようになに痛む。食いしばった歯の間からくぐもった悲鳴が漏れる。

引き離そうと伸ばした指先が触れたのは氷のように冷たい手だ。触れてはいけないような気がして慌てて引っ込める。指先から凍つてしまいそうだ。

逃れようと両足に力を込めてみても、すべて上手くいかない。身体が沈んだ分だけ痛みはひどくなる。

何故、足元が滑る。さっきまで平氣で歩いていたのに。滲む瞳で見下ろせば、ゆるりと黒い海が広がっていく。音もなくじわりじわりとその中にセイラの身体を取り込んで更に口の領域を増やしていく。彫刻のように不動のヒイラギの方へも。

「……あ」

一声出すのが精一杯だった。ひゅっと喉元がおかしな音をたてる。黒い液体の正体は嗅覚が教えてくれた。靴を濡らすその温度を震える手が覚えている。

帰ろうと手を引いてくれた、大きな手の温度。

「トシダー。」

苦しげな顔は無かった。

薄く開いた瞳に注ぐ光は、その表面を滑るだけだ。眩しいと細められることは無い。

「トシダー、ああ、ここのこと?」

嫌な音と共に剣が引き抜かれる。

黒い海が揺れる以外の変化は無かった。

「もう死んでるよ

「離してー。」

自分を捕らえている腕に爪を立てた。皮膚が削れる感触があつたが、セイラを掴む力が弛むことはない。

「質問には答えなよ」

「知らない! 君なんて知らない。母様からは何も聞いていない!」

「母様、母様、母様! まったく嫌になるよ。まるで自分のものみたいに!」

思い切り頭を押し付けられても思いのほか痛くは無い。

その代わりに生暖かい液体が全身にべつたりと張り付いた。

セイラが押さえ込まれていてるのはトッドの身体の上だ。確かに先ほどまで上下していた胸は動かず、失った血液のせいですでに身体の表面が冷たくなりつつあった。

あえぐ口の中にも鼻の中にも死の匂いが入り込んでくる。

セイラは口を引き結び、息を止めた。

認めたくないかったのだ。トッドが死んでしまった事実を全身で拒絶すれば再び息を吹き返すと信じたかった。

頑なに動こうとしないセイラの上から笑い声が降ってきた。今の怒声が嘘のように凧いだ静かな声だ。

「認めなよ。もうただの『みだつて』

「『みじやない…』

見開いた瞳から涙が弾ける。揺らぐ視界の向こうでヒイラギが顔を伏せる。

こんなことになるのなら、せはりセイラの言つてなんて聞いてやるのではなかつた。

真っ赤に染まり使い物にならなくなつた帯は全くの無駄ではないか。ヒイラギはトッドを殺した人にはならなかつたが、トッドを殺し損ねて、助け損ねたという立場になつてしまつ。

もしもヒイラギが手を下していれば、セイラが掴まるのはもう少し先だつたのに。

「そんなことどうでもいいのだけねえ。そうだ！セイラ。私は似てるかなあ。君の大好きな『色なし』に。ジルフォードだったかな。あの歌を聴いたよ。初雪の色だつて？ねえ私にも歌つてよ

舌がセイラの頬に張り付いた血を拭う。零れ落ちた涙を巻き込んで瞼の上も通り過ぎる。

「ほら、早く！」

理解が出来ない。

癪癩を起したように怒り始めたと思つたら、諭され、次には子どものように歌を強請る。

まるで幾人もを一度に相手をしているかのようだ。

もう一度「離して」と叫ぶと、今度はすんなりと開放された。血だまりの上に躊躇無く腰を下ろすと拍手をする。

人一人を死に追いやつたとは到底思えぬ無邪氣な笑顔に心臓が早鐘のように鳴る。

警告音のように脈動がうるさい。

視界の端でヒイラギも同じような顔をしていた。

セイラと。

彼もこの青年を畏れている。仲間を見つけてもうつとも心強くはない。むしろ不安ばかりが増していく。

「君は誰なの？」

「『色なし』だよ。ほら、ジルフォードと同じ色でしょ

「似てない。絶対に似てない。ジンと君は絶対に似ていない。」

ジルフォードを苦しめてきた『色なし』といつ言葉をなぜこの青年は誇らしげに語るのだろう。

王族の色を持たない『色なし』

瞳の色の定まらない『色なし』

それ以外にどんな意味があるのか。

青年の瞳の色は赤一色だ。生々しい不吉な色。

それが一いつと細まつた。

「同じ白だ」

「違う!」

綺麗だなんて少しも思わない。

触れたくない。逃れたい。目を反らしてしまいたい。目を反らすことが出来ないのは、あいつだけの怒りを視線に込めているせいだ。

彼とジルフォードは似ても似つかない。

それでも指先が伸びてきた時、怒りが僅かに恐れに侵食される。叫びだしたいのを堪えて、痛むほど唇を噛んだ。

「本当にルカは何も話していないんだね。自分のことも。ゴザのことも。『色なし』のことも。そして、セイラ。君のこともね」

「私のこと?」

「ルカはねゴザの人間だったんだよ」

「やだ?」

薄い唇が耳元でくふりと笑う。

三田月のように弧を描いた唇が触れる刹那、風を裂く音がした。

「これは何の真似なのかな？ ヒイラギ」

今しがた鉢がうなりを上げて青年の頬の横を通り過ぎていった。傷一つついていないものの、白い髪がはりりと揺れる。

赤い瞳が剣呑に光る。

背筋が凍えそうな視線を受けながらヒイラギは盛大に顔を歪めた。

「それは、じつちのセリフですよ。ローダさま！ 今回のこととは僕らに任せてくれるって言ったじゃないですか」

自分の良いことじみは何事も長く続かないことだとヒイラギは理解している。

悪く言えば飽きっぽいのだが、それが感情となればまた別の話だ。恐怖も嫌悪を感じることが出るが、持続しないのだ。

先まで引きつっていた顔の筋肉はすでに日常と取り戻し、凍りついた舌は滑らかに動く。

何も危機は去っていないのにヒイラギが抱いた恐怖は跡形も無く溶け、ここにいるはずの無いローダの存在に怒りさえ沸いてきた。その怒りさえ次第にどうでも良くなつてくれる。

「何でこんなとこにいるんですか？ 余計なお世話ですけど、心配でもしてくれたんですか？ 本来貴方は家にいるはずでしょ？」

「……最期を見届けようかと思つてね。でも、私としたことがすっかり花を持つていくのを忘れてしまつたよ。失敗。失敗。まあ、あつたところですぐに干からびてしまつけどね」

「最期つて……タハルまで行つたんですか」

「うん。 しつかり見てきたよ。 ウォーダンは死ぬ前に私のことを化け物と呼んだよ。 可哀想に。 それ以外に罵る言葉が思いつかなかつたんだね」

「ウォーダンつてタハルの王様……」

セイラの咳きを聞き取つてローダと呼ばれた青年は楽しげに笑う。
「そうだよ。 ウォーダン王。 だけビもつすぐ前国王つて呼ばれるようになるかな？」

ウォーダン王が亡くなつた。 それでは、 ナジユールは父親の死に目に会うことができなかつたのか。

セイラはナジユールの様子のおかしかつた夜のことを思い出した。 彼は何らかの方法でいち早く、 ウォーダン王の訃報を知つてしまつたのだ。

「王様のことを思つてゐるの？」

ヒライラギのせいで開いていた距離が一気に縮まる。

「自分のときのように最期に立ち会つことが出来なくて可哀相？」

「え？」

確かにセイラは母の最期に立ち会つてはいない。
ジースの誰もがあんなにも急に逝つてしまつとは思つていなかつただろう。

いつもの生活が始まるはずだった。

「なんで？」

「私は何でも知ってるよ」

ローダが耳を澄ます。

ヒイラギもそれに翻つたが彼の耳には何の音も聞こえては来ない。闇の中を透かしてみようと目を細めたが、あまり効果はなかつた。

「面倒」とがやつて来そうだねえ

ローダの言葉に遅れること数瞬、闇の中から黒い獣が飛び出した。影だと思つたのは流れる黒髪だった。まるで尾のようひそんと揺れる。

今の今まで気配など無かった。

正真正銘、獲物を狙う獣のようこしんと息を殺して機をうかがつていたのだ。

乱入者が見知つた少年の輪郭を描き出す。

「ルルダーシエ様！」

「ルルド？」

一瞬、ヒイラギの方が早かつた。重なるようにセイラの疑問が続く。いつでも飛びかかるような姿勢を保ちながらルルドはちらとセイラを見る。

全身が血で塗れているが本人のものではないと分かると、前方を睨みつける。

「お前は何者だ！」

「そういう君は何なのさ。いきなり刃物を突きつけるなんて礼儀知らすだよ」

「ルルダーシェ様です。タハルの一の王子の」

ヒイラギのため息交じりの答えにローダは僅かに目を大きくし、ルルドの上から下までとっくりと視線を巡らせた。

「これが次の王様？ 隨分……弱そうだね」

星読みの技術に香の配合、その他諸々の情報を『えれば少しなりとも評価が変わるかもしれないと思つたがあえて報告はしない。ローダが最も重きを置く「力」においてはルルダーシェは全くの不適合者だ。

「弱そう」それは全く持つて相応しい第一印象だった。

「何をわけのわからぬことを言つているんだ！」

ルルドの噛み締めた奥歯がきりと鳴る。

「ふうん。まだ一度も術をかけたことがないんだ。大丈夫かなあ？ 大好きな兄上を失ったショックの上に重ねれば大丈夫かなあ」

「兄上に何をした！」

ルルドが振りかざしたナイフはまるで奇術でも見ているかのようこふつと消えた。

ナイフは弾かれ、放物線を描きながら決して手の届かないところま

で飛んで行き、地面に激突する瞬間に儂い音を立てた。

消えたナイフの変わりに現れた剣はルルドの首元に突きつけられた。トッドを刺し貫き赤く染まつた刃が更に血を吸おうとルルドの無防備な喉を狙っている。

「ぐくりとセイラの喉がなる。

今度はルルドが犠牲になるといつ恐怖ではない。

ローダーは弱者をいたぶる様な残酷な笑みを浮かべてはいるが殺氣は感じられない。

怖ろしいのは、相手武器を巻き込んで弾き飛ばす剣さばき。あれはカエデの動きだ。

セイラの剣の師匠であり、ジルフォードの師匠でもある。

何故繋がっていくのだ。

母にカエデに、ローダーが。

「ああ、もう。めんどくさくなりそうだから、帰るね。ヒイラギ、ちやんとしてよな。どうして、皆ばらばらちやぐちやと勝手に動くのかなあ」

青年は苛立たしげに頭を搔き鳴ると、ナイフを構えるルルドなど存在しないかのように無防備に背を向けて歩き出した。

「待て…」

追いすがろうとするルルドの前にヒイラギが立ち塞がり、真剣な顔で首を横に振る。

あれはルルドの太刀打ち出来る相手ではない。

「一体どういうことなんだ！ 誰なんだあいつは！ どうしてお前が此処にいるんだ」

ルルドとて慣れない道に闇雲に突っ込んでいくつもりは無い。けれど分からぬことが多い苛立ちから声は次第に熱を帯び、睨みつける相手はヒイラギへと変わる。

「そういうルルダーシュ様はどうしてここに？」「

「城ではセイラがいないとちょっとした騒ぎだ。兄上も姿が無いしどうやら一人の行方を追つてゐる城の奴らのあとをつけてきたんだ」

「うげ。つてことは他にもこの中に面倒な人物がいるつてことか」「

厄介だ。

サクヤと連絡が取れていなことも気にはなるが、あの人がセイラに興味を持つてしまつたことにも心がざわついた。

長期的に考えれば、此方の方が面倒だ。

さて、力が抜けたように座り込んでゐるセイラをじりじりじり。

「兄上はどうだ？」

「……ナジユール様のところにはサクヤ様がいると思つナビ

「サクヤが」

ほつと胸を撫で下ろす主に忠告を一つ。これで最後になつてしまつかもしない。

綻びを一つ見つけられてしまえば、たとえサキの術をうまく使つたとしても、この甘つたれの主の下にいることは出来ない。

「あまり安心しない方がいいですよ？」

「どういう意味だ？」

「前に言つたでしょ？　僕はルルダーシェ様を王様にしたいんだつて」

ルルドの渋面を見ながらヒイラギは低い声で笑う。

初めて会つたときから図体は確かに年相応に大きくなつたのに、眉間に深く皺を刻むこの顔は幼い頃のぐずる時の顔に似ている。

「嬉しいことにサクヤ殿も同じ意見なんだよねえ」

「そんな馬鹿な。サクヤは兄上の付き人じやないか。兄上の優秀さは国の方が知つている」

「でも……死んでしまつたら王様にはなれないですよね」

息を飲むルルドの横でのろのろとセイラが視線をあげる。
まだ大丈夫そうだ。少し心もとないけれど、ルルドに預けて幕引きをしよう。

「どうして、そんな考え方……ゴザ」

「知つているなら話は早いや。そう。これははるか昔の復讐劇。僕やサキは裏方で表にはでないのだけど、ちょっと動きすぎちゃつたかなあ」

操り人形の王子を作るのが目的だったのだが、一時の放任主義がよかつたのか案外逞しくなつてしまつた。

「裏方は幕の内側に引っ込まなきゃ。しばらくお別れですねえ。ルダーシェ様」

「お前の顔なんて一度と見たくない」

「……それは残念」

役者が挨拶をするようにヒイラギが腰を折る。

「待て」と伸ばした腕は空を切る。先ほどまではつきりと見えていたヒイラギの輪郭は急に曖昧となり薄闇に溶けていく。完全に消えてしまつ前にセイラの掠れた声が聞ひ。

「ヒイラギ。さつきの人は誰?」

「うーん。亡靈……かな」

ヒイラギの影が完全に消える前に、何とか口に出せた問いの答えはどうにもあやふやで、決して望んでいたような答えではなかつた。薄闇の中に取り残されたのは三人。

一人にはもう息が無い。セイラはトッドの頬を撫でた。触れた身体はまだ温かい。

ゆるりと冷たさが増していく。

閉じた瞼の下の瞳が夢見た未来は一度と訪れない。ゆっくりと耳に心地よい声はもう一度と聞けない。何もかもが一瞬のうちで夢の中を彷徨つてゐるかのようだ。唯一現実味を帯びたトッドの死が重い。

「ソノにいても仕方が無い。いくぞ」

セイラは素直に立ち上がらない。

地面に伏した青年に視線をやつたまま微動だにしなかつた。

「トツドを置いてはいけないよ

街から追いかけてくれた心優しい青年をこんな暗くて寂しい場所においていけるわけが無かつた。

たとえその身体が自分のものよりもだいぶ大きくて、とても運べないとしても諦めようだなんて言えない。

「気持ちは分かるが、つれてはいけない」

一度、この道を通ったことのあるルルドにはこの厳しさが骨身に沁みている。

危険な箇所はたくさんある。大荷物を背負つて進むことが出来るはずが無い。

「でも、このままじゃ」

「リリは死者の国へ続くノースの道だ。無事にたどり着ける

タハルでは死者の国はノースの道を下った地下にあると信じられている。

死者の国の人り口には巨大な門があり、番人がいる。

生前の行いが良ければ、門は開かれるが悪ければ門番は獣に姿を変えその牙で捕らえようと追いかけてくる。

逃げようとむちゃくちゃに走り回れば、迷路にはまり込み永久に出ることができないといわれているのだ。

だから死者には獣避けの香を持たすのが慣わしだ。

ルルドはセイラが首からぶら下げていた香入りの耳飾を手に取つた。

覚えのあるナジユールのものだ。

奪うと仰向けにしたトッドの胸の上へと置く。これで無事に死者の国へとたどり着くことが出来る。

セイラを助けようとしていた無垢な青年にきつとリコオウは恩情をくれるだらう。

「」この死を無駄にするかどうかはお前次第だ。僕は兄上を助けに行く。それで此処を出て、タハルに帰る。お前はどうする？ 尻にすがり付いて死んでしまうか？」

死すら糧に。

タハルでは死者への祈りは短い。
それは生者への区切りの言葉。

「どうする？」

「……行く。行くよ

トッドの最期を皆に伝えなければいけない。

大きなおにいちゃんが好きだった子どもたちは何田も姿を現さないトッドのことをきっと心配しているに違いない。

それにセイラを心配しているであろうハナ。

『色なし』の意味。

膨れ上がった不安は立ち止まることを許してはくれない。

「」めんね。トッド。あつがとう

セイラは差し出された手を取り、重い一步を踏み出した。

背後からは弾む呼吸音がする。

ぜいぜいと耳障りな音はしないものの、足取りは最初に比べれば少しすつ遅くなっている。

一切情報を持っていない足場の悪い所なので無理も無い。むしろ女の身でよくついてくると思う。

悪路を歩きづめでまだ休憩は一度もしていない。

ルルドは歩く速度を次第に落とし最後には立ち止まつた。

背後からはどうしたのだろうと此方を伺う気配がする。

やはり無理を強いていたのだろう。息を整える時間をたっぷりと取つてから、みづやく「どうしたの?」と質問が来た。

「少し、休もう」

「大丈夫だよ。行こう。」

暗闇で互いの顔は闇にしか見えないが、何となくセイラの表情が予想できた。

疲れているはずだ。

何度も転び打ち付けた身体は痛むはずだ。

歪む表情。

お前が苦しんだってトッドは救われはしない。
喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

そんなことはセイラだって十分承知だ。その上で罰を受けることを願つている。その苦しみを取り除いてやる術はルルドには無い。悔しい。

ナジユールなら上手い慰めの言葉をかけることができただろうか。もし、もしもヒイラギがいたらほんの少しでも心を軽くしてやるこ

とが出来ただろうか。

ルルドは首を振って、むくむくと持ち上がりがつた疑問を遠くに押しやつた。

彼らが出来たとしても、ここにはいないのだ。考へても仕方が無い。

「座れ！」

肩に力を込めれば僅かな抵抗の後、すとんと身体が沈む。

「靴を脱げ」

「え？」

舌打ちと共にセイラの足をむんずと掴む。無理やり靴を脱がすと押し殺したつめき声がした。
まだ掃き慣れないものだつたのだろう。セイラの踵には靴擦れができ、血が滲んでいた。
もともと皇かな廊下や綺麗に整備された街中を歩くための靴だ。ごつごつとした岩がある洞窟を歩くには適していない。
歩き易さを重視した低めの踵もここでは邪魔者でしかない。

「まつたく、どうしてお前たちの靴はこうなんだ」

無駄な装飾に、明らかに足を痛めそうな形。

理解ができないと息を吐くと、セイラの足の裏をぐつと押す。
唸り声は聞かないふり。

服の一部にナイフを走らせ刺繡の糸を切る。隙間から取り出した乾燥した葉を地面のくぼみに溜まつた水を加えて揉むと靴擦れと足の裏に塗りたくる。

すっと熱が引いていくよつな心地がした。

「なにこれ？」

「薬草だ。少しは楽になるだろ？ しばらく待て」

そう言うとルルドは服の布を裂き始めた。

タハルの服は昼の強烈な日差しと夜の冷え込みから身体を守るためにたくさんの布地が使われているので、少々切り取つたところで困らない。

その上、ルルドの服には刺繡に紛れてさまざまなもののが縫い付けてあつた。

さまざまな薬草。ナイフ代わりに使用できるルーガの骨のカケラ。アリオスのティナール金貨も一つある。

めんどくさがりやのくせに器用なヒイラギのアイディアだつた。

そんなものはいらないといつのに小さなポケットを作つては何かを放りいれ、ルルダーシェ様が困らないよつこと、にやにやと笑つていた。

そこまで思い出して、小さな悪態をつく。

あれも何もかもルルダーシェをお飾りの王にするための作戦だつたのだ。

かけられた言葉の全てが嘘だつた。一喜一憂していた自分が馬鹿らしい。

「ねえ、ルルド」

「……何だ？」

「ルルドはタハルの王子様だつたんだ」

「…………そうだ」

いつも胸を張つて言えたことは無い。今日は更に口が重かつた。

「ゴザつて何？」

「僕も兄上から聞いた話しか知らないけど……ゴザつてのは元々は國の名前らしい。兄上も導きの星から聞いたと言つていた」

「知つてることを教えて」

全てが其処に繋がつていく。

早くおいでと真白な手が闇の奥から手招きしたような気がした。

落日が世界を染めている。

空には遮るものは何もなく、ヒューロムの赤酒でも流しこんだかの
よに街の隅々まで赤い。

しばらくすれば陽は王座を月へと譲り、青く澄んだ夜が来る。

今宵は大月。

春告げの祭りを締めくくるのに相応しい美しく大きな月が、世界の
裏側で今か今かと出番を待つていて。

路地では店主が空の具合を確かめながら、店じまいをしようか迷つ
ているところだ。

月が天辺に来る頃には街外れの石舞台にいなければいけないのだか
ら。

なんといっても一年に一度の祭りだ。大月は十年に一度。
その上、今年の春乙女はこの間エスターニアから嫁いできたセイラ王
女だ。話題に乗らないわけにはいかない。
だがライバル店よりは少しでも多くの売り上げを得なければと互い
に火花を散らせつつ、妥協点を探りあつ。
それを笑うように急速に宵闇が忍び寄っていた。

城の一角にも赤みを失いつつある光が差し込んでいる。

「話は分かりました」

重く頷いた後、ルーファは固く瞳を閉じた。

考え込むような仕草に2つの人影は不動を貫き通す。
頭を覆う数多の色彩を帯びた布に腰を覆う毛皮。

腰には小ぶりながら殺傷能力を持つたナイフを帯びた彼らが王の執
務室に招かれるなど異例のことだった。

彼らはタハルの使者5人のうちの2人だ。

小柄で吊り目の青年はケンフィイと名乗り、ひょろりと背の高い細見の青年はゾーイと名乗った。

アリオスの生活にはいち早く慣れ、アリオスの衣装もつまく着こなしていたが一転今日はタハルの正装をしている。

「すぐに屋敷を用意をせましょ」

「それには及びません」

ルーファの言葉を遮ったのはケンフィイだった。彼らの間には何か取り決めがあるのかもしれない。

いつも発言をするのはケンフィイだ。

ゾーイは俯き加減で常に黙っている。ただの引っ越し思案なのだろうか。

「我らはナジユール様と共にタハルに帰ります。お心遣い、ありがとうございます」

「それではお話が違うようですが……」のままでは貴方方は危険なのでは？」

受け取った手紙には確かにウォーダンのサインがある。
一人の青年をアリオスで暮らさせて欲しいと書いてある。

ケンフィイはウォーダンが亡くなつた事を包み隠さずに話した。

毒によつて徐々に身体が弱り死に至つたことも、その毒を盛つていたのが自分的一族であつたことも。

そのことは王の指示であつたことも。

王の死が公になれば、いざれ知れ渡ることになるだろう。例え、王

の指図であつたとしても王族を死に至らしめたことは、重大なる罪であり罰は免れない。

相手が現国王ともなれば、一族滅亡も十分にありえることだ。その前に、若く丈夫な青年を一人ずつアリオスへと逃がす手はずとなつていた。

「罰ならば受けましょ」

ゾーリも身じろぎ一つしなかつた。

秘密を抱えたまま他国で生きるほうが苦しい。

ルーファは一人から手元の手紙へと視線を落とす。
国王暗殺の経緯を国王本人の手紙で知らされるなど、前代未聞だ。
謀りにかけられているとしか思えない。
だが、それに何の意味があるというのか。

「信じることが出来ませんか？ ですが、アリオスでもまた同じようなことが起きているでしょう？」

「……同じこと？」

ルーファの問いにケンフィはしばし考える仕草をしたが、それが本当だったのかルーファの好奇心を刺激するための間であつたのかは分からぬ。

だが、長らく平穀を保っていたルーファの心臓が跳ねたのは間違いではなかつた。

「お父上などのようにして亡くなられましたか」

「なに……」

「誰よりも頼りになる力強い王が急に力を失つていくよくな」とは
あつませんでしたか?」

ロード王は急逝した。

それまでは病ひとつしたことが無かつた。
だからこそ彼が寝付いた時には、サンティアの呪いではないかと嫌
な噂がたつたものだ。

「まさか」

口の端に浮んだ笑みは最後まではもたなかつた。

ルーファのうちにある考えが浮んだ。

父の墓を暴くという恐ろしい考えが。

もしも、毒により死んだのならば遺体には何かの痕跡が残るはずだ。
その考えを打ち消すように、扉の向こうから侍女が呼びかける。

「陛下。 そろそろお時間です」

まだ、セイラが見つかつたといつ報告は聞いていなかつた。

現れた人物にほつとすべきなのか、身構えるべきなのか考えあぐねて、とりあえずナジユールが困惑顔を浮かべた。

これは正しい判断だつたのだろう。顔に似合つた問いはすぐさま音となつて口から零れ落ちる。

「ジルフォード殿、なぜ、ここに？」

城の中でしか見たことの無い姿。

彼の色は儂い様に見えて、この闇の中ではえ存在を主張する。

「セイを探しています。」存知ですか？」

「セイラ殿もこの中にいるのか。残念だが一緒ではないよ」

しばらく自由を奪われているうちにやうおかしな事態になつているらしい。

この中はさまざまな道が入り組んでいる。

ただ一人を探すのは困難だ。

ジルフォードとナジユールが会えたのは、おそらくサクヤが大きな道を選んでくれたおかげなのだろう。

そう考へれば、もとよりサクヤはナジユールを殺すつもりは無かつたのかも知れない。

最期の笑みのわけを探ろうとしてやめた。

どんな理由をつけたところで、サクヤの罪もナジユールの罪も消えてはなくならない。

ここが闇の領分でよかつた。

己の罪を陽の元に曝け出されたら、しばらく立ち上がる」ことが出来

ないだろ。

「怪我を」

傍らに膝を着いたジルフォードに血臭の似合わない男だと思つた。闇に浸かつた足元は赤く染まつてゐるといふのに、ナジユールは傷を負つた半身でこりか口元さえも獲物を仕留めた獸のよつて血で塗れてゐるといふのに、白い面はそんな世界とは無縁だ。

血なまぐさに唾を吐き、口元を拭つたが取り巻く匂いが変わつてようには感じられない。

布を裂く音がした。ジルフォードが応急処置を試みてゐるのだ。

「平氣だ」

強がりを言つてみても思いのほか深かつた傷口が焼け付くように傷む。

傷口を縛られると思わずため息がこぼれた。

「止血はしたけれど、早くちゃんとした治療をしたほうがいい。外に出ましょ」

促されて立ち上がり、足元がふらついて体勢を崩す。

まだ香による戒めが完全には取れていなつた。

「掴まつてください」

淡々とした声には何の感情も滲んではないようなのに、数かな苛立ちを感じ取つたような気がする。いや焦りだつたのかもしない。セイラがこの中にいるのならば当然だろ。

手のかかる厄介者など放り出してさつさと先へと進めばいい。

「置いていけ。ジルフォード殿。私を生かしておいて良いことなどないぞ。生かしておけばいつかアリオスを攻めに来る。私はあの国を救わねばならなん」

撥ね退けようとした腕を逆に絡められ、身体を支えられる。

「やつするといい

「本氣だぞ」

からかわれているのかと思い、ナジユールの声は強くなる。にらみつけたジルフォードの表情には読み取れるようなものはない。

「……ひらも本氣で迎え撃とう。……だがナジユール殿は生きて帰らなくてはいけない。あなたを待っている人がいる」

言葉に詰まり、ぐうと唸り声だけが漏れた。

タハルはどうなっているのか。ルルダーシュは無事でいるだろうか。気がかりは山ほどあるが、思うように動かない身体が厭わしい。

「それに、死ぬなら正式にアリオスを出てからにしてもらいたい。このままではセイが泣く。セイと貴方は仲がよいみたいだから」

「……あんたつて澄ました顔して、わざと酷いこと言つた」

最愛の妻が泣くから、何が何でもあと一日は生き抜けという。皆に送られ城門をくぐった後のこととは知ったことではない。こんな人物だつただろうか。そういうえば、一人きりで話したことなど一度も無かつた。

「私は、セイラ殿に求婚したぞ」

「そう」

答えに一瞬の逡巡もなかった。事実確認のためにだけ頷かれた。相手になどならないと言つのか。

こんな状況だというのに、年下相手に腹が立つ。いや、だからこそか。

「随分と余裕なんだな」

「余裕なんてない。セイのこととは分からぬことだらけだ」

ジルフォードの弱音めいた言葉におやと視線を上げる。

「セイが貴方を選んだとしても、私には止める術も無い」

何一つなしてこなかつたツケが回つてきた。

見ないふり。聞かないふり。

傷つくのを恐れ、どうにか言い訳をつけて逃げていたのだと手を差し伸べられても、失った後のことを考えてしまい拒絶した。去り行くものを引き止める方法など、浮んでは来ない。

「あんたが王だつたよかつたのに」

「そうかもしけない」

この言葉には驚かされた。

ジルフォードという人物はおおよそ権力というものに興味がないと

思つていた。

「私が王ならば、ナジュー＝ル殿は樂にアリオスに攻め込むことができただろう。兄上を相手にするのは骨が折れる。残念だつた」

「はつ！ そうだな。あの御仁の腹を探るのは難しい。物腰の柔らかい人間に見えてなかなかの強情だ。確かに骨が折れそうだ」

「ルルダ＝シェでは、まだ太刀打ちできないだろ。まだ死ぬわけにはいかない。」

香の効果が無くなつたのか身体に力が戻つてくる。

「行こう。ジルフォード殿。きっとセイラ殿も大きな道にいるはずだ。大きな道は3通りしかない」

暗い坑道を重たい身体を枷に歩くのは、なかなか重労働のはずなのだが、ナジユールの頭は霧が晴れたかのように冴えていた。

「私にも弟が一人いてね、これがまた中々手のかかる奴なんだよ。それだけならよいのだが、周りがどうも煩くてね」

「ルルド殿でしょう」

「知つていたのか」

「イレズミの模様が同じだつたから、親類だとは思つていた」

ほんの一瞬の間によく覚えていたものだ。見せた時は興味のあるそぶりもなかつたのに。

「ただの後継者争いならばいいのだが、どうもそれだけでは済みそうになくてね。……アリオスは、いやジルフォード殿はユザについて何かを知っているのか」

互いの距離を測る沈黙が続く。

ナジユールの声からは、先に手の内を見せるのは得策ではないと考えているのが感じ取れる。

折れたのはジルフォードの方だった。

「サン暦224年、幾多の嘆きが染込む地に星落ちて、四つ国が誕生す。大陸の中央に生まれし国をエスターイアという。北の地に生まし国をタハルという。東の地に生まれしはジキルドという。そして西の地、嘆きの地に生まれし国をユザという」

「年代記の一部か」

失われし、古の年代記。

幻の五王国時代。それを知るのは、ほんの一部の者たちだけだ。

「城の中で見つけたけれど、傷みが激しくて全てを読むことは出来なかつた」

「ジルフォード殿は古代文字が読めるのか。タハルにもいくつか文字の刻まれた粘土板があるんだが、如何せん読めるものが少なくてな。こういったことはエスターイアが得意そうだが……わが国とエスターイアは友好とは程遠い」

だからこそ、欲したエスターイアとの繋がり。

架け橋は亞麻色の髪をした少女。

幻想は突如現れた光源にかき消された。

遠い昔の話をしよう。

どのくらい昔かつて、そりやあ遙か彼方の大昔を。
じいさまのじいさまが生きてた頃かかつて？

もつと、もつとずうーっと昔のことさ。

なんたつてタハルはまだ無かつたのだからね。あのエスターニアもア
リオスも。もちろんジキルドかつて存在しなかつた。

そんな時代があつたのかかつて？

あつたのさ。

ササン大陸がたつた一人の王様を戴いて豊かで幸せな時がね。

彼は絶対王。

強く常に正しい王だつた。

餓える民はどこにもおらず、貴族連中も今ほど愚かではなかつたの
だ。

幸せな時間はあつという間に過ぎる。

絶対王も人の子だ。身体は次第に老いていく。

自分が王位を退いた後のこと良く考えるようになつた。

彼の子どもは4人、いいや5人いた。

息子が4人に娘が1人だ。

皆、それぞれに聰明だつた。

さて、困つた。

次の王を誰にしよう。

彼は考えた。

毎朝、毎晩考えた。

貴族に側近、民衆にも誰が相応しいか聞いてみたが、皆それぞれにすばらしいと語るので決まらない。

考えて考えても決まらない。

けれど、いいことを思いついた。

皆を王にすればいい。

ササン大陸は広大だ。

一人の手には余るだろ？

だから王様は大陸を4つに分けてそれぞれに与えることにしたのさ。

ん？

なぜ4つかつて？

子どもは5人いるのに？

そう。

これが問題だつた。

末の子どもたちは、なんと双子だつたのさ。

今はそんなこと無いけれど、絶対王の時代は双子は禁忌だつた。

一つになるべきものが分かれたとね。

片方が善なる魂を持つて生まれ片方が悪なる魂を持つて生まれたと信じられていたんだ。

どちらがどちらなのか見極めなければいけない。

悪なる魂を持つものは善なるものは何一つもたないため処分しなくてはならないとまで考えられていた。

だがこの考えを古いと一蹴したものがいた。

エスターの初代王になるユスティニアスさ。

一つのものが二つに分かれたのならば常に共にあればいいといつことで、二人は常に共にいることで生きることを許されたのだよ。だから国を与えた時も、彼らは一人の王で国を治めることになった。

賢く新しい道を行くことを選んだユスティニアスは、大陸の中央を与えた。エスターを作った。

思慮深く静けさを好んだリールウは常宵の森を与えた。ジキルドを作った。

闊達で自然を愛したギルは様々な動植物の溢れる北の地を与えた。タルを作った。

そして件の双子は

最も少なく荒れた土地を与えた。ユザを作ったのさ。

ユザなんて国は知らない？

そうだろうとも。

ユザは兄弟たちによつて滅ぼされてしまったのだからね。

そして

双子の片割れが興した国がアリオスなのさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8358e/>

月神の祝祭～有明の使者～

2011年9月26日00時14分発行